

910.2-F657



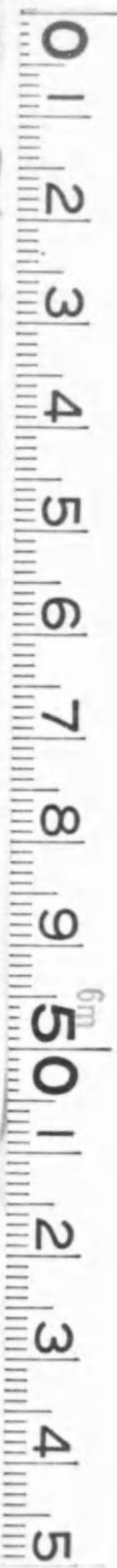
1200500754237

0.2
35
D

國齊學專講話

蕭岡大作

口
複
写



始



J10-5

910.2
F65:

(7)



國文學史講話



73614 丁
子
步

2231

國文學研究會



國立圖書館
昭 24. 3. 5 和
寄 贈

此書を以て亡兒の記念とし、
吾と愁を共にする母と妻
及び世の愛子を先だてし
人々の前にこれを捧ぐ、





東圃學兄が其著國文學史講話
を亡兒の記念として出版せら
るゝに當りて、余の感想を述べ

三十七年の夏、東圃君が家族を携へて歸郷せられた時、君には光子といふ女の兒があつた。愛らしい生々した子であつたが、昨年の夏、君が小田原の寓居の中に意外にも此子を失はれたので、余は前年旅順に於て戰死せる弟のことなど思ひ浮べて、力を盡して君を慰めた。然るに何ぞ圖らん、今年の一月、余は漸く六つばかりになりたる己が次女を死なせて、反つて君より慰めらるゝ身となつた。

今年の春は、十年餘も帝都を見たことのない余が、思ひがけなくも或用事の爲に東京に出るやうになつた。着くや否や東圃君の宅に投じた。君と余とは中學時代以來の親友である。殊に今度は同じ悲を抱きながら、久し振りにて相見たのである。單にいつもの舊友に逢ふといふ心得のみではなかつた。然るに手紙

にては互に相慰め、慰められて居ながら、面と相向うては何の語も出さず、唯軽く弔辭を交換したまでであつた。逗留七日、積る話はそれからそれと盡きなかつたが、遂に一言も亡兒の事に及ばなかつた。唯余の出立の朝、君は篋底を探りて一束の草稿を持ち來りて、亡兒の終焉記なればとて余に示された。かつ今度出版すべき文學史をば亡兒の記念としたいとのこと、及び余にも何か書き添へてくれよといふことをも話された。君と余と相逢うて亡兒の事を話さなかつたのは、互にその事を忘れて居たのではない、又堪へ難き悲哀を更に思ひ起して、苦悶を新にするに忍びなかつたのではない。誠といふものは言語に表はし得べきものでない、言語に表はし得べきものは凡て淺薄である、虚偽である、至誠は相見て相言ふ能はざる所に存するのである。我等の相對して相言ふ能はざりし所に、言語はあろか、涙にも現はすことのできない深き同情の流が心の底から底へと通うて居たのである。

余も我子を亡くした時に深き悲哀の念に堪へなかつた、特に此悲が年と共に消えゆくかと思へば、いかにもあさましく、せめて後の思出にもと、死にし子の

面影を書き残した、而して直に之を東圃君に送つて一言を求めた。當時眞に余の心を知つてくれる人は、君の外にないと思つたのである。然るに何ぞ圖らん、君は余よりも前に、同じ境遇に會うて、同じ事を企てられたのである。余は別に臨んで君の送られたその兒の終焉記を行李の底に收めて歸つた。一夜眠られぬまゝに、取り出して詳かに讀んだ。讀み終つて、人心の誠はかくまでも同じきものかと思つて、感じた。誰か人心に定法なしといふ、同じ盤上に、同じ球を、同じ方向に突けば、同一の行路をたどる如くに、余の心は君の心の如くに動いたのである。

回顧すれば、余の十四歳の頃であつた。余は幼時最も親しかつた余の姉を失つたことがある。余は其時生來始めて死別のいかに悲しきかを知つた。余は亡姉を思ふの情に堪へず、また母の悲哀を見るに忍びず、人無き處に到りて、思ふ儘に泣いた。稚心に若し余が姉に代りて死に得るものならばと、心から思つた。とを今も記憶して居る。近くは三十七年の夏、悲惨なる旅順の戰に唯一人の弟は敵壘深く屍を委して、遺骨をも收め得ざりし有様、こゝに再び舊時の悲哀を

繰返して、斷腸の思未だ全く消え失せないのに、又己が愛兒の一人を失ふやうになつた。骨肉の情いづれ疎なるはなけれども、特に親子の情は格別である。余は此度生來未だ曾て知らなかつた沈痛なる經驗を得たのである。余は此心より推して一々君の心を讀むことができると思ふ。君の亡くされたのは君の初子であつた。初子は親の愛を專にするのが世の常である。特に幼き女の子はたまらぬ位に可愛いとのことである。情濃やかなる君にして此子を失はれた時の感情はいかゞであつたであらう。亡き我兒の可愛いといふのは何の理由もない。唯わけもなく可愛いのである。甘いものは甘い、辛いものは辛いといふの外にない。これまでにして亡くしたのは惜しからうといつて、悔んでくれる人もある。併しかういふ意味で惜しいといふのではない。女の子でよかつたとか、外に子供もあるからなどいつて、慰めてくれる人もある。併しかういふことで慰められやうもない。ドストエフスキーが愛兒を失つた時、又子供がてきるだらうといつて慰めた人があつた。氏は之に答へて How can I love another child? What I want is Sonia. といつたといふことがある。親の愛は實に純粹である。其

間一毫も利害得失の念を挟む餘地はない。唯亡兒の俤を想ひ出づるにつれて、無限に懐かしく、可愛さうで、どうにかして生きて居てくれ、ばよかつたと思ふのみである。若きも老いたるも死ぬるは人生の常である。死んだのは我子ばかりでないと思へば、理に於ては少しも悲むべき所はない。併し人生の常事であつても、悲しいことは悲しい。飢渴は人間の自然であつても、飢渴は飢渴である。人は死んだ者はいかにいつても還らぬから、諦めよ、忘れよといふ、併しこれが親に取つては堪へ難き苦痛である。時は凡ての傷を癒やすといふのは自然の恵であつて、一方より見れば大切なることかも知らぬが、一方より見れば人間の不人情である。何とかして忘れたくない、何か記念を残してやりたい、せめて我一生だけは思ひ出してやりたいといふのが親の誠である。昔君と机を並べてアーピングのスケッチブックを讀んだ時、他の心の疵や、苦みは之を忘れ、之を治せんことを欲するが、獨り死別といふ心の疵は人目をさけても之を温め、之を抱かんと欲すといふやうな語があつた。今まことに此語が思ひ合されるのである。折にふれ、物に感じて思ひ出すのが、せめてもの慰藉である。死者に

對しての心づくしである。この悲は苦痛といへば誠に苦痛であらう、併し親は此苦痛の去ることを欲せぬのである。

死にし子顔よかりき、をんな子のためには親をさなくなりぬべしなど、古人もいつたやうに、親の愛はまことに愚痴である、冷靜に外より見たならば、たわいな愚痴と思はれるであらう、併し余は今度この人間の愚痴といふものの中に、人情の味のあることを悟つた。カントがいつた如く、物には皆直段がある、獨り人間は直段以上である、目的其物 (End in itself) である。いかに貴重なる物でも、それは唯人間の手段として貴いのである、世の中に人間ほど尙い者はない、物は之を償ふことができるが、いかにつまらぬ人間でも、一のスピリットは他の物を以て償ふことはできぬ、而してこの人間の絶對的價値といふことが、己が子を失うたやうな場合に、最も痛切に感ぜられるのである。ゲーテが其子を失つた時、*Over the dead* と云つて仕事を續けたといふが、ゲーテにして此語をなした心の中には、固より仰ぐべき偉大なるものがあつたであらう、併し人間の仕事は人情といふことを離れて外に目的があるのではない、學問も、事業も、究竟

の目的は人情の爲にするのである、而して人情といへば、たとへ小なりとはいへ、親が子を思ふより痛切なる者はなからう、徒らに高く構へて人情自然の美を忘るゝ者は反つて其性情の卑しきを示すに過ぎない。金州城外馬不前の一句ありて愈、乃木將軍の人格が仰がれるのである。

とにかく余は今度我子の果敢なき死といふことに因りて、多大の教訓を得た。名利を思つて煩悶絶間なき心の上に、一杓の冷水を浴せかけられた様な心持がして、一種の涼味を感じると共に、心の奥より秋の日の様な清く温き光が照して、凡ての人の上に純潔なる愛を感じることができた、特に深く我心を動かしたのは、今まで愛らしく話したり、歌つたり、遊んだりして居た者が、忽ち消えて壺中の白骨となるといふのは、如何なる譯であらうか、若し人生はこれまでのものであるといふならば、人生ほどつまらぬものはない、此處には深き意味がなくしてはならぬ、人間の靈的生命はかくも無意義のものではない、死の問題を解決するといふのが人生の一大事である、死の事實の前には生は泡沫の如くである、死の問題を解決し得て、始めて眞に生の意義を悟ることが出来る。

物窮すれば轉ず、親が子の死を悲むといふ如きやる瀬なき悲哀悔恨は、おのづから人心を轉じて、何等かの慰安の途を求めしめるのである。夏草の上に置ける朝露よりも哀れ果敢なき一生を送つた我子の身の上を思へば、いかにも斷腸の思がする。併し翻つて考へて見ると、子の死を悲む余も遠からず同じ運命に服従せねばならぬ。悲むものも悲まれるものも同じ青山の土塊と化して、唯松風蟲鳴のあるあり、いづれを先、いづれを後とも見分け難いのが人生の常である。永久なる時の上から考へて見れば、何だか滑稽にも見える。生れて何等の發展もなさず、何等の記憶も残さず、死んだとて悲んでくれる人だにないと思へば、哀れといへばまことに哀である。併しいかなる英雄も赤子も死に對しては何等の意味も有たない。神の前には凡て同一の靈魂である。オルカニヤの作といひ傳へて居る畫に、死の神が老若男女あらゆる種類の人を捕へ來りて、帝王も乞食もみな一堆の上に積み重ねて居るのがある。榮辱得失もこゝに至つては一場の夢に過ぎない。又世の中の幸福といふ點より見ても、生きのびたのが幸であつたらうか、死んだのか幸であつたらうか、生きて居たらば幸であつ

たらうといふのは親の欲望である。運命の秘密は我々には分らない。特に高潔なる精神的要求より離れて、單に幸福といふ事から考へて見たなら、凡て人生はさほど慕ふべきものかどうかも疑問である。一方より見れば、生れて何等の人世の罪惡にも汚れず、何等の人世の悲哀をも知らず、唯日々嬉戲して、最後に父母の膝を枕として死んでいつたと思へば、非常に美しい感じがする。花束を散らした様な詩的の一生であつたとも思はれる。たとへ多くの人に記せられ、惜まれずとも、懐かしかつた親が心に刻める深き記念、骨にも徹する痛切なる悲哀は、寂しき死をも慰め得て餘あるとも思ふ。

最後に、いかなる人も我子の死といふ如きことに對しては、種々の迷を起さぬものはなからう。あれをしたらばよかつた、これをしたらばよかつたなど思つて返らぬ事ながら徒らなる後悔の念に心を悩ますのである。併し何事も運命と諦めるより外はない。運命は外から働くばかりでなく、内からも働く。我々の過失の背後には不可思議の力が支配して居る様である。後悔の念の起るのは自己の力を信じ過ぎるからである。我々はかゝる場合に於て、深く自己の無力

なるを知り、己を棄てて絶大の力に歸依する時、後悔の念は轉じて懺悔の念となり、心は重荷を卸した如く、自ら救ひ、又死者に詫びることができ、歎異鈔に「念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはんべるらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり」といへる尊き信念の面影をも窺ふを得て、無限の新生命に接することができ。

明治四十年十一月

西田幾多郎記

自序

早くも三四年を過ぎぬ、深川の本誓寺に詣てて、五百羅漢の畫幅を拜觀したる事ありき、畫は菊池容齋が經營慘澹の筆に成りし大作にて、春秋の彼岸にはこれを懸け列ねて供養し、普く有縁の參拜を許す由なれば、友人平出君を誘ひて歩を運びしなり、容齋が執筆の因縁については、哀れなる物語あり、今日廣く世に行はるゝ前賢故實はこの歴史畫家が畢生の心血を絞りて描き成し、以て風教を補はんとしたるもの、辱くも今上陛下が日本畫士の號を賜ひしもこれが爲なるべく、また和氣清麿に神號を追贈あらせられしも或はこの書がその動機となりしなるべしとも傳ふ、されど初はこの十年苦心の作も發行の書肆なく、上梓の資財なく、久しく筐底に籠めて、徒に紙魚の棲となるを待つばかりなりしかば、この事あまりに情なく、折節は忘年の親友なりし福田行誠に向ひて、堪へがたき遺憾の情を漏したりき、時に幕末の頃、江戸牛込に加藤金兵衛といふ商人あり、手の中の珠とかしづきし一人の女年頃にもなりしかば、或る方に

嫁入らせしに、幾ほどもなくして身まかりぬ。婚禮のをり持參の衣服調度今はこなたにおきても詮なし、唯歎きの種ぞとて、婿の方より里方に返す、里方には受け取らず、一旦遣はし、女の道具は即ちそなたの物、それを返さるゝは死したるものを離縁するやうにて、草葉の陰にもいかばかり悲しからん、これはそなたへ、いやこなたへと押問答の果、金兵衛は腕拱ぬきて、さらば吾に思案あり、今深川におはす行誠上人は、浄土宗の大徳、古今の名僧と聞くに、この聖に託しまるれば、衆生濟度の便ともしたまひて、なき女が往生の縁ともなりぬべしといふに、乃ち相談は決し、かの調度を賣代なし、なほ首尾を合せて一千兩の金を行誠に捧ぐ。さてこそ行誠は容齋を招きて、喜ばれよ、御身の志は成りぬ、印刷の料は調へ得たりとあるに、容齋は涙ぐむまで難有く、脱稿の後凡そ二十年にして、こゝに前賢故實の出版に取りかかりしなりけれ、年來の宿望は今しも遂げたるに、いかにしてかこの大恩に報ゆべきと、尋ぬるに、行誠は善い哉、さらば五百應眞の圖を畫きて供養したまはば、亡者の爲、施主の爲、いかばかりなる功德ならん、御身の満足より引いては世間の満足も、ひとへに世を早うせし乙女

の爲、それを悲む父母の爲なるをと示す、それこそ吾にはふさはしき業、いかで加藤氏の名を萬世に朽ちせぬばかりと、沐浴齋戒して書き上げたるが、この本誓寺の什物なりとかや。

吾等が參詣せし折も、くさくさの供物を捧げたるが中に、小兒の玩具の珍らしく面白き取集めたるがあり、これも近頃愛兒を失ひし人の、その遺物をこゝに納めしなりとの事なりしが、一わたり哀れと見たるばかりにて、さして心にも留らず、畫幅の由緒も平たく聞きたるまでにて、容齋の筆法はとあり、思想はかかりなど思ふまゝの事を言ひ散らして、さて過ぎにき、今思へば淺はかなりしことかな、昨日は人の身の上、今日はわが身の上など、古めかしき言ひぐさながら、今こそひしくと心の底に染みぬれ、吾も一昨年、夏長女を失ひぬ、長女名は光、時に七歳、笑ひさゝめき遊び戯れしもの、はかなき病に忽然とこの世を去るべしとは誰か思はん、わが身は既に四十に近し、この後爲すべき事の奥も計り知られたり、唯わが子のみぞわが誇、わが望なりしを、一朝にして死の手に奪ひ去らるゝこと、あらばあらるゝ事か、かくても過さば過さるゝことか、ある

時はありのすさびに過してし、なくてぞまことの哀れさは知りぬる。よくもあしくも咲き出てたる花の、手折らるゝはさてありぬべし、固き蒼の人の目にとまるともなく、不意の嵐にもぎ取られし恨はいかばかり、年長けて少しにて、も世にある甲斐の務をなしたらば知らず、やうく物のあやめも覺ゆる程に、早くももとの開路に歸りなば、かゝるものありしと知るは家の内の人ばかり、世にも知られて空しく來りまた往くこと、いかに悲しきことぞ、愚かなる親はせめても亡き兒のわが心にまた人の心に忘れられずば、それをしもなほ生きたりと喜ばん、固よりわが家のものの生涯忘るべき筈もなし、たゞ忘れじとにはあらず、幼き罪なき兒はさまざまの教訓をその親、その祖母に教へたり、もしや吾等の將來に得るところあらば、そは即ちわが兒の賜ともち齋きてん、さりとても現なの心や、過ぎ去りし面影と殘しゆきしこの教へとを身にしめて、いまだ足らず、願はくは忘れんとするわが友の一人にても、わが兒を思ひ出でんことを、知らず止みなん世の人の一人にても、かゝるものもありしよと慙まんことを、これのみぞ望なき後のわが望なりける。

豊太閤が朝鮮征伐を思ひ立ちしは、老いての後やうく、淀君の腹に生まれせしみどり兒に死なれて、鬱悶やる方なく、いかにしてかその悲を忘れんが爲なりと、傳ふることのあるを、歴史家はそは英雄の心事を解せず、着々として歩を進めたる經營に心づかざる僻ごとなりといはん、されど凡人にもせよ、英雄にもせよ、人の情は同じきものを、當時の秀吉が胸の内を思ひやりては、是非は知らず、傳ふる事のまた所以ありと思はざるを得ず、華山天皇は愛妃を先だてて、御悲みに堪へたまはざりし、その機に乗じて、藤原道兼がそゝのかしまゐらせしかば、則ち宮中を遁れ出でて出家せさせたまひき、後にぞ道兼が欺けるなりと知りて、悔しく覺し召しけると、古史には記したるが、果して法皇は悔みたまひけんや、かれ佞臣が欺けるなりとは知りつゝも、それも得菩提の善智識、亡き人の爲にはよくこそ朕を誘ひけれと、逃れ去る道兼を見送りて、満足して御髪は下したまひけんかし、おほけなき例を引くにはあらねど、今わが身に思ひしむにつけて、更めて昔の跡を願みるなり、健かなるものは日々の務に勵みて、その悲を忘るべし、悟あるものはせん方なき世の習と、術なき思に沈まざるべし、あ

はれ身も心も弱きものの奮ひ立ちて働き勞るゝことも得せず、さりとて一筋に思ひ諦らむることもならず、つくづくと日毎に同じ歎きを繰返すかな、永祿四年、毛利元就の嫡子大膳大夫隆元頓死す、家臣等父君の愁傷いかばかり甚しかるべきと、心配一方ならざりしに、案のほか元就は悲痛の色なく、その子吉川元春、小早川隆景、及び家臣等と呼ばて、隆元の死亡は偏へに尼子滅亡の基なり、わが子の弔合戦と思ひて、皆々心を一つにして向はば、強敵もいかでか挫かざるべき、勝利は掌の中なり、隆元の爲ぞ、位牌の見てあるぞと、勢こんで言ひしかば、上下愁眉を開いて勇み立つ。これをしほに進めやとて、元就自ら三軍を率ゐて、やがて白鹿の城を抜きたりといふ。論ずるものは、いふまでもなく、これ軍氣の沮喪するを憂へて、人心を鼓舞せしなりといふめれど、そのみにては物足らず、天折せし愛子を悼みて、一勝一功もその手に成りしと知らせばやとの、親心ならじやは、勇まじき世のことは思ひもよらず、吾にははかなき筆のあるのみ、南海の任に下りし時伴ひし人の、歸り上る時は一人足らずと、歎きて書きし、貫之朝臣の日記に思ひ比べんには、似も似ぬすさびながら、千年の前後に通ひ

めぐる人の心ばかりは同じかりけり、されどわが日記は同じ事を繰返し、て、人に示すほどのものならず、何をがな世に公けにして愛兒の記念とせんと思ひ成りぬるも、筆執ることさへも懶くて、はかしくも心を定めず。

脇本十九郎君は家弟幸二の親友なり、最も亡兒を愛して、わが家に來る毎に、これと戯れ遊びたりき。君また文を能くす、されば吾一人にては事の成否も疑はしきに、君にこそとて、意中を述べたるに、君快くこれを諾す。これより暇ある毎に、吾口授し、君筆記す、されどなほもどかしからぬに、あらず、吾のこゝちわろしとて、休むことも少からねば、君また他に務あるに、うち任せては身を委ねがたし。かくて一箇年の後にはと思ひしことも、あだに過ぎ、更に月日は過ぎて、早くも三年めになりぬ。今更飛び立つやうに覺え、われ人ともに急ぎて、やう／＼に稿を了へたるが、この文學史なり。此方はたゞ思ひ立ちたる儘にて、成案もなく、組織も立たず、ましてや拙き口より、とりとめもなくつぶ／＼と呻き出づるを、書き取りてこれだけに順序も立て、文章にも綴り成せしは、ひとへに脇本君の功なり。これにて一わたりわが語りし事を世に示し得べく、否、わが語りしより

も以上に君は仕上げたりといへども、元來がよからぬ素地なり、仕立師の術もせん方なきところあるべし、われも新たに工夫して機を立てたるものにもあらず、わけて現代の文學の如き、概略をのみ申し譯に添へたれば、食ひ足らぬことの多かるべし。かくて誇らはしく世に示さんこと、江湖に對して、また亡兒に對して、耻かしくは思へど、今はたそれもすべなし。なほ緒言としてさまゝの懷をも述べばやなど、初は思ひしかど、畏友西田君が真心こめたる序文もあるを、既にこの三四枚の繰言さへ蛇足に似たりとやいはまし。さらばこゝに筆を擱く、同じ心にあはれと見る人あらば、わが望は足りなん。

明治四十一年一月三十一日

藤岡作太郎

目次

總論

- 第一章 團結心と家族制……………一
- 第二章 自然の愛……………六

太古

- 第一章 この時代の概観……………三
- 第二章 大化以前……………六
- 第三章 大化より奈良朝の終まで……………六

平安朝

- 第一章 この時代の概観……………九
- 第二章 弘仁時代……………九
- 第三章 延喜時代……………一〇
- 第四章 藤氏全盛時代……………一三
- 第五章 院政時代……………一五

以平家物語
源氏物語
白拍子

中世

第一章 この時代の概観……………一六七

第二章 新古今時代……………一八四

第三章 鎌倉時代……………一九九

第四章 南北朝時代……………三三三

第五章 室町時代……………三六六

江戸時代

第一章 この時代の概観……………三六六

第二章 啓蒙時代……………三九三

第三章 京坂の盛運……………四〇四

第四章 文運東遷……………四一八

第五章 江戸の盛運……………四七三

明治の世……………四〇五

索引



史講話

文學博士 藤岡作太郎 著

論

團結心と家族制

文學と社會

一國の文學はその國民の思想を表はすものならざるべからず。或は曰く、文學はその書だけの價值あれば可なり、社會の思想を代表するとせざるとを問はず、社會の多數に愛讀せらるゝとせられざるとを論ぜずと。この言は偏固に過ぐ、文藝の作品はすべて觀賞家を豫想す、作者と讀者とは相待つて存すべし。或は積年苦心の跡を擧げて、名山の巔に藏むるものあり、或は雙肩に重き自家の書を湖水に投じて、龍神を祭るものあり、火に焼くもの、井に埋むるもの、これらは世事を慷慨するの餘に出づるか、又は己の伎倆に不平なるが爲のみ。追悼禁ぜず、わが詩を束ねて棺中に亡妻の枕とせしもの、他日更にこれを發掘して世

國民の理想

に發表せしロセツチの行爲は、即ち文藝に對する作者の期待を説明するものにあらずや、されど最も多くの讚歎者を有する作品が、必ずしも最も優等なるものにあらず、當時一般の社會の思潮を代表する著述の、凡俗見るに堪へざるものあり、絶世の妙技が時代と睽離し、文運の推移と交渉なく、卒然として現はるゝこと彗星の如きあり、これはいづれも往々にして見らるべき事實にて、國民思潮の代表と技術の優劣と直接なる關係を見んとするが如きは、過ぎて及ばざるの説なるべし。かやうの極論は暫くさしおき、同一の伎倆ある甲乙の作品にして、甲は一代の思潮に觸れ、乙はこれと風馬牛の觀ありとせよ、乙は漕ぎ行く跡の白波、時の間に消え去つて跡なきに、甲は國運の盛衰と深き關係を有して、永く人心の奥に不磨の銘を刻む、文藝は一國文明の花、甲の如くにして、文學も始めて大なる價值あり。

或は曰く、文學の優秀なるもの、必ずしもその時代の思潮に合せず、百年、二百年の後、始めて全社會に歡迎せらるゝものあり、これをしも國民の思想を表はすものといふかと、固よりなり。元祿の世に住んで、元祿の思潮に浮沈するものも

國民の特性

可なりといへども、文化、文政の世に在りて、明治の文明を豫言するものは、更に可ならずや、人間は現在に満足せず、必ず未來に對して何かの要求あり、この要求は時には迷宮奥深く潜んで、社會みづからこれを覺らず、詩人ひとり感じてこれを筆にす、蒙昧なる世俗なほ覺らず、却つてこれを異端邪僻の言とする、と少からず、年を迎へ年を送りて後、始めて先醒の言に驚く、國民の思想といふを一代に膠着して見ることなく、三世に涉りて見よ、しかる時は、時相を離れて、百歩の外より希望の途に世人を導くもの、これ國民詩人の最も尊きものなり。世運は變遷一日も留まらず、沈滞するものは衰ふ、國民はその理想に向うて進まざるべからず、文學者は國民を率ゐて旗幟を翻さるべからず、文學は國民を代表する時に健全なり、その理想に向うて進む時に健全なり。

如上は國民の思想と文學との關係について一言せるのみ、されど余輩が國民文學の特色といふは、この一般の交渉を指すにあらずして、國民の特性を發現せるところにありて存す。國民にその國民性あること、一個人にその個人性あるが如し、感情に、思想に、異なる國民は一種まざるべからざる色味あり、これを

避けて他の色味を現はさんとすとも、本來の特性はなほ顯脱し來つて、何處にかその真相を露出せざれば止まず、これを個人の作品に見よ。紫式部には紫式部の特性あり、近松には近松の特性あり、一作家が自己の個性を没却して、本意のところ、筆を着けんとすれば、思想洞徹せず、筆路精銳ならず、苦心を重ねても失敗を免れず、本來稟け得たるところに脚を立つれば、感興湧くが如くにして、一個の小天地は讀者の面前に躍出す。國民におけるもまた個人に同じく、よく國民の特性を發揮する時は榮え、これを蔽ふ時は振はず、國民文學の花には必ずこの特性の蓋あり。この特性は固定して動かざるものにあらず、漸次進歩して理想の境に近づくこと、個人の人格がまた日にくく變化するが如し、されど三ツ子の魂百まで失せず、國民の心裡に蟠まれる根本の特色は、その國民の存するかぎりまた存すべし。但その根本の特色は時々形色ともに異なる衣装を纏ふを以て、眼光の鈍きものは服飾と本體とを同一視することあり、一時流行の姿を以て、國民が不變の趣味と斷ずるが如きは、慎んでこれを避けざるべからず。しからばわが國文學の特性とは何ぞや、國文學が表はせる國民の

一系の皇統

特性とは何ぞや。

日本國民の最大の特色は團結の強固なるにあり、全一體として相離れざるにあり。小にして家を成し、大にして國を成し、家族は團欒して一人の如く、國家は和諧して一家の如し。支那の東海を縫うて、しかも大陸と離れたる洋中、超然たる仙洞高く、墻壁を築いて、外犯すべからず、内紊るべからざる、強固なる國民は養成せられたり。而してこの國民はかけまくもあやに畏き現つ御神を上に戴き奉る。楫なき舟は行方を知らず、主腦なき團體は蜘蛛の子と散るべき鳥合の衆なり、國民にはこれを導くべき理想の光なかるべからず、現つ御神は赫耀として千秋ゆるぐことなき大光明と申すも恐あり。一道の靈光脈々として古今に涉り、仰望せる國民は精髓をこゝに養ひ、理想をこれに求めて活動す。大君いましてその下に國民あり、連綿たる皇統こゝに三千載、沂つて神代史上、天岩屋戸の神話を思へば、動きなき教訓は儼として存す。

神代の昔、素戔嗚尊同胞の親に乗じて、君臣の別を辨へず、暴威を振ひて天照大神を苦め奉る、大神これを厭ひ、天岩屋戸を閉ぢて籠ります。天に懸つて國土を

天岩屋戸の神話

照す光明、影忽ち消えて、黒闇々の中、民衆何を便に動くべき、隙を覗ひて、禍つ神は五月蠅なす湧き出て、紛擾亂雜、開けたる國家はまた混沌の世に歸らんとす。八百萬神天安河原に集ひて熟議し、心を一にし、力を合せて、更に天日の照臨を祈る。憧憬の後に希望あり、山の如き岩戸は開けて、瞳々たる旭日天地を別ち、是非を明らめ、民衆その光明に浴して、各自の分を盡すを得たり。歴代の聖帝は即ち不窮の後に天祖の神靈を體現したまふもの、天つ日嗣の御名は國民が古今に通じて奎運發展の教化を仰ぐところの目標とまします。普天の下、卒土の濱、王土、王臣にあらざるなし、常燈上に輝き、國民その下に共同一致して、一定の理想あり。一定の理想を追うて進めば、人をして極端に奔り、邪路に陥るを得ざらしむ、草も木もわが大君のものなるに、何處か鬼の棲るべきぞ、理想の光は空假の幻に終ることなく、現實は時々刻々にこれに向つて近づかんとすれば、國民は希望に充ち、現世を虚偽罪惡の巷として厭ふことなく、樂觀的に人世を觀じ、世間的活動を以て人間の務とす。上に萬世不滅の皇統あり、金甌無缺の國體はその國民をして無限際に無限力を發揮せしむべし。

族制政治

日本の社會は一の大なる家族たり、君は專制の君にあらず、民は不平の民にあらずして、國家は即ち父子夫妻兄弟を廓大したるものなり。日本上古の風、所謂族制政治を以て成り、家族と國家と緊密なる關係あり、二者に大小の差別ありといへども、そのもと一物なり。こゝには家族制と君主制とが社會に於ける出生の先後を論ずるにあらず、一般の法則としての、これらの發達交渉の順序は、社會學の説くところ、今、余輩の關するところにあらず、唯歴史ありてこのかた、聖皇を仰ぐの制と家族親しむの制とは合一して、日本の社會を構成したり。而して盡未來際、國民がわが大君を拜み仕へまつるが如く、家族の親睦も一代を限りてのことにあらず、一代を限れる家族は強固に結合したる家族と稱すべからず、わが家族は一系の氏姓永く過去未來に涉りて動かず、國家に天祖あるが如く、一家にまた氏神あり、氏神は即ちその家を開ける祖先を祀れるなり、代の子孫皆この神の血を分てることを自覺して、同血の眷親十人も百人も唯一人と凝結し、家長を中心として、その手足の如く働く。現在家族の世にある、みな祖先の賜なることを知り、益、一家の榮達を計るは、自己の爲に止まらず、祖先

國運振興の
機

の名を辱めざらんが爲、後世子孫の幸福の爲なりとす。かくして個人の活動はその死と共に消滅せずして、五尺の血肉の外に意義あり、輯睦せる家族は集まりて社會を組織し、こゝに和氣霽々たる國家を見る。

聖德太子の十七箇條憲法の第一條に和を以て貴しとすといへり、一家の親は引いて一國の和となり、君民上下合體して、確立せる理想に向うて進む。されど庭前の樹を見るも曲折あり、四季の變遷その順を違へずといへども、時に寒暖の期を失することなきにあらず、社會の秩序の紊るゝ時あり、民衆の歸趣の蔽はるゝ時ありて、國家は沈滯萎靡す。唯國民が全一體として最も強固に統合せられ、理想の燈最も明かにその前に輝く時、個人は國家の利益の爲に一死を惜まず、現在を未來の犠牲として憚らず、國運こゝに於てか振興す。上古、神功皇后が韓國を征服したまひしが如き、その好例なり。鎌倉幕府の創立は天皇と庶民との間に障壁を築きて、國民歸嚮するところを失ひ、天下漸く亂れ來りしが、豊太閤の出づるに及びて禍亂を戡定し、日光再び天に高く、久しく抑壓に艱みたる希望は勃然と頭を擡げて、更に韓國の征討となりぬ。國民が一體として活動

國勢と文學

する時、國運の最も發揚すること、以て見るべし。されどこれには註脚を要すべし。かくの如きは日本國民に限りての特色にあらずして、世界を通じて國家興廢の一般の運命なりと。然り、この言には異論なし。余輩はわが國史を説くよりも、普通の歴史の規則を説くやうなるが、さりながら日本國民の團結力の殊に強固なるは、なほ何人も許すところにあらずや。その人種的天性なるか、または國土の形勢によつて養はれたるものなるかは知らず、とにかくに古今を通じて萬國に比類なきところなり。世界のうち、一國興りて一國滅び、一朝絶えて一朝繼ぎ、千年の舊國老いてなほ盛なるものなきに、ひとりわが國が上下三千載、抑揚波瀾を経て益々振ひ、更に青年の血氣を回復したるもの、これ何の力によるか。

これを文學に見るに、國民が固く團結し、かくして得るところの勢力を自覺する時に、詩人は彬々として輩出す。萬葉集はかくして成りたり、人麿等が長歌に、まづ天孫の降臨より説き起すを例とせるを思へ。天往かば汝がまに、地ならば大君います。海行かば水づく屍、山行かば草むす屍、わが大君のへにこそ死

階級制度

なめとは、萬葉詩人の信仰にあらずや。外國の影響を排して、國民が己の力量を正當に認識し得たる時、古今集は出て、源氏物語は作られ、一は和歌の範を後世に示し、一は前後無匹の小説と成りたり。宇津保、源氏には、神聖なる皇統永く傳はりて、犯しがたき威あるを見るに、狹衣に至りては上下の分を紊るところあり、文學もこれより皇室と共に萎縮して振はず。元祿時代に俳諧戯曲小説が鬱然として一時の盛を極めたるも、從來屈辱に馴れたる中流以下の社會が、一躍して元氣を回復し、己の社會が國民の有機的一部分なることを自信して、始めて芭蕉、西鶴、近松等の大家を輩出せしめたるなり。

長所も一轉すれば短所となる。是非の別るゝところ、一髪の間もあり、家族制はやがて階級制の發達を促しぬ。家族が遠く歴史を縫うて、前代を仰望するあまり、祖先の職務をも改むるを肯んせず、朝廷に政を執るもの、武器を製するもの、土地を耕すもの、鳥獸を獵るもの、いづれもその家業を世襲すれば、家業によりて更に貴賤の階級を生ず。代々神に仕ふれば、その家おのづから尊貴に、世々屠殺を事とすれば、その分おのづから微賤に、氏姓は一目して上下の別を示す。上

階級と文學

下の別あるは可なりといへども、これを過度にして、上級の士ひとり權力を恣にして下民を壓し、下民は蠢々として無意義なる生活を營むのみにして、文明の雨露に浴せざるに至つては、既に國民の全一を破るものなり。まして封建の世、群雄の割據は諸國を區々に分離し、遠近隔絶、民庶は城下あるを知つて國家あるを知らず、幕府また政事を左右して、皇室の尊嚴を蔽ふ、支離滅裂、仰ぐべき理想の光明も黒雲に蔽はれたる時、國民は方向に迷ひて、合一的動作を能くせず、國力と文學と併せて疲弊するも、自然の勢なるべし。

階級の制は平安朝に至りて一時の極に達せり。少數なる廷臣のみ漢土の文物を輸入し、人民と手を分ちて遙かに前に進み、大多數の民はこの先進者と何等の交渉もなく、都鄙懸隔、上下睽離、文藝は京都貴族の專有に歸す。萬葉の和歌は貴賤文武共にこれを詠じ、東歌あり、防守の歌あり、敢て社會の一部の獨占を許さざりしに、平安朝の和歌小説は月卿雲客が春宵秋夜の玩たるのみ。古今集、源氏物語が絶世の文學書として、なほ優柔にして單調なる嫌を免れざるは、ひとへにこれが爲なり。わが國の梅の花とは見たれども、大宮人は何といふらん。

一章階級の弊害を罵倒して、快極なし。鎌倉時代に至つて、平安朝の積弊は壊れたれども、別途の階級制は尙更に大なる禍を醸し、中世を通じて文藝の暗黒時代を生ず。皆人の世にあるうちは數ならで、憂きには漏れぬわが身なりけり、人世の最後ばかりは利利も首陀も變らねど、宮と藁屋との隔は遠く、數ならぬ身の大君の御光を仰がず、君が御影は藪しわかぬを、強ひて明暗の差を立てたるところに、いかで文學の花美はしく咲き出てなんや。江戸幕府時代に至りて、天下は一統せられ、幕府また皇室奉戴の意を表すといへども、諸藩の分立は依然として存し、階級の差別は更に制を定めて宣言せらる。木曾殿と背合せの寒さかなと歌へる芭蕉の如きは、階級を超絶し、平等なる人世觀の上に俳道を立てたるが、一般の文藝はこの例に従ふこと能はず、上流は墨守し、下流は卑俗に、個々分立して立ちたるは、當時の社會が生みたる自然の弊ならずんばならず。明治に至りて幕府は倒れて、國民は直に叡聖なる天皇の御稜威を仰ぎ、四民同等の權を得て、全一なる國家の統合こゝに成る。近來國運の駸々として發展せるもこれが爲なり。赫々たる光明の下に、一般の社會を擧つてその讀者とすれ

因襲摸倣の弊

ば、文學の隆々として興るべきは、當然の數のみ、或る人は既に古人を凌ぐ、將來の運はた益多望なり。
されば階級の制を喜ぶは、わが國民の特性にあらずして、歴史に現はれたる一時の現象に過ぎず。蓋し階級制の起るや、或る一時代の世態を以て永遠の實相と錯認し、これを軌範として行動するより來れり。皇統連綿無窮に涉り、國民またこれを仰いで進み、社會を組織せる家族は、各自祖廟を祀りて、系統永く繋がれんことを欲す。これまでは可なりといへども、この習慣は増長して、祖先を神と拜し、英雄と望む結果、何事をもこれに摸せんとするに至つて、誤れり。祖先が醫者となり、大工となる、皆その才の能くするところに従へり、これは一時の現象のみ、たとひその統を受くるものといへども、才に適否あり、各、その適するところに向つて進むべし。ざるを階級制の過重はこれを許さず、曩昔一時の現象に執着して、強ひて祖先の業を墨守す、世襲の慣習はかくして祖先の摸倣となり、因循固陋の弊となり、龍頭蛇尾、國運の沈滞不振を促す。祖先を仰望するの眞意は、かくの如き外形の事跡を追隨するにあらずして、一系の血脈の下に家族

個性の消磨

の團結を強固にするにあり、祖先の魂は過去の事業に存せずして、己の血中に傳はり存す。

階級の制は古人の崇拜となり、先例の蹈襲となり、従うて個人の才能は發揮せられず、模型の中に押しはめんとして、個性を削り去る。典型を蹈襲すれば、おのづから形式を追ひて、内容を忘れ、文學も個人の心理的變化に注意せずして、境遇の推移をのみ重んずるに至る。個性の滅却はかくして起るのみならず、また社會の團結、家族の交渉が緊密に失することも、これが原因となり、彼此相促して天才を殺すこと少からず。團體の強固なる一致は規律を増し、服従を進めて、軍隊の武力の如きは専らこれに依るといへども、多數の爲に少數を犠牲に供して、才識ある個人も無學の團體の前に勢力なし、かゝれば個人もおのづから團體の指導に依頼して盲動す。且階級の制は先天的に個人の地位を定めて、材力の有無を問はず、如何なる才を包みても、青雲登るに難ければ、世人は一般にその才を養成するに勵まず。個性は漸々に消磨して、唯團體を表はすところの類性あり。文學もまた複雑なる性情の發展なき、善か悪かの類性のみを寫せば、

真相と假象

おのづから單調無味に流れ、この弊を隠さんが爲、幾かに事件の變化を多端ならしめて、讀者の好奇心に投ず。かくして個性の滅却はわが文學が屢、免れざる弊なるが、これを以て切り捨てがたきその特性なりとは斷ずべからざるが如し。

個性の滅却を難ずるに當りて、余輩は再び一時の假象に拘はりて、事物の真相を忘るゝの弊を説かざるを得ず。旗本八萬騎といふが如き、徳川氏が幕府を建つるに當りて、己の家を擁護する親衛隊として設けたるものに過ぎず。世移り勢變じて、なほこの過去の方便に執着するは迂遠なり、將軍家も時運の已むなきを知り、大政を奉還して、恭順の意を表せる時、彰義隊ひとり上野に據りて、官軍に抗せんとす。誰かこれを以て義理を辨ずといはん。個人の才能は強ちに一時の世態に着するものにあらず、團體の精神はその形式に拘泥するを厭ひて、これを個人の一身に體現するを本旨とす。國民は各自相依り相待つて立つと共に、個人の才を十分に發揮することによつて進歩す。一國民は砂石を積みたるが如きものにあらずして、松林村落、橋上の人、枝上の鳥、各、その所を得て、一幅

の山水畫を成せるが如し、無機的混合にあらずして、有機的融合なり。基面の黒白の石よりは、むしろ將棊の駒に似たり、四十の駒各、その能を異にし、術を盡して、盤上その一を缺くべからざるが如し。天岩屋戸の前、鏡を鑄るもの、劍を鍛ふもの、或は祝詞を讀み、或は鹿骨を灼き、天鈿女は槽伏せて躍り、天手力雄は力に任せて岩戸を開く、慣習なく、束縛なく、渠等は共同一致して、しかも各、その個性の能くするところを爲したりき。個性は滅却すべからず、これを發展せしむるは、即ち國民を發展せしむるなり。

不拔の特色と一時の現象とはよく辨ぜざるべからず、數百歲馴致したる習慣といへども、人心の根柢に浸みざるものは、移すべく、改むべし、未だ國民の特性とは稱すべからず。

第二章 自然の愛

國土と民性

國民の特性は初よりその人種に固有なるものもありといへども、またその住

我國の風光

處の地勢氣候によつて馴致せられ、變化したるものも少からず、そのもと同じき印度歐羅巴種族が東洋に、西洋に相分れて、寛猛柔剛匹を異にする種々の國民と成りたるは、南國の日北地の嵐、山海さまぐの風物がこれを養ひたるなり。日本國民が全一體としてよく統合せるも、また蒼々たる煙波の外、四圍接するの國なき、その地位に影響せられしこと少からざるべし。さらばわが國民の特性を論ずるに當りては、日本の自然についても觀察を下さざるべからず。

日本は東洋の樂園と稱せらるゝこと、歐洲における伊太利、瑞西の如し、氣候中和にして山水明媚、瘴烟毒霧の襲ふことなく、猛獸毒蛇も棲むこと稀に、曠茫たる平原眼界の盡きざるものなく、浩蕩たる長流數百里の山野を浸すを見ず、雄大瑰偉なる大陸的風致に乏しといへども、至るところ優麗嫺雅なる勝景に接す。東海の岸を縫うて進めば、富士を前にし、富士を後にして、長汀曲浦浪靜に砂滑かなり。瀬戸内海に船を行れば、松の島を迎へ、巖の嶼を送りて、朝日、夕日に移らふ景趣は、應接に暇あらず。陽春櫻あり、晚秋菊あり、初夏の梢にかゝれる藤波は、紫の綾を池水の鯉に織り出し、季冬の森、鶉の聲暗き陰に、紅の椿は拾ふ兒な

しに切りに落つ。美なるかな山河、これに接するものは、怒れる心も和ぎ、結べる思も解けて、愛賞に他事なきを得ず。山川は優美なり、穩和なり、これに馴れ、これを愛する國民が、また優美にして穩和なる特性を有するに至れるは、即ち自然の感化が致すところなるべし。日本の土地は孔雀を生ぜずして、雉子を産す。國民の性もまた孔雀の姿の如く濃艶ならずして、雉子の如く淡泊なり。悲憤の情時には火の如く燃ゆることありといへども、概するに稟質猛烈ならずして、穩健に、執着せずして、洒脱なるも、また外圍の風物が漸次に養ひ來れるものならんか。

さりながら如上の論は斟酌を要す。國民の性質は國土の影響を被ると共に、その交通する他の國民の感化をも受くべく、食物などもまたこれを左右する勢力なるべし。相接する人間のおのづから相近づき來ることは、更めていふにも及ばざるべし。肉食の人が精力強烈に、菜食のものが恬憺なるなども、説明なくとも世人の認むるところなるべし。されば寒溫の氣、山川の風が國民性を動かすところの威權には、餘に大なる價值を附すべからず。この論はまづこゝに止

國土以外の影響

自然の鍾愛

めて、更に直接なる風土と國民との關係を説かんとす。何ぞや、わが國民が自然を親愛する念是なり。

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豐饒にして、河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美穩和なる山川は常に臉上に愛を湛ふる如し。接するものはこれに親み、親むものはこれを慕ふ。愛に迎へらるゝものは愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に棲むわが國民が、その一木一草をなつかしむは、自然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には、食品も玩具も數ふるに足らず。露を帯びたる植木の葉の翠、花の紅こそ、カンテラの光に映えて水々しく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買ひ求めて、座敷に飾り、庭に植ゑ込む。裏長屋の道具の据ゑ所もなき窓前にも、稗詩を作りて、田舎の景色の面影を偲び、破れ鉢に唐の芋を育て、やさしき野趣を嬉しむ。長火鉢のわきの福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる葱は、風鈴の音と共に冷し。上下貴賤を通じて、自然を愛することかくの如きは、他の國民にその匹ありや。

自然と物名

わが國民は母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず、自然の愛すべきを見て、恐るべきを思はず、野をも垣をも吹き亂す二百十日の風も、野分の名にやさしく、峰も谷も一つに埋みてすさまじき冬の山里も、深雪といへばみやびやかなり、荒き猪も臥猪の床と唱ふるにやさしく、聞ゆなど、兼好がいへるは、われらが自然に對するこの傾向を説明せるなり、雨といへば、照り續きたる夏などは嬉しけれど、一日の降も十日の照より飽き／＼するに、卯の花くだし、時雨など、何れも趣ありて感ぜらる。自然の愛はかくして表はるゝのみならず、その名を借りて屢、人事に用ふ。すてに文學には、源氏物語の卷の名に夕顔、末摘花、葵、桐、朝顔、胡蝶、螢、常夏、藤袴、若菜、柏木、鈴蟲、紅梅等の類多く、これより源氏名の稱は起れり。われらはまた日常の用品にも、自然より出てたる名を用ふ。菓子に鶯餅、櫻餅、柏餅、萩の餅、紅梅焼、時雨など枚擧するに暇あらず。今の煙草にも、福壽草、白梅、草月、あやめ萩、紅葉等あり。古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるもやさしからずや。ほんのりとのぼせたる美人の湯上りの姿を櫻色といひ、風にも堪へがたげにしなやかなる態を柳腰といふ。惡婆は菊に比べ、醜婦を南瓜と見る、團

自然の尊重

栗眼もあまり恐からず、腫物の腫みたるも酸漿の如しといふにきたなさも薄らぐべし。かくの如き類例は指を屈するに従つて思ひ出づべく、いづれも國民が自然の昵愛を示すものにあらざるなし。

わが國民は自然を愛賞する餘、またよくこれを尊重せり。尊重するものには悦んで服従す、かれらは漫に人工の手を加へずして、自然の儘に自然を仰ぐ。この服従を以て屈伏といふ勿れ、悦服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは不平なる奴婢が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するものは從順なる見孫が寛仁なる家長を見るが如し。任意的なるものは毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意とす。花を愛する趣味の、われらがいかに西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら、幹ながらの姿の美はしきにあらず。花一輪の色の艶に、香の芳しきなり、櫻は一枝の趣を賞するよりも、峰に渡り、川に沿ひて雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もそのまゝに、願はくはこれに置く朝露をも落さざらん。一は枝を携めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり

撒きて、歡興を助くるに、一は床上の盆石、盆栽に、自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し、同じ菊を見るも、彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋草花のチウリ、オピオシニスなど、その葉に何の趣もなくして、その花の妖艶なるは、寧ろわれらの眼に毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花、尾花、その花に何の美はしきことかある、されどあるかなきかの黄花を捧げて、なほたよくと下陰の蟲の音にもゆらく様、ますほの色はやがて白くほくけて、霧に濡れ、風に靡く趣は、われらが胸に浸みて忘れられず、日本人が花を愛するは、その外形にあらざ、賦色にあらざして、その風情にあり、直ちに自然の懐にわけ入つて、その眞意義を握るにあり、かくしてこそ自然を愛し、自然を尊ぶなれ、自然に親しむことの深きは、これ日本國民の特性なり。

或は曰く、自然の昵愛はわが國民が固有の性質にあらずして、支那文學の感化多きに居る。山川の景、花木の美を愛する詩歌は、懷風藻、萬葉集に至りて多く、書紀、古事記には極めて稀なり。梅花の詠は、百濟の王仁の歌と稱するものをその

外國文學の
刺戟

嚆矢といふにあらずや、櫻花の美を賞する情を詩に賦したるは、平城天皇に始まる。これらは、隋唐詩人の影響に出でたるなるべく、公けに韓唐と交通せし以前、の歌を見るに、専ら人事を詠ずるのみ、自然物をその中に挟むも、多くは蔬菜魚貝の如き實用の品にして、自然の美にあこがるゝ情を表はし、が如きものは、殆ど見ることなし。知るべし、自然の愛もまた外國傳來のものなることをと。されどこの説には同ずること能はず。田野に鎌を執る、百姓にも、中心深く詩情の存するものなからんや、たゞ機に觸れざるものは、終身その才を發揮することなくして已む。天稟の才情も、これを啓き、これを導くものなくんば、顯はれざるなり。小兒の好むところを見るに、賢不肖を問はず、植物園よりも、動物園を喜び、床に飾りたる盆栽よりも、汽車、電車の玩具を愛す。その平生に近き人事に興味を有して、これを摸擬すれども、大なる自然については考ふるところなきなり。上古の民はその單純なることなほ小兒の如し、その花を歌ひ、紅葉にあこがれざりしは、いまだこれを啓發するものなかりしが爲なり。璞玉石の如しといへども、磨いて炫耀の光を發す、光は内より發するなり、外よりは唯磨けるのみ。

平和淺近

支那文學の傳播は詩趣發展の機たりしもの、先天的に自然を昵愛する特性のわれに存するなくんば、この指南車ありとも、動くことかくの如く速かならんや。

論ずるものまた曰く、自然の美を知るは、その美に見放されたる時にあり。曾て郷里を出てざるものは、いまだ郷愁の情を覺えず。霧深く、晝なほ燈を便る倫敦に住みて始めて田舎の清明なる景色の愛すべきを知る。異郷の旅客は松島の勝概を説けども、鹽竈の漁夫はたゞ網にかゝる魚の多少を數へて、松に降る雪を寒しと喞つ。優秀なる島帝國に住み、上下三千載、悠々として過し來れるもの、誰か眞に山河の美を感ぜん。擊壤鼓腹の民は却つて君徳を知らずと。この論はまことにその理あり。子を失ひたるものにあらずんば、親の愛を知らず、親に別れたるものにあらずんば、子の愛を知らず、日本國民は子を有てる親なり、親の膝元にある子なり。かれらが自然に對するは、子を愛する情が先天的に人間に存するが如く、親に孝なるべき教を人の子のげに理と守るが如し。中心に備はりたる情の、支那の儒教文學等に啓發せられて、外に顯はれたるなり。墟を闢ん

東洋と西洋

て親昵せる家族の愛は、單簡なりといへども醇正なり、わが國民が自然の愛もまたかくの如し。苛酷なる氣候の恐るべきを知らず、悲惨なる人生の運にも會せざれば、明媚にして緩和なる自然の憧憬を痛切に感ぜず。たとへば慘澹たる苦心を重ねて、更に平坦に歸れる人にあらずして、生れながら平坦なる人の如し。渾身の平坦は等しく愛すべしといへども、彼の心裏に潜める深刻の感は、遂に此の胸中に求むること能はず。國民が自然の愛は廣く上下にゆき渡りて、また極めて醇正無垢なるものなりといへども、その弊を數ふれば、平凡なり、淺近なり、猛烈沈痛、刺すが如く、刺るが如きものあるを見ず。やさしき自然の懷を離れざる國民の情は、おのづからかくの如くなるべく、その人生に對する思想もまた自然に對するに似たるべきことは、推測するに難からざるべし。

更に説あり、曰く、自然に執着するは、常に日本人の性質たるに止まらずして、東洋人が一般の性質なりと。この説は既に定論として人のよく知るところなりといへども、記述の序に、またこれについて一言を費さざるを得ず。そも、事物の性質はこれに反對せるものと對照するによつて明瞭なり。夜あつて太陽

兩洋の文學

の光を知り、天高きがゆゑに人小さし、善あつて惡あり、女子の柔あつて益、男子の剛を見る。人間は人生を知らば可なり、文學は人生を寫すを以て、その目的なりといふ、されど人生を知るには、自然を知らざるべからず、自然は人生と對照す、二者を比較して、始めて各自の真相を知るべし。故に古今の文學いづれも人生を寫すと共に自然を寫す、たゞ性に好惡あり、或るものは左に偏し、或るものは右に傾きて、公平なるを得ず、兩大陸を比較するに、西洋人の見るところは人生を主とし、東洋人は自然を重んず、諸般の文藝はよくこの相違を示せり。古くは希臘のホーマーは人に同じき神、神に似たる人の交渉、戰鬥を寫して、自然の敘述は極めて稀なるに、印度の戯曲は人をして自然の景物を説かしむること多し、希臘の彫刻は専ら人間の美を寫し、永く範を西洋に垂る。支那の文藝を見るに、詩經の如きは、人事を主とすれども、これもまた自然によつて興を發せるもの少からず、清談家流、文人者輩は、人生の煩を厭ひて、自然を友とし、親む。西洋人は自然を寫すにも、これを人間に擬し、東洋人は人間を説くにも、これを自然に比す。人間に擬すれば、自然もまた活動の氣を帶び、自然に比すれば、人間の

東洋人の消極性

の濁れるを清くし、熾なるを和ぐる傾あり、わが國にしては、新古今集前後の和歌および元祿、天明の俳句が、いかに敘景の詠に富めるかを思へ、謠曲が人事を主としながら、なほ自然を寫したる文句の過半を占めたるかを思へ、これらはわが國民が固有の性の他の東洋人に等しきもあるべしといへども、また印度の佛典、支那の詩文の感化によれること少からざるべし。されど一般の東洋人が自然に對する感情は、かくの如きに止まらずして、なほ極端に向うて走れり、西洋人は専ら人智の發展に勵みて、學術の研鑽、器械の發明等に、あくまで人間の力を活動せしめて、自然の威權に敵し、抗し難しと思はれしその壓制にも反撥す、壯大なるゴシック風の家屋の如き、汽車、電車の運用の如き、いづれもこれを證せざるはなし。東洋には、現代の日本を措いて、かくの如き人力の發動なし。印度の氣候はその住民を懶惰にし、自然の猛威に屈せざるを得ざらしむ。支那には孔子の道の實踐を主としたる、老莊の教の虛無を説きたる、細論すれば種々の區別あるべしといへども、世俗一般の信念とするところ、天運は抗すべからず、人間は己を捨ててこれに調和せざるべからずとい

消極的文藝

ふにあるが如し。榮枯盛衰の假象は人生に見、常住不壞の實相は自然に見る。人生は虚偽なる慾界の姿にして、自然は無限なる造化の鏡なり、彼は浮動、此は寂靜。されば不滅なる生命を得んとするものは、人為の巧を捨て、自然の眞に就かざるべからず。慾火の浮動は寂靜の水もて消すべし、山と動かず、水と拘はらざる自然の性を得て、人間は始めて完全の域に至れるなり。西洋人の社會觀の積極に樂天的なるに反して、東洋人が消極に厭世的なるは、かくして來れり。西洋人は人間を本とし、東洋人は自然を重んず。人間を本とすれば、強ひてその性情を矯めんとせず、寧ろ天に稟けたるところを積極的に完全に發展せしめんとす。西洋の道德が概するに愛を主とし、また戀愛を神聖なりとしたるなど、皆この理に出づ。文學が個人性の變化を寫さんと力むるも、由つて來るところ深しといふべし。自然を重んずれば、人生を擧げてこれに従ふ、東洋の道德も一概にいふべからず。性善を唱へ、性に従ふを道とすといふが如きもあれども、なほ人性は汚れ易く、亂れ易し、道を得んとするものは、力めて克己の綱に意馬心猿の狂奔を拒がざるべからず。制慾は修身の鍵なり、己を空しうしてこゝに

わが國民の積極性

仁義ありとす。その文藝が人生を去つて自然を寫し、道德を人化したるが如き普遍性を寫すも、これらの思想に基くなるべし。わが國にては、東山時代の水墨畫が山水を主題とし、人間を寫しても、遁世得脱、寒巖枯木の如き清僧、居士を描きたるが如き、馬琴が小説に勸善懲惡を旨としたるが如き、進むところは異なれども、いづれも如上の東洋思想の影響に出でたるは、言はずとも明かなり。一般東洋人の自然に對するは、その威力に屈從せるなり、悦服せるにあらずして、懾伏せるなり、人間は自然の親友ならずして、その奴隸なり。その文學におけるも、人生を蔑視して、自然の一時的幻影とせずんば止まず。この點において、日本國民は大にかれらと性質を異にす。西洋人に比すれば、等しく自然を重んずるなり、されどわれらは他の東洋人の如く、自然を恐怖せずして、これに親昵す、あくまで自然を尊重するは、その慈愛を思へばなり、寒村の民が收斂の君に對するが如きは、われらの事にあらず。むしろわが國民は積極的なり、樂天的なり、生々として活動して、人生の力を無限に發展せしめんとす。これを證せんとせば、萬葉集の生氣ある和歌を見よ、また外國の影響を脱して、己の力を自覺せる

平安朝と元祿時代とを見よ。一の貴族的なると、一の平民的なるとの相違はあれど、共に感情を主とし、戀愛を寫して、赤裸々に人生を描き出さんとしたるにあらずや。落窪物語の如きは、自然に關する章句は殆どこれなく、近松の淨瑠璃は謠曲より出てたるところ多くして、しかも景物の描寫の如きは、その道行の外には稀なるにあらずや。額田王の歌をはじめとして、日本人は春秋を比較して、秋に傾くこと少からず、その秋に傾くは、悽慘なる風物を見ずして、千種の花の色々の美を愛するなり。支那人は杜鵑の聲を悲しと感ずるに、われらは深更の初音を待ち兼ねて嬉しと聞く、わが國民は厭世の觀念尠くして、世間に活動し、希望は前途に洋々たり。

されど支那文物の輸入ありてより、日本國民は著しく東大陸一般の思想の感化を受けたり。かれらは從來覺えしことなき悲愁を感じ、人間の無常を觀じ、人生を提げて自然の中に吸収せられんとせり。奈良朝に兆して江戸時代に至り、殊に鎌倉室町時代において、この傾向を著しとす。日本國有の積極主義と東大陸の消極主義とは、わが國において衝突したり。否、由來矛盾を好まざる平和の

將來の國文學

國民はよくこの衝突を和げて、反對せる二者を融合せんとしたり。されどなほ中世以來消極主義の偏重せられたりしを憤慨して、上古の積極主義に歸さんとしたるが、國學者のみづから天職としたるところなりき。今日また別に西洋の活動主義の輸入したるあれば、わが國民の將來は、決して從來の如き受動的のものにあらじ。その行動を案ずるに、蓋し國民の本性を基礎として、これを彩るに東西兩洋の思想を折衷したるものなるべし。折衷はよく物の中正を得て、極端に走らずといへども、執着の薄きがその缺點なり。故に邦人の性、典雅、冲澹、洒脫の美は存すれども、凡俗、平板、淺薄の誹もまたこれあり。是非は何物にも存す、わが國民は唯その長所を發揮すべし。自然を愛するはわが特性にして、人生に執するもまた然なり。自然と人生とは車の兩輪の如し、兩輪といふよりも一物の二面なり。人生は即ち自然の一部、自然はまた人生の反響なり。二者相離るべからず。時にその一面を放ちて見るは、他の一面をして明かならしめんが爲なり。便宜の爲に兩片とすといへども、これを理會すれば、渾然たる一體なり。健全なる思想は二者を分つてしかも分たざるところに存すべし。この意義を明

かにするは、即ちわが國文學の任にあらずや。



時代の區劃

大和魂説、各宗學堂説、
以事、刊事の考、
（三）並行、新金、（三）

太古

第一章 この時代の概観

茲にいはゆる太古とは、神代より紀元を経て奈良朝の終、平安奠都に至る間、おほまかにいへば神代このかた紀元千四百五十四年までの時代を總稱せるなり。されど大化以前の年数は頗る曖昧にして、歴史の教ふるところもいまだ容易に信じ難く、按ふにさばかりの長年月を経たりとも覺えざれど、今は暫く普通にいふまゝに従ふのみ、この悠々たる年月の間、諸般の文物はその變化固より一再のみにあらず、これが敍説に當りても更に一層の細別を要することまた當然にして、曩に余が著はしたる新體日本文學史教科書にもこの文化の變遷に基きて、おほよそ四期を劃し置きぬ、神代以來、漢學公行以來、佛教傳播以來、および奈良朝これなり。而してこの四期やがて太古文學發達の四段落なること論を須ひずといへども、しかもこはたゞ他時代に對する權衡上の區分に過

時代の特色

ぎずして、世古うして人文の發達愈、遅く、到底これを以て進歩急激の近世に較ぶべくもあらず、その成績のごときも多く言ふに足るものなし。これを今日に傳はれる作品に徴せよ、當代の文藝がよくこの四期を通じてやう／＼進歩發達せるは、明かなる事實なりといへども、その歩武極めて緩に、一々の期間につきて著しき變化の實跡を指摘するが如きは得て望むべからざるところ、一國文化の歴史よりいはば、文運の發展また當に大勢の變遷推移に伴はざるべからざるが如しとはいへ、この時代の文學については、余輩は寧ろ簡に分ちて二期となすの便にして、且、當を得たるを思はずんばあらず、二期とは何ぞや、曰く、大化以前神代—一三〇五と大化以後—一三〇五—一四五〇と、而して奈良朝を以て特に後紀における文運發展の顯著なる時期とす。

概觀するに、この時代においては文學なほいまだ後世におけるが如く外國の影響を受けず、よし受けたりとするも、極めて微少にして、わが日本國民が本來の國民性を最も赤裸々に表はせるは、この時代を措いて他にあるなく、従つて純粹なる日本國民の感情をありのまゝにうち出せるは、やがてその特色なり。

太古の風俗

近世の國學者輩が、本邦道德の紊亂を以て専ら儒佛二教の傳播に歸し、極力外國の影響を排斥せんとする自然の念より、新に樹つべき倫理道德乃至制度の如きは、一にその範を天真無垢なる原始の人間に則らざるべからずとなし、盛に憧憬思慕したりしは實にこの時代、わけても初期にありと雖も、文物風俗いまだ開けず、思想の純潔簡素は則ちあれども、單純幼稚の域を脱せず、いはば人間の搖籃時代に過ぎざりき。

太古國民生活の質朴なるは想像の外にあり、明治の聖代となりては邊地僻境の民もなほかつこれを髣髴するに難し、政治の中心地といふも、今日の村邑とその繁華いづれぞ、奈良朝以前、遷都の概ね帝位の繼承に伴へりしに照しても、都といふ名はいかめしきが、實は宮殿のある所といふに過ぎずして、廢むるも建つるも誠に易々たりしさま想見すべからずや。當時、一般國民の地を相する、曠茫の平野を棄て、山麓谿間の小仙境に就き、薪採るに易く、水汲むに便なるの邊、山を背うて暖さに面し、三々伍々その住宅を營む。家居多くは黒木作にして、棟梁を繋ぐに藤葛繩索の類を以てし、蒼くに藁を襲ね、柱を埋めて礎を用ひ

外國文物の傳來

ず、その他、日用の具、木葉を以て杯椀に供したるが如きを思へば、衣服調度の類もまた概ね推知すべきのみ。

時勢既にかくの如くなれば、よしや太古の太古には文學行はれたりとするも、なほ今日の片山里に僅かに盆踊の歌謠等の存するにも似たりしならむか。されどかくる時代もこれを久しうしては、遅々たれども文物の變遷漸く認むべく、わけて應神天皇の十五年(九四四)には漢學の公行(私にはこの以前すてに行はれたりしならんと共に、三韓の文化を輸入し、ついで支那との交通も開け、雄略天皇は殊にかの國の制度および産業に注意したまひて、衣食住の進歩益々見らるべきものあり、この勢を頼に助長したるものは、實に佛教の傳來にして、事は欽明天皇の十三年(一一二二)に屬す(私にはまたこの以前すてに傳はれりき)時に聖德太子あり、英邁の資を以てこれが興隆に力めたまひしかば、その傳播幾ばくもなくして宇内に普く、從つて久しく國民の間に鬱屈せる思想は俄然として迸發し、憲法こゝに布かれ、制度こゝに改まり、造寺造像の美術そのほか百般の文物一時にその面容を新にして、やがて大化の改新となりぬ。蓋し真正の

文藝の進歩

意義における日本文明史は、佛教の渡來を以て開卷となすといふも不可なく、頑固なる國學者、漢學者の輩、口を開けば佛教輸入の惡果を呪詛して止まずといへども、その日本文化に對する第一の開發者たり恩人たるは、終に否定すべくもあらざるなり。

當時、支那は唐代の盛時にして、その一事一物悉くわが國民の師表となりたりき。外にしてわが留學生とまたかの來朝者とがこれを傳へし結果は、内に警鐘と國民の自覺心を喚起し、内外呼應、燦たる奈良朝は忽ちにして成りぬ。さきに余輩はこの時代を以てわが國民の搖籃時代となし、その文化は質實樸野の一語に盡きたりとなししかども、かくて太古も、神代ながらの太古と比較的後代の奈良朝との間には、著しき逕庭あり、特に奈良朝の建築彫刻は範を唐朝に取るといへども、その青きは藍より出て、藍より青きもの、洵に以てわが國藝術の誇とするに足る。かの推古式また飛鳥式と稱せらるゝ法隆寺の藥師像が古拙素朴なるに反して、所謂天平時代の作品たる東大寺三月堂なる佛像が精巧優美を極むるを見るも、思半ばに過ぐるものあらむ。文藝の發展緩漫なりとい

文學と美術

へども、しかも確乎として著々その地歩を占め來れる、想ふべきなり。されど文學美術に對する外國の影響を考ふるに、文學は、美術がかれの輸入とともに直ちにこれを摸倣し同化して、絶妙の域に達せるが如くに、著しき感化を被らず。そは彼我國民根本の思想を異にする外に、言語の不同といへる超越すべからざる一大障壁の横はればにて、漢文學傳來の後、年漸く久しく、漢詩を操縦するものさへ出て來りたりといへども、終に一人の本國の才人に追隨するに足るなく、日本固有の文學に至りてはこれが爲に特筆すべき直接の影響を見ざりしものもとよりその所なり。これらに關してはなほ後章に述べべし、要するに外來の風潮はわが文化に影響すること極めて大に、しかも文學のみは開發指導せられ、もしくは轉化左右せらるゝこと、他の藝術に比して少かりしをいひて、ひとまづ概觀の筆を結ばむとす。

第二章 大化以前

大化以前の
典籍

大化以前の典籍にして今日に傳はれるものは甚だ稀なり。唯漢字を以て國語を寫したるものに法隆寺の釋迦、藥師像の光背の銘及び中宮寺の天壽國曼荼羅の銘等あり、漢文を以て書けるものに聖德太子が十七箇條の憲法并に勝鬘經の疏等ありて、これら二三によりて纔かに當時の情勢を察知するを得るのみ、純粹なる文學として見るべきものは全くこれあることなし。奈良朝に至りて古事記、日本書紀及び諸國の風土記等の成るあり、ついで平安期に及びては延喜式に祝詞を輯めたりといへども、これらはいづれも比較的後世の撰にかかれば、よく大化以前の面影を傳ふるに忠なりや、後世の思想によりて不純なる色彩を附加したることなしや、頗る疑ふべし。

記紀の二書

古來、古事記、書紀の二書は、神代以來の確實なる正史として許され、後人の信憑尊崇して措かざるところなるが如し、されど書紀の漢文を以て記されたるが爲に、動もすれば舞文曲筆、潤飾に急にして蒼然たる古色を存するに疎きものあるは蔽ふべからざる事實にして、既に古人の辯じたる所、甚だ當れり。豈啻に舞文曲筆の弊の惜むべきのみならむや、余輩は更に進んで記紀の二書を

以て全然正確なる歴史として憑據するの、また甚だ所以なきを信ぜんとす、近くこれを日露戦争中の金州丸の事件に見よ。一報傳へてこの運送船が悲惨なる運命を詳かにするや、世人はいかに乗組將士が花々しき最期を夢想し、直ちにかれらを以てわが武士道の精髓を發揮したるものとなし、日本軍人の典型たるに耻ぢずとして、讚歎欽仰、殆ど傳說的溢美の言を放ちて惜まざりしぞ、何ぞ知らむ潮わく日本海上に皇國の萬歳を三唱しつゝ、護國の鬼となりたるべき渠等は俘虜として露國に抑留せられ、二年の後、無事の歸朝却つて五千萬の民衆をして呆然自失せしめむとは、現在目前の事にしてなほかつ然り、况んや文字の記すべきなく、典籍の傳ふるなく、流傳口誦、わけて千年の年處を経たる奈良朝に至りて國初前後の事實を筆にせむとするをや、その漸く事實を遠ざかりて、甚しく空想化せられたること知るべきのみ、果して然らば記紀の二書、これを上代純樸なる事歴を記載したる歴史と見んよりも、むしろ過半は太古の國民がその想像より産出し來れる神話なりといふを以て、一層妥當なる見解なりとせむ。

記紀の歌の
純雜

記紀は既に神話なり、いまその中の歌を検するに、一々吟詠の時代と作者とを明かにすといへども、こもまた必ずしも信を置くに足らず、一二の例を引かむか、古事記に載せて長歌の始と稱せらるゝ、八千矛神が越の沼河姫を慕ひてよめる歌、及び姫が答歌、さては八千矛神の正妻須勢理姫命がよめる五首の詠など、綱纏たる人情を歌ひ出して、讀者の讚歎に値すといへども、また餘に巧妙なるが爲に、實は後代の作たるを自證せるは、先人の早く注目せるところなり、古事記仁德紀の條に見えたる、隼別王が皇軍に追はれて大和の倉崎山クラシマに上りてよみたまへる歌が、肥前風土記の杵島曲シマウマと大同小異なるを見て、説をなすもの、或は後者を以て前者を摸擬せるものとなせど、事實は却つてこれに反し、肥前に行はれたる俗謠を以て隼別王に假託せるものなるは、推斷するに難からず、その他、古事記と日本書紀と詠歌の作者または由來の屢齟齬するところあるを見ても、二書の載するところ必ずしも盲從しがたきを知るべきなり、蓋し詩の國風が、誤つて後人の揣摩臆測に遇ひ、俚歌童謠の歴史的事實を以て附會せられたると同一轍か。

祝詞の醇醜

もしそれ祝詞に至りては太古を通じて風體著しき變化を被らず、概ね古式のまゝなりといふも、しかもまた時代の自然の影響を免れずして、その間往々後代の思想を交ふることなきを保せず、果してその幾分を大化以前のものとして、幾分を後世のものとなすべきか、明かに識別するに苦む。要するに大化以前の文學的作品は今に存するもの極めて僅少に、その僅少なるものだに、玉石混淆甚だしく、中につきて純の純なるものを求めばその數と量とはいよゝ／＼減却せむ。こは當來の文學研究者がまづ注意せざるべからざる重大なる問題なりとす。

開闢化生

日本の神話は天地開闢説、自然物化生を以て始まる。天地まづ開けて天神地祇生じ、ついてもろ／＼の天然物化生してまた神とはせられたるなり。たとへば山は山祇、海は綿津見、火は軻遇突智、水は速秋津姫、木は句々迺馳、土は埴安、雨は高麗雷、火雷風は級長戸邊、五穀は歲神といへる類にして、この天然神話の事歴は天上即ち高天原を以てその舞臺となしたるが、いつしか下りて豊葦原すなはち地上のこととはなりぬ。これと同時に天然神話は一變して英雄神話と

素戔鳴尊

なれりしが如し。素戔鳴尊は實にこの過渡期の代表者にして、尊の豊葦原に下りたまひしが、恐らく人間界の始なるべし。そも／＼太古の思想を以て人間發生の原由を尋ねるに、高天原に在りて罪を得しもの、この土に追はれて人間となる、すなはち神の墮落やがて人間の發生なり。そのいはゆる罪にはいろ／＼の天つ罪、國つ罪ありて、これを贖ふには爪髪を裁りて潮水に浴し、贖物と稱へて種々の供物を奉る。これ全く心靈と物質との二面を混同したるものなりといへども、當時の人はとにかくにこれを以て贖罪の手段と思惟したるなり。素戔鳴尊も高天原にありて罪を犯し、贖罪を終へて清淨の身となりたまひしが、なほこれが爲に人間界に墮落せざるを得ず、出雲國に至りて、簸川上に八岐大蛇を退治し、奇稻田姫を迎へて妻としたまふ。思ふに尊は大國主命及び彦火火出見尊と共にわが英雄神話中の最大立物にして、恰も神代三幅對の觀あり。すべて鬭争に端緒を開きて結婚に局を結ぶは、洋の東西を通じたる英雄神話の一般性質にして、素戔鳴尊は大蛇と戦ひ、大國主命及び彦火火出見尊は兄弟と争ひて、これに勝ち、さていづれもその慕へ

る麗姫を娶るに至る。この英雄神話の内容たるや、強ち荒唐無稽なる空想の所産とのみしも思はれず、實際の歴史的分子ももとより混れるなるべく、この歴史的分子を経として、織るに他の神話傳説の緯を以てせるものなること、蓋し疑を容れず。

記紀に最も多きは、人生、風俗、物名、俚諺等を解説せる説明神話ともいふべきものにして、古事記に、高天原より遣はされたる雉子が、途に射殺されて、使命を全うする能はざりし事を記して、雉子の頼使といふことを明かにし、伊弉冉尊がわれ黄泉に至りて日に千人を殺さむと仰すに、伊弉諾尊がさらばわれは日に千五百の産屋を作らんと宣ひしことを引きて、生者の數の常に死者にまされるを説くの類にして、茅渟の海、奈良の都等の地名を解釋説明せるが如きもみなこれに屬す。また別に一種動物説話とも名づくべきものあり、隱岐より出雲に移らんとする兎が一策を案じ、鰐を欺きて、われらが家族は孰れか數多き、卿等まづ一族を連れて海に浮べ、われうち渡りて數へ見んとて、鰐が唯々として橋を成す上を躍り越え、將に陸に上らむとする時、鰐の愚直を嘲り、却つて捕へ

説明神話と動物神話

神話の性質

られてその衣を剝がれたりといへる稻葉の白兔の傳説、また牡鹿が一夜その身に霜ふりかゝると夢み覺めて何の祥ぞとその妻に謀るに、牝鹿答へてこれやがて御身が鹽漬になるべき前兆なりといひしが、のち數日、果して獵人の爲に射殺されたりといへる、後世小説の濫觴とも稱せらるゝ夢野の鹿の傳説の如き、即ちこれなりとす。

いづれの國にありても思想の單純なる時代における神話は、その國に特有にして他國に類例なしといふべきもの甚だ少し、わが國の神話またこの例に洩れず、概括して論ずるに、わが太古の神話の多くは、天孫種族が僻遠の海濱に放浪して、いまだ大和に定着せざりし以前、早く既に傳はりたるものにして、近畿地方において始めて發生したるものにあらざるは、蓋し明かなり、海洋に關する説話の多きことこれを證す、伊弉諾、伊弉冉の二尊が天の浮橋に立ちて、矛を下して海水を探りたまひしはいふに及ばず、御禊を行ふに海岸においてして、河に浴すといはざるが如き、或は潮干る珠、潮満つ珠の傳説の如き、その他船といひ、鰐鰐はわが海岸には産せず、或は鱧の類ならむかといへり、といふの類、一

一擧ぐるは煩に堪へず。また、由來、宗廟を重んじ祖先を敬ふはわが國民固有の美風。記紀の記事には隨所にこれを窺ひ得べきが、神話もまた天照大神の御稜威及び天孫降臨の偉蹟を以て主眼となし、八百萬の神々いまだ曾て大神に對して背叛の言動ありしを傳へず、常にその旨を奉體して從順の意を表はせりとす。以てわが國體の動かすべからざるものあるを知らしむると共に、太初よりわが社會組織の家族制に成りて、族制政治の行はれたるを首肯せしむ。諸神の名を擧ぐるに當りても、必ずこれが後世の何氏の祖たるを明かにせるが如き、また以て祖先を尊崇する念のいかに篤かりしかを證するものにあらずや。そも、太古文藝のよりて發するところを考ふるに、多くは國民娛樂の用としてよりも、神祇渴仰の具として萌芽を現はすを見る。太古の日本社會は族制制度に成りて、氏族の祖先は子孫世々これを崇敬し、年處を經るまゝに、時代の霧漸く彼此の間を隔て、終に祖先は人間以上の性格を帯び來つて、神とし仰がる。これ即ち氏神にして、初は父母、祖父母に事へたるもの、いつしか神格を以てこれに附與するに至れるなり。されば神といふも全然人間を超越したるもの

祭祀

にはあらずして、畢竟人間とその性質を同じうし、その勢力においても霄壤の懸隔あるにあらずと思惟せられたるも、またこの故に外ならずかの神人相通じたりといへる三輪の傳説、大和の三輪神嘗て玉依姫の許に通ひたまひしに、姫その何人なるかを詳かにせず、試みに男の衣に針を貫き、後朝に至りて針に繋げる糸を手繰り行き、その端の神殿に入れるを見て、始めておのが戀人の三輪神なるを知りたりといふ、これと類を同じうせるもの、韓國の古代にもこれあり。及び丹塗の矢の傳説、加茂の縣主の祖建角身神の娘玉依姫、背見の小河に丹塗の矢を得て床邊に飾り置きしに、この矢こそ火雷神にして、姫やがてこれに感じて別雷神を生めりといふ、の如きを見て、神人の間に確然たる甄別なく、二者時に實際談話して關係を保つとなししを悟るべし。かくて人間に等しき性質を具へ、等しき感情を有する神祇は、その意向のまゝに、時あつて幸福を下し時あつて災禍を及ぼす、人類生殺與奪の權かゝりてその掌中にあるれば、人間は一意神意を和ぐるに急にして、兢兢としてその機嫌に觸れざらむことを力め、以て人生無上の祝福を得んことを祈求す。これが祈願に當りては、また人

祝詞の性質

間に對すると等しく、布帛を捧げ、食物を供し、神前に舞踏して、告白の祭文を讀める。蓋し偶然にあらざるなり。祝詞は實にこの祭文として用ひられたるものなりき。

祝詞は普通散文として取扱はるといへども、その用神意を悦ばずにより、一種の諧音を有せしめて、壇前に朗讀せるものなれば、一に節調を主とす。この意味において和歌と距ること甚だ遠からず、たゞかれが備へたる律格を缺けるのみ、祝詞を以て散文詩と呼ぶ、最も當れり。されば祝詞の長所は聲調の整へるにあり、聲調の美にして、思想の比較的に見るべきものなきは、太古文學を通じたる性質なりといへども、祝詞において殊に然りとす。その内容の長所をいへば、秋毫の包むなく、欺くなく、飾るなくして、人情の天真のまゝに流露せることなるべし。されどさすがにこれも時代の産物なり、その神々に向ひて告ぐるにも、しかく、の供物を捧ぐるが故に、願はくは風雨時を違へざれ、年は豊かに、疫病の禍するなからむことをといへるなど、全く交換的に報酬を待てるが如きは、餘に幼稚に、餘に露骨なりといはざるを得ず。行文また變化に乏しく、千篇一律

の嫌なきにあらずといへども、譬喩の壮大にして氣魄の雄渾なるは、後世よくこれに及ぶものなし。祈年祭の辭に、

天の壁たつきはみ國の退きたつかぎり、青雲のた靡くきはみ、白雲のちり居、向伏すかぎり、青海原は棹柁ほさず、舟の艦の至り留まるきはみ、大海原に舟みちつゞけて、陸よりゆく道は、荷の緒ゆひかためて、盤根、木根ふみさくみて、馬の爪の至り留まるかぎり、長道間なくたちつゞけて、狭き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱うちかけて引きよすることのごとく……

といひ、また大祓の詞に、

科戸の風の天の八重雲を吹き放つことの如く、朝の御霧、夕の御霧を、朝風、夕風の吹き拂ふことの如く、大津邊に居る大船を舳とき放ち、艦とき放ちて、大海原に押放つことの如く、彼方の繁木が下を燒鎌の敏鎌もて打掃ふことの如く……

といへるが如き、以てその一斑を窺ふべし。これらの例に見るも、祝詞の最も古きものは、また、大和奠都以前、海邊に棲居したりし時代の餘風を帶ぶるものな

太初の歌體

きにあらずといへども、多くの祝詞を綜合するに、最古の神話時代が漸く轉じて、農事の重視せられし時代に入りて製作せられしものなりと斷言するを憚らず。祈年祭の詞、風の神の祭の詞、または大嘗祭の詞を讀め、いかに當時の民庶が耕耘に注意し、苦慮し、奔走して、年々の豊凶に全生命を託したりしかを發見せむ。またいはゆる天つ罪として大祓の詞に擧げたる畔放ハナツク、溝埋コウヰ、樋放ヒツク、頻蒔ヒツクの類は、みなこれ農作に關する罪名にあらずや、海事より農事に移れる太古國民生活の變遷は、恰も祝詞によりて反映せられたりといふも不可なることなし。

太古の歌最も古くは律格いまだ定らず、法則に拘束せられずして、思ふがまゝに素懷を行れりき。記紀の歌を計算するに、短歌最も多くして、長歌これにつき、旋頭歌と片歌とは幾ばくもあらず、而してこれらのものいづれも詩形放恣亂雜にして、一句三言なるあり、四言なるあり、或は六言、七言、八九言に及ぶ。格調整ひ、規則生じて、萬葉集に見ゆるが如き、一定の歌體を成し、従つて想形二つながら見るべきものあるに至りしは、おほよそ漢文學の傳來せる應仁天皇の朝より後のことといふを得べし。

歌謠の性質

太古の歌に取るべきは、祝詞におけると同じく、その外形にありて内容にあらず、語句語調にありて思想感情にあらず、構想直白なりといふの外また奇を認めざるに、措辭いかにも巧妙にして甚だ耳に快し、されど祝詞に比較するに、これには絶えてかれの雄大を見ず、かれが譬喩莊重森嚴、天地と共に大にして、聞くものをして轉た心懷を曠うせしむるあるに反し、これの用ふるるところ何ぞ卑近にして平凡なるの甚しきや、これ一は神に告ぐる祭文にして、一は人間同志の間に謠はるゝもの、用途の差のやがてこの懸隔を生じたるや勿論なりといへども、余輩をして更に一步を進めていはしめば、前者はなほ未だ太古民族の抱懷せる征服的氣性を脱せざるに、後者は既に風光明媚の境に定着し、照々たる春光に浴して、平和の情感を味ふの相違に坐せずんばあらず。試みに二者が用ひたる言辭を引きて比較せむか、等しく自然を寫しても、かれは偉大にして勢力あり變化あるものを好む、故に天といひ、雲といひ、霧といひ、潮といひ、風といふ。これは眼前淺近の小景物を捕ふ、故に谷のみ、磯のみ、河のみ、瀬のみ、鳥のみ、崎のみ、朝日の日照宮アサノミヤ、夕日の日陰宮ユフノミヤの二語に、日は僅かに見られたれども、月

敍景の詠

は咏まれず、星もなし。最も多きは日常目撃接觸する動植物家具の類にして、動植物もまた實用的なるが多く、植物にては野蒜、粟生、葦、薑、蔓菁、大根、蓴、菱、栗、花橘、桑、榛、楓、椶櫚、榎、白樺、熊樺など、いづれも衣食住もしくは祭祀の料たるべきもののみ、葉ひろ五百箇、眞椿などは實用の外にして花も葉も賞せられ、一つ松といへるは姿のおもしろきをや愛てたりけむ、櫻花、蓮花も歌はれざるにはあらず、れど、これらの花が歌材となることは極めて稀なり、動物はた細螺、蟹、蠣、蛇、蜻蛉、鮪、鯨、雀、鴨、鳴、庭つ鳥、鶴、雉、鶉、猪、馬の類を出てず、家具は太刀、胡床、菅疊、絹疊の類を見る、男女の姿の玉に比べられたるはその例頗る多く、女子の後姿を小楯にたとへ、齒竝の美しきを稱して稚實に似たりとも形容したりき、古來自然の美を愛し、花木を翫賞するは、わが國民固有の特色の一なりと稱せらる、されど太古の歌を見るに、純然たる敍景詩は甚だ尠く、むしろ人をして奇異の感あらしむ日本武尊が、

鳴海らを見やれば遠し、火高路にこの夕潮に渡らへむかも、
と歌ひ、また

はしけやし、吾家の方よ雲ぬ立ちくも、大和は國のまほろば、たなつく青垣山ごもれる大和し美はし……

と詠ざるが如きは、一見、敍景の詩なるが如きも、一は境に對して宮辭媛を慕ひ、一は大和を懐うて望郷の念を述べたる、敍情詩のみ、應神天皇が菟道野の詠、鳥羽の葛野を見れば、百千足家庭も見ゆ、國のほもみゆ、の如き、雄略天皇が初瀬野に出遊して、山野の形勢を見てのこもりくの初瀬の山は、いでてたちのよろしき山、わしりての宜しき山のこもりくの初瀬の山は、あやにうらぐはし、あやにうらぐはし、の吟の如きは、やゝ客觀的敍景詩の體を得たるものといふを得べきが、この種の歌は五指を屈するにも足らざるべし、花木に對する、また既に述べるところの如し、後世花としいへばこの花となさるゝ櫻だに、いまだ主題としては歌はれざりしなり、さばれ神代既に木花咲耶姫の名あり、紀元後に稚櫻の宮の名あるを思へば、上代の民の花の眞美を知らざるにあらず、賞せざるにあらず、唯いまだこれを歌に詠じて樂むことをなさざりしのみ、

敍情の詠

既に客觀に乏しうして敍景に貧なり、敍事詩もまた能くするところにあらずとせば、剩すところはそれ主觀的敍情詩か、げに敍情詩は當時の詩人が最も得意とせし壇場にして、中にも戀歌が過半を占むる、また怪むに足らず、しかもその戀愛多くは赤裸にして粗糲、男女の性慾を基として肉感に趨り、未だ沈痛深刻を以て許すべきものなきは惜むべきに似たりといへども、後世の思想を以てかれらに強ひんは強ふるものの酷なるならざらむや、武勇を唱道し、兵氣を鼓舞するもかれらが好題目、後世のいはゆる祝言たる新築を賀する歌、置酒高會の歡樂の歌など、また數、見るところにして、従つて酒徳を稱へたるものも甚だ少からず、酒の穀物と共に上代神饌の隨一たりしは、祝詞の明かに示すところにして、その太古の神に人に離るべからざる附隨物たるは洋の東西を問はざるなり、哀悼の歌また多きを占むといへども、戀愛の歌の單に會合の機なきを恨み、戀情の止みがたきを洩らせるに止まりて、近世の人に嫌焉ざるもの多きが如く、これはた簡單膚淺にして、兒女が涙痕いまだ乾かざるに雙鬢早くも微笑を湛へたるの感なくんばあらず、要するに率直樸野は太古の民庶の特性

即興の弊

にして、恬愴快濶なる現實主義は歌謠の上に漲れりといふべし、而してこの平和歡樂の氣象に満てる思想はまた單純易解なる言語によりて盛られ、時には何等の詩美をも認め難き空文字を羅列する弊あり、わけても抽象的文辭に乏しく、いまだ夢の通路、戀の淵などいへる、後世に見るが如き微妙なる形容の辭句を詠出するに至らざりき、

かく太古の歌が思想文辭二つながら坦夷無味に流れ、日常慣用の平語を使用して得々たりしは、蓋しそが即興を主として思索を疎外したるの結果なり、從來、和歌の衰頹せる原因を論じて題詠の罪に歸するは、殆ど動かすべからざる定説とせられ、余輩もまた一面にはこれを是認するに躊躇せずといへども、なほ即興の弊の更に甚しきものあるを忘るべからず、豫め歌題を設けて、苦心慘澹、推敲に推敲を重ねて始めて成れるものを以て、歌合と稱へて勝負を闘はせたりし題詠の弊と、實地の一端にのみ趨りて、和歌を以て贈答應接の要具とし、殊に青年男女を媒介するに用ひたる即興の弊とは、兩々前後して和歌の疲弊を來せるなり、彼は人生の實際に遠ざかりて、迂遠なる閑文字の遊戲に趨り、虚

偽に流るゝ恐あり、此は一時の喝采を博せんが爲に言辭の間に細巧を弄し、嚴格の念なくして淺薄に陥る嫌あり、而してこれが輕重を問へば、前者の禍或は後者よりも甚しきものあらん、こゝに和歌の疲弊といふ、疲弊の語は語弊なきこと能はず、和歌は元來唱和贈答にその端を發せしもの、一朝一夕にして隆々たる進境ある能はざるは自明の理にして、その初より高尚なる地歩を獲得したることあらざりければなり、疲弊といふは一旦興隆して後の頽勢をいふ、太初の和歌はいまだ興隆の域に入らざりしなり。

第三章 大化より奈良朝の終まで

時代の
大勢

聖德太子、一世の才識を抱いて、全力を佛教の興隆に盡したまひてより、漢土の文物、決河の勢を以て奔注し來り、大勢こゝに移つて大化の改新となりぬ、かの國の制度に倣ひて、新に官省を設け、冠位を定むるなど、これまで遅々たりし文化は急速の進歩を遂げて、まさに百花繚亂の盛況あり、爾來、留學生は愈、その傳

當代の
作物
作者

習するところを以て、歸來盛に實地に施し、相尋いで立ちたまへる天智、天武の兩帝は共に政治に熱心したまへば、國家の紀綱大に振張し、文運またいやが上に發展したり、元明天皇都を奈良に遷したまふに及びて、世は七代七十年の奈良朝の盛時に入り、百般の文物燦たること前代未聞なり、皇居はこれまで一世一代にして嘗て定所なかりしを革めて、永久の帝都を造營す、その設計唐の長安の制に則り、これを後年桓武天皇が經營したまへる平安京に比べては、その規模もとより小なりと雖も、新都の面目は始めて都らしきものとなり、青丹よし奈良の賑は未曾有の繁華を呈し、さらに聖武天皇の天平時代に至りては、佛教の隆盛この一時に極まるとぞ見えし、この時代、年を経ること前後百五十年、諸國荒蕪の地を開拓し、道路を通じ、橋梁を架し、修堤築港等の工事、或は政府の事業として、或は地方の僧侶等が手に企てられて、物質的文化は著しき進境を示し、が、學問文藝の道はたこれと隨逐して、進歩の機運に後れざりき、この時代の文學的產物としてまづ注意すべきもの一つは、たしかに國史の撰修ならむ、この事業は聖德太子がはやく推古帝の朝にありて志したるも

の實功をも收めしなるが、惜むらくは焼亡して傳はらず、さればこの朝の初、元明天皇の勅によりて成れる古事記、日本書紀の二書を以て、わが國に現存せる最古の歴史とすべし。諸國の國産、傳説等を採録せる風土記またこの時に成り、更に純文學の方面にしては、文體甚だ祝詞に似て、しかもかれの神前に告白する祭文なるに反し、これは庶民に宣傳する勅語として用ひられたる宣命といふものも、この奈良朝に至りて最もよく發達し、漢詩も行はるれば、和歌も盛になりぬ。漢詩の撰には、懷風藻あり、和歌の集には、萬葉集あり、前者は専ら當代名家の作を網羅し、後者は時に仁徳天皇の古にまで溯るものなきにあらずといへども、それらは實例極めて少く、概してこれを當代の作品といふに憚らず。漢詩人にして支那文學に長じたるものには、吉備眞備、安倍仲麿あり、ともに唐に遊び、眞備は歸朝の後、文學を以て右大臣に進み、仲麿は玄宗に仕へて名をも朝衡と改め、李白、王維等と來往して、遂に骨を異疆に埋めき、歌人に至りては更に多士濟々、見渡すかぎり眼も遙に、柿本人麿、山部赤人、山上憶良、大伴旅人、その子家持等は中にもすぐれし巨匠なりき。

美術の盛運

當時文學の盛なることかくの如く、その發達の著しき眞に驚くに堪へたりといへども、しかしながらこれを當時の有形美術特に彫刻の進歩に比して更にその及ばざるには、また一驚を喫せずんばあらず。聖徳太子法隆寺を建立して以來、佛寺の造營せらるゝもの年とともに頻劇なれば、従つて建築の術はいふにも及ばず、造像彫刻の技日に月に進まざるを得ず。今日奈良に巡遊するもの、試に法隆寺及び藥師寺の佛像を見來れる眼を以て、東大寺、法華寺のものに對せよ。その眼よし審美の一斑をだに辨へずとも、一目してかれの粗莽幼稚と、これの優美と威嚴との二面を備へて圓滿最勝、絶妙の域に進めるとを識別して誤らざるべし。これもとより模範たる三韓または隋唐の粉本の相違にもよるべしとはいへ、わが國におけるこれ等の藝術がこの時代に長足の進歩をなせるは否定すべからず。げにや天平時代の前に天平時代なく、天平時代の後に天平時代なし、寫實を超絶してしかも怪奇の嫌なく、理想を表現してしかも寫實の妙を失はざるは、この時代の彫刻にして、これやがてその東洋の彫刻に冠たる所以ならずや。萬葉集の如きはまた前後その比倫を絶せる點においてこれ

宗教思想の有無

と名聲を馳するに足るといへども、その眞の藝術的價値に至りては軒輊するところ頗る遠しといはざるべからず。

そも、有形美術の漢土の影響を受けて發達進歩せること、かくの如く大かつ速かなるに、しかもこれと並行隨逐すべき文學の、またこれがために開發せらるゝこと甚だ多からざりしは何が故ぞ、余輩の見を以てするに蓋し二個の原因あるが如し、第一には佛教冲天の勢ありしことこれ、君も臣も萬事を抛ちて佛教に沈溺し、位九五の尊におはして三寶の奴と稱せられたるが如きこと、この時代を外にして別にありや、いまだ聞かず、かゝる熱心のありてこそ、今日においても世界無比の建築たるを失はざる大佛殿も出來しにて、この時代の佛像の優秀なるも、當代の佛師が熱烈なる信仰心の凝つてすなはち成れるの故にして、渠等は單にこれを美術として觀賞せむが爲には作らず、實に宗教的敬虔の對象として、學生の心血を絞りて一刀また一刀を下せるなり、されど文學はこれと事情を異にして、なほ依然として男女の戀愛を歌ひ、喜怒哀樂の情を洩らすもののみ思はれ、宗教的信仰と何等の交渉もなく、従うて文化の原

動力と緊密なる關係を有することなかりしなり、第二には材料の上の相違にあり、すなはち有形美術の如きは用器用材ともに普遍的性質を帶ぶるに反して、文學は徹頭徹尾國民的なる點にあり、たとへば彫刻に用ふる大理石の如き、東西産出の有無多少もしくは性質の不同はあらんも、一旦これを得、これを材料として、彫刻家が技を揮ふに當りては、從來扱ひなれたる木材、象牙、金銅に對すると根本の相違なし、繪畫についていふもまた同じく、かの維新前後洋畫の輸入に際して、パレットの上にコバルト、オルトラマリンを調色したるものは、かたはらその指を臘脂、雌黃に染めたる人々にて、しかも何等の堪へがたき程の困難に遭遇せざりしにあらざや、されど文學的作品の基礎たるべき語法、語格はしかく一朝一夕の習熟練達すべきにあらざり、外國語は到底外國のものたるに留まりて、これと邦人との間には超越すべからざる障壁の儼として存するあり、今日、西歐の文化類に注流し來りて、これらの國語を操るもの決して少しとせず、しかもこれによりて、或は詩に、或は文に、その思想を發表して成功したるもの極めて稀なるは、洵にこの國際的難關のうち勝ちがたきを證明して餘

あるものならずや。人あるひはいはむ。建國三千年に垂んとする文明を有する明治の盛世と、文化なほ草創の世に屬する奈良朝以前とは、全く國情を異にす。當時の國民が支那文化に對する渴仰の念は、到底今日余輩が外國文明に對する尊重の比にあらずして、かれらが從來僅かに口より耳に傳へて止まざるを得ざりしその言語を、新たに眼に訴ふるの術を發見せるその喜やいかばかりなりけん、翕然としてこれが學修に全心を傾倒したりしこと知るべく、その成績の如きも頗る見るに足るものありしならんと、余輩はこれに向つて多く答ふるの要なし、ただ去つて當時の詩集たる懷風藻等を一瞥せむことを勸めて止まん、集中の絶唱と許さるゝ幾多の作品だに、具さに惡戰難闘の歴史を語りて、竟にかの國人が所作の足下にも及ばざるを自白すべければなり。以上はその形式についてののみいへるなり、もし彼我の根本思想に至りては、二者の間に確然たる相違あり、和歌の漢學傳來の爲に影響を被ること少かりしはもとよりのことなり。

漢文學の影

さばれ水の流るゝ必ずや石を轉じ土を穿たずんば止まず、漢文學の感化の直

響

接に間接にわが文藝に及ぶこと少からざりしはいふを俟たず、とにかくに詩人は、文選の律格に擬してゆがみながらに詩を作れり、歌人もまたその命題の上、取材の上に實は多大の暗示を得たりしなり。見よ、和歌はこれまでは専ら内觀的敘情を主として、往々外物に及ぶも、曩にいへるが如く、日常實用のもののみ多かりしに、鶯をよみ、梅をよみ、月雪などの景物をよむこと、これより類なり。思想について見るも、儒佛の影響やうやく著しく、すでに孝徳天皇の時代に、山川に鶯鶯^チ二つゐてたぐひよく、たぐへる妹を誰か率^キにけむといふ歌あり、これいふまでもなく詩經の關々、雉鳩の句をとりたるものにして、かゝる傾向は一代は一代より甚しくなれり。同じ萬葉集の歌人中にても、人麿、赤人はこの外來の思想を受くること極めて少けれど、旅人、憶良に至りてはその影響頗る顯著なり。これらの細論は暫く措きて、以下少しく當代歌人の評傳を試みむ。

柿本人麿

柿本人麿の傳記は詳かならず、余輩の知るところは、持統、文武の二朝に仕へて官位甚だ高からず、後に石見に住して、その國に終れりといふに過ぎず。されどその歌は今に存するもの短歌、長歌頗る多し、短歌も山川の風物、羈旅、戀愛の情

を歌ひて、まゝ、雄渾雅正の調をなすといへども、人麿の人麿たる所以は、その短歌にはあらずしてその長歌にあり、文辭の端正、格調の雄大、梅櫻桃李百花並び咲きたる、萬葉集中よく一人の右に出づるものなし、その高市、皇子の薨去を悲める歌の如きは集中の最大長篇にして、また最も崇高なるものなり。人麿の特色は一はこの哀死の詠の多きにあり、貴人にしては日並、皇子、河島、皇子、明日香、皇女、高市、皇子の死を悲めるあり、妻を悼み、また吉備津采女、讃岐の狹岑島の死人を泣く、これ等はみな長歌なるが、短歌にもまたこの例多し、香具山の屍を見て詠める歌、土形、娘子を火葬する時の歌、溺死したる出雲の娘子を火葬する時の歌の如き、みなこれにして、いづれも免れがたき人世の悲運に満腔の同情を寄せたるが中にも、吉備津采女、狹岑島の死人を弔へるは、情緒纏綿、文辭嫺々、途上白面の人に對してもよくその熱涙を灑げる多涙多恨の渠が面目を躍如たらしむ。否々、この多感の詩人が心奥の琴線に觸れしもの音に人世の悲哀に止まらず、天地山川の變遷、尙かつ渠をして惆悵低徊千古の絶唱を成さしめぬ。近江の荒都を過ぎし時の歌、輕皇子が安騎野に宿りて懐古の情を謠へる歌の如

格調の革新

き、以てその例とすべし、また吉野の宮を詠じ、雷岳の御遊を歌ひて祝賀の意を述べたるが如き、いづれか得意の題目にあらざりける。然り、長歌に長じ、同情に深きは人麿が特色なり、以て古今に獨歩すべく、以て千古に歌聖たるべしといへども、渠が上下三千載を通じてたゞこれこの人あるのみとせらるゝ所以のもの、また別に理由の存するなくんばあらず、前に述べたるが如く、わが國和歌の弊は即興を主とするにあり、一時の感情を吐露するにあり、たゞそれ即興を主として一時の感情を吐露す、動もすれば輕浮に流れ、露骨に失し、淺膚にして儀容を缺ける一種の低級文學たらんとする所以こゝにあり。人麿の眼孔はさすがに大なりき、この宿弊を達觀し、この弱點に想到して、やがては和歌の彫蟲の小技たらむを慨し、新に旗幟を翻して斯道の爲に整々堂々の陣を張らむと企てたり、これ或は支那文學の刺戟にもよるなるべし、かくてこの目的を達し、この蕩逸淫靡の歌壇を覆して、更に沈痛幽玄なるものを得んが爲、その第一手段として渠は森嚴莊重なる祝詞の格調を捉へ來つて長歌に投じぬ。即ち筆を天地開闢に起すこととなり、天孫降臨に説き始むることな

り、而して滔々數千言を陳ぬ、雄偉と莊嚴とはやがて成りぬ。されど長所はやがて短所なり、そのあまりに極端に趨りたる爲に、狹岑島の素姓も知れぬ死人を悲みて

玉藻よし讃岐の國は國がらか見れどもあかぬ、神がらかこゝた貴き、天地日月と共にたり、ゆかむ神の御面とつぎてくる……

と説き起せるが如き、時に題目に相應せざるまでこの法を用ふるに至れるものなきにあらず、深く惜むべしといへども、もしそれ高市皇子の殯宮の歌に、大御身に太刀とりおばし、大御手に弓とりもたし、御軍をあともひたまひ、とのふる鼓の音は、雷の聲ときくまで、吹きなせる小角の音も、敵見たる虎かほゆると、諸人のさゝまどふまで、さげたる幡の靡きは、冬ごもり春さり來れば野毎につきてある火の風のむた靡ける如く、取り持てるゆはずのさわぎ、み雪ふる冬の林に嵐かもしまきわたると思ふまで、聞きのかしこく、ひき放つ箭のしげけく大雪のみだれて來たれ……
といへるが如きは何等雄渾の大文字ぞや、筆法甚だ大祓の詞に似て、格詞の森

山部赤人

嚴いふばかりなし、格調の森嚴は要するに人麿が最も苦慮したるところにして、これを成就せるは疑もなく歌壇における一大革命なり、人麿一たび出て和歌の價値九鼎大呂よりも重く、後世萬葉の研究甚だ盛にして、歌人がこれを尊崇耽讀して措かざるもの、また故あるかな。さばれ人麿が歌の長所は所詮その格調の美なるにあり、その思想に至つては祝詞と相距ること甚だ遠からず、純潔朴直なりといふの外、また何等の奇あるなし。

人麿に後るゝこと二三十年、聖武天皇の前半世を全盛時代として渠と名聲殆ど相如くものを山部赤人となす、その經歷の明かならざるも人麿に等しく、官位の卑かりしといふもまた相似たり、されどその作るところの歌は、おのづから一家の特色を存す、渠や性もと山水の癖あり、屢吟杖を曳いて天下の勝地に放浪したるが如し、近畿にては吉野宮、難波宮はいふにしも及ばず、やゝ隔りては紀州和歌浦及び播州印南野の行幸に扈從し、東、東海富士の秀容を仰ぎ、勝鹿の真間娘子の墓を過ぎ、西の方遙かに道後の温泉に遊ぶ、遊ぶ毎に吟懐を行きてその歌遺れり、その他行宮を祝せるものあり、山川に對せる懷古の歌あり、一

敍景の詠

生の作、旅行に關するもの甚だ多し。一括していふに、赤人の歌は内容外形共に人麿のと甚だ相反す。これを外形に見んか、人麿は長歌に長じたるに、赤人は短歌に秀てたり、赤人の長歌の存するもの短歌と相半すといへども、概ね極めて簡單にして、人麿が長歌の八百潮の湧くが如くに波瀾重疊せず、その反歌却りて本歌を壓倒せるが如き觀あるは、渠が長歌に屢見るところ、さらば内容はいかに。

わたる日の陰もかくろひ、照る月の光も見えず、白雲のいゆきはばかり、時じくぞ雪は降りける……

これ赤人が神州秀靈の芙蓉峰に對して、その驚嘆渴仰の意を詠めるものにして、わが國の敍景詩にては雄偉なるが中なる雄偉なるものと稱せらる、渠はこの種の詠にもまた體を得たり、されどかくの如きは人麿が得意の壇場にこそあれ、到底赤人の特色としも思はれず、その特色は實に人麿が雄大莊嚴を旨とせるに對して、飽くまで優美可憐の情を喜べるにあり、人麿が痛切熱烈なる感情を主としたるに反して、むしろ天地の悠揚として迫らざるが如く、その居る

處の境遇に安んじ、よく自己を没却して、自然と融合し、山川と同化したるところにあり。わが國和歌の敍景の一面は洵に渠によりて開拓せられたりといふも敢て不可なく、

田子の浦ゆうち出でて見れば、眞白にぞ富士の高根に雪はふりける。
和歌浦に潮みちくれば、瀉をなみ、蘆邊をさして鶴鳴き渡る。

など金玉の詠吟一々擧ぐるの煩に堪へず、管に單純なる敍景のみに止まらず、景によりて情を寄せ、いはゆる情景併せ得たるものまた甚だ尠からず、感情を寫すといふも、人麿の如く直ちに素情を吐くにはあらずして、その主觀を對景の中に没却し去るにあり。たとへば淡海公の山池をよめる歌、

古の舊き堤は年ふるみ、池のみぎはに水草生ひにけり。

などにその一斑を知るべし、要するに赤人は人麿が詞藻の絢爛もなく、格調の威嚴もこれを缺くといへども、深く山川草木の自然を愛し、これと同化し、これと合一して、坦々たる辭句の中、おのづから侵すべからざる風韻をとくむ、赤人の大なるところはこゝにあり、人麿に譲らざる所以もまたこゝに存す。

大伴旅人

山上憶良

大伴旅人は元明、元正、聖武の諸朝に仕へて、征隼人持節大將軍となれる人、無常を觀じて佛教に歸入し、酒徳を稱へて晋の清談家に擬するものあり。またこの時代の俊秀としてや、注意すべきが如きも、概して即興の歌多く、深く論ずるに足らず。旅人が太宰帥たりし頃、山上憶良國司としてまた筑前にあり、互に相來往したりといへば、旅人の憶良に負ふところ蓋し尠少にあらざるべし。

山上憶良は赤人と時代を同じうして、嘗て遣唐少録として入唐し、歸朝後東宮に侍讀たりし人にて、漢文學に精通し、從つて外國思想の感化を受くること、萬葉歌人中の隨一たり、この點において渠は全く人麿、赤人と徑路を異にす、その歌序に華麗なる漢文を用ひ、その作るところの賦が萬葉集に存するを見ても、漢文學の造詣甚だ深かりしを想見するに足る。憶良の長所は長歌にあり、殊に長歌中の長歌を好み、時に人麿の壘をも摩せんとするものあり。思想は人麿に較ぶれば漸く複雑となり、取材また他方面にして、歌中に人倫の道を教へ、人生の無常を説きたるもの少からざるが如きは、明かに外國文學の影響による。赤人深く自然に愉悅して全く自我の感情をこれに没入し、人麿強熱の感情を歌

大伴家持

ふと雖も、なほその境に臨みその人に接して發する同情の涙に過ぎず、未だ以てその痛苦前に涙り後に亘りて忘るゝに處なからむとするが如きなし。憶良に至りては然らず、その貧病の苦を歌へるが如き、人倫道德の腐敗を歎じ、社會組織の不完全を慨し、頻に憤懣不平の情を訴へ、これが匡正救濟の道を叫んで、痛切悽愴の氣人に逼るものあり。從つて形式また複雑となり、或は主客問答の體を用ひたるも見ゆ。されど惜むべし、好漢理を説くに急にして情を述ぶるに疎し。その用語また太だ粗笨にして、全然詞句の烹鍊を閑却し、時に俚諺を連ねて顧みざるが如きは、寧ろその放膽に驚かざるを得ず。余輩をしていはしめば、人麿は格調に長じ、憶良は思想に優る、人麿は舊來の風格を大成し、憶良は外國の新思想を輸入し來る、人麿が古風弊なきにあらざれども、憶良が新しきをのみ趁へるは更に拙なるものといふべし。もし彼の格調と此の思想とを打つて一丸とするものありしならむには、萬葉集の光彩愈、陸離たるものありしならむ。

大伴家持は人麿、赤人の如く操觚専門の歌人にあらずして、政治史の上より見

ても看過すべからざる人物なり、故にその歌を読むものは渠が政治的經歷と相關聯して點檢玩味するを要す。家持の歌の萬葉集に見えて年序の明かなるものうち、最も早きは天平八年の詠なり、同じ十八年に越中守となり、そこに病を得て死に墜し、しかも命數いまだ盡さず、六年にして更に故郷に歸る。天平寶字三年の歌は萬葉集に見えたる渠が最後の歌なれども、政治上の活動は却つてその後でありしが如し。天平寶字六年、藤原良繼が惠美押勝を除かんとせし時、同類の嫌疑を以て危く罪に座せられんとせしが、事なくして濟み、ついで延暦元年に氷上川繼が朝家の覆滅を謀りし時、またその謀に與れりとして、こたびはその職を解かれしが、のち數月にして官位を復せられ、薨ずる時は中納言持節征東將軍たりき、されど死後に至りて、更に曩に藤原種繼が殺戮せられたるは、その主謀實に家持にありとの宣告の下に、罪科枯骨に及びて、再び官位を褫奪せられ、妻子は遠流せらるゝの慘に遇ひしが、また疑雲消散して、遂に青天白日の下に瞑目するを得たり。

家持が經歷かくの如く、政治に關與し、武事に鞅掌したるの故を以て、諷咏する

その壯年時

代。

ところ自から武士的精神を發揮し、尙武の氣象に富むとなし、説をなすもの後世の軟弱淫靡の風に對する遒勁質實の例を第一に渠に取る、而していはく、和歌の漸く女らしくなりて、單に戀愛をのみ歌ふに至りしは、實に平安朝に始まると、されどそは一面を見たるものの説のみ、和歌の戀愛を主とし、即吟を貴べるは、前にも述べたるが如く、太古以來の風にあらずや、何ぞ平安朝の至るを待たん。人麿赤人の出づるありて始めてこの弊に着目し、これが革新に力めて、和歌の爲に漸く嚴正なる地歩を獲得し來りしも、また前にいふところの如し、然りわが和歌の爲に虹霓の氣を吐かんとしたるものは人麿なり、赤人なり、家持は與らず、否、人麿、赤人が苦心慘澹、刻苦經營の餘に成りて、漸く九仞の功に就かんとしたりし和歌の地位をしも、一簣にして失墜瓦解せしめたるもの、實にこれ家持にあらずや。越中赴任の前、壯年時代における家持は後の業平と多く選ぶところなし。萬葉集に見よ、從妹の近縁を以てして、渠が妻たりし大伴坂上、大嬢はいふに及ばず、平群、娘子、傘、采女、紀、采女等の女流歌人多く愛をかれに寄せ、互に贈答往復したり、渠が當時浮華輕薄の美男子にして、才媛貴女が好笑を

中年以後

一身に鍾めたるさま想ふべし。家持がこの愛情を歌うて、これを四季折々の景物に寓せるはその特色にして、郭公、花橘は中にも最たるものなり。この花鳥を詠めるもの何ぞかれ一人に限らむ。或は當時一般の風習なりしやも知らざれど、かれにおいてその最も著しきは事實なり。夢も旅人その他二三歌人の詠に入らざるにあらねど、家持に至つて特にこれを用ひたり、共にや、注意すべし。』

およそかくの如きは家持が壯年時代にして、人麿、赤人が事業を破壊したること少々ならずといへども、越中守となると共に、俄然その性行は一變したり。青春の血漸く冷えて、狂蝶は秋の近づけるを知れるなり、過ぎにし榮華を思へば夢か現か、殊に山河隔絶の他郷に病臥しては、病苦と望郷の念とにうたた傷心斷腸の悲なきを得んや。されど徒らに衣衿を濕して黙して止まんは、渠の堪ふる所にあらず、こゝにおいてか古歌の涉獵は生まれり、而しておのれもまた吟詠を恣にして鬱悶を遣りぬ。古歌の研究益々盛にして、和歌の價値を信ずること漸く深きに伴ひては、長歌をも究め、敍景をも試み、その志専ら先哲に繼がむとせり。この頃の渠が歌の古人先輩に負ふところ多きは歴々指摘すべく、その弟



晩年の大成

の長逝を哀傷し、婿藤原二郎が母を失ひしを弔へるが如きは、人麿が好題目にして、二上山、布勢水海、立山を詠じたるが如きは、赤人の得意とするところ、而して史生尾張少昨を諷したる歌、病に臥して無常を悲み、道を修せんと欲して作れる歌の如きは、憶良が長所、雪梅を詠じ、鹿と萩とを詠じ、酒を僧に進むるが如きは、父旅人に享けたるならじか。なほ一步を進めて辭句の出所を穿鑿せんか、記紀に得來れるもあり、祝詞、宣命に擬せるもあり、かくてあらゆる長所を吸引して自家藥籠中のものとなし、情懷を吐露するや、一氣呵成、間々咳唾珠をなすものなきにあらずといへども、要するに一家の格式未だ成らず、古人の糟粕隨處に横はれるの觀ありしは、免れがたき數なるべし。

これ進程の第二期なり。家持が歌は更に三轉す。三轉の期は渠が任滿ちて京に歸り、政治界の中樞に進み出でたる時にして、官位漸く高うして社會に對する自己の何者たるかを意識すると同時に、歌人としての天稟もまた十分の發達を見たるなり。宗廟を敬ひ祖先を尊ぶはわが國古來の美風、大伴氏はその先道臣命に出でて、金村が大連となりたるを初め、大化の改新に大臣たりしものあ

り、壬申の亂を裁定したるものあり、世々功臣を出して、樞要の地位を占め來りしが、藤原氏勢を得るに至りて漸く勢を失ひ、子孫慷慨の士を出すもの多し、家持生れて多涙多血、如何ぞ痛憤悲切の情なくして可ならむや、曩にはこれを戀愛に傾倒したる花々公子、今はこれを忠君憂國に發揮したり、陸奥に黄金を産せるを賀し奉れる歌、憶良の詠に和して勇士の名を擧げんことを思ふ歌、防人が哀別の情を陳ぶる歌、一族を諭す歌等は、この期に成れるものにして、これらの詠を讀まば、明かにかれが意の奈邊に存したりしかを覗ふに足らむ、かの最もよく人々に膾炙せる、

海ゆかば水づく屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、顧みはせじ、の句の如き、また

すめろぎの天のひつぎとつぎとつぎとくる君の御代、かくさはぬあかき心をすめらべにきはめつくして、つかへくる親のつかさとことだてて授けたまへる生の子のいやつぎ、見る人のかたもつぎで、聞く人の鏡にせむを、あたらしき清きその名ぞ、おほるかに心思ひて、ひな子ども、親の名たつな、

大伴の氏と名におへる丈夫のとも、

といへるが如き、よく國民固有の性情を歌ひて、國體のよりて立つところを明かにし、武士道のよりて成るところを示すものといふべし、その詞藻はむしろ生硬粗雑なるに、殆ど人麿、赤人と並び論ぜられ、萬葉の上、和歌の上に、重要な地位を占むる所以のもの、一にこの國民的特性を歌うて詩味横溢せるが爲に外ならず、家持が歌の傳はるもの、天平寶字三年のものを以てその最後とする、と前に一言せるが如し、それより薨去に至るまでなほ二十七年の年月あり、この間全く吟詠を絶ちしか、吟詠したりしもその歌散佚せしか、詳かならず、たゞこの二十七年間、かれが最も政治界に活動したる時代にして、三たび罪を得たる時なるを思はざるべからず、要するにかれは操觚者にして、しかも操觚者を以て安んぜず、その最後に歌へる理想を現實に見んとして、屢、事を謀り、藤原氏の勢力に反抗して、却つて破滅を招けるものにはあらざるか、

なほ萬葉集には卷九に傳説を咏んでや、敘事詩の體に近づかんとする水江浦島子がよめる歌あり、卷十六に滑稽の趣致多き歌あり、卷十四の東歌、卷十六

その他の和歌

の防人の歌などは、いづれも地方の民が國々の方言によりて歌ひ出でたるものにして、當時の俗下流の人々までも歌をよくし、歌にいそしめるを證して餘あり。これ等のもの一々研究に値すといへども、今煩を厭ひてすべて略しつ。



平安朝

第一章 この時代の概観

所謂平安朝

千四百五十四年の平安奠都以來、頼朝が總追捕使となれる年即ち千八百四十六年までを指してわが平安朝とす。大數を以て算すれば、千四百五十年乃至千八百五十年、星霜四百年の間なり。

平安朝は泰平無事の時代なり、初頭に坂上田村麿の東北征討あり、終局に源平の戦あり、その間にまた將門、純友の亂、刀伊の寇ありて、時に兵器を動かすことなきにあらざりしかども、概していふに四海波穩かに、時の風枝をならさぬ時代にして、わけて都人が安逸に馴れ、遊惰に耽りて、太平を謳歌したる時代なり。ここに概観として述ぶるも、またこの靜平怡樂なる中間時代にして、そが最もよく平安朝の特色を帯べるは、いま更に言ふを須ひず。

時代の特色

圓滿なる文化の發達は、いかにして期すべきか。曰く、文武は輔車の關係を以て

進むべし、都鄙は唇齒の交渉なかるべからず、世俗を超絶せる一部少数者の發明創作、固より必要なれども、多数人民の知識と趣味と並に開發指導せらるゝを要す、物質的文明と精神的文明と、理性と感情と、また互に提携雁行するべし。およそこれらのものの合體整正する時、一國の文化はじめて煥然として見るべきものあるなり。今この平安朝の社會を觀するに、全く然らず。文武は非常の懸隔を生じ、都鄙は全然沒交渉なり、少数者の創作は頻にあれども、一般世俗はこれに對して風馬牛の觀なしといひ得るか、物質的文明は必ずしも精神的文明と歩調を齊しうせず、理性は殆ど無視せられて、感情ひとり重んぜらる。かくの如き偏重の結果は知るべきのみ、功を以て論ずれば、光彩燦爛前古に比なきの時代を作りたれども、弊を以て數ふれば、缺陷擧ぐるに堪へざらむとす。あま潮風凜として梢頭蓄なほ堅きに、南面の一枝ひとり春に誇れるが如きは、實に平安朝の文化の傾向にあらずや。

かゝる偏重不具なる人文發達の現象はいかにして醸成せられたるかといふに、太古わが國の文化未だ開けざりし時、一たび隆々たる三韓隋唐の文物に接

外國文化の輸入

文事の偏重

するや、その開明に驚歎し、眩惑して、やがて渴仰となり、心醉となり、一意これを移植してたゞ及ばざらんことを恐るゝの有様にて、その摸倣と刺戟とはよく大化の革新を促し、また奈良朝の盛時を現出して、以て平安朝に及べるなり。されどこれが必要を叫びたるものは、國民輿論の聲にあらずして、僅かに朝廷を圍繞せる少数人士の希望のみ、自然的要求によりたりといはむよりも、寧ろ人工的に輸入せられたるなり。その影響の専らこれら宮廷の貴族者間に限られて、庶民はこれについて殆ど何等の關知するところもなく、また何等の歡迎すべき所以をも悟らず、従つてこの新文明によりて何等の著しき恩澤をも被らずして、一般社會は依然として舊態を持續し行けるもの、當然の數ならずや、かくの如くにして文化の普及もし望むべくば、木に縁つて魚を求むるも強ち不可能の業にはあらざるべし。

さらばこの朝廷に立ちて新來の文化に浴せる少数貴族者とは誰ぞや、いふまでもなく、當時政治界の樞機を握つて、威勢をさく天下を壓倒したる藤原氏の一家一門なり。この時代の初期にありては、なほ藤氏以外の權門勢家にして、

ひとしなみに重要な地位を占むるものなきにあらざりしが、鎌足に起りて、奈良朝を通じて潜勢力を養ひ來れるこの一族が、一たび皇室と姻戚の縁を結ぶに至りて、その威望さながら旭日の昇るが如く、自餘の群星一時に影を潜めたり、源平二氏の如き近く皇族に出でたるものさへ、帝都にありて角逐しがたく、地方に下つて徐ろに實力を養ひ、他日榮達の期を覗ふのみ。そもく藤原氏は中臣に出でて、世々文事を掌り、佛教を尊信し、兵馬には關涉せざるを以てその家風とす。由來、職業の世襲はわが國の習慣、この時代に至りても藤原氏は相傳へて文臣の家なり、敢て平安朝の前後とのみはず、文よりも武を先にして、武事偏重の傾向あるは、日本文化史の一特色なるに、ひとりこの藤原時代のみ文事偏重の異例を見る、また怪むに足らざるなり。文事偏重も一概に難すべきにあらず、平安の世には、武を外にして、文によりてもなほよく國政を料理し、紀綱をも張るべし。たゞその弊や招き易くして、善用の途を得るに難し、一世の指導者たる藤原氏が武を賤みて、兵器を執るを以て上流貴族のことにあらずとせし世は、漸く文弱に流れ、遊惰に耽り出でぬ。當時、中央政府の機關、唐朝の制に倣

物質的文明
の缺如

ひて、八省百官を置くといへども、尨大なるかの國の制度を採つて、直ちにわが國に行はんとす、人徒らに多くして施すに處なし、閑散に馴れて、愈、政務に熱中せず、唯遊興逸樂を事とし、初は暇を偷んでこれに充てたるもの、漸く募りては實務の時間をも傾倒して顧みざるに至る。唐朝の文化はまた詩文萬能の文化なり、人材の登用もたゞこの一藝に決す、これに學び來れる藤原氏の一門が、文藝に他事を忘れて、昨日も今日も佛事供養にあらずんば、すなはち詩歌管絃の遊樂に睦み暮せるもの、偶然にあらざるなり。

平安朝の文化は中流以下に傳はらず、平安京の外に出でずして、全く藤家一門の貴族が専有するところたり。奈良朝にありては地方交通の便を開き、文化を四方に普及するの企畫もありしかど、この時代に至りて驛路來往の途また壅塞せられ、都鄙甚しく懸隔したり。文化は文藝重視を主義として、物質的方面においては何等の進歩なく、學校ありといへども、そはたゞ貴族の子弟が仕官の途を得んが爲の階梯として設けられ、庶民開發の機關にはあらず。まして出版の事業のあるべきやうもなく、本草學、醫道も加持祈禱に勢を奪はれ、算道はた

貴族社會の眞相

吉凶を占ふ陰陽道に附屬せしめらる。この時にありて誰か殖産工業の發達を計り、一國の文化を進めて、國利民福を増進せむとするものぞ、國家的觀念の缺乏この時に極まりて、地方一般の民衆は如何にもあれ、おのれら少數者間に文藝を享樂して閑日月を送迎し得ば足れりとし、物質的事業の獎勵などに聊かも思ひ至らざりしは、滔々たる當年政治家の常態なりしなり。

かゝる偏狹不完なる文化の中心たるこれ等の貴族を、政治上より、社會上より、はた宗教上より概見せんか。まづ政治上より見るに、これらの貴族が國家を無視し、國民の進歩を顧みざりしは上述の如く、各地方に莊園を有して、これが收入によりて活計を營み、貧なるは地方にある富有豪勢なる受領と姻戚の縁を結んで、實力を養ひ、朝廷にありては、互に權力を争ひて黨同伐異す。而して初は舊家の紀、大伴、もしくは新興の源平二氏等と相反目せりしが、後にこれらの諸族相尋いて樞要の地を棄つるに至りては、藤氏同族間の争奪となり、叔姪相敵視し、兄弟墻に閔ぐの活劇を演じて恬として耻ぢず。大臣、攝政、關白は人臣榮達の極なり、これを得るは一途、皇室の外戚となることすなはちこれ。されば藤氏

中の權勢あるものにして、娘をもてるは、われもく、とこれを女御更衣に進めて後宮に納る。幸にして女もし君寵を得、君寵を得てかつ皇子を生み、皇子はた幸にして嗣位に立ちたまはむか、その立ちたまはむ日こそやがて父が大願成就の日なるべけれ。平安廷臣が權力獲得の手段、といふものこれに盡き、行動の範圍極めて狹隘にして、殆ど願ふべからざる僥倖を希ふなり。女子ありやなしやの一事既に期しがたきに、さて後宮に入りても、寵愛を壟斷せむが爲には、容貌の美醜なども關すべく、おぼつかなき産兒の運命成否はまたその男女によりて決せらる。これらのこといづれも天なり命なり、人力の如何とも爲すべからざるところ、止むを得ずんば、仰いて天に訴ふべし、俯して地に哭すべし。このおいてか三世因果の宿命説はかれらが信ぜざるを得ざる天理となり、加持よ祈禱よと財を抛ち根を盡して神佛の加護を乞ふに寧日もなく、益、優柔に陥り、懦弱に流れつゝ、無爲にして化せるもの、憐むに堪へたるが、またしかしなから必然の勢なるべし。

この政治的狀態と關聯して特記すべきは、才媛淑女の彬々として輩出せる一

才女の輩出

事なり。女子の和歌に秀でて男子をして後へに墮若たらしむるものありしは、太古以來屢見るところにして、萬葉集中にも、この種の巾幗者流の作品また決して鮮しとせず、されど平安朝に至りては文學殆ど女流の獨占に歸し、男子はあるかなきかにその一隅にけおされぬ、この東西また見るべからざる現象は原くところ一にして足らざるべしといへども、女御更衣が各、その威勢を張りて權力を争へるも、またその一大主因たらずんばならず、即ち才學ある女子は擧つてかれらが招に應じて後宮に集れるなり、集りては互に才を競ひ、男子もまたこれと唱和贈答せんことを求むれば、後宮はやがて文學の淵叢、女房はすなはち文界の粹にして、かくて彩華爛漫たる平安女流文學は生れ來にけらし。』

つぎに社會の生活状態はいかに、今しも公卿が懦弱に流れしを以て、宿命説興りて力あるよしを説きしが、もとより當時の生活状態がその主因たるには如かず。武事に關與するは公卿の耻辱、これかれらが套語にして、士氣一代を通じて地を拂ひ、政治はた疎んぜらる。年中の行事は神佛の祭祀法要にあらずんば春花秋月の遊興のみ。而してこの興を助くるに詩歌と管絃とあり、詩歌管絃は

遊樂の風

佛教の盛運

實に當時公卿が必修の技藝にして、歌は詩よりも盛なり、そはその詩形の短易なるが爲なるべけれども、また當時の遊宴、男女席を共にする場合多く、漢詩の男子に限られたるに反して、和歌の共通なりしに因らずんばならず。管絃は和歌と並び、或は一步を進めて盛に學ばれたるものにして、當時の殿上人は琴笛の合奏を能くするとともに、またよくみづから立ちて舞へりしなり。かくて舞臺は益大の京都のうち、偶、旅行するも石山、住吉さらずば長谷か大峯か、後になりては、遠く熊野へ參籠するもありしかど、多くは地方に下るを卑みて、足畿内の地を出でず、生活單調にして變化あるなし。生活のあくまで單調不活潑にして、局面の轉化を缺けるは平安朝の一大弊害にして、和歌の千篇一律なる物語の萎縮沈滞せる、いづれかこれが結果にあらざる。これ一は文藝に従事するの閑暇を與へて、文學史上の偉觀を成さしめし所以なりといへども、抑、又時代精神の鬱結不活動を來たすの原因となり、隆々たる文藝をして一所に停滯して、十分の變通をなし得ざらしめしは深く惜むべしとなす。

儒佛二教の消長については、はむか、漢文學はこの時代に至りて非常の流行を

見たりしが、儒教の影響はさばかり大なるものもなくして、佛教ひとりますます盛なり。佛教は前時代において既に冲天の勢ありしもの、更に天台、真言二宗の入るありて、思想界はたゞこの佛教の獨壇場となれりき。俗界の政治を聽きつゝも出家得道して、院政の變態を開きたまへる白河法皇を出し、神祇釋教戀無常とならべて和歌に稱せられたるをも怪まず。本地垂迹説は夙にわが神祇を取つて自家藥籠中のものとなしたれば、神社の建築は漸く佛閣の風を摸するに至り、名流貴族の住宅莊園の寺領に喜捨せらるゝものも多し。佛教の流行また盛なるかな。しかれどもかくの如きは形式の上のみ、外部の莊嚴は常に内面の實質を發表するものにあらず。この時代の佛教も外徒らに饒富にして、内實は甚だ荒寥なり。説くものは必ずしも人心秘奥の根柢に及ぶことなく、聽くものはた安心立命の大事を思はず、かくて佛教自體よりいふも、人心に對する影響よりいふも、漸次佛教の眞意義を遠ざかりて益、邪路に陥み入れるに似たり。

當時最も勢を得たるはいふまでもなく新に起れる天台、真言の二教なり。天台

密教の修法

佛教の墮落

はいはゆる顯教なるもの、教理を明むるを主とし、經文佛典の考究研鑽によりて佛道の極に達せむとし、眞言はいはゆる密教なるもの、これら煩瑣なる手段をすてて、短刀直入、頓悟の妙境に入らむとす。即心成佛はひとしく禪宗の唱ふるところにして、この一點密教と甚だ相似たりといへども、眞言は更に形式の上よりも彼岸に到達せんとす、すなはち意密を重んずるとともに身體の儀容を正しくし、手に印を結び、口に眞言陀羅尼を唱へて、身口の二密を整へ、以て三密相應じて、始めて佛我一體の境地に到らんとするなり。従つて佛像の儀規を正し、ことごとく曼茶羅を別つなど、すべて形式を主とすれば、祈禱の目的に伴ひて加持修法も一々その様を異にせざるを得ず。前にも言及せるが如く、この時代において佛に歸するは未來の安樂淨土を願ふに止まらずして、現世の利益をも求むるなり。小にしては安産、平癒、息災、延命の祈願より、大にしては國家の鎮護、天變地異の爲に頼む。心靈の疾患を救ふべき僧侶はこゝに至りて肉體の病痾を醫し、兵亂鎮定の功は甲冑の士よりもまづ緇衣の徒に歸せらる。かく現世の利益を主として形式儀容を貴べるを見て、直ちに佛教の墮落との

みいふべからず。蓋しかくの如きは一は眞言宗本來の性質のみ。元來眞言宗は日本に起りたるものにあらずして、早く印度にあるの如く、他の外道と混和したるが爲に、その所謂佛菩薩といひ、儀式法會といふも、佛教以外の要素を含むこと多く、天台また日本に渡りて後は、純粹なる天台にあらずして、種々の異分子を和合し、殊に形式を眞言に借り來りて、盛に修法灌頂を行ふ、迷信深き人心の歸向を促さむが爲に、密部の行ふところを容れたるは、洵に慧敏の手段といふべし。されど現世の利福を主としたる佛教は年を経るに従ひてやがてまたそれ自身の腐敗を來しぬ。たとへば天台にありては、山門、寺門常に軋轢して勢力を争ひ、識徳一世に空しき名僧智識を推し來れる天台座主の重位に名門貴族の出を戴いて俗界の權を張らむとす。甚しきに至りては僧兵を養うて干戈を動かし、亂暴狼藉至らざるなく、俊邁なる白河法皇をしてなほかつ朕が意の如くならぬもの、加茂川の水、雙六の骰、山法師と仰せあらしむるに至る。兵備を置けるは叡山のみに限らず、奈良の興福寺、東大寺、その外諸國の大寺また然り。一たび辯難攻撃の募りて、劔戟相見ゆるに至るや、山法師は日吉の神輿を擔き出

衣食住の情態

し、奈良法師は春日の神木を振り翳して、はては政權の争奪にまでも容喙し、世を騒がすこと鎌倉、室町時代に至りて絶えず、あさましかりし次第なり。かくれば徐ろに修養を積んでその徳を磨き、一切衆生の濟度を云爲するが如きは迂愚の行とし、僧綱を得るに急に、金襴の袈裟に纏はれて驕奢を競ふもの、滔々としてみなかくの如し。しかすがに中には人寰とほき山林の庵室に籠りて三昧に入り、或は世の爲體を諷して超然たるものなきにあらざりしかど、そは寥々として晨星も管ならず、大勢は墮落に墮落を重ねて、俗より出て俗よりも俗に、平安朝の末期より鎌倉時代にかけて、新宗教の勃興を見るに至りしまで、混濁の教界はまた救ふに途なかりき。これを要するに平安佛教の隆盛は皮相の隆盛なり、宗教の第一義たる信仰に就いては多く説くところなく、僅かに宿命因果説を傳播し、無常迅速の厭世觀を鼓吹し得たりといへども、しかも未だ以てわが國民の根本思想を動かすに足らず、快濶なる日本固有の樂天主義はさせる多大の感化を受けざりしなり。

平安朝の文化はめざましきものなり、しかれども科學思想に至りては全くこ

れを闕く、日常生活も實用の方面はいつまでも進歩せず、食物の調理、滋養の如何を度外にしてたゞ外觀の美にのみ注意し、建築の裝飾、丹青をこらして綺麗人目を奪ふといへども、内部は陰鬱暗澹、これに住むものをして益、因循不活潑に傾かしめ、服飾はた實用を蔑ろにして體裁、紋様、色彩の配合にのみ心をつくす。婦人がいはゆる十二一重の襲着に起居も自由ならぬに得々たりしなど、女性のたしなみはさることながら、めざましくもまた憐むべからずや、一言にしていへば當時の貴族は實用の本を閑却して、形式の末に趨れるなり。たゞ美なるべし、その他はかれらの問ふところにあらず。かの詩歌管絃の遊宴はいふも更なり、神祭佛事を行ふにも多く夜陰を選んで白晝においてせざりしが如き、他に理因あるべしといへども、また一はこの美の標準より來れること疑ふべくもあらず、月光燈影のかすかなる世界は却つてこれ平安貴族が活動の時なりしなり。

説き來つて平安朝の如何なる時代なるかを髣髴せしめば則ち足る。さらば當時の道德律たりしものは何ぞや、或は曰く、放縱淫逸なるかれらはたゞ意馬心

情趣尊重の時代

猿の狂ふに任せて行動せるのみ、何ぞ社會の指針たる道德律なるものあらむやと。げにこの時代にありては、後世、世道の準繩となりし武士道あることなく、儒教の勢力はなほ極めて微々たり、宗教漸く高潮を示すといへども、未だ根本的に人心を陶冶するに難し。されば倫理宗教に束縛せられずして、一面文弱に流れたる結果は、克己制慾の意志を缺き、世人はたゞ感情の趣くがまに、東行西歩せるに似たり。しかはあれど偏したりといへども、光輝ある文化を有する平安朝、感情を主として本能の満足に趨れりといふもの、その中また一片の主義自信なくして可ならむや、すなはちかれらが志すところは感情の中庸を得るにありき、本然の要求を適度に達するにありき、換言すればかれらは善に到らむことを期せずといへども、美を知れり。しかり、美は平安朝の貴族が生命にして、これあるが爲に情趣を重んじ、美を主とせる文學は著大なる發達を遂げ、個性の描寫に巧を盡せるこの時代の作品の如きは、わが國の文學を通じてまた見るべからざるところとす、これらは文學偏重の平安朝において特に留心看取すべき特色なり。

時代の區劃

平安朝四百年を區劃して、一、弘仁時代（一四五〇—一五五〇）、二、延喜天曆時代（一五五〇—一六五〇）、三、藤氏極盛時代（一六五〇—一七五〇）、四、院政時代（一七五〇—一八五〇）の四期とす。括弧内の年数は多少の出入あること勿論なり、たゞ今、讀者の記憶に便せんが爲、強ひて圓數を取る。たゞし余輩の見によれば、鎌倉幕府の創立を以て平安時代の終極となすは一般國史の區劃なりといへども、他方面よりはともあれ、文藝の歴史よりいへば未だ具はれるものといふを得ず。そは平安末期より鎌倉時代の初承久の亂に至る文學の形勢は、全然同一傾向を以て進みたればなり。故にこの期間を以ておなじ院政時代に總括し、前の王朝の末期に附するか、後の武家時代の初頭に置くを以て、寧ろ正當なる方法となせど、かくては却つて讀者が混亂を來さん恐れて、今故らに變更せず。

第二章 弘仁時代

漢文學の隆

佛教も漢學も前代にありて既に隆盛に赴きしが、平安朝に入りてその勢力更

昌

に大なり。今や唐朝文化の情愴は靡然として一時代の風をなし、遣唐使のことある毎に留學生これに伴ひ、ひたすらかの國の新文明を移植して及ばざらむことを恐るれば、制度といはず、文物といはず、いづれかその風を傳へたるものにあらざりける。かくて佛教は最澄、空海が新たに傳へたる天台、眞言、法燈ひとり熾にして、從來の六宗は殘穂、明滅の境に餘光を保ち、學問としいへば、やがて支那の書を読むことと誰も心得ぬ。古來の格式律令の研究未だ全く衰へたりとはいはず、古事記、書紀の塵を拂ふもの終にまた見られずなりぬとはいはず、しかも記紀を繕かむよりは、史記を讀め、萬葉を誦せむよりは、文選を講ずるに如かずとなせるは逆ふべからざる時代の傾向なり。蓋しわが國の文學はその收穫當時いまだ豐饒ならず、一朝かの國の充實備滿せる穀倉に接して、驚嘆の眼を睜ると共に、讚美の聲を放ちて惜まざりしもの、怪むに足らざるなり。元來、大寶の制學者登庸の道を定めて六とす、明經、明法、進士、秀才、書、算、これなりき。されど平安朝に入りて秀才、進士、書の三のうち、書道はいつしか廢れ、秀才、進士は一に合してその名も改まりて、紀傳、明經、明法、算の四道となる。紀傳道はその名

の示す如く専ら歴史を修むるもの、史記、漢書、後漢書の三史を必修書とし、また文章に達するの要ありて、傍ら文選を學びしが、後には從位にありし文章却つて主位に立ち、紀傳博士の名稱起りて二十餘年、早くも文章博士の名これに代り、論議講説の優劣はいかにもあれ、苟くも囑文に長ずるものは、すなはち對策して任用の榮にあづかる。明經以下三者の博士、こゝにおいてかその下風に立ち、僅かに六位、七位の卑官に止まるに、文章博士のみは遙かに擢んでて數等の高位高官に拜せらる。菅原道真、藤原有衡等が大臣に上れるが如きは、わけても著しき例にして、學問のうち漢學最も貴ばれ、殊に詩文の重視せられしこと察するに餘あり。およそかくの如きもの、これを唐風の感化といはずして何ぞや。つらく、かの朝の事を考ふるに、唐の太宗天下を一統して、銳意力を經術に注ぎ、大に儒學の興隆を期せり。されど太平の波はいつしかに人心の巖角を磨消す。世を経て逸樂の風漸く上下を靡け、詩を賦し文を綴りて、政綱の弛むを知らず、修文館の學士を擧ぐるにも、一に詩文に堪能なるものを選ぶに至りて、文學は實に萬能の力となり、玄宗數代の後これにつぎて初の程こそ政治にいそし

唐朝の文學

みたれ、幾ばくもなくまたこれを抛ち、朝にあるもなほ酒盃を含みて詩賦を吟ず。宴飲遊興至らざるなく、胸中風流韻事ありてまた他あることなし、かくて國運の振肅は期すべからざりしも、詩においては絶世の名家杜甫、李白等時を同じうして錦心繡腸を羅織し、唐詩の盛名天地と共に朽ちざるものあり。かゝる唐風に心酔せる平安朝の貴紳、いかんぞ經術律令を棄て、詩文に傾倒せざるを得んや。試みにかれらが耽讀せる書目を擧げむか。まづ九經あり、禮記、左傳、詩經、周禮、儀禮、周易、尚書の七書に公羊及び穀梁の二傳を加ふ。孝經、論語は苟くも學者たるもの、學ばざるべからざるところ、その他老子も喜ばるれば、莊子もまた讀まる。たゞ孟子のみはわが國情と相容れざるものありて、著しき流行は見ざりきと傳へらるゝが、果して然りや。群書治要、顔子家訓はたさすがに治國齊家の資料として机上に上りしといへども、およそこれらを壓して最も渴望熱愛せられたるは、いふまでもなく詩集なり、文集なり、就中前にいへる文選を以て最とす。文選三十卷、洵にこれ六朝文學の粹にして、當時斯道の經典たりき。猥雜なる小冊子にはあれど、遊仙窟また盛に弄ばれ、白氏文集遙かに後れて嵯

漢詩文の感化

峨帝の時に傳はり、文選を凌ぐの勢あり。平安朝の貴族が政治に荒みて遊樂を事とせるは、その起因多々あるべしといへども、一はこれ等詩文の影響なり。漢一代の豪華を輯めし武帝が長安の柏梁臺、兎園に梁の文士を招ける孝王が風流は、寤寐思慕して忘れず、長恨歌、琵琶行の如きはたいかにかれらが多涙多感の情を動かしたりけむ、五節句もおほかた支那文學を讀みての後にかれに擬して興せるもの、白樂天の故事にとりては尙齒會を起す。その他これらの時代の風俗にして詩文の感化を受けたるもの、いま一々擧げずともありぬべし。四季折々の景物につけての感想、草木花鳥に對する好惡の情など、またこれに左右せられざるもの少し、秋の千草をあはれと歎き、雁の聲、砧の音を悲しと聞くも、わが國民が本來の性情にはあらざるなり。

僧空海

この滔々たる時潮を導けるものを誰とかなす、教界の偉人空海これその人。空海の才や多方面なり、宗壇の功績は今更めてもいはず、繪畫、彫刻、書道行くとして可ならざるはなく、いづれを以てするも優に一家を成すに足るべし。その文

嵯峨天皇、
篁及び道眞

學上の偉勳に至りては、嘗に隋唐詩文の精華を請來したるに止まらず、自ら筆硯を呵してこれを作り、これを評し、筆端の縦横よく富贍の思想を助けて、言々句々聲あるにあらざるかを疑はしむ。壯年の作に三教指歸あり、その詩文の評論を文鏡秘府論といひ、詩文の作を集めたるものを性靈集といふ。わが國文化發展史の第一頁を佛教の傳來に割くべきは、前章既にこれを述べたり、而してこれが媒介誘導の第一の恩人は聖德太子なり、第二にはすなはち空海を推す。空海と並びて漢文學の獎勵に盡したまへるを嵯峨天皇とす。天皇聰明にして文學に志し、歷朝のうち最も詩賦に堪能なり、その勅撰に成れる凌雲、文華秀靈の二集が、當時の諸大家の作を網羅したるが中に最も多く聖作を採れるもの、決して故なきにあらざるなり。經國集また蓋しこの帝の勅撰か。小野篁この時に出て騒壇の鬼才と稱せられ、詩情ほゞ白樂天の境に詣り、その句かれの作に暗合するもの三ありといふ。これより三四十年を過ぎて菅原道眞は出づ。三代の儒家として位右大臣に至り、不幸にして讒にあひて謫處に悶死すといへども、その誠意誠心を披瀝せる詩文は、永く國民の肺腑を衝き、同情敬慕のあつ

漢詩と和歌

まるところ、遂に後世文學の神と崇めらる、道真たるものまた以て限するに足る。道真が詩の特色は著しくその日本趣味を發揮したるにあり、炯眼なる渠は早くも外來のまゝなる詩形作風の摸倣のみにては、到底わが國民の思想と柄鑿相容れがたきを看破すると共に、從來の作家を呪詛して、盛に和臭の注入を試みたり。蓋し外國語の操縦は難中の至難事にして、文法解剖など組織的研究の進める今日にありて、尙且その神髓を得るに難んずかゝる言語をいかに漢譯すべきか、この思想をいかに支那風に表現すべきか、これらの苦心すてに容易ならざるに、わが國人には何等の趣致もなき平仄押韻によりて更に掣肘せられざるべからず、堪ふべからざる負擔なり、かくて經營慘澹、始めて成れるものは規則のみ、法格のみ、虎を描いて狗に類するもの比々然らざるなき、抑、また免れがたき結果のみ、文學の價値は人間自然の感興をあるがまゝに歌へるところに存す、而してこはたゞ自家特有の國語によりてのみ表はすを得、いな、おのづから表はる。かの江戸時代に歸化せる明の朱舜水が、日常日本語を慣用して

反動の氣運

誤らざりしにも拘はらず、その臨終における最後の數語は實にその生國の土音なりしといふも、よくこの邊の消息を傳ふるものにあらずや、あゝ詩形は、詩想と共に、生むべし、作るべきにはあらざりけり、こゝにおいてか當時漢詩の流行盛にして、苟くも學藝に指を染むるほどのものは、その習作に熱中せざるなきに似たりといへども、眞に文學の本事を解するものは、學者としての立脚地、世間に對する名聞上よりこそ四六の文字を駢べたれ、敢てこれに膠着するこゝとなくして、熱烈の感情を洩すには、また國語國詩を用ひたり。道真が、
東風ふかば句、おこせよ、梅の花、主なしとて春を忘るな。
の詠、また筆が、
思ひきや、鄙のわかれにおとろへてあまの繩たぎいさりせむとは、
の吟などを思へ。
これを要するに弘仁時代は漢學崇拜の時代にして、日本文學の精髓たるべき和歌がこれに壓倒せられたるは、明かなる事實なりといへども、外國文學は竟に外國文學なり、その異域に完全なる發達を遂げ難きは寧ろ自明のことなる

のみ、況んやわが國古來純粹の文學として和歌の儼然として存するをや、物盛なれば必ず衰ふ、反動の旗幟は漸く動けり、國民は漢詩の不自由と束縛とに堪へずしてまた顧みて和歌を思ふに至りぬ。この頃支那はさしもに華やかなりし唐朝の榮華も夢と過ぎて、干戈しきりに動き、氣息奄々として餘喘を保つのみ、萬機衰へて文學ひとり盛なるの理なし、道眞すなはち自ら遣唐使の榮を荷へる身を以て建白してこれを止む。かくて漢詩はこゝに直接なる大打撃に會ひ、和歌はこれに反して漸くその潛めたる頭を擡げ、わが弘仁時代の漢文學は延喜時代に入りて、全くその勢を和歌に奪はる。この和歌勃興の急先鋒たりしものはすなはち在原業平なり。

業平は平城天皇の皇子阿保親王の第五子、母は桓武天皇の皇女、兄行平と共に在原の姓を賜はる時に藤氏一門の勢威盛にして、自餘の門族みなその後塵を拜す。業平兄弟また一生轆轤不遇にして、顯達せず、わけても業平は、妻女の姻戚なる惟喬親王が文德天皇の長皇子として皇儲の位にもえ立たず、洛北小野の山莊にわびしくも暮しいますを見るにつけても、多情多恨の質、一門零落の悲、

在原業平

等遍昭、小町

ひし／＼と身にこたへて、同情の念やみがたく、鬱屈遣るに所なかりしもの。如し、業平も行平もつとめて和歌に萬事を忘れんとせり、殊に業平は天成の大詩人、その特色は天真の流露せるにありて、一々の作は感ずるまゝに歌となれるもの、苦心もいらす、彫琢も要なし、風の河上を行きて自らに文をなすといふもの、正に業平の謂なるべし、和歌の口に入る、たゞそれ感懐の走るに任せて刻苦練磨を蔑にす、嘗て鴻臚館に渤海の客を勞問したりしといへば、必ずやまた漢文學に通じたるべきに、しかも故らに時流を追うて平仄の願使に甘んずることをなさざりしもの、もとより怪むに足らざるなり、されど渠にも長所はまた短所、その人情を傾けたる思想の痛切を極めたるにも似ず、とかくに措辭結構の粗鹵を免れずして、所謂心餘りて詞足らざるの恨を残す。さばれ業平は大なる時代の代表作家なり、萬葉時代の歌風渠に至りて全く一變す。渠が逸事の後世永く佳人才子の談に入る所以のもの、豈管にその風流公子たりしのみによらむや。

當時その歌を以て業平に對すべきもの、僧正遍昭あり、遍昭は道德堅固の智識

漢字使用の

にして、渠が石上の寺に痛快の諧謔を弄したるは、有名の話柄なり。僧侶なればその詠に經文を釋し、無常厭世の感を述べたるもおのづから多く、同時代の歌人と比べて大に異色を存す。その構想の飽くまで思索的にして、修辭の徹頭徹尾技巧的なるは正に業平と反對の極端にあるものといふべし。また小野小町あり、業平の亞流にして、たゞ感情のまゝによみいだす。その詠の業平に比して、更に濃艶優麗なるもの多かりしは、さすがに女性の作なればなるべし。わが國女性美の權化として謳はるゝもの一人にして足らず、しかも小町が常にその筆頭に擬せられて、男の業平と對せしめらるゝもの、實に二者が率先して和歌に清新の風を鼓吹せしが爲なるべしといへども、またその性行と歌詞とに考へて、そゞろに首肯せらるゝものなきにあらず。なほや、京を離れて近江の湖畔に住み、萬葉の古調を交へて質實素樸の風を喜べるもの大伴黒主あり、その他文屋康秀、喜撰法師それ〴〵に聲名あり、前の四者と並べて六歌仙に數へらるといへども、その實は名に添はず、遠く數等の下位にあり。

漢文學跋扈して、國文學の萎靡振はざりしは、漢學傳來以後、平安初期にかけて

不便

の現象なり。一見奇異の觀なきにあらずといへども、理由は極めて明白なり。日本固有の文字を缺きたりしことすなはちこれ。わが國の神代に文字あることなし、ありといふも信を置くに足らず、よし數歩を譲りてこれありしとするも、そが文化のやゝ發達したる時代に及びて實用に供せられざりしは勿論、比較的未開時代において、古代の傳説、和歌を傳ふるにも、またその用ひられしことあるを聞かず、これ等の傳承は一に口耳の媒によれるにて、漢學の入ると共にその文字を借りてこれを寫せるなり。さればわが國の書契時代は實際に漢文渡來に端緒を開けるにて、かの神代文學と稱せらるゝ日文、天名地鎮、秀眞の如きはこれを否定するも何の妨ぐるところあるを見ず。さて漢文傳來して目に訴ふべき書寫の途は開けたれども、所詮外國の文字なれば自由自在にわが思想をば盛りがたく、わけて和歌の如きは、これを譯出するにその趣味の大半を毀たる。こゝにおいてか始めてこれを借れる當時の學者はいしくもその文字のみを借りてわが音を現はし、やゝ久しうしてその字劃の徒らに煩雜に、加ふるに語音に等しき字數を用ひざるべからざる不便に想到しては、義訓を交へ、

假名文字の
發達

假字を發明し、かくて古事記、宣命、祝詞の體は成りたれども、なほ理想的國字たるに遠く、萬葉集に至りては更に一時の省略法を試み、或は翻つて文字上の滑稽遊戯をさへ弄しければ、平安朝に入りてその歌風の衰ふると共に、萬葉集は早くもその訓讀に註釋を要するに至れり。

所謂真假名の不便難澁なることかくの如くなれば、平安奠都以前にありて既に一方に簡便を旨とせる一種の省略文字を見るに至りしは、必然の勢なるべし。例へば記紀に見えたる吳公（百足）、寸主（村主）の如き、萬葉に見えたる冬木成冬木盛、鬼醜の如き、等由氣宮儀式帳に見えたる令領（要腰）の如き類にして、これらの省略法は漢字の本國たる支那にありても、その樂府に見え、わが佛家にてはササ（菩薩）、メメ（聲聞）、ヨヨ（緣覺）、トト（懺悔）、土犬（地獄）、骨骨（髑髏）、羊石（羯磨）の類なほ今も用ひらる。この省略法を進めて漸く一點一畫を除き、終に最簡至便の境に到着せるもの即ち片假名にして、これと前後して、漢字を極端にまで和げくづせる草假名即ち平假名もまた成りぬ。俗傳によれば、片假名は吉備眞備の作にして、平假名は僧空海の手に成れるものなりといふ。されど當時の狀況を考へ、

今日に残れるその頃の種々の假名によりて察するに、この二個の假名文が徹頭徹尾その各作者が自己單獨の發明創作に成れるものなりとせんは早計なり。識者解説して曰く、吉備眞備が片假名を作れりといふは、その字劃を作れりといふにはあらずして、漸次に成形し來れる文字を集めて五十音圖を作れりとなり、僧空海が平假名を製出したりとなすは、平假名自體にはあらずして、これを集めて涅槃經下卷なる諸行無常是生滅法生滅滅已寂滅爲樂の四句の偈を意譯せるいろは短歌にありと、異説紛々として強ち信を置きがたしといへども、この説や、正鵠を得たるに庶幾しといふべし。蓋し假名四十七文字を現役して、一字を除すことなく、二字を重ねることなく、剴切に流暢にかの偈を現はさむは、鬼才空海の如きにあらずんば爲しがたき業なればなり。五十音圖に至りては固より印度の悉曇に倣ひて作れるもの、悉曇は恐らく吉備の時代にありては未だ傳はらざりしを、空海が眞言宗を請來すると同じ時に始めて傳へたるものならむ。されば五十音圖もまた空海か、さらずとも空海前後の人の作なるべし。

假名文字の
流傳

かゝれば平安朝の初頭において二體の假名文字は早くも成り、漸く弘布したりといへども、當時これが學習に當りては、なほ「いまだいろは歌もしくは五十音圖によることなく、難波津に咲くやこの花、冬ごもり、今を春べと咲くやこの花」〔淺香山、影さへ見ゆる山の井の淺くは人をわが思はなくに、の二首を以てせるもの、如く古今集の序にも、この二歌は歌の父母の様にてぞ、手習ふ人の始にもしける。〕といへり。これにつぎては「天地、星空、山川、峯谷、雲霧、室、苦、人、犬、上、末、ゆゑさるおふせよえのえをなれるてなど無意味の文字どもを並べたりしものに似たり。而してこれら草片二體の假字はあつから別途に用ひられ、片假名は和漢混淆體及び日記のうちの漢文にて書きにくき個所に交へらるることとなり、草假名は専ら女子の間に行はれて、女手また女文字の別稱を得たり。假名のはじめて現はるゝや、漢文學崇拜の折からとて、男子は卑みて顧みず、無學なる女子が用ふべきものとして、寧ろそを知るを憚りしかど、至便平易、全くその根本たりし漢字と選を異にして、支那人の目より見るもはたその巧妙なるに一驚を喫せざるを得ざりしなるべし、男子がかくこれを彈指して齒牙に

假名と女子

掛くるに足らずとなせる間に、この新生の國字は漸く女子の間に勢力を得、殊にわが國語のまゝに寫さざるべからざる和歌の要求に應じて、遂にこゝに日本文學發展の基礎をなすに至れり。竹取物語、伊勢物語の出づるに至りしも、實にこの假名發明の結果に外ならず。

竹取物語と
伊勢物語

竹取、伊勢二物語の製作は何れの時なるか明かならず、されどその素材質實なる點によりて考覈するに、この時代の末に成れるものなるべきは疑を容れず。竹取物語は竹の中より生れ出でたる赫耶姫を主人公とし、姫がこの世の戀を知らず顔に、帝王の勅命をも斥けて、八月十五夜、團々たる玉兔を望んで、月宮の故都に還り行けるを描けるものにして、この一人の女性をおのれが花と眺めむとて、月卿雲客が心をつくし、態をつくして、狂奔せる様は、宛たる平安世態の縮圖なれど、筆路一轉、この美人を以て天上の女仙が罪を得て暫く下界の生活に身を托せるものとなせるに至りては、平安朝小説に類例なき趣向にして、漢文學の流行につれて、道家の説などの影響また淺からざりしを想ふべし。伊勢物語は歌物語なり、過半は業平が詠歌をとりてその由來を簡短なる小話に編

めるもの、事實なるもあり、假託なるもあり、行文簡潔にして流麗、業平の歌と相俟ちて餘韻嫋々、後人をして讚歎措かざらしめむとす、業平が歌聖として後人に仰がるゝは、この伊勢物語の存すること一因ならずとせんや、その作者に至りては業平その人なるべしと思はるれど、未だ定説なし。

第三章 延喜時代

國民の自覺

弘仁期は漢文學崇拜の時代なりしが、この期は國民自覺の時代なり、恰もこれ繪畫界に巨勢金岡出てて隋唐の畫風を日本化したる時にして、文學の風潮も漸くこの時に移り、曩には争うて漢詩文の摸倣に傾倒したりしに、今は翻つて自國文學の復興に力め、外國文學を壓して、和歌大に起る。和歌の勃興は實に延喜の偉觀にして、これを古今和歌集に代表せしむべし。古今和歌集二十卷、これを今日より見れば固より渺たる一小撰述に過ぎざるが如しといへども、しかもわが文學史上に一時期を劃するの大段落となり、永く和歌に志すものをし

古今和歌集

て斯道の經典と仰がしむるに至る、そもく何の故ぞや。

古今集はそののち續出せる所謂二十一代集の最初のものにして、勅撰和歌集の嚆矢なり。蓋し凌雲、文華、秀靈、經國等の勅撰詩集に擬したるものにして、古代の名歌の萬葉集に洩れたると、當代和歌の秀逸とを輯め、醍醐天皇の聖勅によりてその延喜五年に成る。撰者は紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人にして、いづれも官位甚だ高からぬ人々なり。今この集を見るに、集中最も多きを占むるは、古歌にもあらず、先輩の詠にもあらずして、實に選者等四人が吟に外ならず、わけても貫之のは全篇千餘首のうち百首に近し、これ豈輕々に看過すべき事實ならむや。思ふに一國文藝の隆盛はもろくの作者が現代の社會に對して多大の感興を有し、自家の文筆に不敵の信念を抱きて、その外國もしくは古代に比較して一步を譲らず、否、むしろ二三步を進めたるものあるを自覺せる時代なるべくして、或は外國文學の移植に汲々とし、或は古代作品の摸倣に自己を忘却せる時代にあらざるなり。古今時代は如何、延喜の聖帝はこれら官位極めて卑しき人々をしも篤く信じて、この空前の事業を託し、選者等また

よく自己の才を信じてこれに當り、君臣合體、動かすべからざる信念の上にこの集は成れるなり。すなはち選者等は人麿、赤人の聖を聖としてこれを尊び、近くは業平、遍昭等が才を認めてこれを容るゝに吝かならざりしといへども、自己の主張はまた斷として枉ぐべからず、外國文學に對するもまた然り、國詩の漢詩と較べて遜色あらざるはいふまでもなし、わが國人がよりに思を述ぶべきもの、實にこの和歌を措きてまたあるべからざるを確信したりしなり。かくて古歌を取るも全然主賓の位に置くことをせず、おのれ等が新體の歌風と相俟ちて國詩の光輝を發揮し、以て漢詩を西の方本國に向つて掃蕩驅逐せむと期したるなり。この集一たび出でて國民詩の基礎始めて堅く、平安朝を通じて永くその和歌の軌範として尊奉せられたるもの、決して偶然にあらざりしを悟るべし。

萬葉と古今

古今集の特色はその調飽くまで優雅にして端麗なるにあり、これを剛健樸野なる萬葉集に比すれば、一は澎湃たる波濤に對して太洋の巖上に立てるが如く、一は潺湲の音も幽かなる都あたりの河面を望むにも似たり、人麿死して二

百年、この甚大なる歌風の變遷はいかにして生じたりやといふに、弘仁期にありて全盛なりし漢文學全く和歌を壓し、隨つて萬葉集の研究も著しく疎外せられ、その風を學ぶものなきに至れるが爲なるべし。かの長歌がこの時代にありて全く衰頽し終れるもこれと同じ理由の結果にして、嘉祥二年、興福寺の大法師等が仁明天皇の四十の寶算を賀する長歌を續日本後記に載せたるが、拙劣殆ど見るに堪へず、しかもこれらの邊地にありてはなほいしくも殘れるなり、都門の内において早くもその跡を絶つ。されどこれは表面直接の原因のみ、なほ別に間接重大なる根源ありて存す。萬葉集の方より見れば、長歌の單調にして變化少く、語彙また貧弱なりしこと、その一因ならんが、平安朝の方より見れば、太平日久しきにつれて、風俗の柔惰艷弱に流れしこと、その主因にして、従うて奈良朝にありて、人麿等が苦心經營、漸く和歌の價值を高めて、嚴正崇重なる地歩を作れる工夫をも忘却し、更に和歌初發時代の風に歸りて、専ら一時的、即興的なる感情戀愛を歌ふの具とし、威嚴ある文學はおのづから漢文學に限れる結果によらずんば、業平の歌はこの範例にして、歌意固より甚深微

妙、容易に後人の企及すべきものにあらずといへども、戀愛の情を主とし、異性交誼の媒として専用したる一事に至りては、かれ實にその責を免るゝ能はざるなり。

國民性の一變

かくて延喜時代はわが國民詩の著しく發達したる時代なるが、從來文藝の上に昭として明かなりし國民特殊の性質は却つて滅却の運に向へるが如し、弘仁時代に隆盛を極めたる漢詩文は延喜時代に至りて全然日本趣味に同化せられたれど、その隆盛を極めつゝありし間におのづから國民的氣風を一變したりしなり。滅却せられたる國民的性情とは何ぞや、尙武的氣象これなり。萬葉集における人麿等が作を回顧せよ、かれらは堂々として建國勲業の事實を歌ひ、かれらは聲を大にしてわが國體のあるとこを疾呼したりしなり。今はすなはち如何に、文弱の風偏へに國民を靡け文壇を靡けて、古今對照し來れば、別人種ならざるかを疑はしむ。

要するに平安朝の作家等は萬葉集の先達等が振肅したりし苦心を忘れて、再び即興的偶詠の古代に復り、儀容なく主張なき玩弄物を以てこれに擬せんと

貫之の抱負

するに至れるなり。さらば延喜時代に和歌が勃興したりしといふにも關はらず、かゝる即興的なる空文字を連ねて、古今集の選者等は満足し得たりしか。否、余を以て見るに決してさることなし、少くとも紀貫之において異見ありしを信ぜむとす。古今集の選者のうち、一生の抱負を吐露してその選述に當れるものは誰ぞと問はば、何人か紀貫之と答へざらむ。古今集選擇の標準とその序とは、以てかれが和歌に對する意見を窺はしむるに足る。かれはつとめて業平、遍昭等が清新の調を採りたりき、されど併せてその弊をも容れむとはせざりしなり。浮華輕薄、一時の興になれるは渠の最も忌むところ、深くこれを慨して極力その匡正に任じたり。

貫之と躬恒

貫之はされど歌人としては、天才者の域を去ること遠し、業平が奔放自在、行るとして可ならざるなかりしに似ず、一句一語も推敲熟慮を経て後にして、修辭を正しくし、語格を整へむが爲には百の苦心も吝むところにあらず、やがてその長所は穩健雅正なるにありて、天真爛漫にはあらず、所々自然を缺いて理窟の弊に流れたるが如し、撰者のうち躬恒はこれに反して、寧ろ境に臨み、才に任

せて心懷を吐きたりしが、これとて眞の詩才あるにあらず、僅かに句を連ね辭を飾るに達者なりしといふべきのみ、業平に比べて相距ること千里萬里なりといへども、これを貫之と上下するに、貫之或は一籌を躬恒に輸す、貫之の才やかくの如し、しかも平安朝にありて、ひとり奈良朝の人麿と並べて和歌の二聖として尊奉を絶たざるは、一にかれが古今集の歌體を定めたる卓越の鑑識とその序に發表せる評論の才とによらずんばならず。

貫之の歌論

貫之が和歌に對する意見は古今集の序一篇に盡きたり、古今集の序は歌學の始、和歌評論の始にして、これより先き和歌四式なるものありきといひ、四式の一なる喜撰式は喜撰法師の作として千載集の序にも引きたれど、和歌の體裁の定まらざりし時代にありて早くその形式を説ける歌論の出づべき所以なれば、こは固より無稽の説なるべく、深く信ずるに足らざるなり、貫之はまづ歌を詩に譬へて六義を擧げ、古來の和歌の沿革を概括して述べ、さて、今の世の中、色につき、人の心の花になりけるより、あだなる歌はかなきことのみ出てくれば、色好みの家に埋木の人知れぬこととなりて、まめなる所には花薄ほに

出すべきことにもあらずなりたり、その始を思へばかゝるべくなむあらぬ」として、近き世の和歌の墮落を嘆じ、翻つて前代の君臣が四季折々の眺、嬉しきにつけ悲しきにつけて詠み出せる痛切の調に説き及び、殊に人麿、赤人等は中につきての聖者なりといひ、なほ、この外の人々その名きこゆる、野邊に生ふるかづらのはひひろがり、林にしげき木の葉の如くに多かれども、歌とのみ思ひてそのさま知らぬなるべしといひて、近世の歌に満足の意を洩さざるは勿論、歌の上手と許せる六歌仙につきても、花と實と、こころと言葉と備はれるは少しと斷じたり、蓋し貫之謂へらく、近世の歌人輩古人の用意を忘れてひたすら即興を主とせる遊戯末藝とのみ思惟し、わが和歌の神聖を辱しめて深重謹嚴の態度を缺くと、すなはち不撓の信念と不屈の自覺とを提げて歌風の矯正を叫び、以て和歌の爲に萬丈の氣焰を吐かむとせるなり、されば時潮の導くところ止むを得ずして四季の歌及び戀歌の二部を以て主位に置きたりといへども、旨と感興の深きを選べるは一見極めて明白なり、換言すれば貫之の古今集を撰したるは、萬葉に一たび上れる和歌の墮落を救うて、これを弘仁時代におけ

る漢詩以上の盛況に復興せんと試みたるものにして、その抱負の大なるはまたこれを古今集の序に窺ふべし、いはく、人磨なくなりたれど歌のこと止まれるかな、たとへ時移り、事去り、たのしびかなしび行きかふとも、この歌の文字あるをや、青柳の絲たへず、松の葉の散りうせずして、まさきのかづら長く傳はり、鳥の跡久しく止まれらば、歌の様をも知り、ことの心を得たらむ人は、大空の月を見るが如くに、古を仰ぎて今をこひざらめかも」とさればこの時代における和歌に著しきは、長歌の益衰へたると、敍情詩ことに戀情を主とせるものひとり勢力を占めたることにして、貫之はこゝに見るところあり、古今集の選擇に當りては極めてその標準に注意し、貴族間における戀愛の談柄の如きは嚴にこれを避けて、専ら感情の痛切にして詩味横溢せるものを收め、以て當時の通弊を一掃せんとせしかども、なほ大勢の趣くところ抗するに難く、未だ俄に長歌を復興し、古今集に載せたる長歌は萬葉に似も似ぬ四五首のみ、敍景詩の隆盛を來すには至らざりき、されど所謂平安朝の歌體は貫之を俟ちて始めて確立し、永く範を後世に垂るゝに至れるなり。

貫之の序文

和歌の格調を定めて一體を確立せる貫之はまた和文(假名文)の上に一體を確立す。時假名文字傳播の後、日なほ久しからず、軟文學においては既に竹取物語、伊勢物語の二書ありしかど、論說序跋など硬文學に屬する假名文の著述はなかりしに、貫之が識見の高邁なる、外國傳來の漢文の到底永く純粹なる日本文の標準たりがたきを思ひ、漢詩に對して和歌を興せると同一筆法を以て、漢文に對して和文を創めたるなり。前に論じたる古今集の序と大堰川行幸の歌の序とはすなはちこれにして、未だ前例なき當時のこととして、勢、漢文に模範を仰がざるを得ず、理路文脈なほ漢臭あるを免れずといへども、漢文直譯の境を脱して、渾然萃然としてわが國文の魁をなせり。

土佐日記

これらの諸文は今も人の推重するところなるが、その短所を指摘すれば、あまりに華麗絢爛なる一點にあり。これいふまでもなくその軌範たる文選等の四六駢儷文たるが爲にして、貫之はこれより脱化して一家の文を創めたりといへども、さすがに同じ弊あるを免れざりしなり。これやがて後世の國學者がこの二序をすて、同じ人の作なる土佐日記を挙げむとする所以にして、事實ま

た然らずとせず。土佐日記は貫之が晩年の作にして、土佐守の任はて、京に歸るまでの日記を婦人の筆に託して書けるもの、つとめてその文章に粉飾の氣を避けたり。國學者評して以て輕妙洒脫、洵にわが古文の標本たるに適ふとす。されど余輩の見によれば、土佐日記の特色として推さるゝ滑稽諧謔は眞の滑稽諧謔にあらずして、一見極めて重苦しく、單に文字上の遊戯に過ぎず、その文輕妙なるが如くにしてしかも輕妙の境を去ること遠きにあらざるか。これを竹取、伊勢の二書に比するに、二書の更に簡潔素樸にして古色蒼然たる、管に一日の長のみにあらざるなり。

二序と土佐日記との文體を異にせるは前述の言によりて明かなるが、貫之が文章の到る所思想の眞率と感情の横溢とを缺いて、ひたすら語句の精練と措辭の技巧とに經營苦心したるを思はしむるは、二者共に一なり。蓋し貫之はその歌に見るも文に見るも玲瓏たる天成の詩人にあらずして、むしろ頭腦明確なる評論家なりしが如し。分析的批評にかけては當時の第一人たりといへども、綜合的創作に至りては第二流の位置に甘んぜざるを得ず。その功はやがて

貫之の長短

後撰集

彼我の文體を折衷打成して國文の一體を確立せるにあり、また過去に鑑み將來に慮りて、所謂古今の歌風なるものを定めたるに存して、純文學的創作を出せるにはあらずかへす。も貫之をして平安文壇に重名をなさしめたるは、一にその評論の卓拔なるにあり、詩才の豊富なるが爲にあらざるを記せよ。延喜を距ること二十餘年にして、天曆の盛時を迎ふ、この時に至りて文物更に煥然たり。漢文學復興の氣勢を示すと共に、國文學また勢を得て、和歌大に振ふ。かの詩合、歌合等の優美なる遊戯が多くこの時代に行はれたるを見るも一斑を推すべく、勅撰集としては後撰和歌集成、後撰和歌集は源順等所謂梨壺の五人の撰するところにして、聲名古今集に亞ぐと稱せらる。されどこれを古今集に比するに、二個の點において遜色あり、すなはち一は選歌のうち全く撰者等の歌を收めざりしことにして、こは渠等が現代に對する自信の缺如を自白す。その自歌を採らざりしは謙遜の意に出づといはゞいふべけれど、同時代の作は極めて官位高き二三の人のに限れるに至りては、何とかいはむ。この後久しく和歌が古今を軌範としてこれに拘泥し、一所に沈滞して向上の一路を

戀愛贈答の歌

得ざりしもの、後撰集實にその備をなす。

二は後撰集が最も力を盡したりと覺ゆる戀歌の部に男女の贈答を併せ掲げたるもの多きことこれなり。贈れる歌と答へたる歌とかくまでにうち揃ひて撰集に入るべき價值あるを得るや否やは見易き理にして、撰者等がこれを選ぶに當りて、歌の巧拙如何を吟味するよりも寧ろ戀愛の話柄に重きを置けるを知るべきなり。かく戀愛贈答の二首を並び擧ぐるは、後撰集に始まりたるにあらず、その例勅撰においてすでに古今集にありといへども、その數極めて少く、選者が用意に至りてもまた大に逕庭あり、彼のこれを取れるは一に感情の漲溢を標準とせるものにして、いまだ所謂花鳥風月の便を掲げて、男女情交の秘密を發かんとはせざりしに、後撰に至りては敢てこれを曝露して怪まず、否更に一步を進めてこれを傳ふるを主とせるものに似たり。この後撰に見ゆる戀愛の事實は恐らく同時代の作なるべしと思はるゝ大和物語を見れば更に明瞭にして、前代および當時の青年男女がいかに狂蝶の痴態に半生を送れるか歴々睹るが如し、後撰はもとよりこの風潮に乗じて成れるもの、そのかゝる

宇津保物語と落窪物語

贈答に紙面を割いて憚からざりし選者等の意、蓋し和歌を以て男女交際の媒介となせる爲にして、こゝに至りて貫之が振肅せる和歌の地位は再び下らざるを得ず、時潮の趣くところ、如何ともするなしといへども、この點においてもまた後撰が先鞭を附けたるの觀あるは、深くこの集の爲に惜むべしとなす。この時代の小説にして今日に存するは宇津保物語及び落窪物語の二つなり。共に當時の社會を寫せるものにして、宇津保が主人公たる一美人を圍みて多くの貴紳が狂奔せるを描けるは、かの竹取に似たりといへども、竹取は前にもいへる如く支那の道家の影響を受けて、人世にあるべからざる神仙譚に髣髴し、宇津保は専ら現代の事象を以て一篇を貫けり、落窪は落窪の君が繼母の爲に苦められ、のち少將なる人に懸想せられて幸福の生涯に入れりといへる、これもまた宇津保と同じく戀愛を主材とせるものにして、かれと合せてその時代における社會一般の精神状態の如何なりしかを窺はしむ、なほこれらの小説につきては平安朝小説の最盛期たる次の時代に併せていふところあるべし。

第四章 藤氏全盛時代

黄金時代

この時代は平安朝の最盛時代にして、稱して黄金時代とも謂ひつべし。されどこれは政治上の天下國家を標準とせる立論にはあらずして、平安時代の爲政者たる藤原氏の榮華がその極に達し、この藤原氏と常に消長を共にし來れる文藝美術がまた極盛の時期に到達せるをいへるなり。皇室の威嚴遍布して政綱の緊張せるを以ていはむか、余輩はむしろこの時代の初期たる弘仁期を取るべく、本期に至りては貴族政治の弊害愈増長して、古今失政の好標本たるを揚言するに踟躕せず。これを都鄙の關係に見るに、地方の形勢は全く京師に知られず、京師の政治は毫も地方に關係なく、貴族はこれをしも意に介せずして、ひたすら逸樂宴飲に耽り、地方の豪族はこれに乗じて銳意武を養ひ、その勢力漸く盛なるに及びて割據を思ふ。およそかくの如きものこの時代の概観にして、革命の氣運は漸く成形し來れりといへども、この短所はいま論ずるの要なし。

御堂殿

余輩は直ちにこの政治頽廢の時にしも倒さまに隆々の勢ありしこの時代の特色たり長所たる文學の研究に向はむとす。既にいへり、平安朝の歴史は京都における宮廷の歴史にして、宮廷の歴史はすなはち藤氏一門の歴史なりと。而してこの藤氏の全盛期こそ平安文藝の頂點にしてこれを代表するものはいふまでもなく御堂殿道長なれ。渠みづから歌うて曰く、この世をばわが世とぞ思ふ。望月の缺けたることもしと思へばと。げに道長は榮華の權化、權威の化身、その富貴繁昌や皇室も及ばず、これまで世を代へ時を経て、一代は一代より、一期は一期よりも増し來れる藤氏の盛運は、唯この一個道長なる本尊を齋かむが爲ならざりしかを疑はしむ。されど波狀なす人生の行路は上りつむればまた下り坂なり。望月の缺けたることもしも圓滿具足の蔗境も永くは續かずして、明日よりは早く暈虧の歎あり。しかもこれはた今説くの要なし。道長を中心とせる一代はとにかくに黄金時代なり。暇々たる藝術全くその保護獎勵になり、名媛才子かれが一身を繞りて燦たり、爛たり。かの一條天皇が、朕が世以て誇るに足るものなし、たゞ人才の輩出に至り

この時代の美術

ては前代に耻ぢずとのたまひしもの、洵に所以あるかな。

文學の大勢

まづ教界を見るに、天台に惠心僧都あり、眞言に寛朝僧正あり、惠心は學僧ながら、また美術に心を寄せて、繪畫彫刻に妙を得たり。専門の佛師としては法橋定朝、穩和雅正の佛像を刻みて、佛師僧綱の始なり、畫家には巨勢弘高、宅磨爲成等出づ。爲成は宇治平等院の扉に畫ける人、それだに今日にありて人目を眩惑するに足るものあるに、さても道長が六十餘州の富を傾け、極樂淨土をさながらにこの土に現はさんとしたる法成寺の輪奐の美、結構の壯や如何なりけむ。文學に至りては固よりこれら美術の比にあらず、前代を受けて漢文學にも知名の士なほ多かりしが、時代は既に遠く漢文心酔の境をさりて、國民漸く自覺の歩を進め、國文學の勢力遙かに漢文學の上に出でたり。勿論、當時の時勢より考ふれば、男子の學ぶべきものは文選、學者の弄ぶべきは漢詩にして、假名文は寧ろ依然として輕重の外に置かれたるが如しといへども、今日よりその作品を比較するに、漢文學に見るべきものなくして、第二位にありし國文學に却つて千載不朽の價値を留めたるもの多きは、争ふべからざる事實なり。しかもそ

歌界の反動

が俊秀の作者は概ね後宮の婦人にして、和歌の和泉式部、赤染衛門、散文の清少納言、紫式部、擧げ來れば、儂指に暇あらず、これに反して男子には和歌に局在せる藤原公任、同實方、能因法師などのあるありて、僅かにこれと拮抗せるは、空前の現象にして、また絶後の奇觀なり。

和歌は古今集にその體定まりて、久しく後生を掣肘し、その間、時に語法の變化を試み、格調の清新を呼ぶものなきにあらざりしも、要するに大勢は貫之の規約を奉ずるに異議なく、以てこの時代に及びしが、こゝにこの時潮に對して反抗の聲を揚げたるものこそありけれ、これを曾禰好忠とす。好忠は當時世を擧つて古格を墨守し、規律に拘泥して、思想修辭二つながら現代の思潮と相協はざるを憤り、この平板を破りて破天荒の大革命を遂行せむと欲したるものなり。古今の穩雅平靜は今や陳腐凡庸と化しぬ、後撰の月雪花はこゝに至りて千篇一律の典型を残す。徒らに古語の狹範疇裡に蟄して無腸無味の言を繰返さむは藝術に忠なる所以にあらず、俗語用ふべく、奇調試むべし、自由は詩人が天與の特權にして、これを得ると否とは一にかゝりて作者の意に存す。歌枕の外

に名所なしとは誰がなせる鳥辭の言ぞ、鶯、時鳥、これらを外なる鳥の聲は野に満ち山に響けるならずや。この主張に驅られたる渠は飽くまで時流の他端に出で、奮闘惡戰その志は嘉すべかりしも、その詠や粗笨蕪雜、好漢をして徒らに曾丹の嘲聲を受くるに止まらしむ。これ畢竟思想の根本を忘れて寧ろ形式の末に趨れるが爲にして、却つて藤原公任をして一代の耆宿として歌壇にその名を恣にせしめし所以なり。

歌論の興起

四條大納言公任は和漢朗詠集の著者にして、有職故實の造詣深く、學問才藝を以て一世に重んぜられたる人、曾て道長の父兼家がその才を羨望して、わが子は影蹈むことだに能はざる口惜しさよといへるは、すなはちこの公任なり。のち道長が大堰川に詩歌管絃の船を浮べて、當時の月卿雲客を招き、各自がおぼえある一藝によりて乗船を定めし時、所謂三舟の才に長じたりとて、名聲一時に高かりしは、普く人口に膾炙するところの話柄なり。されどそのうち特に人も許し、我も許せるは和歌の道にして、和歌が一科の學問として研究せらるゝに至りしは公任實にその魁をなす。歌論歌學が、句格辭法の用例を討究綜合し

て、是非批判の標準を定むるは、後世も變らずといへども、この時代においてはいまだ思想の美的價値に至りては殆ど問ふところなく、ひたすらかれ等が所謂故實と先例とに全力を注ぎたるものの如し。公任はこの評家の代表者にして、當代の作の古格に外れざるや否やを檢し、終に歌學なるものを起すに至れるなり。換言すればかくの如きは當時一般の人士が不知不識の間に抱懷せる思潮にして、偶、その發言者を公任に見、さてはこの人を斯道の先達として、悉くその脚下に集まれるものといふべし。而して時人の公任に服せるや、争うてその品隲論評を仰ぎ、褒められたるものはこれを以て一代の榮譽とし、貶されたるものはこれが爲に悶死するものあるに至る。その愚終に及ぶべからずといへども、時勢の趣くところまた已むを得ざりしなり。公任が歌界に重きをなす、それかくの如し、されど詩才はよく盛名を辱かしむることなきか、こは疑問なり。渠の歌は或は雅正なるべし、しかも凡庸なり、或は穩健なるべし、しかも暢達風の風なし、保守を唱導して好忠と他端にありて睥睨せりといへども、その詩人の資を闕けるは、敢て好忠に譲らず。たゞ批評の才に至りては、とかくの是非を

外にして、遙かに儕輩を擢んづるものありしを信すべく、これよりさき貫之が古今集の序にその萌芽を見たりし歌論歌學は、公任に及びて全く確立せりといふべし。

和泉式部

かくて公任は歌論の先達、好忠は和歌改進の急先鋒として、とにかくに當時の歌壇に貢献するところなきにあらざりしかど、天成の詩人として余輩の推重措かざるは宮廷の才女和泉式部なり。式部は初め和泉守道貞に嫁して小式部を生み、のち出て道長の女にして一條天皇の后たりし上東門院に仕へたり。才色雙絶、多情多恨、敢て後世の徳操なるものに掣肘せられず、引く手は多し、水のまに／＼誘はれて、擅に狂ひ恣に歌ひて、戀愛の一生まさに平安朝の婦人の好典型たり。この性情ありて始めてその歌あるべし、奔放流麗はやがてその特色にして、怨みては咽び、笑ひては鳴り、綿々滾々、盡きざるの慨あるもの洵に所にあるかな。和泉式部を小町に比するに、詩才の豊富にして、所作の多量なる、蓋し數等の上に出づ。しかも小町の名ひとり喧傳して、和泉式部をいふもの少きは、一に前者が時代を先にせるが爲にして、和歌の眞價値を以て論ずれば、後者

散文全盛

をこそ業平と並べて平安歌人中の二星とすべけれ。

この他なほ女流歌人の有名なるもの枚擧に暇あらずといへども、一括するに古今の舊套に局して、新調を歌へるもの少し。偶、和泉式部の如きはその感情熾烈にして眞率、古今有數の歌人として特筆するに足るといへども、しかしながらその風格よりいへば、なほ古今集中のものにして、いまだ大なる特色なし。幾たびいふも古今集は平安朝の和歌の經典なり、時代の進むに伴ひて多少の出入はあれども、大體においてその歌風の仰がれしは變ることなく、日本文學の黄金時代といはるゝ、この時代にしも、なほ歌人てふ歌人を擧げてこれが範疇を脱するを得ず、好忠の如き、稀に革新を唱ふる者あれば狂と笑はる。要するに和歌は、その間さすがに二三の名家なきにあらざりしが、終に颯爽たる新風の樹立を見るに至らず、後世の文學研究者をして遺憾止む時なからしめむとせしが、散文に至りては然らず、延喜以後漸く行はれたる假名文の隆盛その極に達し、所謂古文中の秀拔なるものはこの一時代の作に限られたるの觀あり。いざや以下徐ろにその眞相を窺はしめよ。

枕草紙

假名文すなはち後世の所謂雅文はこの頃に至りて無上の發達を遂ぐ中にも枕草紙、源氏物語の二書は管に平安文學中の白眉たるのみならず、前後三千載を通じてまたわが國に匹儔を見ざるの傑作とす。枕草紙は清少納言の作にして、紫式部日記、和泉式部日記など、同時代に出でたるこの種の作物數あれど、いづれも一步を草紙に譲る。その材とするところは、多く著者が嘗て遭遇せる事實の追憶、然らずんば時々折々の見聞感想にして、秩序もなく筆に任せて書き連ねたるもの、章節おの／＼獨立せる隨感隨錄なれば、固より全局の結構など云爲すべきものにあらず、筆致奔放にして自由、些の澁滯を見ざると共に、後世の隨筆に通有なるが如き思想の貧弱を修辭たくみにいひくろめたる節もなし、僞らず飾らず、眞率に著者が本來の面目を曝露し來りて、その嬌慢なる虛榮心の隨所にほの見えたるもをかし。枕草紙の長所はその觀察のいかにも女性的にして、緻密周到を極めたと、これに反してその言句の婦人には不相應なりと覺ゆるまで、痛快警拔、寸鐵よく人を殺すが如きとが交錯せるところにあり、微に入り細を穿ち、時に大膽なる省略の讀者の意表に出でむとするにあり、

源氏物語の
本篇

されど要するに外物に對する觀察も感想も多くは淺薄にして、哲學的、宗教的思想に缺けたるは、女性にありがちの短所なるべし。たゞ趣味性の發達に至りては、後人の及びやすからざるものあり、雅俗美醜を識別して、名もなき草蟲の上にも美を認めたと、ころなど、案を拍ちて首肯せしむるもの多し。下りて徒然草や更に下りて花月草紙やみな範をこの草紙にとると雖も、終にその上に出づる能はず。宜なるかな、人の清少納言を論じて紫式部の好敵手とし、二者の相反せる性情と、従つて全く相違へるその著書とを對比して、わが平安朝文學の雙璧となさむとすることや、さばれまた枕草紙を以て源氏物語に比するに到底花の前なる深山木なるの觀なくんば、あらず、源氏はこれ渾然たる一大長篇、眞に古今獨歩と稱すべく、眇たる枕草紙と日を同じうして談すべき品彙にはあらざるなり。

源氏五十四帖分ちて二部とすべし。すなはち初の四十四帖は本篇にして、光源氏を主人公とし、終の十帖は源氏の子薫大將を主人公として、續篇と見るべし。光源氏は桐壺の帝の皇子にして、圓滿幸福なる生涯を送れる人、これを中心と

して數多の婦人を點出し、論評批判、一々その性格を描寫して頗る精細なり。されど圓滿なる源氏の一生はあまりに單調なるを免れずして、讀者は一讀直ちに變化の乏しきに苦しみ、波瀾重疊の妙なきを慊焉らず感ずべしといへども、再讀三讀、回を重ねる毎に巧に個性の書きわけられて、何物か人情の琴線に觸るゝものあるに驚き、著者とともに落涙の滂沱たるを禁ずる能はざるべし。著者はまた著しく佛教の感化を被れり、これを一派の論者のいひけん如く、一にこの教の眞義を祖述せんと試みたるものとなさんは、誇張に過ぎたりと雖も、盛者必衰の世相を現はし、因果應報の理を寓せんとしたるは、明かなり。幸福なる源氏の身邊にしも一たび犯しし罪惡の影は去る時もなく、心は常にこれが爲に苦められ、輾轉反側、終には明々地にその報を受けざるべからず。自己の中心の愛を灑げる紫の上を先だててよりは、悲痛の恨心身を腐蝕し、佛事供養に暇なき幻の巻を過ぐれば、所謂かくれたる雲がくれの巻にその身も終る。思ふにこれ著者の厭世觀の發現にあらずや。とはいへ、更に著者の用意を忖度せんか、これ等の悲哀分子は源氏一篇の眼目にはあらず、たゞこれによりてその主

宇治十帖

人公が生涯の單調を破らんと試みたる手段にして、單にその結果の二者の死に終れるを見て、直ちに悲劇を以て呼ばむとするは、早計に過ぎたり。蓋し人の一生をその初より終までもらすことなく寫さんには、筆をその誕生に起すと共にその終焉に結ばざるを得ざるは、論ずるまでもなきことにして、死はこれ何人にも免れがたき運命のみ。余輩は源氏の生涯の大部分が狂蝶の密の甘きに酔へるが如きものあるを見て、むしろ却つて著者の樂天觀を表白したるにあらざるかを疑はんとす。

されど宇治十帖に至りて傾向は漸く一變し、厭世的悲哀の分子を帶ぶること頗る著しきを加ふ。主人公薰大將は源氏の本妻女三宮が柏木右衛門督と通じたる罪惡の子にして、源氏の浮華なるにも似ず、生れ得て多感多涙、深く佛法に歸入して、甚しく厭世の思想を抱き、帝の八の宮の、都の塵を厭ひ、世の騒がしきを避けて、洛南宇治川の畔にさびしくも行ひすませるを尋ねて、一見舊知の思あり、忘年の友、法の友ともして交はるに、宮には姉妹の姫ありて身はいつしか大姫が戀の奴となり、挑めどすかせど、やがてうせにし宮の性をうけたる姫の

世の常の女子ならねば、ひたすら菩提をとぶらふに他事なくて、妹姫を薦めて自ら知らぬ振もにくし、薫は妹姫をば匂宮に嫁がしめて、なほも時の至るを待つ程に、思ひきや大姫は父の宮の後を追ひて、早くも白玉樓中の人とならむとは、薫亡き人をおもへば悲し、翻つて中君を慕へど、それだに今は人妻のまゝならず、かゝる時しも浮舟の君は現はる、面影のみか物ごしさへ似たる異母妹の、いかで憎かるべき、大姫の形見とも再生ともめていつくしみつゝ、ふるき胸の傷もやゝ忘れなんとするに、運なるかな、好色にして思へば行ふ匂宮はこれにしも語らひよりにて契をこむ、浮舟の母は身分高からぬ女性なり、浮舟は鄙に育ちて、世はいかなるものなるかもえ知らず、薫大將のあつき情は知れど、そのわびしく淡々しげなるに比べて、娘氣のうれしきは花やかなる匂宮の姿、さりとてこれはうきたる戀にあらじかなど、心ひとつを定めかねて、身を宇治川の淵に投じぬ、されど悪業いまだ盡きず、さながら死にもえやらで、再び人の世に迷ひ歸り、煩惱の絆を断たんとて、髪は削れども去りやらぬ浮世の執着、かくてはかなき運命に泣きあかしつゝ、終るともなく終らざるともなく、源氏一篇は

源氏におけ
る佛敎の感
化

中絶して、讀者をして長へに亡羊の嘆あらしむ。

宇治十帖はこの女主人公が浮舟のよるべもなみに定めかねたる心的状態を旨と描寫して、變化極りなし、これを本篇の、人物徒らに複雑にして、しかもその記事の坦々たるに比べて、讀者の感興さらに幾何ぞや、試みに薫大將の性質を思へ、光源氏の單純なるとは痛く趣を異にして、その一身には常に二個の異なる性質の相闘へるを見る、すなはち一は平安貴族に通有なる戀愛本位の樂天的性情にして、一は當時漸く人心の根柢に感化を及ぼせる佛敎の厭世思想なり、大將が當然手中に握るべかりし中君を失ひ、さらにまたわが妻としながら、浮舟の君を匂宮に奪はれて、一時失戀の淵に沈淪したりしもの、實にこの二性質の存在せるが爲にあらざるや、源氏は平靜樂易の境涯を享樂するに、薫の生涯は全然悲愁の二字を以て蔽はる、相違はこれのみに止まらず、舞臺も十帖に至りてまた一轉す、かれは錦繡眼を射る宮殿樓閣の中、これは滿目蕭條の洛南の片山里、對照し來つて著者の人世觀の、卷を重ねると共に漸く進み、この世は到底源氏、紫の上などの樂めるがごとき兜率天上にあらずして、萬事蹉跎多き不

如意の境たるに想到し、これと同時に佛教の感化のいよく、甚大なるものあるに至れるを知るに足らむ。かの宇津保といひ、落窪といひ、等しく源氏と共に戀愛を主とすといへども、別に主張とするところあるにあらず。現實世界を樂觀して、世にも圓滿なる局を結び、思ふに紫式部は平安朝の一般作者よりも佛教の感化を蒙れること著しく、この佛教尊信の念はやがて式部の思想をして深からしめし所以にして、源氏の傑作を出しし原因の一もまたこれに歸すべきなり。

薰大將の、一面平安朝公卿の樂天的戀愛主義を代表しながら、他面には來るべき鎌倉時代以後人心を支配せる厭世思想を豫言せるは、前に述べたるが如くなるが、更にその心理を解剖すれば、渠の意馬心猿の狂ふがまゝに任せずして、むしろ動もすれば後に顧みて逡巡せしもの、佛教の感化はさることながら、また實は本來の性質の優柔不斷なるの致すところならずんばあらず。しかも戀愛の盲目的なるは佛教思想などの如何ともしがたきところにして、勝利は常に前者の有となれり。且、全篇を通じたる事件の進行も決して悲哀には終らず

著者が思想の結局

一種の理想小説

して、不幸の中にも必ず一點の光明を認めむとつとめたるは、厭世的思想のなほ全然著者を左右するに至らざりしを覗ふるに足る。これを要するに本篇の巧に個々の性格を寫し分けたると、十帖の境遇の變化を描くに苦心せるとは、兩々相俟ちて源氏をして古今小説に冠絶せしむる所以にして、紫式部の思想は十帖に至りて著しく進歩したるを見る。

紫式部の女性的觀察の緻密なるは清少納言と上下して敢て劣るものにあらず。加ふるに此は彼に闕きたる一味のあたゝかき同情を以てす。かくて審かに當時の人情風俗を研究せる結果は、渾然結んで一部源氏の雄篇とは成りぬ。論者或はこゝに於てか源氏を以て當時の活社會を描寫せる一寫實小説を以て擬せんとすといへども、余を以て見るに、必ずしも然らざるが如し。式部は決して何等の標準もなくして活社會の世相を捕へず、源氏に描かれたる平安の舞臺は、一に著者が批評のレンズを通じて始めて現はれたるもの、これを一種の理想小説といふも、何の妨ぐるものぞ。然り、源氏は理想小説なり、さりとて實境を忘れたる極端の空想に偏せるものならざるは、また論なきことにして、實に

二才女の比較

著者が着實なる観察と深邃なる思想とが抱合するところに、この空前絶後の傑作は生れたるなり。これをしも思はずして、或は皮相淺薄なる寫實小説と評し、或は單に幽玄なる純理想小説を以て呼ばむとするは、著者を強ふるものにして識者の與せざるところなり。

源氏物語の特色はあくまでもその形想併せ得て用意の周到なる點にあり、抑揚頓挫の妙端睨すべからざるところに存す。その初は事もなげに起せるが如き筆の讀みもてゆくうちに、そは漸く伏線なりしを悟らしめ、霧は雲を生じ雲は雨を起して、筆の意のまゝに従へるを三嘆せしむるもの比々然らざるなく、未だ嘗て一命題、一事件の不用意に投入せられたるものあるを見ざるなり。これ一は著者が一篇の趣向の上にも、因果應報の理を示さむと試みたるより來りて、卷を繙く者の容易に首肯するところなるのみならず、むしろその照應の著しきに食傷せむとす。紫式部を清少納言に比するに、納言は奔放膽大、云へば必ず人の意表に出でずんば止まざるに、式部は諄々説き去り説き來りて煩を厭はざる風あるを見る、これやがてかれの動もすれば放埒に失し、これの時に

源氏以後の小説

冗漫に陥らむとする所以にして、前者が外面的觀察の精緻微細を極めたと、後者が爬羅剔抉、人情の秘奥を穿てるとは、互に相侵すべからざる特長にして、また後人の得て及びがたしとするところなり。これを要するに、一筋に己が才を待みて思ふがまゝには振舞へど、向日葵の胸中一片の信仰ありとも見えざるは、清少納言、百合の花の幽けき色はあるかなきかに沈みながら、蔽うても蔽はれぬ理想の光の中に輝けるは、紫式部、強ひて後の江戸時代に兩者の對を求めば、清少納言は井原西鶴にして、紫式部はそれ近松門左衛門か。

竹取物語、伊勢物語以來、漸次に進み來れる小説は、源氏に至りてその極度に達し、それよりはまた沈滞す、いな下降すること、なほ歌壇に古今集の典型と仰がれて、向上の一路忽ち壅塞せられたると全く事態を同じうす。源氏の後、狭衣、濱松中納言以下小説の現はれたるは、雨後の春草に比すべしといへども、そのいづれか源氏の糟粕を嘗めたるものにあらざるや、摸擬といふも形の上のみ、意に至りては傳へむことを企てず、企つといふとも能はざるなり。あゝ中天月懸りて餘星影くらし、仰げりな、この光を。

現代の描寫

こゝに平安朝小説の歴史たる源氏につきていへる序に、この時代における一般小説家の取材と構想とに論及せむ。
おほよそ一時代の作品を通覽するに、創作の多き時代と歴史的研究の盛なる時代との二傾向あるものの如し。もとより一方のみ存して他方の全く闕けたる時代はあるべからずといへども、おのづからいづれかに偏重するなり。單に創作のみにつきて見ても、著者が生活せる現在社會を以て過去未來に見るべからざるわが世の天國として、その榮華に甘んじ、その順境に満足せる時代と、ひたすらに古を慕ひ、來るべきに懼がれて、現實世界を無視悲觀せる時代とあり。前者は現代に對する自信の存在を示し、後者はその缺乏を自白す。さらばこの時代はいかにといふに、歴史的研究は寥々指を屈するにも足らざるに、いかに創作著述の多かりしよ。しかもその創作著述は悉く材料を當代に取れるものにして、いまだかつて一言の過去におよべることなし。これを曲亭馬琴が好んで鎌倉室町時代の古武士を寫し、菊池容齋が主として南北朝の事蹟を描けるにくらべて、時代精神の昇降、豈驚くべからずや、奈良朝何かせむ、神代のこと

描寫事件の制限

はたいふに足らずとせるはこの時代の風潮にして、舞臺はいつもおのが臨める儘の社會なり。背景は常におのがまのあたりに對せる天地にして、日常遭遇する宮廷の有様、さらずば退いて家庭一身の生活を寫す。さばれ、これ等のもの一々嚴密なる意義における寫實主義によりて成りたるものならざるは、いふまでもなきことにして、源氏の如き著者の理想の著しくその述作を通じて穎脫表現せるものなきにあらずといへども、理想主義か現實主義か、著者が標榜せる真意は如何にもあれ、その描出せられたる社會なり、天地なりのひとしなみに當代の反映なるは明かなる事實にして、後世この時代の真相を窺ふべきもの源氏物語の右に出づるものなしとなし、甚しきはこれを歴史と對照比較して篇中の一事一件悉く當時の史蹟なりとして疑はざるものあるも、蓋し偶然にあらざるなり。

平安朝にありては、小説は多くは京都の外を知らざる作者の手になり、宮廷の貴族を以て唯一の讀者となすが故に、寫されたる舞臺もまた京都における貴族ならざるを得ずして、中流以下の社會もしくは邊僻の土地の如きは多くは

與らず。これを源氏に見るに、偶々須磨明石の海岸の風景、そこに侘しき謫居の有様、さては常陸、筑紫の遠境にも及びたれど、その描寫は極めて簡單にして、以て地方的潤色を施すには足らず。五條の假のやどりに近隣なる貧者の境界を説きもしつれ、かくの如きは極めて稀なる上に、その目的實は上流社會の記事の單調を破るにあり、これを以て直ちに當時の下流を髣髴するものとなさむは、おぼつかなし。すでに生活難多き中層以下を閑却し、また比較的活氣に富める地方を寫すに疎し、葛藤軋轢の見るべからざる所以にして、かの江戸時代に至りて小説戯曲の好題目として最も屢捕へられたる、一旦の零落に刃も恐れざる忠臣義士が貧乏の縛に頸も廻らず、或は親夫の病氣に藥用の人參もえ買はて悲歎の淵に沈淪す、さりとして主家の寶物を取り戻さむが爲には大事の娘を手離しても顧みるところにあらず、上りつめて才覺つかずなれば、道行心中と歌はせてなか／＼心やすげに死にゆける如きの心事は、竟に平安貴族者流の夢想だもせざるところ、この時代の小説のこの種の方面を歎きたるは當然の數なりといふべし。平安朝の貴族にして、日常その食膳に上る米菜のいかに

悠々たる生活

して生じ、寤寐その膚に着くる服裝のいかにして成れるかを知れるもの果して幾人ありや、もしかれ等のうちに、これらのもののおれが莊園に作られ、またはおのれに事ふる奴婢の手を煩はせるものなるを知るものあらば、そはまことに稀有の學者なるべし。况んやかれ等には縁遠き金錢の計算をや。悠々たるかな、平安貴紳の生活や、春來ると年立ちかへるといづれか疾きおそき、白馬の節會、後七日の修法の噂に日數経れば、桃咲くとして上巳にかしづき、菖蒲ひきては端午をことほぐ。今宵を七夕は逢ふ夜といふに、などわれには人目の關守多き、聖壽をいのる重陽の宴、御佛名にもなりぬれば、いつしか年もくれゆきぬ。公事に數へられし年中行事と、花紅葉折につけての宴飲遊樂とは、平安朝生活の全體にして、これらを除かば、この時代の小説はおほかた白紙となるべく、残るはそれたゞ戀愛か、さらば冠婚葬祭か、げにやうさがうからず、うれしきもいまだ喜ぶべからざるは、人界の實相にして、平和の日は常住に續かず、悲みの雲をり／＼來りて面を蔽ふ、榮華の極だにも盛者必衰の理は免れがたくて、事は屢々志と違ひぬ、煩悶あり、暗闘あり、歡樂世界なるが如き平安朝の裏面

男女の愛

も實は悲哀に満てるなり。されどさすがに後世に珍らしからざる殺人、復讐、決闘などの殺伐なる事件はいまだ見るべからず、嚴格なる道義の制裁を缺けるこの時代にありては、良心の苛責に堪へずして自らその身を縮めて死を早うしたる柏木右衛門督の如きも稀有の例なりき。

いつの世にありても生死は人世の最大事件にして、平安朝の小説もまたこれを寫すに吝かなるものにあらざりしかど、男女の戀愛に至りては他の何物よりも大部分を占めたり。當時戀愛はいかにして成り立つかといふに、こゝに某の家に女ありとせむに、女は猥りにその容貌を人に見せぬをこの頃の風とすれば、眉目もよく手蹟もよしなど知るべきたつきは世間の噂のみ、噂をのみききて意馬しきりに狂ふ若殿上人、我も我もと心のたけを文和歌に通じ、折もあらば几帳簾を隔てて語をかはずに、いよ／＼ゆかしと思へば、直ちにわがものに眺めまほしきといひ贈る。敢ておのれが性質の先方のと適合すべきか、女は妻としても果して愛すべき女性なりやなど、深く思慮しての上のことにあらず、すでに子ある身なるを忘れ、齡の漸く傾きたるをも顧みざるが多し。一夫

多妻は公然の俗、先なるが本妻とは必ずしも限らず、好もしきがあらば幾人を娶るも心のまゝなるなり。かゝる世の女性は禍なるかな、女子の身にとりてはたその父兄にとりて一生の苦心は嫁娶の時にあり、男子が情愛の濃淡をその贈れる歌文に計り、性情行爲の如何を世評に尋ねて、沈思熟慮、始めて百人の一人を選ぶ、この選ぶの日は即ち女子の權利の男子に移る日にして、男子をして或は憂へ或は歎き、語つくし情つくして膝下に伏せしめしも、昨日をかぎり、今日の婚嫁と共に地位は顛倒す。幸にして愛を得ばよし、されど數多なる妻女のうちに、おのれひとり移り氣多き夫の愛を獨占せむことは期すべくもあらず。一たび寵遇を失はむか、秋の扇と捨てられ、また顧みもせられずして、一生悲愁の月日を送らざるべからず。戰々競々として夫の鼻息を窺ひ、心術を傾けてその歡心を買ふに急なりしもの、あに憐むべからずや。戀愛に對する義理、生活難等の聲少きもこの時代の小説の特所にして、大和物語に貧に迫られたる夫婦の離栖を描き、源氏物語に蓬生の君がわが家の零落に住み馴れし都と忘れがたき源氏とを棄てて田舎へ移り行くを寫せるの類、全くなきにあらずといへ

ども鴛鴦も管ならぬ夫婦の間の義理の爲に裂かれ、新たに女子を愛しては許嫁をも袖にし、さては遊女の身代金の調達つかでさながらにわがものともえせぬなどの、後世に普通なる事件の、この時代においてはなかく普通ならざりしなり。

要するに當時の社會には未だ確固たる道德の制裁なく、嚴格なる儒教も根柢より人心を陶冶するに至らず、男子の女子を得んが爲には、左顧右眄して逡巡遅疑するものにあらざれば、朋友も排擠し、親子も競争す、いな、人の妻と姦するもいまだ甚しき不倫とはせられざりしなり。勿論、光源氏が藤壺の女御と通じたるは直ちに父帝の后を犯したるもの、柏木右衛門督が女三宮を姦したるは當時權勢旭日の上るが如き源氏の夫人を汚せるものにして、さすがに心中安からざるものなきを得ず、源氏はこれより一生煩苦し、右衛門督は一步を進めて悶死するに至れりといへども、これ等はまた他に例を見ず、女子に至りては男子の如く自由なるを得ずして、一たび定めたる一人の夫に對しては他くまて貞順の實を盡すを以て必要とせり。しかもその夫は多く放縱多情にして、多

倫理的制裁の缺如

親子の愛

くの妻女を貯へ、感情の趣くまゝに愛憎常なければ、かれらが地位の安からざる、さながら浮雲の如く、涙痕乾くに暇なくして、さらずばいかに單調なるべき平安朝の小説に變化あり、波瀾あり、輕薄ある男子が愛情の動搖に伴ふ女子が一喜一憂は、いづれの時代にも免れがたきことなれど、わけても平安朝はこの事實の著しかりしなり。

男女の思慕と比較するに足るべき人間最大の愛情の發現は親子の恩愛なり、後世の戯曲小説を見るに、これを材料とせるもの頗る多し、ひとり平安朝の小説は然らず、限も知られず、行方も知られざるは天地間たゞ兩性の愛のみなりとし、親子の愛に至りては閑却し去つて言の及べるもの極めて稀なり。小説は時代の反映なり、當時、一夫多妻の風ありて、生母の家に起臥せる子女は、父の母に對する愛情の他に異なるものあらざるかぎり、その音容に接すること少きと共に、恩愛の情もまた薄し、もしそれ更に進んでその母にして全く夫に疎外せられたるものならんか、この母の兒は終に父の一瞥をだに得ずして止まむのみ、父にしてかくの如し、况んや母の競争者たる義母においてをや。たゞ生

母との情愛に至りてはさすがに深きものありて、屢、歌中に現はる。父子の愛を以て小説の材料となしたるは甚だ少く、強ひて求むれば宇治の八の宮の自らその女を愛育したる、濱松中納言の父の再生したりといふを尋ねて支那に渡れるなどあるべしといへども、これ等も畢竟男女の戀愛を引き出さむが爲の緒に過ぎずして、その主題として委曲を盡せる描寫に比すれば、眞に九牛の一毛のみ。

第五章 院政時代

藤氏の傾衰

院政時代とは後三條天皇の頃より鎌倉幕府創立の頃までをいふ。太古以來、王政を以て傳はれるわが國家の秩序紊亂して、政權武門に歸するに至れる、その過渡時代にして、畢竟王政の末期なり。これよりさき名は王政とこそいへ、上御一人の下に藤原氏の一門ありて、大政に與り、全權を恣にしたりしは、平安朝初期このかたのことにして、この藤原氏の盛衰やがて平安朝の歴史の全部とも

小説の衰微

見るべく、一門の權威道長に極まりて、頼長、教通ののち春日の神燈影漸く暗く、朝廷に於ける官位のみはをさ／＼今日も變らねど、實力はまた昨日の比にあらざるなり。翻つて見るに都鄙の縣隔もこの時に至りていよ／＼著しく、皇室の威嚴求むるに難ければ、從來このみは夢穩かに、干戈を見ざりし京都にさへ人心動搖し出でて、洛中洛外早くも源平兩氏が東奔西走の巷となんぬ。あはれ光榮ある藤氏全盛時代の文學はこの國家の大變動に際して如何の運命にかあへる。

平安朝の文藝の消長は藤原氏の盛衰と相伴ふ、これ既に屢、諄説したるところにして、これを小説に見るも、この一門が全盛期をまたその黄金時代として、源氏物語の名篇を出して後、漸く振はず、藤氏が徒らに道長一代の榮華を追憶夢想して、いかに努力すとも、またかゝる兜率天上の世界を再現するに由なきを悲觀せると同じく、その後の小説家は源氏を以て動かすべからざる模範とし、渴仰追隨、敢てその外に出でんとは試みざりき。されば當代の小説を見るに、摸擬剽竊歴々として指點すべく、その間往々にして新意を加へ、結構を變改して

歴史的述作

人の耳目を引かむとせるものなきにあらずといへども、これらは却つて斧鑿の跡著しく、しかも極めて醜陋なる結果を止め、甚しきに至りては猥雑の氣紛として近づくべからざるものありて存す。源氏出でて源氏なし、この衰運はこの過渡期に止まらずして、延いて遙かに中世の末に及べり。

榮華の頂上より墮落せる者は蹉跎たる人世の行路に想到して、その運命を自覺せざるを得ず、氣力あるものは勇猛心に鞭ちて更に回復を圖らんとすれども、氣力なきものは徒らにその悲境に泣いて、昔日の追懐にせめてもの慰藉を得て止まんとす。院政時代の藤氏はまさにこの好例にして、この藤氏を圍繞せる作者に如何ぞ現代を寫せる傑作あらむ、歴史的述作はこゝにおいてか起る、榮華物語や、大鏡や即ちこの黄金時代憧憬の所産に外ならず、榮華物語は一見その體裁甚だ源氏物語に似たり、されどこはたゞその形式についていへるに、内容に至りては全く相反す。源氏は全篇を通じてすべて著者が空想の生むところなるに、これは道長の榮華を中心として、その前後の事蹟に説き及ぼせる當時の歴史なり、これを歴史的述作として見んか、頗る有益の史料たるべし。

歌壇の動搖

といへども、その冗漫にして氣力を缺ける筆致と平板無統一なる敘述とは、純文學としてのその地位を輕からしむ。大鏡がその材を藤氏全盛時代に取れるはまた榮華に同じ、されど本紀列傳を立てて史記に倣へるはかれと全く體を異にし、遒勁にして繁簡宜しきを得たる書きぶりは、國文體の歴史のうち比類なき傑作として推重するに足る。水鏡、今鏡、増鏡などこれに次いで出でしかど、その文終に大鏡の敵にあらず、更に前時代の末かこの時代の初に現はれて、古今の奇話異譚を集めたるもの今昔物語三十一卷あり、著者は博く書史を涉獵したるものと覺しくて、日本、支那及び印度に及び、殊にこの書に尊ぶべきは、平安朝のあらゆる作物が盡く當時の貴族社會の狀態を以て對象としせるに反して、階級の上下に通じたるにあり。余輩が今日依りて以て平安中流以下の風俗習慣さてはその間に行はれし傳説迷信を知るべきもの、この書を措きてまた他にあらざるなり。

かくてこの時代は小説においては衰微の兆漸く著しといへども、榮華あり、大鏡あり、今昔ありて、新たに假名文の歴史を出し、文學一轉の氣運に向へるを示

したりしが、その傾向はこれらの散文よりも和歌の上に更に顯著なり。小説界にありては源氏出生の時代を距つることいまだしかく遠からず、その光明なほ赫々として後進をして容易に仰ぎ見しむるを許さざるに、歌壇に至りては斯道の經典たる古今集の撰述せられし後年久しく、人心漸くその風に倦みて、革新の旗幟は機を待つて動かむとす。而してこの歌壇の變動は政權の轉移と恰も符節を合するが如し。

革新の

藤氏既に實務に倦みて、院宣の政治を見るに至りしはいま更に説かず、かくてなほも習慣によりて持續したる藤氏の威權を壓倒せむが爲に院中に北面の武士なるものを置く、これらはやがて源平二氏勃興の發端にして、二氏は茲に始めて藤氏一門の貴族に代りて京洛の一大勢力となる。この時に當りて皇室における法皇と當帝との兩立は、天に二日あるが如きものにして、到底諧調を保ち難く、終に延いて皇位繼承の争となり、この争はまた移つて武家軋轢の因となり、保元、平治の戦亂うち續きて、古來固定せる階級の制度こゝに破れ、人心頗る動搖す。兵亂が文藝の永久の御方ならぬは論を待たずといへども、しかも

新派の風尚

當時の月卿雲客の優長なる花を賞し月を眺めて詩歌管絃の宴に日もまた足らざりしもの、この國家多事の日も曾て變らず、加ふるに新來の武士をさへ文藝にかけてはその勢力範圍に入れたれば、頼政、忠度の和歌における、經正、敦盛の管絃におけるが如き、以ていかに平安貴族の感化の著しかりしかを思へ、和歌はこの外圍の動亂を受けて却つて活氣を生じ、政治において變革の機熟すると共に和歌においても上下蕩搖、甲論乙駁、氣運は漸く刷新を呼べるなり。この院政時代における和歌は、かく社會人心の漸く動搖せるにも拘はらず行はるゝを得たりといはむよりも、むしろ更にこれによりて刺戟せられたること大なりといふを以て、一層妥當の見解とせむ。殊に盛なりしは保元の亂以前にして、月花の宴、和歌の會屢、行はれ、名流きをひてその技を現はしたりき。この風潮に棹して、まづその旗色を明かにせるを源經信、俊頼父子とす。經信は革新を唱へたりとはいへ、なほ大なる決心を以て全く舊調を棄つることをせざりしが、俊頼に至りては出藍の才を以て清新の家風を承け、銳意これが勃興に力む。その主張するところは曩に曾根好忠が唱へ出ししところとほゞ同じく、道

長の頃にありては徒らに世の嘲笑を招くに過ぎざりしを、更にこの時代に持ち出でて唱道實行したるなり。以爲らく古今集に定めたる歌格、古今集に用ひたる語彙は以て古今時代の思想を盛るべし、未だ以てわが時代の複雑なるはた清新なる思想を容るゝに足らざること、なほ升器の斗水を盛る能はざるが如きのみとげに古今の用語法は先人すてに慣用し盡して餘すところなければ、これをのみ斯道の金科玉條として鸚鵡の舌を學びて止まむは、因循保守の時代とはいひながら、さすがに倦怠の情なき能はざる、正に人情の自然なるべし。俊賴等はこの風潮の急先鋒として起てるものにして、作風はやがて自由を標榜し、見るにつけ聞くにつけて感ずるが儘に遣らんとし、まづ古今が制限せる用語の法格を破りて、上は萬葉を採り、下は卑俚としたる俗語をも入れたり。而してたゞ必要に應じてこれを用ひたるのみならず、好んで奇異の物名を詠じ、故意に險難怪澁の辭句を使役したるなり。古今時代には體言少くして助辭多かりしかば、歌調おのづから溫柔暢達なるを致し、がこゝに至りては助辭の省略、名詞の繁用の外、好んで語句の配列を轉倒すること多く、ひたすら佶

かれらの弊

屈勁拔の調を喜ぶに至りぬ。内容はいかにといふに、古今にありては一たび全く主觀的敘情の一方にのみ走れるもの、また一轉化の運に遇ひて客觀的敘景の歌少からず、間々秀逸なるものさへ現はるゝに至れり。これ或は漢詩の感化にもよるべきが、とにかくにその發達は多とすべきものありしなり。かくて新派は舊來の弊風に對してよくその庶幾するところを遂行し得たりし觀ありしかど、思ふにこれもまた他端の弊に陥れり。すなはち徒らに奇怪の文字を連ね、難解の句法を用ひたることにして、その所謂清新の歌風は毫も内容外形の相伴へる進歩を示さず、思想はいまだ舊套を脱せざるに、形式のみまづ急ぎて變化を銜ふ、これこの革新の終に永久の革新たらずして、歌壇は更にまた幾ばくもなく古今の古調に復歸したる所以ならむか。當時この新派歌人等が代表せる勅撰集は金葉、詞花の二集なるが、由來勅撰集の例として、優雅穩健の調を旨とすれば、これのみを以ては未だかれ等の眞面目を窺ふに足らず、更に去つて俊賴が散木奇歌集を見ば、すなはちかれらが弄したりし變調奇語の如何なるかを首肯すべし。

歌學の旺昌

いづれの世いづれの時にも急進派に對する保守黨のあらざるはなし。政治上に藤氏等の上流貴族が今の時世に不満を懷きて古代に眷戀したりしと同じく、和歌の上にもひたすら古今の盛時を慕ひ、これを崇拜して斯道の動かすべからざる經典となせるもの、また頗る多かりき。これら尙古派の人々が新興の歌風を評するや、いはく、かくの如きは古代の先例古實を忘却したる無節制の調言のみ、一定の準則を示してかの卑俗の野語を制せむはわれらが任務なりと。こゝにおいてか歌學の勃興となり、また一方には歌合の流行に伴ひて辯難攻撃の武器に備へんが爲に歌論の益、進むを見たり。歌學は前にいへるが如く、早くその初を貫之が古今集の序に見、公任に至りて漸く形成せられしが、こゝに至りて全く一個の學問となり、これを以て生涯の事業となすものさへあるに至れり。されどこれらの歌學者は、和歌は自然と如何なる交渉を有するか、文學としての絶對的價值はいかに、などいへる根本的論點には向はずして、唯古人の歌としいへば、その優劣をも問はずして一意これに盲從し、これを法則とし、これを標準として形式の末を云爲し、間々褊狹固陋なる自己の智識より割

有名なる歌學者

俊成の企畫

出せる論法を加へて内容の空虚を飾るのみ、學問とはいへど、その薄弱膚淺にして、殆ど科學的價值を認むるに難きもの思ふべし。そもくかれ等が歌學を唱ふるもの、歌道の進歩に資せむの志あるにはあらずして、一にこれによりて淺薄なる自家の主張を貫徹せむとするにあれば、それも故あるかな。

院政時代におけるこの歌學の代表者は誰ぞといはば藤原基俊を以て第一に推さむ。俊頼をもつて好忠の跡を追へるものとなさば、基俊は正に公任の衣鉢を繼げるものといふべし。たゞ一條天皇の時、好忠は彈指せられて衆人の間に伍せられず、公任ひとり一代の耆宿と仰がれたりしに、今この院政時代に至りては俊頼却つて斯界の名流として一世の渴仰をあつむるに、基俊不遇に身を處して時人に惡まる、時勢の變遷の急にして争ふべからざること驚くに堪へたり。基俊につぎて歌學に名あるは藤原清輔及び僧顯昭なり。清輔は詞花和歌集の撰者たる顯輔の子にして、父子共に和歌を能くし、爾來全く和歌を以て家業となす、所謂六條家すなはちこれなり。顯昭もまた顯輔の猶子なり。

院政時代は概するに和歌の榮えたる時代にして、保守、急進の二派が互に自黨

の樹立を計り、紛々擾々として未だ勝敗を決するに至らざりし様は、源平二家の争亂にも似たるかな。この時に當りて、嶄然として頭角を現はし、快腕一刀亂麻を斷ぜざるを藤原俊成とす。俊成初め六條家の門に學び、のち基俊が尙古の風を望みてこれに投じ、更にまた俊頼が急進説に動かされて、大にその影響を被りぬ。俊成が經歷それかくの如くなれば、諸流の長短はよくこれを領せり、これを取捨してその基礎となし、以て理想の樓閣を築かむは蓋し俊成の希望なりしに似たり。當時の歌壇を瞥見するに、いづれの歌人か保守の一端に傾かずんば革新の一端に走らざる。一方に萎靡沈滞の嫌あれば一方に放縱亂雜の弊なきにあらざり、彼と此とを混合折衷してなほ若干の束縛を加へなば、清新にしてしかも放埒ならざる一家の歌體こゝに成り、歌壇の統一やがて期して待つべし。おほよそかくの如きもの俊成が心事にして、基俊等が定めたる舊例古格に軌範を求むれど、全くこれに泥むことをせず、俊頼等が唱へたる清新の調を喜べど、また力めてその奔放逸走の嫌あるを避く。その長壽を享けて、折ふし源平争亂の世ながら、一生を文藝の道に捧げ、邁進の勇氣を鼓して、計畫着々として

佛教の影響

その圖に當り、終に一代の先達、天下の判者として許さるゝに至れるもの、偶然にあらずといふべし。

院政時代の和歌の特色はさらば奈邊にあるかといふに、佛教の影響の層一層加はり來れること即ちこれなり。而して余輩はこの特色ある和歌の代表者としてまづ指を西行法師に屈せむとす。西行は出家の身なり、その詠の佛教臭味を帯ぶるは、けだし理の當然のみといはばそれまでなれども、この佛教思想の影響はこの時代にありては、緇衣の徒の間のみならず、一般人士の心裡にも深く浸染して傳播の範圍甚だ廣かりしなり。こゝは當時の佛教が腐敗の極こゝに至りて一生面を開き、新たなる活動を始めたるに徴するも、想像するに難からず。

佛教の革新

天台、真言二教はまたこれを藤氏の状態に比すべし。嘗ては從來の諸宗を壓してひとり覇を教界に稱したることもありしに、藤原氏が惰眠を貪りて政治上に實力を失へる時、二宗もまた沈滞萎靡して漸く佛教の眞義を失ひ、僧侶の分を忘れて俗世界の俗事にたづさはり、兵を動かし戈を弄して、互に自派の維持

をはかる。二宗既にかくの如くなれば、餘は推して知るべく、今や將に宗教は危急存亡の秋に會せむとせしが、下りたる時潮は常にまた上る、良忍の融通念佛を唱ふるあり、源空が專稱念佛を起すありて、こゝに他力の宗門なるもの開かれ、士民争うてこれに歸依すれば、舊宗教こそあさましくも墮落したれ、新光明はこれに代りて、暗黒の教界を照し、更に次の鎌倉時代に禪、一向、日蓮の諸宗前後して生れ来るに及びて、佛教は再びあらゆる文化の指南車となり、學問藝術はたその感化を被むること尠少にあらざりけり。蓋し院政時代はこの佛教改革の過渡期にして、その和歌の受けたる佛教の色彩は平安朝におけるよりも濃厚に、鎌倉時代におけるよりも淡泊なり。すなはち鎌倉時代に然りしが如く、全くその奴隸たるには至らざりしかど、また遂に平安朝の中世に然りしが如く、途上の人たるに止まらずして、これが爲に思想の深遠を致し、併せて厭世の觀を歌ふもの多きに至れるは火を睹るよりも明かなり。

弊上漫吟の

この潮流に乗じて現はれたる歌人は前後その數甚だ乏しからずといへども、天成の歌人としては西行ひとりその名を恣にす。西行の特色はさらば何ぞと

いふに、一言にして盡せば實境實感を主として歌へることすなはちこれなり、しかり、實境實感を主として歌へることすなはちこれなり。かくいはば聞くもの或はいはむ、和歌の道は所詮實境實感を詠ずるにあり、豈他あらむや、かくの如きは渠西行あるを俟ちて後に知らざるなりと。言や洵に可し、歌人が實境實感を歌ふ、これ尋常一様の事柄にして、世間またかくの如き當然平凡なる現象なきに似たりといへども、翻つて當時の時勢に想ひ及ばば、わが強勢を加へたるこの言の一見奇矯なるが如くにして、しかも甚だ當を得たるものなるに同感せむ。當時滔々たる歌人が行へるところを見よ、かれらは堂上に坐して名所を詠ずること百千にして足らずといへども、そのうちおのれが實見せるは幾何ありや、或は煩悶すといひ、或は覺醒すといふ、その果して半宵の襟を濕し、もしくは卒然案を打つて成れるもの幾首かある。否、かれらは月といひ花といふだに典型は悉く古人にあるなり、俊賴出でて革新を唱へたりといへども、親しく自然の懷に出入して、その默示に従はむとせしにはあらず、これもまた題を探り、古歌に例を求めたれば、在來の弊は依然として止む時なく、その説いたづ

西行の特色

らに牽強附會に陥り、作風また千載の軌範たるに至らざりき。さらば西行の歌はこの時勢を超越して全然形式の弊を脱却したりしかといふに、また全く然りとはいふを得ず、世間因襲の久しき、古人が句格語調は知らず識らずこの天稟をしも侵せりといへども、たゞ西行や生れて煙霞の癖あり、儕輩が流俗の京都に一生を籠りて、坐ながら名所を知るを以て得意の色ありしとは選を異にし、早く身を一笠一杖に托して、南船北馬、老に及びて足跡殆ど海内に普く、まのあたりに境に對して感を吐く、見るべし、かれが歌の今日もなほ讀むものをして自然の莽氣を傳へて脈々として盡きざるものあるを思はしむるを、これやがてまた余輩が鷄群の一鶴として西行を推す所以なり。されその歌ひとへに感興に任せてよみ放ち、敢て推敲練磨を経たるものにあざれば、景情活躍の高調を示すと共に、時に平調凡作の見戯にひとしきものあるなきを保せず、玉石混淆、渠が私淑者を以てしてなほかつ嫌焉らざるものからずといへども、一長一短は何人にも免れず、西行また歌人として強ひて一家を立てむことを庶幾したるものにあらずとせば、深くこれらを咎めむは咎

結論

むるものの乏しき雅量なるのみ。要するに院政時代は政治において然りしが如く、文學においても單調優弱なる平安朝の舊風に飽き來れる時代にして、次の鎌倉時代に入らむとする過渡期の一步にあり、去らむとする舊時代の風潮と來らむとする新時代の風潮とはこゝを先途と相撃ち相戦へりき。



中世

第一章 この時代の概観

所謂中世

この時代の美術

こゝに中世といへるは、源頼朝が府を鎌倉に創めて天下の政權を握りしより徳川家康が海内一統の志を遂げて江戸開府を宣言せしまで、すなはち所謂鎌倉時代、南北朝、室町時代、戦國時代を経て織田豊臣時代の末に及び、圓數を以て算すれば千八百五十年(建久元年)より二千二百六十年(慶長五年)この年關ヶ原の役ありまで、すべて四百五十年の間なりとす。

この時代はいふまでもなくわが歴史上の混亂時代にして、兵戰隙もなくうち續き、太平無事の日少うして、上下擧つて武事に専念すれば、平和の世を裝飾すべき文藝はさづから疎外せられ、これを享樂するもの稀にして、これを述作するもの愈々寥々たりしは自然の勢なり。わが國歴史ありて三千年、時勢は展轉して止まずといへども、前後この時代ばかり亂れたる世もなく、この時代ばかり

り文藝の衰へたる時もなし。さはいへ亂世にはまたおのづから亂世の文藝あり、亂世の美術ありて、しかも卓然として一時代の特色をなす。まづこれを美術に見む。彫刻には鎌倉初期に運慶、快慶の二佛師あり、共に一代の巨匠にして、この上りたる昔にありて人體の研究を忽にせず、寫實と想化との妙を極めて、優美の趣、豪宕の姿、さては曠恚の相など、寫し得てそゞろに神往の氣韻あり。これらは千年の一人にして、論外とすとも、その後も或は珠玉を飾り、或は蒔繪を施し、その弊としては纖巧細弱を來ししものなきにあらずといへども、技術の一點に至りては蓋し賞讃するに堪へたるものあり。丹青には信實、光長繪卷物に遒勁の腕を揮ひて人物の活寫を試み、所謂東山時代の水墨畫は雪舟、元信の筆に入りて、墨痕淋漓、自然の畫圖をして顔色なからしめたるが如きは、就中その偉大なるものなり。この他、茶の湯、香花の道、これらに伴ひて進める蒔繪、陶磁器の製作など、數へ來ればかゝる時代の産物として寧ろその盛なるに驚かずんばあらず。

文學と美術

たゞ文學に至りてはその性質上これらのものと並行追隨しがたき事情あり、

すなはちこれらの美術は比較的一時の寧日にもよく進歩するの便宜あるに反して、文學は常にやゝ長久なる年月を要するが如し。それ然り、余輩はこの兵馬倥傯の時に際せる中世の文學が同時代の造形藝術の進境に比べて著しく遜色あるを見て、直ちにこれを以て當時の文學者の不能を責めむとするものにあらず、つとめて深大の同情と感興とを以て對せむとすといへども、この時代の文學はかゝる戰亂時代の所産としてもまたあまりに貧少庸劣ならずや。平家物語はあり、源平盛衰記はあり、徒然草はあり、文壇はた全く暗黒の言下に喝し去るを得ざれど、遂に斯道の快慶、雪舟は出でざりしなり。固より文學と他の藝術とを比較せむは俳優と力士との伎倆を上下せむとするものならざるを保せずといへども、二者が發達進歩の道程に大なる逕庭を存したるは疑ふべくもあらず。かくいはば論者或はこの時代の特産たる謠曲、狂言を以て特筆に値せずとなすかといはむも、これとて一般文藝史上に一時期を劃すべき程のものにあらず。東山時代の繪畫が不朽の價値を留めたるに比して及ばざること遠しといふべし。

兩盛代の連鎖

抑、わが國文學を通覽するに、その偉觀はこれを平安朝と江戸時代とに推さざるを得ず、これひとしく十指の指すところにして、わが中世はこの二大盛時の間に介在して、恰も二山を繋げる一谿谷の觀をなす。而して二山は各、特色あり、特色は常に草木の皮相、緩急の外貌の上においてのみならず、根本地層の構成、岩石の性質において一致すべからざる相違あり、人をして殆ど二者の同一系統に出でたるものにあらざるべきを思はしめんとす。また更に言を換へて説かむか、平安文學は上方なり、江戸文學は東國なり、相望めば雲煙萬里、よく一躍の移すべきにあらざるなり。この隔絶せる兩地をしも連結するものはすなはちわが東海道たる中世の文學にして、この短からざる道程を経るまゝに、かれの面影の漸く失はるとともに、これの異なる傾向は次第にその頭を擡げ來る。畢竟、王朝文學を滅せるも中世なり、近世文學を興せるもまた中世なり、中世文學はたゞそが二大文學盛時の連鎖たるが故に價值あり、興味あり。

兩盛代の比較

平安文學と江戸文學と特色を異にせるはこれを後章に譲りて、こゝに少しく他方面における兩時代の相違を比較せむ。そは人間生存の要件たる衣食住を

近世より見たる理想的時代

見るに如くはなし。卓を並べて箸と共に匙をも備へ、醬油、鹽、酢など陳列しておのがじし食ふ人の嗜好に任せて調味せしむるやうにせること、なほ今日の西洋料理の如くなるは平安朝にして、加味料を置くことなく、匙をも略せるは江戸時代の風にあらずや。裳、唐衣、その名を擧げむだにことごとくしき十二一重の地も色も華やかなるに、螺鈿、蒔繪の巧をさへ盡したる平安女子が服裝の變遷はいふに及ばず、男子が束帶、直衣の寛優の姿も烏帽子を捨て、素袍の袖を切り、江戸時代の上下となり、住宅の結構はた平安の宸殿造は江戸の書院風、何も何も要するに戦亂多端の世は煩瑣を棄てて簡便に就き、華麗を遠ざかりて素朴に歸る、これ自然の勢にして、これに前後せる二時代の面目はあつからざるを覆すが如く相異なり。如上は物質的方面における一例のみ、精神的方面に至りては更に甚しく、従つてその反映たる文學の特色に非常の差異あるは、これによりて推すも思半に過ぐべし。

中世時代の歴史徴つせば平安朝の文化は衰へず、中世時代の歴史徴つせば江戸時代の文化は起らざりしなり。これこの時代に大に見るべき文化なく、寧

る缺陷破綻に充ちつゝも、徳川時代の人士が仰視して以て當時の理想を實現せるユトーピヤとなせる所以にして、こは固より事實以上の想化を試みたるもの、中世は到底いづれの方面に見るも、さばかりの好所あるにあらずといへども、たゞこの混沌紛糾を通じて次期に至りて來るべき燦然たる文化の漸く凝成固形しつゝありしは疑ふべくもあらず、政治上に江戸の府を開きて勤儉尙武を奨勵したりし家康が頼朝の先例に倣へるものなるは、いふまでもなく、その制度の如きも多く範を貞永式目、吾妻鏡等に取れるなり、文學の上よりいふも中世の貧弱は、平安の豊富に比べて脚下にも及ばざるに、なほかつ江戸時代に喜ばれたるもの平安朝の小説にあらずして中世の軍記謠曲なりしを思はば、中世の江戸時代に及ぼせる感化や驚くべし、なほ他の一二の例を引かむか、猿樂は江戸時代に至りて武家の式樂となり、民間には太平記讀なる講釋師の業を起すあり、義経は傳說的色彩を帯びて武勇を人格化せる武士の典型となり、敵討といふこと、歴史を涙らば早く眉輪王の事蹟もあるに、中世ならては夜の明けぬ時代は、曾我兄弟を權輿とせずんば折合はれず、年々の江戸の春の

新思潮の勃興

初芝居にも何は措きてもこれを出すを吉例としたりき、江戸時代の中世に對する崇敬やそれかくの如し、されど要するに此が彼に先だつこと一時代にして、先驅たり、源流たりしが爲にして、その文化その道義共に決してかれらが夢想したるが如きものにはあらずなり。
更に換言すれば偏重なる平安朝の文化と、その偏重を補うて起れる新文化とが合一し、混淆して江戸時代を現出するに至りし過渡時代すなはちわが中世にして、一時代の全局面を通じたる特色は畢竟新舊二潮流の戦闘に外ならず、この新舊二潮流はさらば各、何によりて代表せらるゝかといふに、政治の中心よりいへば、舊思想は朝廷にして、新思想は幕府なり、その位置の上よりいへば、一は上方にして、一は關東なり、更にこれを狭うしては、彼は京都にして、此は鎌倉なり、而してその文化を享樂せる社會の階級よりいへば、一方は公卿にして、一方は武士なり、かれ有職故實を主とすれば、これ武備兵術を專とす、やがて古法の墨守と因循の性質とは前者が必然の特色にして、革命の傾向と殺伐の氣風とは後者に免るべからざる異質なり、舊潮流の利弊はいま措いて問はず、新

立二思潮の對

潮流は樸素質實の旗幟を標榜して新に立てるもの、未だ歴史と習慣との掣肘なく、行動甚だ自由にして、縦に從來の形式模型を打破し、新進氣鋭の態度頗る刮目に値するものありしかど、惜むらくはその事に與れるもの、武事一途の人にして、他を顧みるに至らざりしが爲に、文學は比較的はその影響を被むること少く、光榮ある革新はさておき、舊態の持續だに難く、墮落に墮落を重ねて、わが國稀に見る衰微時代を現出したり。

新舊潮流の對立はまた文藝の上にも現はれたり。雅樂に對して平家琵琶、田樂、猿樂の起り、和歌に對して連歌俳諧の新體を生じたるはすなはちこれにして、一は平安朝以來の貴族的文學を代表し、一は中流武家の一般文學となる。されこれこれらの二潮流は必ずしも常に確然たる墻壁を隔てて相依らざるにはあらずして、同一作者、同一書中にも併存共立するを見る、こは苟くもこの時代の戰記、隨筆、謠曲等を繙くもの容易に着眼して誤らざる所なるべし。要するに平安朝の舊風漸く衰へて江戸時代の新風の勢を得るに至れる路程を示すもの即ちこの時代の歴史にして、その消長の跡は最も文學に著し。

新思潮の特色

尙武の氣象

余輩は曩に新舊二風の特色を比較して、その學ぶところ一は和歌有職にして、一は兵術武器なるに言及したり。されどこはあまりに簡短なるを以て、更に詳説すべしといへども、舊風の特色は所詮平安朝の特色なれば、こゝには繰返さず、ひたすらに所謂新風潮のいかなるかを見む。新風潮に顯著なるは、尙武の氣象の勃興せると儒佛二教の感化が眞面目に社會人心の根柢に及べるとの二新現象なり。いふまでもなく儒佛二教のわが思想界に認められしは上古以來のことにして、尙武の氣象も建國當初既に存在したるものなりといへども、儻然一代の風をなして、社會百般のこと一にこれを標準として決せらるゝに至りしは、すなはち中世に入りて後のことにして、感情主義の威力に覆はれてこれまで永く國民思想の奥底に潜伏せざるを得ざりし倫理的はた宗教的性質は、一朝この變革時代に遇ひて俄然として復興の機を得たりしなり。境遇の人心を化すること大なる眞に驚くべし。

尙武の氣象！あゝこは國初以來終始一貫せるわが國民性の隨一にして、近く露國が東侵の野心を挫きしはいふも更なり、文を以ては師と仰がざるを得ざ

りし三韓を神功皇后の古にありてまづ破りたまひき。額には立つとも背に矢は立てじとは早く上古の信念にして、文學偏重の平安朝にありてだに、ひたすら柔弱に流れたるは京都における上流貴族のこと、地方にありてはなほよくこの氣象を保存するに止まらずして、これを獎勵琢磨し、その代表者たる源平等の武士が入つて京都に勢力を得ると共に、更に大に風をなす。さ候へば君は實盛を大矢とおぼし召され候にこそ、僅か十三束をこそ仕り候へ、實盛ほど射候ふ者は、八箇國にはいくらも候ふ。大矢と申す定の者の十五束に劣りて引くは候はず、弓の強さもしたたかなる者の五六人して張り候ふ。かやうの精兵どもが射候へば、鎧の二三領は容易うかけず射透し候ふ。大名と申す定の者の五百騎に劣りて持つは候はず、馬に乗りて落つる道を知らず、惡所をはずれども馬を倒さず、軍はまた親も討たれよ、死にぬれば乗り越えく、戦ひ候ふといへるは、これなん當時最もこの氣象に富めりし坂東武士の特色を口づから評せる齋藤別當實盛が言にして、説き去り説き來りて痛快極なし。而してこの進むを知りて退くを知らざる尙武の氣風に伴ひて、自己の仕ふる主の爲に一身を鴻

朱子學の傳來

毛の輕きに比せる忠義心の如きは、その初は己の胸臆を傾け盡すところの眞心にして、その實は國民のうち存すれども、殊更なる名稱は存せず、また一般社會が皇室に對するやみがたき性情にして、特別なる階級に限られたるものにて、もなかりしが、漸次移りて武士がその主に對する道義として凝結し、これに儒教の名義を命じ、佛敎の教理をも附加するに至りて、遂に一個の道徳律所謂武士道なるものを生ずるに至る。されど武士道の確然たる種々の形式を定むるに至りしは、また遙かに下りて江戸時代のこと、に屬し、中世にありては漸くその發達の路程を示すに過ぎずといへども、しかも武士道の根據の徹頭徹尾古來の事實を綜合し理想化して成れるものなるを思はば、この時代における尙武の氣象のいかなりしかは推測するに難からず。

儒敎の行はるゝやまた久しいかな。されどそのわが國文學に及ぼせる影響は常に佛敎の勢力あるに及ばず、漢文學全盛の時にだになほ一步をかれに譲り、わが中世に及びてもこの形勢は依然として舊の如くなりしかども、またさすがに新興の佛敎と相待ち相扶けて、當時の人心を感化せるもの少々ならざる

は言を俟たず中に就き最も勢力ありし學派を朱學とし、説くところ頗る禪學と相似たり。その始めて傳はれるは何時の頃なりけむ。或は順徳帝の朝俊苜これを傳ふといひ、或は金澤文庫にその創立者實時の子越後守顯時が奥書せる小學あれば、恐らくは既に鎌倉時代に傳はれるならむといひ、また一説には建武の頃玄慧の輸入するところともいひ、その他異説なほ多く、多少年歴の出入なきにあらずといへども、要するに禪宗と相前後して傳へられ、建武中興の頃や、著はれ、室町時代の末期に至りて大に行はれしものなるは疑を容れずかく弘傳すると共に文學も漸くその思想を受くること多く、人心の陶冶に資するところはた甚大なるものありしなり。しかれども、この一事あるが爲に、わが國近世道德の淵源を以て直ちに支那にありとなさむは、一を知りて二を知らざるもの説のみ。由來われは東海君子の國、倫道の基礎國體と共に定まる、賓たる名を假れるを以て直ちに實の存在を疑はむとす、誣ふるものといはざるべけむや。

神道

敬神祭祀てふ行事の發達して神道となれるも蓋しこの時代にあり。而してこ

新佛教の傳播

も儒教と同じく佛教の勢力に隨伴して起れる新現象にして、教義の大部分を佛教にとり、なほ混和するに儒教及び陰陽道の二説を以てせるもの、道とはいへど、特種の深遠なる主張あるにあらざるなり。

佛教の傳來や悠遠なり、奈良の盛時はいふもことふりたり、平安朝においてはその内面的感化は外面の流行ほどにもなく、また漸く腐敗を重ねしが、その末葉よりこの時代の初期にかけて、禪宗支那より傳はり、種々の念佛宗、日蓮宗の新たにわが國に起れるありて、折ふし戦亂多き社會人心の根柢に觸れ、明日をも知らぬ人々の要求に應じて、平安朝の萎靡に對する反動の氣勢は漸く揚れり。されどこは新興佛教のみにして、舊佛教に至りては則ち與らず、天台、眞言の如きも徒らに袖手傍觀してまたこれらと中原に角逐する能はざりしなり。この時代のこれら新佛教が平安佛教の現世的形式的なるに反して、人心内部の宗教的要求を對象となせりしは注意すべき現象にして、その發達はまた新たに起れる武家の勢力と追逐す。故に禪宗まづ鎌倉に榮え、日蓮宗これにつぎて、關東に信者多く、念佛宗最も後れて一般民衆の渴仰を贏ち得たりき。さるが中

文學の服従

に特に禪はその教理以外に、支那の文化をも伴ひ來り、新しきを喜べる當時の風潮に投じて、急ちこれを傳播し、風俗文藝に影響するもの少々にあらざりけり。見よ、茶道の起りたるといひ、東山水墨畫の一代に重んぜられしといひ、みなこれ禪宗の傳へられて後に然りしにて、衣食住萬端のこと、今一々擧げずして止むといへども、感化の甚大なりしは概ねかくの如し。

かくては文學もこの風潮に棹さざるを得ず。また強ち禪宗のみに限らずといへども、當時、上下干戈を弄するに急にして、一般人士が學問の道に疎く、文筆を執るに暇なかりしや、操觚の業は自然にひとり閑寂なる僧侶の手に委ねらる。當代の文藝が宗教臭味を帶ぶること甚しきは一にこれが爲にして、偶、佛教者ならぬ人の述作にかゝるものありとするも、社會人心の傾向にして既に前述の如くなれば、勢また厭世無常の主張なきを得ざりしなり。佛教趣味の普及や善し、中世文學の特色の存するところ、正にこれあるが致すところなるべしといへども、一步を過れば大澤に墮つ、佛教の趣味を加味して止むべかりしこの時代の文學は、果然その境界を越えて佛教の教理を宣傳するの説明手段とな

男尊女卑の風

り、よりて以て甚深の意を加ふべき佛教の爲に、却つてその獨立を失ひ、一種傀儡の觀ありて、倒さまに淺薄の誹を免るゝ能はざるに至りしは、實に惜みても餘あり。當時の人心よりいへば、和歌を學ぶもまたこれ佛道の奥旨に達せむが爲の方便にして、わが國小説の隨一たるかの源氏物語だに、この佛教食傷者の眼には、天台止觀の意を承述敷衍せる世にもありがたき法の手引と見えたりとよ。

上述の尙武の氣象盛になりて、やうやく武士道を構成し、儒佛の影響感化はた人心の奥底に徹するに至りて、社會が女性に對する觀念は平安朝と全く異なるものあるに至れり。かの三從七去の説は早く儒教の來ると共に唱へられしところにして、たゞ王朝における女性の勢力甚しきや、實際の習となるに至らざりしなるが、こゝに及びて犯すべからざる女性壓迫の憲法となれるは是非もなし。この儒教のまた養ひ難きもの女子と小人とに盡きたりとなし、佛教の生れながらにして罪業深重に、三世の諸佛に棄てられたるものこれ女人なりとなせる外、直接に女子の身にとりて悲しきは戰場に馳驅してものの役に立

たざる一事なり。これらは相依り相援けて女性卑下の思想を養ひ、平安朝にありては一面には女尊男卑の傾ありしに、こゝに至りてその風全く堙滅し、男子は上にありて昂然自ら居り、女子は唯々として一にこれ命これ従ふ。この濟度すべからざる虚飾無能の化身たる女性に戀愛を送るを以て、男子が拭ふべからざる耻辱となし、極力これと關係交渉せざらむとするに至りしは、やがてこの傾向に附隨すべき思潮にして、これを反映せる文學にも、これまでさしもの重きをなせる男女の愛情も漸く見られずなり、君臣の情、父子の愛などいへる道徳代りて旨と描かるゝに至れり。

要するに中世は、一面においては、因襲摸倣、平安朝の様によつて胡盧を描ける風を存すると共に、一面には習慣的勢力を打破して革命的改新を成就せる時代といふべく、文學にありても従來の平和艶柔なる戀愛を一掃して、殺伐剛毅の氣象を鼓吹するに至り、或は克己といひ、或は制慾といひて、儒教の意義を明かにすると同時に、無常厭世の佛教的教理を含め、破壊に代ふる建設は以て足れりとすべからざれども、とにかくに清新の風を容れたるは多とすべし、され

中世の概観

時代の區劃

どこれに伴うて形式の上に漸次階を追ひて進める典雅絢麗の雅文が崩壊せられ、しかも當代人士の滔々として文章に長ぜざるや、新たに精しき修辭法を以てこれに代ふるにも至らず、到るところ文法の破格に充てるはまた一奇觀なり、たゞ漢語、佛語の用ひらるゝこと漸く多くなりて、形容、句法の豊富を致すと共に剛健雄大の度を加へたるはこの時代の外形に特記すべき長所にして、王朝の雅文の近世の和漢混淆文に轉ずるに至りし徑路は、歴然としてわが中世亂雜の文體中に見ゆ。

圓數によりて中世を左の四時代に分つ。

- 一、新古今時代 (二八五〇—一八九〇) 四十年間
- 二、鎌倉時代 (二八九〇—一九九〇) 百年間
- 三、南北朝時代 (一九九〇—二〇六〇) 七十年間
- 四、室町時代 (二〇六〇—二二六〇) 二百年間

(戰國及び織田豊臣時代をも含む)

第二章 新古今時代

所謂新古今時代

鎌倉幕府開けて後四十年の間を新古今時代と名づく、新古今和歌集の成りし元久元年は正にその中葉にして、新勅撰和歌集撰述の擧ありし貞永元年はその末葉なり。

和歌の盛運

小説は振はず、漢詩文も衰へたり、秋風落莫の感なきはなき鎌倉時代の文壇ながら、この一期にありてひとり丹楓の霜に誇れる慨あるを和歌の現象とす。そのかゝる凋落時代の偉觀としてめざましきはいふまでもなく、美なること花の如き古今時代に比しても遜色なからむとす。新古今時代は竟に新古今の時代なり、古今時代と共にわが和歌の二大盛時として記憶すべし。

時代區劃の難

翻つて思ふに、院政時代の特色はこの時代に入るも未だ何等の變革を被らず、一般文藝の傾向はた舊様依然として前時代を襲ふ、かくてもこれを前代と相分ちて新時代と稱すべきか、疑問なき能はず、そもく政治史上の時代區劃を

幕威確立の期

以て直ちに文藝史上に應用せむとするは、餘に輕卒なる手段にして、精密にいへば、その政治史上の區劃だに實は甚だ曖昧に、普通に所謂武家政治の初は果していづれに置くべきか、極めて漠然たるなり。或は頼朝が鎌倉に座を占めたる時か、或は平家が安德天皇を奉じて西海に沈める時か、はたまた頼朝が總追捕使もしくは征夷大將軍に任ぜられたる時か、これ既に一個の疑問なるに、更に一步を訴らば、武家執政の備を作せるもの早く清盛あるに想到せずんば、あらず、單に武家政治の新現象を以て中世の發端となすべしとせば、寧ろ平相國が太政大臣となりし仁安、もしくはその全盛時代なる治承の交を以て擬するもまた可ならずや、もしそれ政權關東に歸して鎌倉幕府の威令全く天下に布き、その勢力牢として抜くべからざるに至りし時を俟たむか、そは遙かに下りて承久の亂の後にあるを如何せむ。

鎌倉幕府の建設は元暦、文治の古にあり、巨頭公が方寸には當時早く確固たる信念を貯へたりしなるべしといへども、時人は見て以て清盛が一時無上の權勢を弄したりしと同一視し、これに多大の囑目と信服とを捧ぐるに躊躇して、

時代分割の
不精確

いつかはその覆滅の日あるべきを想ひ、朝廷はた深く政權の東遷を遺憾として、常に回復の念を断たざれば、これに心を傾け、これに望を屬せる京都派の人は、機會だにあらば討幕の大軍を起さむと期したりき。この沸騰せる反抗心の代表者は、いふまでもなく後鳥羽上皇にましく、承久の亂は、やがてその抑へ難き宸襟の發露せるなり。されど大勢既に定まりて、王師勝たず、驟雨一過して、新政府の地盤は却つて堅くなれり。王政復古の希望と武斷政治遂行の決心との軋轢も、これまでにして、京師はこの一敗の後、また起つべからずなりぬ。これを國民一般の思想上よりいへば、源平時代以後、さしにも動搖せる天下の人心、頓に鎮靜すると共に、また活氣を失ふ。嚴格なる意義にいふ、鎌倉時代は、かくて承久の亂の終ると共に、その第一頁を開くといふべし。

既に政治歴史の上より見ても、鎌倉幕府の創立を以てその時代を分ちがたしとせば、これを以て必ずしも細かに政治歴史と時を同じくして進まざる文學史上の時代區劃の目標となさむは、更に當を失せるや論なし。平安の末造源俊賴出でて和歌の新派を標榜し、その麾下に屬するもの甚だ多く、これより保守

を唱道するもの、清新の風を喜ぶもの、折衷を主張するもの、議論紛々として決せず、藤原俊成ついで出て、快刀を揮つてこの亂麻を断たんとしたれど、群雄割據の世は容易にこれを許さず、奮闘惡戰の狀政治上に源平二氏が兵馬の權を争へると正に絶好の對聯をなす。源平の争亂は、鎌倉開府と共にその局を結びたれど、歌壇はその後も暫くこの趨勢を持続し、俊成の子定家がひとり覇權を弄するに至りしは、新勅撰集撰進の後にして、歌界一統の結果はこの集に始めて現はれ來る。これまでは紛亂騷擾の時代なり、敢て平安末期と撰ぶところなし。定家は歌界の頼朝なれども、その功を畢へたるは彼に後るゝこと四十乃至五十年なり。故に文學上一般の形勢より論ずれば、院政時代と新古今時代とは殆どその間にけぢめを分ちがたく、從つてこれを平安朝の最後に附して、王朝文學のまさに死せむとして終の光を放てるのと見るか、または鎌倉時代の初に置きて、武家時代の文學の精華のすでにこの時に養はれたりと見るを以て、妥當の見解とし、二者いづれかその一を選ばば、文學史として在來の區劃に一進境を示すに足るべしといへども、かくてはなほ讀者の混亂と誤解とを招

新古今集の性質

くことなしとせず、暫く従前の方法に甘んじて、むしろ分ちがたき時代を幕府創立に分ち、新古今時代なる一短期を設くるなり。

新古今集の特色はさきの千載集と比べてさまざま異なりたるものなし、すなはち評して千載時代の傾向の更に一步を進めたるものとやいはむ。金葉、詞花に種々の歌風亂れ起りて、清新と稱し、奇抜と唱へて、ひたすら古きをすてて新しきをのみ逐へる結果は、亂雜となり粗笨となり、一害を去りて一害を招きしかば、千載集出でてこれに掣肘を加へしを、新古今の更に大に束縛を固くしたるなり。束縛は固くなれり、されど標準を無視したる虐政者の筆法にはあらず、好所は存せられ、存せられてあくまで奨励せられ、唯よからずと思はるゝ節のみ抑へられたり、やがて古今は新古今を得て、屈竟の後繼者を見出せるものといふべく、新古今は、また名詮自稱、よく古今を改造して、別途に比較的圓滿なる發達を遂げしめしものといふべし。

平安末期以來の特色は、敘景詩の多くなれることなり。これを新古今集の例に見るに、

敘景の詠

格調句法の變

かすみたつ末の松山、ほのくくと波にはなるゝ横雲の空、
 旅人の袖吹きかへす秋風に、夕日さびしき山のかけ橋、
 古畑のそばのたつ木にゐる鳩のともよぶ聲のすぎき夕暮、
 のさびしき、凄きなど、中には多少作者の主觀的感情を交ふるものなきにあらざれども、概するに詠物敘景の著しく風をなし來れるは争ふべからざる事實にして、かくて主觀的敘情のみを主とせる古今の舊風に客觀的敘景の新潮を加味し、以て客主錯交、景情一致の趣を得むとつとめ、またよくこれを大成せるは、新古今の最大特色なるべし。

忘らるゝ身を知る袖のむらさめに、つれなく山の月はいでけり。

春の夜の夢のうき橋とだえして、峯に別るゝ横雲の空、

後鳥羽上皇 定家

歌調についていふも、巧緻纖細なるもの、豊艶華麗なるもの、もとよりこれあり、されどこれと共に思想の雄大、用語の洗鍊を併せて極めて莊重謹嚴の趣あるもの、すなはち所謂丈高き歌の現はるゝに至りしも看過すべからざる一特色

なり。

ほのくくと春こそ空にきにけらし、天の香具山霞たなびく。後鳥羽上皇といへるが如き、悠揚として迫らざるところにいふべからざる妙所あり。修辭の進歩もまた新古今に至りてほゞその極に達せり、既に古今といへども、一はこれによりて名を得たるなるが、未だ幼稚の誹を免れざりしに、こゝに至りて嘗て聴かざりし琅々の聲をなす。この修辭の發達は、蓋し漸次複雑となり來れる思想の在來一様の語句に盛りがたきに至れる自然の結果にして、また一つには歌合の流行のこれを鞭撻しこれを刺戟せるがために外ならず、その特色の二三をいへば、名辭、終止の辭を多く用ふることなり、助動詞、天爾、袁波をなるべく省くことなり。この終止の辭を多く用ふることに關しては、本居宣長はこれを以て新古今の一大弊なりとして深く警め、石原正明はこれこそ新古今がよりて古今に凌駕せる全生命にして、その格調の高き所以のもの、一にこれあるが爲なれと斷じ、その他甲論乙駁、説をなせるもの少からず、蓋し思想は複雑になりても和歌はいつまでも三十一字に限られたり、その語句を簡潔にし、從

歌人輩出

うて終止の辭を多く使用するに至りしも、必然の勢といふべし

新古今集がよりて以て誇るに足るべき所以の一は、俊秀なる歌人に富むことなり。古今集成りて後、歌壇は久しくその風尚の跳梁に委せ、後進の輩これを摸倣して、その法則に違はむことを恐れしが、金葉、詞花の出てし頃より形勢漸く改まり、革新の聲高きに至れりといへども、この二集といひ、千載といひ、未だ新古今時代の如く名人は輩出せざりしなり。新古今時代にはまづ後鳥羽上皇あり、英邁にして、その才多方面、政治に勵精すると共に、和歌所を再興して、斯道の發達に力め、固よりみづからこれに秀てたまへり。土御門、順徳の二帝また和歌の上には拔群の伎倆ありて、父皇と並べ稱せられたまふ。後京極攝政良經權要の地位にありて、歌壇の重鎮をなし、その叔父にして天台座主たりし僧正慈圓も盛名あり、藤原家隆、同定家が當代の二星と仰がれしは今更にいはすもがな。その他、男子に俊慧、寂蓮、長明、秀能等あり、巾幗者流に式子内親王、宮内卿の如きあり、みな當時錚々たる歌人にして、各自その特色を有して相下らず、余が霜葉二月の花よりも紅なるの慨ありといへるはこの謂なり。

名家の概評

後鳥羽上皇の作には沈痛悲壯なるもの多し、而して言々句々おのづから君王の氣を帶ぶ、共に他の作家輩の企及を許さざるところなり。

奥山のおどろが下もふみわけて、道ある世ぞと人に知らせん。

人もをし、人も恨めし、あぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は。

われこそは新島守よ、沖の海のあらき浪風心して吹け。

良經は天稟の才、迷悟の境に浮沈して煩悶に堪へざるところ、讀者をして同情の念禁ずる能はざらしめ、敍景の詠またすぐれたるもの多し。惜しいかな、中年にして人に殺され、その詩才未だ十分の發達を見ざりきといへども、清新の歌風は優に推して以て同時代の作家を代表せしむるに足る。慈圓證して慈鎮といふ。西行を庶幾して、無常厭世の佛敎的思想を詠ぜむと力め、歌數の多きことは遙かに西行の上にある。されど歌品の高下優劣を以て論ずれば、此は到底彼の敵にあらず、概ね粗笨蕪雜にして、趣味油然たるものを求むるに難し、多作の弊か、要するにその實遠く誇に及ばず。藤原家隆もまた多吟を以て名あるものなり、生涯詠ずるところ無量六萬首に及ぶと稱せらる。その特色は敢て新なる

藤原定家

にあらず、奇なるにあらず、極めて平和穩健なる思想言語のうちに捨てがたき趣あるを取る。結構の上よりいふも、全體に重きを置きて、字句の工夫は寧ろ凝らざりしに似たり。家隆歌人として深く後鳥羽上皇の眷顧を蒙り、定家に推重せられ、一般人士に崇拜せらる。しかもまた多作の弊に陥りて、詩興を缺ける凡庸の平語を連ねたるもの少からず。

藤原定家は最も文字の修飾に重きを置ける歌人なり、西行が不用意に率直に素懷を吐露せると全く相反す、實に彼と此とはこの時代の作風の二極端を示すものといふべし。定家謂へらく、情は新しきを先とし、言葉は古きを用ふべしと、すなはち用語句法に苦心を重ね、彫琢に彫琢を加ふると共に、父の俊成にも過ぎて尙古の風を唱へ、三代集以後の言葉は用ふべからずとして、以て亂雜粗笨の弊を矯めんと力めたり。然れども時代の進歩に伴ひて思想複雑になれば、三代集時代にありては不足を感ぜざりし言語も、勢、その用を辨ずるに難し。すてに限ある語數によりて限なき思想を現はさむとす、言語配置上の工夫が唯一の緊要手段となりて、修辭の技巧を以てその缺點を補はむとするに至るは

自然の結果にして、定家の歌はこの技巧上の修練工夫の爲に直裁簡明を缺いて、一讀再讀、歌意のいづれにあるかを疑はしむるものあるに至れり。晩年、新勅撰集を撰する頃に及びては、漸くこの弊を覺り、難解の嫌あるものを去りて、平穩なるもののみを尙びたりしかども、後世定家の崇拜者を以てして尙且その難語難句の應接に苦めるもの多し、特にその戀歌において然りとす。かくても定家の流を汲むものは、この戀歌を定家獨得の長所として、古今に獨歩すべきものとなすといへども、これ實は漠然として眞意を捕ふるに難き點を以て、感情の深刻痛切なるが爲と過信したるものなるなからんや。

年も経ぬ、いのる契は初瀬山、尾上の鐘のよその夕ぐれ。

といへるが如き、殊更に多くの名詞をよみ込みて、何の意なるかを知らざらしむ。余輩は定家が修辭上の苦心を多とす、たゞ多とするのみ、眞の詩才に至りては、いまだ首肯する能はざるを悲む。

門閥の樹立

時代はかゝり、新古今の成れる時、名家は綺羅星の如く列なれり。されどそれより時移ること、いまだ三十年ならずして、形勢は漸く一變す。良經はやく薨じて、

定家が政權の手段

諸家またこれにつぐもの多し。三上皇は承久の亂後、邊陲の離れ島に遷御せしまし、後鳥羽上皇に昵近して最も信任を得たりし家隆は、たこの役以來、人の見ること漸く篤からず、こゝに定家は歌壇唯一の老将として、一般社會の輿望を負うて立ち、みづからまた兀々として倦まず、老年に及びて終に歌道の門閥を樹立するに至りぬ。

當時、時人の歌人を評するや、標準とするところ、作歌の絶對的價値に存せずして、その俗界に對する關係に拘はること多し、故に世間における俗人としての地位の上下は、直ちにまた歌界における作家としての聲譽に影響したるなり。されば家隆は後鳥羽院に昵近して、盛名頻に傳へたるも、院の遷御と共に勢力挫け、定家はこれに反して關東に阿附せるが爲に、家隆に代りて權威を得たり。定家が秋波を幕府に送りしは著しき事實にして、その新勅撰集を撰ぶや、何れも皆價値ありとは覺えざる實朝の作二十餘首の多きを收めたるに、堪能なる三上皇の詠は、その一首をだに採らざりしを見ても、思半ばに過ぎむ。選者がこの一舉は世間の物議を招き、その妹なる越部禪尼さへ、後數年、定家の嫡子爲家

に書を送りて、この撰が名人たる家兄の手に成れるものならざりせば、手だに觸れざらましをといへり。當時、幕府と氣脈相通じて威勢をさく、儕輩を壓したりしは、太政大臣西園寺公經にして、俊成もしくは定家の門に學び、定家またその家に入出して、種々の便宜を得たりしが如し。權家に出でて、和歌に名ありしもの、なほ常盤井相國と鎌倉右大臣とあり。相國實氏は公經の子、定家が老後の作に則りて最も平穩の調を喜び、措紳家にして和歌の門閥を樹てたるなり。右大臣實朝は定家が秘藏の萬葉集を相傳すると共に、その尙古の一面を傳へて、好んで萬葉の古風を諷詠す。かくて東西の大勢力の師家と仰がれたる定家の勢力や想ふべく、群小作家の敬重畏服を博し得たりしもの固より知るべきのみ。

これよりさき平安末季に當りてまづ歌道の門閥を定めたるを六條家とす。六條家の祖は藤原顯季なり、その後を繼げる顯輔また令名あり、三代清輔に及びて位置漸く堅し。俊成この時に出でて二條家を起し、爾來二家相反目して黨同伐異す。建久の頃、六百番歌合あり、俊成これが判者として、六條派の作家を罵り、

二條、六條の反目

定家の歌學

偏頗の評一時に高くして、六條家の顯昭の如きは陳狀を作りて不平を訴ふ。これを始として正治二年、後京極家に選歌合ありて、こたびは六條家の季經その判者となるや、定家口を極めて、この撰の粗謬見るに堪へざるを誹謗せしかば、季經またこれを含んで定家を譏す。終にその年百首選歌の舉あるに際して、これに加はるを許されざりし定家が怨恨憤懣の情や想像するに餘あり、父俊成もまた奏狀を奉りて、六條家の無學を論述す。かくして漸く定家も百首作者の員に加へられ、且、その歌によりて昇殿を許されしかども、あくまで敵を窮處に追はずんば止まざる俊成父子は、顯昭が日本紀の歌を註して法橋の僧綱を乞ふに及びて、またこれに向つて矢を放つ。軋轢年あり、六條家の壘漸く傾きて、氣息奄々また振はず。知家嫡流として家名を繼ぐといへども、疾く父を失ひて、終に定家の軍門に下り、定家よくこれを指導して機會ある毎に推薦の勞を吝まず、輔翼薰陶力めたるに庶幾し。定家の歿後、知家二條家を離れて、再び一家を稱するに至れりといへども、一時は全く二條家の眷顧に倚頼したりしなり。既に異を歌學に樹てて門閥を稱す、必ずや子孫後生に傳ふべき特色なかるべ

からず、六條家はやく二條家に先だちて起り、歌論にも先鞭を付けて、これに關する著書頗る多かりしが、二條家には定家の出づるに及びて、殊に意をこゝに注ぎ、晩年に至りて拮据甚だ力めたり。渠はまづ種々の異本を涉獵校訂して古書類の定本を定むると同時に、その註釋をも作り、これを基礎として一家の説を打成したるもの如し。その日記なる明月記を見るに、頽齡に及びて未だ嘗て衰へず、嬰鑠として壯者の勢力を凌ぎ、古書を蒐集して、土佐日記、伊勢物語等の短篇の如きは、一兩日の勞よく淨寫の業を了へ、手寫に當りて誤脱の少きも、また私かに誇とするところなりしが如し。その苦心校合の餘になれる源氏物語は、青表紙とて、源光行の河内本と竝べて後人の憑據すべき定本となり、註釋としては古今集の顯註密勘最も名高く、源氏奥入また世尊寺伊行の註を定家の増補せるものといひ、水源抄、紫明抄に先んじて源氏註釋書の先驅と稱せらる。歌學上の著書に至りては、詠歌大概等頗る多しといへども、後人の假作に成れるも少からざるべければ、これが眞偽の鑑別は、定家を論ずるものの特に注意すべき點なりとす。

第三章 鎌倉時代

所謂鎌倉時代

源氏三代

これを政治の上よりいへば承久の亂(一八八一)の後、これを文學の上よりいへば新勅撰和歌集撰述(一八九二)の後、鎌倉幕府の滅亡に至るまで、政治の中心たる東の鎌倉と文化の中心たる西の京都とが兩々對立せる期間をわが鎌倉時代といふ。されど委しくいへばかく畫然對立せしは北條氏執政の後にして、實朝の時まではなほ彼此固く執つて相隔つることなかりしなり。實朝は風流にして錦心繡腸あり、自ら和歌を嗜み、頻に京都の文化を輸入せんと企てぬ。いな、實朝一人に止まらずして、源氏三代はいづれも京都を眷戀したり、今や天下の霸權その手に歸して、關東の威勢遙かに京都を壓すといへども、京都はこれ祖先の住みなれし桃源境、翻つて八州を見れば何ぞ葦蘆茫茫として士民朴野なるの甚しきや、故郷忘じがたきの念こゝにおいてか須臾も去らず、彼の優美なるところを取りてこの野に移さむと試みたるもの、蓋し自然の

北條氏の方針

人情なるべしされどこの京都の憧憬が、剛毅朴訥また他を顧みざる關東土着の武士と相容れざるべきは、勿論のことにて、源氏の覇業成つて漸く三代、早くもその覆滅を招きて、悲慘の終を告ぐるに至りしもの、原因一にして足らざるが中に、余輩この兩者の好尚の異なるところ、意志の疎通を見る能はざりしを以て、そが主因の一に推さむとす。

源家滅びて北條氏政權を恣にするや、鎌倉幕府施政の方針は更に頑固になり、泰時以後はわけても武事を養ふにつとめて、勤儉質朴の風を奨励すると共に、嚴に驕奢柔弱の俗を遠ざけ、以て幕府永遠の基礎を堅うせんと計る。鎌倉と京師との對立こゝにおいてか確然として成り、都人は鎌倉武士を以て蒙昧野蠻なる東戎として顧みず、關東武家は浮華輕薄兒として上方人を彈指す兩れば者の間に交通關涉なきにあらざれども、古風と新興の潮流とは接觸するの期なく、公卿は公卿として特立し、武家は武家としてみづから行ふ、鎌倉時代の特色はまた實にこゝにあり。

關東武士の

鎌倉武士は文事に通曉せず、また知らざるを誇りて、知らむともせず、鎌倉幕府

文盲

殆ど百五十年の間、さすがに關東武士の國文和歌を玩ぶものなきにあらざりしといへども、そは寥々として晨星も嘗ならず、はじめ頼朝の制度を定むるや、既に大江、三善等の明法家を京都より招きて事に従はしむ、よしこれは草創の際なりとせんも、その後久しく幕府の文筆を掌れる右筆の供給をも京都に待たざるべからざりしに至りては何とかいはむ、關東武士は文筆にかけては實用にだにその人を缺けり、况んや文學の翫賞をや、更に况んやその創作をや、鎌倉は到底武事一片の地なり、文華は發生せざるに止まらずして、實に無用の長物として顧みられざりしなり、政治史上の鎌倉は刮目して注意すべし、文學史上の鎌倉に至りては、多く問はずして可なり。

京都公卿の萎縮

文學史上の鎌倉はその價值極めて少し、京都はこの時代に至りても依然として文學の中心たり、平安朝以來の文化はとにかくに常にこゝにその粹を集め、學問藝術の最高府として一代の名人を會すれば、これが翫賞者もまたこゝに限られたるの觀あり、されど承久の亂に公卿が一敗地に塗れてより、京都もまた振はず、虛榮の念はいまだ失墜せざれど、内心充實の信は既に脱出し去れる

なり、かれらは質實なる學問と光彩ある創作とにその特色を發揮せむとは思はずして、虛無空漠なる有職故實などに浮身を窶し、これを一身の學問とし、職業ともして僅かにその家を立て、その活路を失はざらむとするのみ、政權一たび鎌倉に移りて、一朝その實務に離れたるかれらは、盡日悠々、閑は棄つるに餘れど、一方に失へる勢力を以て直ちに文學に向くるにもあらず、漸く他方に懦弱なると共に文學にもまた活氣を失ひ、かれらが偏に古を愉悅して、みづから信ずるの薄きや、一にその範を平安朝の盛時に求めて補綴釘篋これ事とするのみ、自己の主張を滅却して、摸倣假託の續出せることこの時ばかり甚しきはあらず、これが原因を求むれば新舊二潮流の分立に歸す、陰陽二氣の接觸するや、電光急ち閃き、雷車轟々の響をなす、東西兩思潮の合するところ、必ずや人目を聳動せずんば止まざりしなるべしといへども、惜むべし、京都は京都たり、鎌倉は鎌倉たること上述の如く、文學は一方にその生育發達を阻害せらるゝと共に、他方に全く萎縮凋落せり、而してこの趨勢は歌壇に最も著し。

二條爲家

定家の子に爲家あり、父祖と同じく長命にして、子弟に教授し、三代和歌の家學

を傳へて、二條家の門閥全くこゝに確立せり、俊成の千載、定家の新勅撰に爲家の續後撰を加へて、後の二條家の門流を汲むもの、「家の三代集」として尊奉措かず、蓋しこれらはその撰者が單獨任意の撰述に係りて、好尚のある所を知るに最も便よければなり、爲家の續後撰集の成れるは建長三年なるが、これに先だてるその寶治百首また二條家にありては百首の典型なりと稱せらる、爲家の重視せらるゝことそれかくの如し、されどその實一家の見地を樹てたるにもあらずして、ひたすら父祖の學を傳へて及ばざらむを患ふ、父祖の學を傳ふるに急なるはなほ忍ぶべし、その徒らに摸倣をこととして、父祖が有したりし清新の氣を失ひ、平板に流れ、凡庸に化せるに至りては、斷じて與すべからず、渠や凡骨のみ凡才のみ、その語と調とが父祖の鞭韃によりて練磨せられたるもの即ちその歌にして、詩趣の横溢は遂に見がたし、その歌學として説くところ、著しく古語を尊び、縁語を喜び、新奇勁拔の語を避けて、制ある語、主ある語を定めて、これを用ふべからずとなし、最も平々坦々の調を選びたりき、その古風を尊ぶといふも、いふところ歌ふところ、すべてこれ平凡淺近の調、自ら當世擬古

三家分立

の弊に流れて、眞の古體を傳ふるに足らざりき。
 爲家歿してその後三家に分る、長子爲氏二條家を繼ぎ、次子に爲教ありて京極家これより出て、三子爲相は母を異にして生れ、冷泉家の祖となる。而して何れも門戸を構へて相下らず、爲氏と爲相との如きは、父祖傳來の所領たる播州細川の庄の所有權を争ひて、遂にその裁決を幕府に仰ぐに至れり。こは家産の争にして、文學には直接に何等の關係なけれども、この紛争の爲にこの時代の紀行文の白眉たる十六夜日記を出すに至りしは注意すべし。日記は爲相の母たる阿佛尼の作にして、訴訟の爲に關東へ下れる道中の見聞感想録なり。

二條、京極の軋轢

爲相と長兄爲氏とは年齢において非常の懸隔あり、爲氏が古稀に垂んとする時爲相はやうやく弱冠を過ぎたり、爲相父母の慈愛と保護とを一身に聚むといへども、和歌にかけては爲氏の敵にあらず、されば歌道の争論は鎌倉時代にありては主として二條、京極の二家に限られて、冷泉はこれに與らざりき。二家の反目は爲氏の子爲世、爲教の子爲兼の代に至りて愈はげしく、互に陥擠して、おのれ歌壇の覇權を握らむと願ふ時に恰も皇室にありては兩統迭立の議あ

り、大覺寺、持明院二派の軋轢絶ゆる時なく、終に南北朝對立の基を開くに至れり。爲世は後宇多天皇に事へて帝師となり、その女は後醍醐天皇の寵幸を得て尊良親王、宗良親王等を生み、爲兼は深く伏見天皇に昵近してまた和歌を教へ奉り、後伏見、花園二帝これを乳父として、その家に生長したまふ、されば二家の和歌における紛争が皇統兩系の分立を刺戟するに與りて力ありしや、蓋しいふを俟たずして明かなり、さばれ二條家は名手の嫡流なり、續拾遺、新後撰など勅撰集撰述の譽は常にその家に歸すれば、世人の尊信もおのづから他の二家と異ならざるを得ず、爲兼たるもの如何ぞこれを傍觀して晏如たるを得む、勅撰集編成の志頻に動き、終に伏見上皇の勅を奉じて玉葉和歌集を撰して、自派の主張を立てたり。その後、花園天皇の風雅和歌集の自撰あり、京極の家風これより漸く興らむとせしが、爲兼は佐渡及び土佐の兩度の流竄に遇ひ、晩年に至りてまた振はず、渠を最後として、三家のうち京極家まづ絶えぬ。二條家はた、爲氏、爲世の後、後繼者の以て一世を率ゐるに足るものなく、所謂師範家の勢漸く衰ふ。

兩家の歌風

二條家の歌風はその祖たる爲家の法格を墨守して、つとめて穩健雅馴の調を歌はむとしたるにあり、爲家すてに平板の弊に陥れるに、只管渠を軌範としたるその後の隨逐者が所信なく、主張なく、沈滞逡巡して新意を加ふるに至らず、いたづらに陳套凡庸の文辭をつらねて得々たりしもの、怪むに足らず、京極家はこれに異なり、その歌新古を問はず、調の如きも敢て雅俗の境を設けずして、一意珍らしく新しきを標榜し、束縛なく、箝制なく、平安朝のかた新古今にかけたる和歌を包羅して長短を取捨し、極めて自由なる歌體を創造して、以て二條家に對して天下公衆の耳目を引かむとしたりき、而してそのあまりに新奇を欲したるが爲に、放縱に流れ、偏頗に陥れる點なきにあらず、かくては二條家たるもの名家の嫡流として愈、保守に傾かざるを得ず、京極家の主張を抑制せむが爲めにはあらゆる手段を盡して、用語格調上の制限規則を發表したり、京極家またこの筆鋒に對して黙々に附するものにあらず、こゝに於てか二派の論戰絶ゆる時なく、鎬を削りて辯難攻撃すといへども、その和歌の是非を論ずるや、これを自家獨得の主義批判によらむとせずして、一に父祖傳來の秘傳

秘傳家訓

家訓なるものによりて云爲するに過ぎざりしは二派ともに一なり、二條家の如きは必要の迫るところ終に家訓なきところにも家訓を設け、傳授なきところにも傳授を作りて、假託虚偽の武器を借りても敵を攻撃するの材料に供せむとす、かの三五記、未來記、雨中吟など、定家の著として傳ふといへども、その家を尊くせむが爲に後世子孫の偽作せるものなるは、夙に識者の辯斥せしところなり。

和歌の衰微

二條家が歌書假託の一事だにすてに藝術には恕しがたき罪惡なるに、これによりて歌風の自由を掣肘したる結果は、その生氣を殺ぎ、その向上を阻碍して、歌壇の衰廢を招き、爾後暫くはこの頹勢を、救ふに由なからむとす、京極家が内部構想の如何を顧みずして、一意外形の用辭技巧にのみ新奇の工夫を凝らせる、固より極端の弊に趨れるものなるを否定せずといへども、二條家が思想形式二つながら平和穩當を主義として、因循固陋に陥り、ひいて子孫後生を誤れるに至りては、その罪もとより同日の談にあらずといふべし。

三家の概観

更に繰返して二家の概評を試みむか、古語古調を喜べるは二條家にして、新奇

を求めむとしたるは京極家なり、しかれどもその實現せるところは共に庶幾するところに反す。すなはちかれは古風を學ぶと稱して、實はその則るところ定家、爲家以後の近體に止まり、これは時様の尙古を非議しながら、またいつしかに古調に歸れり。古しといへるも擬古の新調のみ、新しといふも、おのづから古體を離れず、かくて二者の期するところは異なりといへども、その趣くところに至りては相距ること五十歩百歩、竟に甚しき逕庭なし、殊に二派いづれも父祖を尊崇して、しかも父祖の眞意を解せず、時流を斥けながら時流の眞相を解せず、空しく世と浮沈して、茫漠の境に彷徨したりしは、共に憐むべし。冷泉家に至りては、この時代にはその家振はず、多く説くに足るものなし、強ひていはばその歌風故らに二家に對して異を立つることをせず、寧ろ種々の風體を使役して偏頗の弊を免れたりといへども、近きを求むれば京極に傾きたりといふに止めて、和歌の一段を結ばむとす。

小説もその傾向和歌に同じ、藤原定家に門閥生じて和歌萎靡して振はず、源氏物語一たび無比の名を留めてまたこの壘を衝かむとするものなし、平安朝に

小説の衰運

ありては根本思想の變化こそなければ、或は事件を前後し、舞臺を轉換して、讀者の好奇心に投ぜむと試みたりしに、この時代に至りて和歌の平凡陳腐に流れたると等しく、小説も悉く同一典型中に固定して、大同小異の技巧に摸倣の跡を蔽はむとするのみ、苔の衣といひ、風につれなき物語といひ、石清水といひ、みなこれに洩れず、そもかくの如きは當代の上流貴族がその職務を關東武士に奪はれて、社會の閑人となるや、併せてその活氣をも失ひ、遊食惰眠に日を送りつゝ、思想漸く涸渴して、創意も想像もなくなり、觀察さへ銳利ならずして、摸擬剽竊にあらざれば、篇をなす能はざるに至れるが爲なり。かくてこの時代の新小説の一として見るに足るべきもなければ、讀者が平安朝の小説に對する渴仰憧憬はいやが上に盛ならざるを得ず、こゝにおいてかそれらに對する註解書批評書の生じ來るを見る、わけても小説の絶作たる源氏の註解は踵を接して現はれぬ。

註釋と雜纂

源氏物語の註釋の始めて世に出てたるは源氏物語奥入にして、平安朝の末、世尊寺伊行これを編述し、のち藤原定家の増補したるものなりと傳ふ。ついで源

光行の水源抄、その子素寂の紫明抄、相前後して出て、弘安の頃には源氏論議といへることも行はるゝに至れり。かく古代小説の研究の起れるも、この時代の一特色なるが、これと同時に一方には古來の奇聞逸語を輯めたる十訓抄、古今著聞集等の雜纂類の流行したるも、またその特色とすべし。而してこもまた平安朝追慕の念盛なるあまりの業にして、その驕華なる生活、優美の行狀、さては秀逸なる詩歌を傳へむとせるものなるは云ふを須ひず。この二書の外になほ宇治拾遺物語あり、その序には、今昔物語の編者と稱せらるゝ源隆國の纂錄せるやうに記したれど、これもその實鎌倉時代の撰にして、今昔物語の拔萃に加ふるに後世の逸聞を以てせるものなり。

偽書續出

當時、作家の滔々として自信に乏しく、古代の作品に眩惑し、藝術的良心を缺けるの極、古人に假託せる偽書の續出を見るに至れり。歌學におけるこの現象は、さきにこれを説きたり、神道五部書の上代の作として、中世このかた神道根源の經典として尊信せられながら、實はこの時代の假作に過ぎざりしも、古人既に定論あり、その他夜半の寢覺、とりかへばや物語等を改作して、平安朝時代の

文學にあらはれたる佛敎

まゝなる名稱を存して、恬として耻ぢざるが如き、石清水物語の一名に附するに源氏に先だてる正三位の題を以てせるが如き、松浦宮物語を以て貞觀三年の作となせるが如き、その愚終に及ぶべからず。かの宇治拾遺物語に擬するに今昔物語と同じ撰者を以てせるも、正にこの好例なり。陋劣なる惡戯はこれのみに止まらず、發心集を以て鴨長明の著に擬し、撰集抄を拈出し來りて僧西行の名を強ひたり。今行はるゝところの寶物集を康頼の作といひ、方丈記を長明の筆に成れりといふも、また信じ難し。偽作の一々の精確なる年代に至りては固より知るに由なしといへども、この時代における大體の傾向より推して、余輩はこれらが鎌倉時代に續出せるを明言するに躊躇せず。要するにこの時代において、文壇の徳義全く地を拂ひ、作者に自己の信頼なく、わが國文學史中最も意氣沈滞せる、最も不名譽なる一時期を劃すといふも不可なることなし。以上説き來れる文學の各方面を通じて、この時代に顯著なる特色をなせるは、佛敎的意義を劇増し來れる一事なり。昔の衣は、北の方の幽死を悲める右大將が、これを因縁に落髮して横川に隱逃せんとすといふを以て局を結び、弘徽殿

の女房の父大臣を主人公とせる風につれなき物語は、大臣が宇治に佗しく行ひすませる原因を以てその女の早世とものが失戀との哀情に歸し、またわが身にも代へがたき意中の人の東宮の女御に立てるを見て善光寺に籠り行ける伊豫守が上を寫せるは石清水物語にあらずや、これらの例によりて見ても、この時代の小説の平安朝の範疇を脱せざるが中にも、作者の作物に對する理想のぶから變遷して、無常厭世の佛教觀を鼓吹せんと企てたるものなるは蔽ふべくもあらず。果して然らばこの佛教的見地に立てるかれ等が、或は源氏物語一篇の成れる眞意を付度して、紫式部が浮華艶麗なる好色物語にまづ人の感興を引き、そのうち徐ろに佛教の眞諦を闡明し、以て娛樂のうちには知らず識らず讀者を解脱の境に導かむとせるものに過ぎずとなし、或は式部は石山寺に籠りて、その經卷の裏面に五十四帖の筆を染め、猥りに佛物を使用して狂言綺語を寫すの非禮を敢てせるが爲に地獄に陥れりといへるも、偶然にあらざるを知るべし、もしこれの墮獄の罪を救はむとて源氏供養の行はれたりといふが如きは、かゝる時代にさもあるべき事實にして、愈、明かに一世の

新佛教の刺戟

趨向を反映するものにあらずや、方丈記、寶物集、撰集抄の類みな紛ひがたきこの時代の産物にして、厭世觀、往生談、さては自己の世をそむける因縁などを以て全篇を埋むといふも不可なることなし。要するに當時の作家の理想は、所詮佛教の傳播にあり、豈他あらむや。意氣銷沈せる平安京の公卿はひたすら古代の摸倣に一時を糊塗して、また千載不朽の作をなすを思はず、關東の武士鞍上に意氣を示して勢猛なりといへども、朴訥粗野にして眼に一丁字なし。この時に當りて新風潮を帶ぶるも、文盲武士の比にあらず、學藝に通ずるも優柔公卿の流にあらずして、活潑潑地、よく文界一時の牛耳を執りて、清新の氣を鼓舞せるを僧侶及び僧侶ならぬまでも深く佛教の奥旨に徹底せる佛教尊信者の一階級となす、平易なる親鸞の假名聖教、激越なる日蓮が遺文等はその例にして、品格と生意と二つながら備はり、この時代の産物としては特筆すべく、宗教上の述作としては或は不朽に傳ふべきものなるべし。されどこれを以て直ちにわが文學史上に優秀の地位を有するものとなさむは當らず。さてさらばこの外に僧侶または佛教尊信者の手

平家物語

に成りて、更に文學的價値の大なるものありとせむに、そは必ずしも親鸞、日蓮等の新佛教に關係せる人ならざるべからざるの理なし、蓋し佛教の新潮流を代表せるものは、いふまでもなく禪、念佛、日蓮等の諸宗なりといへども、從來の天台、眞言等の諸宗もこれに刺戟せられ、これに警告せられて、覺醒一番、重來の生氣を呈し來れるを以てなり、わが鎌倉時代における唯一の傑作たる平家物語は實にこの時に出づ、その著者の新佛教に關するものなると舊佛教に關するものなるとを問ふなかれ、たゞその熱心なる佛教尊信者の所産なるをいはば足る、何ぞその在家者たると出家者たるとを問はむや。

平家物語はいふまでもなく平安末期における源平の争亂を描きたるものにして、結局平家が西海に落ち行きて底の藻屑と化せる一篇の悲劇なり、事實の詳略、文體の異同はあれど、同じ消息を傳へたるものに、別に源平盛衰記あり、更にこの以前の事實を記せるものに保元、平治の二物語あり、保元、平治はその簡素遒勁なる點において時に平家に勝るものなきにあらずといへども、大體においてその價値は平家の下にあり、或は軍記の祖として殊にこれを尊ぶもの

歴史的悲劇

あるを見れども、余はその平家以前に成れるを信ぜず、従うて別にこの二書について細説せず、平家と盛衰記との年代の前後に至りては古來種々の異説ありといへども、こゝにはこれにつきてもまた説を立てず、直下に作品としての研究に向ふべきが、しかしながら盛衰記に取るべきは、その敘述の精細なるの一點のみ、文學としては平家は戰記書中の第一位にあるべし、されば煩を避けて二書を放ち論ぜず、盛衰記の名を省きて、平家の下に攝せしむ。

平家物語を讀みて吾人の最も感興を深うする所以のものは、そが歴史上空前の事實たる源平争鬪の一大悲劇を寫せる點にあり、從來、文運盛にして作家が想像に生み來れる名篇傑作少からずといへども、わが國いまだ嘗てかゝる雄大沈痛の悲劇に接せず、壽永の天地を舞臺として自然が演ぜるこの活歴史は、貧弱なる人間想像の埒を超越して、言葉の儘に小説よりも遙かに奇なるものありしなり、もとより平家は純粹正確なる歴史にはあらざるべし、その間著者が想像も交れり、傳説の誤れるものもまた多かるべし、しかもその歴史的事實を土臺として取捨鹽梅せるものなるに至りては斷として疑ふべくもあらず、

平家と太平記

況んやその事實たる、わが歴史にあらはれたる最大悲劇にして、その局面の變化に富める、また尋常一様のものにあらざるをや、平家が今日なほその讀者をして歎賞の聲を絶たざらしむるもの、洵に故ありといふべし。

社會の秩序混亂して、干戈飛び旗幟動いてわが世の修羅場を現出したる時代を歴史に求むれば、源平時代なり、南北朝なり、戦國時代なり、織田豊臣時代なり、平安朝は概するに泰平の世、徳川時代に至りては海内更に穩かにして、米艦一發の砲聲に三百年の眠のさめしは漸く末季なり、南北朝には太平記あり、戦國以後には應仁記、鎌倉大雙紙、信長記、太閤記等あり、應仁以下は文學上見るに足らず、ひとり南北朝の太平記は平家物語と並びて軍記の二大作物と稱せらるれど、なほ平家を以て太平記に勝れりとなすべき二個の點あり、一は平家の太平記に先んじて出でたること、一は平家の捕へたる事實の技巧を要せずしておのづからに太平記よりも詩的分子に富めることこれ、換言すれば太平記は平家を摸倣せる點においてすでに誹を免れざると共に、その文彫琢に過ぎてあまりに華麗絢爛なり。

階級の破壊

源平争亂の事實は何が故に詩的にして多趣味なるか、いはく、平家一門二十餘年の盛衰が急轉掌を覆すが如きものありしを以てなり、たゞ榮枯地を變ふる夢の如くなりしのみを以ていはば、南北朝と多く異なることなし、されどこれは從來固定したりし社會の階級の動搖して、全く調和を缺ける新舊の二潮流は、こゝに始めて久しく蓄へ來れる威力と新進氣鋭の生氣とを以て堤を決して衝突せるもの、混沌澎湃の狀ほゞ想見すべからずや、南北朝の戦亂はその初はまた武士と公卿との争なりきといへども、しかも當時の公卿は既に武を練ること日久しく、實は武を以て武に當れるものなり、源平時代の争闘はすなはち然らず、源平兩武家の戦といふも、まことはこれ文と武との争なり、新と舊との戦なるなり、この大混戦の渦中に投じて新舊衝突の犠牲となれるものを平家の一門とす、特に清盛が一生こそこれを代表して餘あるものなりしか。

平清盛は藤原氏の習慣的勢力に反撥して起れるなり、因襲の久しき、上下の階級おのづから定まりて、その壓迫に堪へざれば、これを破りこれを倒して一面繁褥なる社會的形式を顛覆すると共に、一面箝束縛の境より自己を救ひ、以

清盛の奮闘

平家の覆滅

て人生本然の要求に應じて、その行動を自由にせむと試みたるなり、その志や諒とすべし、その徹頭徹尾自己の威力に信頼せる獅子奮迅の大勇猛心や、以て天下を横行するに足る。日本六十餘年は果して渠淨海によりて新光明を見た、入道が希望はた將に成らむとす。たゞ歴史の勢力や更に偉大なり、清盛いかに縦横無碍に奮闘すとも、その張れる網をば破るべからず、否、そが壓制は早くも至りぬ、平家の軟化はやがてその結果にあらずや。

清盛は知らず、昨日まで馬上弓を掻い挟んで疾驅せる嚴めしき武夫は、今日は詩歌管絃の宴に袖を絞る優にやさしき公達と化しぬ、甲冑やいづこ、意氣やいづこ、一門がいま踏みて歸れる戦場の様も忘れたりげに、いしくも行ひすませる笑止さよ、平安朝以來の宗教もまた舊思想を代表して平家を煩はすこと多大なりき、園城寺といひ、興福寺といひ、延暦寺は幸にして清盛と結べりしも、何れも不俱戴天の仇敵として、常にその干戈を差し向けぬ、平家が横紙を破りて一時帝居を福原に遷せるも、その理由の一は、蓋し京都の地にありてはこれ等舊思想の壓迫絶えずして、恣に威力を振ふに由なかりしが爲なりしなり。され

文武の對照

ど既に久しく養ひ來れる習慣の惰力はこゝにもかれらを安んずる能はざらしめて、また幾ばくもなく都がへりの陋態を演ずるの止むを得ざらしむ、さしにも魔王の威を振はむとせし清盛の運命もこれまでにして、その歿後數年を出でずして一門の破滅となり、西海の浦波をして永へに悲哀の曲を奏せしむるに至りしもの、單に源氏の武力の優れるが爲とのみにてはいひ足らず、木曾義仲が一舉にして都に入るを得たるも、從來平家に同心したりし山門の衆を語らひてその合力を得たるが爲に外ならざるなり、奈良の大佛殿を焼き、伊勢の神領を掠めたる平家が無道の振舞はいかに天下萬衆の敵愾心を喚び起したりけむ、およそこれらの壓迫と忿恨とは相重なりて、かくまで容易にめざましき源氏の功名を遂げしめぬ、要するに平家没落の主因は二あり、都會に上ると共に早くもその武装を捨てて文弱なる公卿に同化せるはその一にして、これに反して一方には新進の勇氣に任せて舊來の思潮に對する破壊を試み、終にまた防遏すべからざる反抗心を躍起せしむるに至りしはその二なり。

宇治川の合戦脆くも敗れて、腹かき切らむと扇の芝に坐したる源三位頼政が、

平家の女性
と武士

最期の辭に、埋木の花さくこともなかりしに、身のなるはてぞ悲しかりけるとよめる、薩摩守忠度が都落に馬の首を廻らして、俊成が五條の館を叩き、この中一首にても撰集に入るべきものあらば生涯の面目なりとて、己の家集を預けて去れる、また一の谷の櫓の上に吹きすさぶなる笛の音に、木戸口に眞先かけたる朴訥の熊谷直實をして、平氏の公達は姿も心もやさしき上臈よなとて感歎の聲を放たしめし風流などの、詩味油然として興趣湧くが如き感あるも、當時新舊思想を代表せる文武の對照が餘に著しきによるるべし、平家の著者は固よりまたこの對照の讀者の感興を引くに足るべきを信じ、肉動き骨鳴る勇ましき戰物語の間々には、この優美可憐なる話柄を挿み、以てその庶幾するところを達したるは、苟くもこの篇を繙くものの容易に看取するところなるべし。

この優にやさしき方面の物語の中にも新舊二道の潮流はまたおのづから顯著にして、運命の翻弄するにまかせて、その一生を浮沈せる二代の後、小督局、維盛の北の方の如きは、飽くまでかよわき平安朝式婦人の舊思想を代表し、祇王、

平家の厭世
觀

祇女、佛御前、横笛、千手の前等の中流以下の女性の如きは、その戀を失へばすなはち去つて佛に歸すといへる新時代の傾向を帶ぶ、武士に至りては、平家の公達の多くは平安貴紳に擬して優柔不斷に陥りたりといへども、なほその中にも新なる武士氣質を養へるものなきにはあらず、所謂關東武士は進むを知りて退くを知らざるもの、君の爲には一命を鴻毛の輕きに比し、干戈の外また一物を顧みざりしが、いまだ後世におけるが如き武士道の發現は見がたかりしなり、筑後守貞能が重盛に事へて平軍無雙の勇士と稱へられながら、しかも御方の都落にひとり離れて東國に向ひ、宇都宮氏に隱匿はれて殘生を送れるが如き、木曾四天王の一人と聞えたる樋口次郎兼光が兒玉黨の甘言に陥りて、これに降れる甲斐もなく斬罪に處せられたりと傳ふるが如き、これを證して餘あり、武士の志操氣節の成熟して渾然たる一個の武的道德を形成するに至りしは、遙かに後にありといふべし。

平家物語は縦に雄大悲壯の戰記を貫き、横に哀憐優雅なる戀物語を錯綜すると共に、また實に幽玄奥妙の佛教趣味を點綴す、叡山に關する記事は殊に多し、

これ既に前に説けるところにして、著者が平家物語一篇を述作せる目的の存するところ、これを措きて他あらむや。畢竟この主張ありて、治承の春を名残に、壽永の秋を西國さして落ち行ける夢よりも果敢なき平家一門の榮枯盛衰の史に言々涙あり、句々同情あり、讀む者をして讀誦一過、急ち無常厭世の感を懐いて佛道に歸入せしめずんば止まざらんとす。その全篇を通じたる平氏が運命の波瀾の、人心最奥の琴線に觸るゝものあるはいふまでもなし、その間に挿入せる戀愛譚の如きも、歸着するところは即ち無常にして、著書の理想は到る所に現はる。今これらにつきては深くもいはず、その冒頭を、祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅桑樹の花の色、盛者必衰の理を現はす、驕れるもの久しからず、たゞ春の夜の夢の如し、猛きものも遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じといふに起して、結末の灌頂の卷に、建禮門院が白河法皇への物語に、その身の経過せる一生を六道に譬へたまへりといへるに考へて、その全豹を推すべし。

この時代の
大勢

第四章 南北朝時代

後醍醐天皇英邁の資を以て鎌倉幕府の專横を憤り、帝業回復の謀幾たびか蹉跌してなほ屈したまはず、御志いよ／＼堅きと共に、時勢もおのづから一轉して、諸國の武士の心を朝廷に寄するもの漸く多く、幕府遂に倒れて、建武中興の成れるを見る。すなはち天下は再び聖天子の直ちに政を視たまふ天下となり、世はさらに靜謐に歸りて王朝盛時の復興期して待つべかりしに、痛むべし、新令宜しきに従はず、公平に行はれず、さなきだに久しく武政に慣れたる諸將は奇貨措くべしとなし、碧血いまだ乾かざるに、早くも反旗を翻して亂を構ふ。首魁は足利尊氏、鎌倉に起りて京師に上り、大義名分を正しうせむが爲に正統を外にして別に天子を立つ。後醍醐天皇すなはち吉野に蒙塵したまひ、主權こゝに南北に分れて、嘗て北條氏が分ち奉れる兩皇統は更に相反目することとなり、武士てふ武士はそのいづれかに附して、戰亂これより止む時なし。社會は統

時運と文藝

一を失ひぬ、臣民は歸嚮すべきところを知らざらむとす。一時好望なりし文藝はたこゝに至りてその萌芽を潜めざるを得ず。そも、後醍醐天皇の中興の偉業は後鳥羽上皇の遺志を継ぎたまひしものなり、さきの承久の亂は皇權の回復を謀りたまひし御企なりしが、雨降つてあしくも地はかたまれり、官軍一敗地に塗れて、幕府の勢力いやが上に張り、その後にはまたかゝる無謀の舉に出でむとするものなかりき。この間、鎌倉の地は實力足りて活氣充滿すれど、文藝の道には極めて疎く、京都はこれに反して文學の士多けれども、因循固陋にして、舊型先例を摸倣するのみ。さらば後鳥羽上皇の企畫はその謫所に崩じたまふと共に全く跡を斷ちしかといふに、決して然らず、一脈不平の氣は沈滯鬱結せる人心の間にも縷々として絶えず、隱約の裡に根を張り幹を延して、遂に後醍醐天皇に及びて俄然として天下の耳目を聳動せるなり。京都はこゝにおいてか更に政治の中心となり、公卿はた活氣を呈し來れば、この勢は社會の全般に涉り、文藝も一時復興の姿を示す。されどこの文藝復興の機は熟せるは、單に世の中の戰亂うち續くにつれて、人身の動搖せ

頼阿法師

る結果なりと説かむは未だし、換言すれば、いまふたゞび政府の地となれる京都が、これまでに引きかへて活動の社會となり、亂れたる國家はこゝを中心として統一せられむとし、久しく暗黒の窟中に適從するところを知らざりし天下萬衆の、一路を探り得て、新たなる希望の光に接し、氣力を回復すると共に理想實現の途をも得たるが爲なりといふを以て妥當とすべし。しかも惜しいかな、京都の政治の中心たるはその後永く變ることなかりしといへども、社會の理想實現の希望は一時の夢と消えて、幾ばくもなく天下は更に麻と亂れ、望をかけたりし文藝もまた遂に陸離たる光彩を放つことなくして止む、實に已むを得ざりしなり。

和歌の現象を見るに、鎌倉時代には二條、京極、冷泉の三家あり、各異を立てて門戸を張りしが、そのうち冷泉家は初よりいまださせる聲譽を得るに至らず、京極家は爲兼の歿後その家全く絶え、二條家も爲世の子孫にして勅撰に與るものなきにあらざりしかど、これはた微々として振はざりしが、元弘、建武の頃、二條家の門より出でて、折ふし頽然たる二條家の風と一般歌壇の衰運とを挽回

連歌の起

して、よく復興の實を擧げたるものを僧頼阿となす。頼阿法師は爲世に師事せる人、和歌の造詣頗る深し、その集を草庵集といふ。風體爲氏以來の平穩を主として、奇を避け、清新の氣を失ふといへども、言語の雅俗の撰擇に注意し、辭句の鹽梅に苦心を費して吝まらず、殊に多く縁語を用ひたる修辭上の技巧に至りては、蓋し何人もその價値を否定する能はざるものあり。後世、二條の流を汲むものの模範としてまづこの集を推すこと、所以ありといふべし。

その門下に攝政の貴紳あり、二條良基といふ、頼阿と力を協せてまた和歌の復興に勉む。されど良基の意を傾倒したりしは、和歌にあらざりて、寧ろ連歌にあり。連歌の起源につきては、或はやく神代にありて、伊弉諾、伊弉冉二尊に起れりとなし、或は日本武尊が酒折宮にありて、焚火せる翁に向ひて、にひばりつくばを出でて幾夜か寐つると問ひたまふに、翁が答へて、かゝなべて夜には九夜、日には十日をといへるを以て、その始となし、これによつて連歌を唱へて筑波の道といふともいへど、これらの起源論はいま深く穿鑿するの要なし。下りて萬葉、拾遺等の集にもその例見えたるが、なほ特別の名目を設けず、金葉集に至

連歌の盛運

りて始めて連歌なる一部門は置きたるなり。

連歌は一首の和歌の上もしくは下の一句を一人がよむを、これに次ぎて殘の一句を他の一人が連ぬるにて、その例は前にあげたる日本武尊の問答に見ても知るべく、初めは單に文學上の一種の遊戯として弄ばれ、随つて多くは滑稽の意を寓せしものなるが、平安末期を通じて、鎌倉時代に入り、漸く盛に行はるるに及びて、和歌の名家にしてこれに指を染むるもの多く、同時に一首の制限を脱して二十句、五十句、百韻、二百韻、五百韻、千句に及び、二條家の祖爲氏の如きも和歌よりは却つて連歌をもつて得意の技としたりと稱せらる。かくて鎌倉時代には既に連歌の法式を定むるものあるに至れりしかど、なほ一家の私言たるに止まりて、以て全體の連歌を律するには足らざりしが、良基一たび出て救濟、周阿と共に連歌新式を定め、始めて準據すべき斯道の法則を立つるに及び、今までは消閑の餘技として取扱へる歌人も、眞面目の態度を以てこれに對すれば、滑稽の意味もいつしか嚴肅となり、進んでは和歌と拮抗し、或は和歌の勢を壓せむとするものあるに至る。歌界の風潮の變遷もまたこの間に窺ふ

べからずや、連歌はかくこの時代に至りて滑稽の域を出でて嚴正の地歩を獲得したり、しかもこれを歴史の壓迫を被ること多き和歌に比ぶるに、なほその法則の自由にして、用語の無節制なる、到底同日の談にあらざるは勿論なり。されば良基等の如き極めたる上流者間にも行はれたりといへども、流行の程度を以ていへば、公卿の間には和歌なほ勢力あり、連歌は寧ろ武家の文學として行はれたりといふを得べきか。

南北朝は王政復古せむとしてしかも復古せず、天下統一せむとしてしかも統一せず、日輪山端を出でて更に雲霧の爲に暹照の威力を遮られたるが如き時代なり。この瞬時一閃の光明を捕へて、よく理想の實現に力めたるものを神皇正統記と増鏡となす。神皇正統記は准后北畠親房の著にして、中興の業破れて南北更に分立するに至れる王道の衰頹を憤慨し、古來の歴史に照して皇統の正閏を論じ、三種の神器の在るところすなはち名分の存する所なるを疾呼せるもの、實にわが國文を以て綴れる議論文の權輿といふべく、婉曲なる語句のうち博大の氣格を藏して、堂々としてまた朗々たり、たゞ著者が身權要の地

神皇正統記

増鏡と吉野拾遺

にありて、みづから權力争奪の渦中に投じたりしが爲に、その文や、もすれば一種の政論的臭味を帯び、純文學として嫌焉らざる節なきにあらざるは、或る人は却つてこれを賞すべく、余を以てすれば寧ろ憾むべしといへども、とにかくこれを以て文學者ならぬ著書を上下せむは固より誤れり。

増鏡は後鳥羽天皇の御即位より後醍醐天皇の建武中興に至るまでの歴史にして、この間に起れる大小の事實を客觀的に記述して、一見別に南北分争に關する何等の意見をも挿めるものにあらざるが如し。その後鳥羽天皇に記事の發端を置きたるも、單に今は絶えたる彌世繼の後を承けたるものと見ば、これは尋常のことにして、普通の歴史として毫も疑を容るゝ餘地なく、著者が編述の目的は極めて平明なるが如しといへども、余輩の村度にして誤らずんば、承久の亂を開卷として結末を建武の中興に選べる著者が内心、また何の意味をも存せずといふを得ず。たゞ正統記と選を異にして、明々地に正閏の議論を云爲せず、事實を事實として表面一様の敘述を用ひたるが爲に、その眞意を汲むに難んずるのみ。この増鏡が深く思想を裏に包みて、傾向的着色を帯びざる

は、やがてその文學として正統記に優れる所以にして、流麗の筆致またよくその模範たる榮華物語の文章を凌ぎ、大鏡の壘にも接せむとす、されど時代の先後よりいふも、絶對的價値よりいふも、増鏡は到底假名歴史の隨一として名譽を恣にするには足らざりき、吉野拾遺またこの時代に成りて、吉野の朝廷に關する種々の逸聞を録す、固より南帝の侍臣の作にして、舞臺は悉くなほ天下統一の希望ありし初期の吉野にして、恰も老後衰殘の士が今はた望むべからざる少壯健闘の時代を追憶せる回顧録とも見るべし。

徒然草

神皇正統記といひ、増鏡といひ、吉野拾遺といふ、いづれもその形質において多少の差こそあれ、その一時光明を認めむとしたりし實社會と相接觸して生成せる産物なるは、みな一なるが、こゝにこれらと全く發生の所縁を異にして、著者が修得せる道佛主義の眼鏡によりて、よく皮相の虚飾を透して隠れたる社會の裡面を洞察し、爬羅剔抉、痛快にその矛盾撞着のあるところを曝露し、しかも世間より一步を退いて全く第三者の位にその着眼點を置けるものあり、これを兼好法師の徒然草とす、兼好法師は洛東吉田祠の神官卜部氏に出づ、後宇

多上皇に仕へて、一時宮廷の間をも立ちならし、が、上皇崩御の後、髪を削つて山林に隠れ、閑寂の生活に世を終りし人、その佛教の蘊蓄ありしはいふも更なり、ふかく道家の虚無説に悟入して、二者の抱合するところ、おのづから特殊の厭世觀をなし、かの支那の南北朝に出でたる清談家をこゝわが國に世を白眼に見る、されど平安朝以來の舊思想はこの時に至りてもなほ偉大なる勢力あり、平淡曠懷のこの僧をしてなほかつ感情主義の羈絆を脱するを得しめず、時に口を開いて、色好まざらん男は玉の卮の底なきが如しなど、戀愛偏重の響を傳へしむ、まことや人生を遠觀し時代を超越して、その好むところに従つて世を褒貶すといへども、また人間通有の情緒斷つに難く、その間おのづから一味忘るべからざる温情を有するは兼好の特色にして、その見聞記たり、感想録たる徒然草の、この時代の産物としては太平記と併稱せられ、隨筆としては枕草紙と並べて輕重を問はれむとするも、畢竟この舊思想たる情緒主義と新思想たる厭世主義とが、併存錯交、或は融和し、或は反撥して、時にかれに、時にこれに偏重し、以て一種獨得の調をなせる點にあり、一言にして兼好を評すれば、渠は

新舊思潮錯存の時代の鏡面の影なり、而してその趣味の清淡洒脱なる後世また對を求むるに難からむとす。歌道においても兼好は頼阿と弟兄たり、されど和歌はその得意とするところにあらず、長技は文章にあり、文章はすなはち不朽の價値を止む。

太平記

南北朝における文學の最大著述は、いふまでもなく太平記なり。太平記四十卷は平家物語に倣ひて作れるもの、後醍醐天皇の即位に筆を起して、建武中興を過ぎ、兩朝分争を経て、足利二代將軍義詮の薨後、細川頼之が幼主義滿を輔佐して、天下の政治を行へる頃まで、およそ五十年間に亘りて、戦亂の始末を記す。その文章は平安朝の末造より漸く發達し來れる和漢混交文を用ひて、漢語を交ふることに多く、脈絡は大に漢臭を加へ來りて、絢爛華麗なること遙かに平家物語の上にある。されど評するものはこれを以てなほ平家物語と比肩する能はざるものとなし、讀むものはこれを對して平家に感ずるが如き油然たる興趣なきを憾とす。何が故ぞや、他なし、平家物語には首尾を一貫せる著者の理想のあるあり、以て前後照應、抑揚あり、波瀾あるを得て、全篇渾然たる一全

社會的統一の缺如

體をなせども、太平記に至りてはすなはち然らず、著者の心筆は事件の進行と共に屢、動搖し、いまだ嘗て平家が示せるが如き高調に及ぶこと能はざりければなり。

見よ、初め後醍醐天皇の中興の業に多大の同情と尊敬とを捧げて起てるが如き太平記の著者は、兩統分立の後もなほ流石に櫻樹を削りて赤心を披瀝せし兒島高德の忠節、その子の自殺を止めて尊王の大義を含めし正行が母の庭訓など、時に巧なる空想をさへ交へて、國民が向背すべき道義の路條を示したりしが、さるほどに南朝の旗幟漸く光なく、朝に忠臣と頼まれし勇將も夕に賊軍に降つて逆さまに矛を構へ、一時の利害愛憎によりては兄弟も敵となり、敵も御方となり、一代を拂つて節義なく、恩愛なく、理想なく、主張なきに至りては、またいづれにその同情を向くべきかを知らず、描寫は徒らに東西に彷徨して、中心の歸着點を失ひ、支離散漫、讀者はまたこれが爲に屢、前後の脈絡を忘却して、卷を覆うて退屈を訴ふ。太平記が一人の手に成れると數人の手に成れるとは關するところにあらず、とにかくにそが統一の美を缺けるは第一の缺點にし

て、これは強ちこの書の著者をのみ咎むべきにはあらざるが如し。蓋し建武の中興ありて社會の秩序一時成立したるが如きも、やがてまた南北朝の兩立となり、天下更に混沌の狀に陥れば、仄かに認めし理想の光明も、忽ちにして消え、國家の統一を失ふと共に、文學の上にもこの影響の及べるなり。皇統の分立は短日月の間にはあれど、平家物語にもまたこれを見たり、たゞ太平記と異なるところは、當時國民の間に、政治の中心、權力の中心は常に京都にありといへる一片確固の所信ありしが爲に、かゝる際にもよく思想の浮動を免かれたりしのみ。

武と武との争

さばれ太平記と平家物語とが趣味を異にせる著大の眞因はまた別に存す、それは平家の條にいへるが如く、兩者が取れる題材の主體の相違にあり。平家が取れる源平の争亂は、名は武家と武家との争なりといへども、實は武家と公卿との争なり、その生活を異にし、習慣を異にせる階級の相扞格するところすなはち破天荒の詩味を生ず。これに反して太平記が取れる南北朝の合戦は關東の武家方に對する京都の宮方の反抗なり、一見その階級において非常の相違あり。

るが如きも、この時代の宮方はまた舊の宮方にあらず、武を練り、膽を磨きて、剩へ從屬の武士ども、その數をさく／＼關東に匹敵すれば、實はこれ武家といふと何ぞ選ばむ。かゝる宮方と武家との合戦は全然武器の利鈍を試すなり、兵力の強弱を比ぶるなり、新田勝つか、足利敗るか、これを決するは一にかゝりて兵術の熟否にあるのみ。太平記が一篇を通じて殺伐なる記事に滿ち、絶えて平家に見たりしが如き、優美可憐なる戀物語、戯曲にも似たる悲劇の一齣をだに有せざるは當然の結果なりといふべし。平家物語はわが國の散文的敘事詩の上乗なり、太平記もまた後世に及びては一の敘事詩を以て目せらるといへども、その當時の兵術を研究するに寄與するところあるを外にして、不朽の價値を有すること、よく平家の如くなるを得るや、否や、識者を俟ちて後に知らざるなり。

道義の觀念

論じ來りて余輩は頗る太平記の爲に不祥の言を重ねたるを思ふ。然り、太平記はこれを何れの方面より望むも、文學史上の最大傑作とはいひ難し、されどこれは一全體としての立論なり、部分々々の美點に至りてはまた大に見るに足る

武士道の發

ものあり、而して平家に比較して太平記の特色とし長所として擧ぐべきは、その中に現はれたる個人が、かれの時代にありては未だ全く脱却するを得ざりし平安朝の色彩を去つて、新しき風俗習慣を養ひ、殊に儒佛二教の影響を受け、著しく倫理的、宗教的觀念において進歩を示せる一事なり。すなはち儒教の感化に見んか、かの藤原藤房が龍馬を退けて政道を論じたるが如き、また尊良親王が式部少輔英房の貞觀政要を講ずるを聞きて寵姫を遠ざけたまひしが如き、以て例とすべく、これを佛教にしては、わけて禪宗の勢力行はれて、公卿武士のこれに歸依するもの甚だ多く、日野俊基は鎌倉に身を失はれむとして、泰然として「古來一句、無死無生、萬里雲盡、長江水清」と喝破し、北條氏の臣長崎次郎は「如何なるかこれ勇士恁麼のこと」といへる間に對して、「吹毛急に用ひて前まむには如かず」といへる南山和尚の答を得て、聞くや聞かずや、驀地に敵陣に駆け入りて血戰す。かれらが死を見ること歸るが如く、平然自若として運命の示すところに従へるもの、また偉ならずや、もしそれ武士道に至りては、これら儒佛の思想と聯關して、その發達の特筆す

展

女性に對する觀念

るに足るものあり。元弘三年六波羅の陥るや、越後守仲時を始として兵士これに死するもの四百三十二人に及び、ついで高時の鎌倉東勝寺に誅に伏するや、無慮八百七十四人の臣下枕を並べて追復切つて失せにけり。北條氏の末路は悲惨なり、民心を失ひ、戰爭に敗れて、四面楚歌の聲に滿つ、されどその最後の一瞬やかくの如く、それ華やかなり、これをかの一の谷の合戰乃至壇の浦の船軍における見苦しき平家の敗北に想ひ比べて、その差幾何、あゝ、時勢の變遷の争ふべからざる一にこゝに至るか。

女性に對する觀念もまた平家物語とは頗るその趣を異にし來れり。源平時代にありても、時に一世に先んじたる女性なきにはあらざりしが、なほ二代后、小督局の如き戀愛偏重の平安朝式婦人は、その時代の代表的女性にして、平家の著者はまたこの種の婦人に向つて滿腔の同情を注ぐに吝かならざりき。太平記の著者は然らず、鎌倉時代以後漸く根柢を固め來れる女性卑下の思想に同感して、頻に儒佛の説を注入したりしが如し。例へば、御方の土岐頼員が大事をその妻に洩せるが爲に、後醍醐天皇の討幕の御謀の破れたるを擧げて、七たび

子をなすとも女子に心を許すべからずといへる外國流傳の古諺に左袒し、さしにも堅固なる武家方の佐々木信胤が一朝節を變じて宮方に附きたるを見ても、この頃天下に禍をなす例の傾城ゆゑとぞ申しけるといひ、更に新田義貞が合戦の期を失へるも、勾當内侍の愛に溺れたる爲、鹽屋高貞が家をも身をも亡ぼせるもまた美しきその妻のせさせたる業なりとす。されどかく著者が誹謗し呪詛せるは、優にやさしきかの平安上臈式の女性のみ、或はその子を誡めて、父の志を繼がしめ、或は御方の兵氣を鼓舞して止まざりし、楠木正行の母、奈須五郎が母、さては瓜生保が母などの如き、武事の一端をも心得て庭訓の龜鑑たるべき雄々しき戰國的女性に至りては、寧ろ好んでこれを描く。かくの如きは終に平家に見るべからざるところにして、以て太平記と平家物語との著者が女性に對する理想を比較すべく、延いては以て時代思潮の變動を知るべし。

第五章 室町時代

この時代の
大勢

南北朝合一して京都は再び政治の中心となる。尊氏はよく足利氏十五代の基礎を築きしかど、なほ擾々たる内訌軋轢を如何ともなす能はざりしに、花の御所を築き、金閣三重の樓を營める義満に至りて、始めてその政治の緒に就けるの觀あり。尊氏が天下の覇を稱するまでの態度は、到底公明正大なりといふを得ず。戰亂の世の中とはいひながら大義名分は、おのづから畫然たり。尊氏いかに權謀術數に長けたりとも、曲れる尺度は正しく用ひがたし、機を見て動くに疾き渠は、諸侯と下民とが悦服の意なきを知りて、忽ちその態度を一變して、おのれまづ頭を低うして媚を八方に獻ず。驕傲、至尊をも無視するに躊躇せざる人の政策として、こは寧ろ奇觀といふべきも、天下人心を懷柔すべき道、これを措きてまた他あらざりしなるべし。しかも當時諸侯の尊太自ら許したりしや、尊氏がこれしきの溫容甘言に軟化するものにあらず、ます／＼勢を得、愈、權を恣にして、各自の所領に跋扈跳梁の限をつくし、將軍家の令を蔑にすると共に、或は個々に、或は黨與相結びて、隣戰遠攻、干戈相見えざる日とてもなし。およそかくの如きもの尊氏が世の有様にて、ひとへに渠が自ら招ける禍ともいふべ

文武の合一

くや。さて義満の代に至りて、久しく解決するところを知らざりし兩統の軋轢は合和し、天下の紛争はた一時に歇みて、士民こゝに太平の象を喜び、室町幕府の盛運を謳歌したり。されど實はこれ雨公篠を衝かむとして、滿を持していまだ放たざるの時のみ、やがて永享に一矢を試み、嘉吉に二を亞ぎ、應仁に及びて、續發亂射、息をも繼がせず、風伯叫び、電將狂ひ驅け、雷神轟きさわぎて、京都を中 heartとして、天下をこの混沌溟濛の裡に露出すること、前後百餘年ならしむ。あはれ義満の世に萌せる文華は、蕃のまゝに咲くこともなくて散り了んぬ。徳川家康はこの雨この風の歇む時、頭を擡げたるもの、渠が見たる天地は滿目風打雨撃の痕ならぬはなく、渠が見たる四民は具さに塗炭の苦を嘗めて、怨嗟の聲いと哀なりき。嬋娟たる百花は駘蕩の春にこそ誇れ、文學もかくの如き亂離の世にいかで榮えむ。

しかすがにこの戰亂の時代も應仁まではやゝ和煦の日時あり、よしや内治外交のこと、一々意のまゝに行はれざりしにせよ、室町將軍家の威令は、とにかく全國を支配するに足りしなり。前の鎌倉の世を見よ、文化の中心は全く東西

社會よりも個人

に二分して、文藝の素養あるものは實力萎靡して振はず、氣力漲りて政治の權を握れるものは、文事の門外に立ち、文武全く兩途に趨せ、兩者の離反この時より甚しきはなかりき。相繼げる南北朝もまた勢力の二元なるは依然として變ることなく、天下歸服するところを失ひて、人心五里霧中に彷徨すれば、文藝の發育のこれがために阻害せられたるもの、豈少々にして止まむや。室町時代に入りては情勢一變、權力京都に集中して、文に携はるものと、武に與するものと、併びにこゝに合一し、従つて一時の元氣はこゝを中心として現はるれば、文藝はたこの機運に乗じて大に振はむとする傾向あり。すなはち所謂東山時代の繪畫を筆頭として、髹漆、陶磁等の美術工藝が、非常の發達を示したりし如く、文學にも漢詩和歌の盛を致すと共に、別に謠曲といへる新文學を生み、前後に類なき特殊の産物を後世に残したりき。

されど天下の諸侯、陽に柔順を裝ひて、將軍家の麾下に服すといへども、陰には野心勃勃、事に臨み、機に従ひて、その鋒鋩を露はし、弱肉強食の業に日もまた足らず、暗流四方に流れて盡きざれば、人民須臾もその生業に安んずるを得ず。東

山將軍も積極的にこの不服分子を平げて、昇平の實を挙げむとはせず、袖手傍觀、消極的に退いて銀閣の閑室に風雅の道を樂まむとす。かゝる時、社會に理想の光明を關けるは理の最も見やすきことにして、この點はまた南北朝と異ならず、國はいづこにかある、統一いづこにかある、紛々たる好戰の諸侯は攻撃これ事とし、黨を同じうして異を伐つ、矛盾の人界なり、悲慘の世の中なりとは、當時何人の眼にも映じたる世相なるべく、これに逆ひて進んで自己の理想を體現せんとし、或は社會全體の精神を發揮せんと試みるが如きものなかりければ、勢おのづから或は個人の苦痛、悽慘の境に同情を寄せ、或はその清風高節を讚するものを生じたり。後崇光院の椿葉記の如きは稍、選を異にして、皇統の嫡庶を論じたりきといへども、これとて神皇正統記の氣魄堂々たるには似ず、寧ろ瑣末なる私事をことごとくしく説けるのみ。固より平家物語、太平記などの如く、天下國家の安危存亡に關する大戦を描けるものは少くして、義經記、曾我物語など、個人の武勇譚、孝行話の類を寫せるもの多く出て、なほ下りては社會の紛紜をば全く度外に置きて、専ら滑稽を主とし、純然たる想像の所産に俟て

典型の弊

る鴉鷺合戰物語、魚鳥平家等の作を見たり。されどこの時代また全く大題目を捕へたる戰記物のなきにはあらず、應仁記の應仁の亂を寫し、鎌倉大雙紙の關東治亂の委曲を盡せるが如きはすなはちその例にして、たゞ當年の士人が踏々踏々、自己の歸向するところを失へるが如く、作者もまたこれらの戰亂に對して、敵味方いづれにその同情を寄すべきかを知らず、漫然筆の動くに従つて記事を臚列糊塗すれば、通篇何等の主張なく、意義なく、要するに無味乾燥いふに足らざるの結果を生じたり。

かく文學はこの時代に至りて、いよく平凡庸劣のものとなりつれど、しかしながら文學に個人の尊重せらるゝに至れるは、この時代の新しき傾向として一顧に値す。されど余輩がこれに對して、いまだ雙手を舉げて賛稱の意を漏らすに躊躇する所以のものは、その皮相の極めて美はしきにも似ず、實體の實に響感すべきものあるを思へばなり。何を以てこれをいふか、他なし、この時代の個人尊重なるものは、國民の團結心の缺乏、社會思想の壞頽がその極に達して、國家的觀念の失はれたる結果、おのづからこゝに至れるにて、決して積極的に

意識的に人格を認識せむとしたるものにあらざればなり。されば文學が個人を寫すといふも、その性格なり、心理なりは極めて普遍的なるものとなりて、微細なる感情の發動の如きは現はれず。後に出でたるは先なるものの爲すところを追ひ、準擬摸倣、みづから深く研覈討究することなければ、一代は一代よりも自然に遠ざかり行きて、はてはあどろくしき一定不變の典型を生ずるに至れるなり。和歌に傳授の論のやかましくなれる、謠曲が千篇一律の弊に陥れるなど、原因はすなはち相同じ。

古今傳授

まづ和歌を見るに、頼阿の後、二條家も一向に振はず、僅かに、義滿の時、冷泉の家風を學べるものに、武人今川貞世(入道了俊)あり、ついで東福寺の僧正徹(徹書記)また同じ流を汲みて一時盛名ありしのみ。概するに寂寥の感を免れざりしが、應仁の頃、武人東常縁なるもの、頼阿の曾孫堯孝の門に學びて、二條家の正流を得たりと稱し、始めて古今傳授を唱道す。そもく和歌の傳授といへることは、敢てこの時に始まれるにあらず、前にも説ける如く、既に鎌倉時代において、或はまた平安末期にありて、その萌芽は見えたるなるが、常縁がその弟子宗祇法

師に傳ふるに當りて、特に古今傳授とは唱へけるなり。當時文學頽然として衰へ、和歌の道日々に廢れて、師弟の相承も漸く失はれ、圖書も散佚しゆけば、これ等の弊を防がむが爲には、傳授などいふことも強ち無用のこととしも覺えざれど、それも程度あることにして、かれ等がこれによりて故意にその道を神秘にし、自己が糊口のたつきを得んが爲に、恣に牽強附會の辯を設けたるに至りては、斷じて許すべきにあらず。思ふにこれが結果、歌道に志すものをして容易にその門戸の窺ひ難きを想はしめ、斯道の弘通を妨げて、益、少數者間に局在するの非運を招かしめたるは、疑ふべからざる事實なりとす。かれ等が尊げに説けるところを見よ、三鳥三木など稱へて、古歌に見えたる語を捕へ來りて、たわいもなき意義を附し、以て傳授と呼び秘傳と稱ふるのみにして、苟くも和歌の大本に及びたるものありや、余輩不幸にしてこれを見ず。この和歌の傳授は宗祇より堂上家たる三條西實隆に傳はり、三人力を協せて二條家風の復興を計れり。實隆より子孫三代相傳へて、後更に武人細川幽齋に移る。戰國の世、歌道まさきに絶えむとして絶えず、縷々絲の如くにして以て次の江戸時代に及ぶを得

宗祇法師

たるは、玄旨法印その功なきにあらず。宗祇は別に歌道を柴屋庵宗長及び牡丹花宵柏に傳へたり。されど渠はその二弟子と共に、短歌を以て立つものにあらずして、寧ろ連歌に有名に、その人みづからも、得意とするところ、これにありてかれにあらざりしは、二條良基よりも甚しく、勅を奉じて、良基が菟玖波集について、新撰菟玖波集二十卷を編む。連歌の和歌を離れて一種特立せる文學となり、且勢力ありしこと、實にこの時に極まる。宗祇性ふかく山水の遊を好み、江湖に放浪して、旅次、箱根の山中に歿す。蓋し前の和歌の西行、後の俳諧の芭蕉と併せて、自然を心友として、その一生を羈旅に送れる、わが國の三大詩人として推重すべく、道こそ變れおのゝその道にかけて第一位を占めたるも奇といふべし。されば摸倣を事とし、典型に泥める時勢の感化は、宗祇を以てしていまだ全く免るゝを得ず、殊に連歌のものたる、この時に及びてすでに遊戯の境界は離れながら、なほ即席の唱和に興を遣るに過ぎざりしかば、今日に至りてはさばかりの價値を認められず、従つて宗祇の名も他の二家に比べて、遙かに及ばざるものあるは、深く渠の爲に悲むべ

能樂と謠曲

し。あはれ時勢は一轉の機を將來に待たざるべからざりき。室町時代の文學中最も偉觀あるは何ぞと問はば、誰か言下に謠曲なりと答へざらむ。三代將軍の世は足利家の權力が最も伸びたる時にして、また室町時代のうち、最も平和なる時なり。されば文學美術もこの頃より漸く向上の運に向ひ、第八代の時、應仁の亂は起りたれど、北山の粉壁を銀閣に摹せむとせる東山將軍の胸中には、金閣の主にも超えて、風流三味の境地あり。いはゆる水墨畫の發達もこの間に遂げられ、香道、茶道起り、蒔繪、陶磁器なども、とりくに新機軸を出して、いづれ面白からぬはなし。この氣運に伴ひ、義滿の時に起りて、義政の時にかけて盛なりし一種の舞曲あり、その舞は能樂にして、その曲はすなはち謠曲なり。能樂委しくは散樂の能といふ、散樂は古來多く神事に用ひられし一種の伎樂なり、義滿殊にこれを喜びて、樂師をして田樂、曲舞等の長をも取りてこれに融和せしめ、以て今日行はるゝ能樂を起せり。これよりさき、禪宗の行はるゝこと漸く盛にして、唐山の文物、來往の僧侶によりて傳へらるゝもの少からざりしが、義滿新に明國と交を修し、彼我の外交頻繁の度を加ふるに及びて、

謠曲の作者

その影響いよく、甚しく、いつしか繪畫に宋元の水墨が浸潤し來れる如く、文學にもかの國の風は入る。謠曲もまたこの一例にして、そのわが國の古來の文學を綜合打成せるものなるは、いふを待たずといへども、また支那の傳奇雜劇いはゆる元曲に則るところ多かりしは、特筆すべきことなりとす。

こゝに明かならざるは謠曲の作者なり、あるひは觀阿彌清次、世阿彌元清等の名を擧ぐるものありといへども、これらの人々は曲譜をこそ定められ、詞藻もその手に成れりとなさむは早計に失すべし。一休、正徹等の禪僧の作として擬せらるゝもの二三あり、やゝ信ずべき説なるが如きも、これとて確證あるにはあらず。今日に傳はれる謠曲は通常、内外二百番、その外番外のものを一々數へばその數倍にも及ぶべし。これらは決して一時に成れるものにあらず、世を繼ぎ時を隔てて、徳川氏初世の頃までに漸次量を積みたりとするを以て妥當の見解とすべく、なほその後に至りても辭を修め、句を正せること少からざるべし。されど後なるは前なるを摸して概ね一樣の形式を脱せざれば、室町時代の思想はあつからその儘にして失はるゝことなく、畢竟謠曲はこの時代の所

國家的觀念の缺乏

産として、その特色を存するものといふべし。

前にも述べぬ、室町幕府の世は諸國の大名に權力ありて、將軍は虎皮の威をだも缺きたる時なりと、げに日本六十餘州あつて、獨立して、一小國の姿をなせば、國家を一體とせる社會觀はあつから存するを得ず、士民は全くこの小範圍に踞踏して、更に眼を大局に放つを忘れたりき。謠曲はこの時代觀を包含す、そのひたすら個人としての個人を描くに力めて、國民としての個人はた國家を閉却せる傾あるは、言を要せずして明かなり、住吉の神が、わが文化の程度を窺はむとて來れる白樂天を追ひかへし、白樂天、支那の天狗がわが國を計らむとして、却つて佛教の爲に敗れ歸れる善界セカイ類、これらはいづれも日本は神國なり、また佛法加護の國なりといへる、古來の思想を、この亂離の世にありても、國民が失ふことなかりしを示したるものなれども、社會の秩序の紊るゝと共に、かゝる國家的觀念も漸くその絆を絶たれて、行方も知らに漂ひゆかむとせるは、蔽ふべからざる事實なり。大佛供養、景清における景清はいかに、渠が敵と狙ふは頼朝一人のみ、渠が望は頼朝一人を失はば即ち足れり、それ以上に源氏を

江戸時代との比較

亡ぼして、再び平家の世を見んなどとは庶幾はざりしなり。安宅、攝待にあらはれたる義経はいかに、渠にはその徒黨を糾合して更に覇を天下に稱せんのみならず、たゞ追窮せられたる鼠の如く、身を隠すべき所もがたと逃げまどふのみ。小なるかな、謡曲に現はれたる景清や、義経や、かくいはいはば論者あるひはいはむ、かくの如きは主材たる史的事實の與り知るところにして、これを借りて筆端に上せたる作者に罪を問はむとするは、問はむとするものの酷なるなりと、されど思へ、史實を史實として、一毫一抔もその真に遠ざからむことを恐れ、小心翼翼々として忠實の描寫を試みむとするのみが、能ある詩人の本領なりや。否、謡曲が歴史に拘泥せずして想像を加へたる作物なることは、論證を待たずとも明かなることなり。従うて曲中の人物も作者の方寸に従ひて自在に左右せらるべき筈なり。下つて江戸時代の戯曲小説を見れば、一の谷嫩軍記に彌平兵衛宗清は敦盛を守りたてたり、平假名盛衰記に樋口次郎兼光は幼主を保育したり、而して共に衰へたる主家を興して、天下を治めしめむとす。されどこれらの主張はなほ薄弱にして、殊に注意すべき程に

謡曲に現はれたる古代の事件

もあらざるが、馬琴の作に至つてその傾向殊に著しく、義経に兵法を授けし鬼界島の俊寛が衷情滿腔の經綸施すに所なく、去つて琉球に風雲を捲きし八郎爲朝の將略、南朝の復興を計る新田、楠の遺孤が忠心義膽、老奸北條を罵倒せし朝比奈三郎が俠勇など、いづれか國家的觀念の存在を證するものにあらざる。翻つて謡曲を見るに、鉢の木、藤榮の類、僅かにこれに準ずべしといへども、かれは佐野源左衛門が廉潔によりて再び出世の途を得たりといへる一身の話、これは月若丸が一たび叔父に横領せられし本領を取りかへして、めてたく榮えたりといへる、大きくしても一家の事件に過ぎず。殊に鉢の木の最明寺殿が源左衛門の志を試みむとて、要もなき鎌倉の大事をいひ觸れしめて、人心の動亂を顧みざるが如きは、國家をも政治をも辨へぬ沙汰の限にして、沒常識もこゝに至りて極まれりといふべし。

中世には平安朝以來の舊思潮と武家の世となりて起れる新思潮とが合流す、而して文學はこの形勢を反映すとは、既に概觀の章下に述べたるところにして、謡曲にもまたこの二風潮は確然として存するなり。即ち王朝時代に材を取

物 謠曲の世話

れるものは、上臈の戀愛、和歌贈答の由來など優にやさしき物語多く、鎌倉時代以後の史實に據れるものは、おのづから勇敢殺伐の氣に滿つ。前者の例としては、空蟬、夕顔、葵の上、匂の宮、玉葛、浮舟は源氏物語より、小鹽、井筒、杜若は伊勢物語より、姥捨、求女塚は大和物語より出て、後者の例としては、頼政、實盛、巴、七騎落、敦盛、忠度、八島などありて、平家物語、源平盛衰記に出づ。中にも屢、謠曲に引かれたるは、義經と前二書以外の事件たる曾我兄弟とにて、一は武勇一は孝行を以て、中世はいふも更なり、下りて江戸時代の文學にも頻繁に現はれて、讀者に喜ばる。太平記時代の史蹟に至りては極めて少く、僅かに壇風的一篇を見るのみ。支那の故事などもまた散見して、漢文學尊重の跡を留めたりといへども、十中の八九は、平安朝より鎌倉時代を舞臺とせるものなりといふも不可なかるべし。これらの史蹟は嚴格なる歴史的事實より生れたるものにあらず、今しも擧げたる例にも見ゆる如く、多くは文學の中に現はれたるものを材料として作爲せるものにして、かくの如きものを稱して余輩は假に謠曲の時代物と呼びむとす。いふまでもなく時代、世話の名稱は後世に至りて起りたるものなれど、こ

れらを外にして殘るは謠曲の世話物にして、すなはち當代の社會を反映せるものなり。中に就き最も多數を占むるは離散せる親子の再會、ついでに敵討なり。當時、世の中亂れに亂れて、政令の行はれざるや、人買と聞く名もおそろしき人鬼の都の中にさへ横行して、みめよき兒女を誘拐して錢に代へしとかや、自然居士、隅田川、櫻川、隱岐院など、みなかどはかされし子とその親との運命を寫せるものにして、かくて子を失ひし母の氣もすゞろに、そこはかとなく迷ひ出づるは、三井寺、百萬、柏崎、父の子を尋ねるは花月、丹後物狂、歌占、繼母に虐待せらるゝ子を實母の悲むは竹の雪、子の親を尋ねるは籠祇王、菖萱、土車、女の夫を探しあるくは班女、加茂物狂、水無月、夫の女を慕ひ求むるは舞車なり。これらの中には隅田川、菖萱の如く永へに相見る期なくして幽明處を異にすといふ悲哀に局を結ぶもあれど、多くは再會の時を得て歡語を盡すに終る。男女の中らひよりも親子の情を主とせるは、いま數へたる數の多少にても知り得べく、以て平安朝に比して、人心の推移の甚しきを見る。また臣の君を失ひて狂亂せる高野物語などもあり、望月、放下僧などは即ち父の敵を討つ例とす。

文學の下向的傾向

連歌は上流よりも主として中流に行はる、和歌もまたこの時代には武士の文學となりぬ。そもく平安朝にありてはわが國の文學は摺紳貴女の専有するところにして、敢てその以下の輩の窺ふを許さざりしが、鎌倉時代に入りて情勢一變、僧侶のこれに携はるもの多く、且その後世の中の亂るゝにつれて、武士の立身出世は器量のまゝとなり、王侯將相種を問はぬ習となれば、いつまで續く公卿の地位かは、文學もやがてその優柔の手を去りて、中流以下には投じけらし。さはいへ、この時代にありては文學はいまだ全く平民的化せりといふを得ず、一面における貴族的傾向の保守はなほ盛にして、この二潮はうち混じり相争へり。和歌の道が武士の手に移りながらも、その武士たる東常縁が貴族的に古今傳授を唱へたるが如きは、この好例にして、謠曲にもまたこの傾向はありき。元來謠曲には曲論義などいひて、歌ふべきところと單に語るべきところとあり、固よりこの二要素の分れたるはずにて、平家等において然りしなるが、謠曲に至りて殊に著しき區別を生ず。歌ふべきところは希臘古代の合唱ゴラスに似たりともいふべきか、これには到處に古歌故事などを引用すれば、文學の素養あ

狂言

り、且常にこれを耳にし慣れたる輩ならては、到底その意を解しがたし、これを貴族的方面とす、語るべきところは近世の演劇の面目を存し、比較的によく俗談平語を用ひて、聞き易く解し易し、やがてこれ平民的方面なり。この二部の分裂は、いふまでもなく元曲に擬して成れるものにて、これのみにては強ち室町時代の文學が貴族的と平民的との兩面を有する十分なる證左とはなしがたからむも、この謠曲が能樂として演ぜらるゝに當りて、更に相同じき傾向を有したりしは深く注意すべき事柄なり。そは古歌をよみ込み、故事を引き入れたるものく、しき謠曲が多く、の觀者に解し難かるべきを思つて、別に謠曲の本文を通譯俗解せる所謂間の狂言なるものをその間に挿めること、すなはちこれなり。

間の狂言のほかにも獨立せる狂言もあり、貴族的なる嚴格なる能樂に對して、狂言は平民的に、また滑稽を主とす。多くは罪もなき失策談にて、中にも迂愚なる大名を主人公とせるもの多く、人情の弱點を捕へて、誇張過大の脚色、よく人の頤を解かしむといへども、謠曲と共に踏襲摸倣を事として千篇一律、概するに

謠曲の宗教思想

一種のフォールス、バントオマイムにして、その價值においては今日の俄ニハカと相距ること遠からず、たゞ愛すべきはその古樸にして品位を存する一點にあり。謠曲は平安朝の戀物語と鎌倉初期の武勇譚とに富む、これ上來説き盡したるところなるが、また謠曲の研究者が看過すべからざるは、これらと錯綜して佛教思想の遍滿せる一事なり。佛教思想はこの時代にありてはあらゆる文學の根柢をなす、一例として和歌を解釋する爲に古今傳授が唱へたる體用の説を見よ。歌學者はいはく、およそ和歌のものたる體を以て説けば表面の義の通なれど、用を以て説けば一首の歌も微妙にして甚深、佛法の眞義に徹底せずんば止まずと。一見奇異の感なき能はずといへども、古今傳授の實は眞言の灌頂に擬して出てたるものなるを思はば、この邊の消息はおのづから明なるべく、かれ等がひたすら和歌の道を以てこれもまた衆生濟度の善巧方便なりと思惟したるもの所以なきにあらざるを知るべし。翻つて謠曲のことを思ふに、所謂カッラ戀愛を主とするものカッラにまれ、修羅物、武勇を主とするものカッラにまれ、はた狂女物カッラ、物狂を主とするものカッラにまれ、佛教の意を寓することの多きは、想像の外にあ

來世の解脱

り、勿論、一概に佛教とはいへど、うち分けていへば神道のこととも混れり、元來祭神の儀は國民本有の通習、佛教渡來して後は、やゝこれが爲に抑へられたるが如きも、なほこれと同化していまだ甚しき壓迫は被らざりしなり、かつや能樂の起原を尋ねれば、祭祀の用として神前に行はれたる古樂を基礎とせる因縁もあり、おのづから神道はまた謠曲に缺くべからざる一要素とはなりけるなり。この神道に關するもの多分は、脇能といへるものの中に收められ、御裳濯（伊勢）、加茂弓、八幡石清水、大社、出雲、松尾、老松、北野など、みな神々の靈驗もしくは社々の縁起を述べたり、數もまた決して少しとせず。佛教に至りては、謠曲全體がその思想を鼓吹せむが爲に作られたるにあらずやと思はるゝほどにて、猛將勇卒の亡靈が、妄執浮びもやらず、宙宇にさまよひ、賤の男子に現はれて、巡錫の途なる名僧智識に遭ひて、處の物語などし、更にありし世のさまに歸りて、歴史的事實を再演し、さて僧侶の供養を得て成佛するといへるが、十中五六を占むる筋なるが如し、平家物語の如きまたおなじく佛教の教理を含めたりといはるれど、平家にありては、たゞ人世は泡沫夢幻の如

現世の利益

きもの、修羅道の如きものといふに止まりて、畢竟作者が厭世觀を洩せるには過ぎざるに、謠曲は更に進んで、この矛盾悲慘の境界より解脱して、未來に救はれざるべからずとなすところに、大なる特色あるを見る。

將來の光明は必ずしも來世の得脱に限らず、現世の幸運を寫すところにまたこれを見る、得脱は所謂時代物に多く、幸運は所謂世話物に普通のことなり。隅田川、菖葦の如きは例外にして、哀別離苦を寫せるものも、後にはめてたく再會するを以て結末とすとは前に述べたるところ、この邂逅もまた多くは神佛菩薩の冥助によるとなす、百萬は嵯峨の大念佛のをり、弱法師は天王寺にて、三井寺、高野物狂、加茂物狂はその名の如く三井寺、高野山、加茂にて、花月は清水寺にて、柏崎および土車は善光寺にて、丹後物語は切戸の文珠堂においてするが如き、みな然らざるなし、何の加護ありてにもあらで、母がふと櫻川にその子を見つけたる(櫻川)子が飛鳥の里に田植するその母を尋ね出せる(飛鳥川)が如きは、隻手の指を折るにも足らざるべし、こゝに至りては佛教は單に未來の冥利をのみ希ふものにあらずして、現世の幸福をも得るの手段となれりといふを

御伽草子

得べし。かく謠曲がこの世における佛法の物質的利益を認めむとせるは、一見すれば平安朝の佛教を排して起れる新佛教の傾向に反するが如きも、實は一時佛教的厭世觀によりて蔽はれたる國民の思想が、こゝに至りてその固有の樂天主義と相混和し融合して、光明主義の人世觀を發露せるものに外ならざるべし。

謠曲より蓋し一步を後れて、戰國時代に大に行はれたる文學に、御伽草子、舞の本、誹諧の三種あり、御伽草子は平易なる短篇小説なり、その主人公としては、小町草子、和泉式部などに平安朝の人物を見、小敦盛、横笛草子などに源平時代の人物を見、木幡狐のせざる草子、猫の草子などに動物類の人格化せるものを見る。なかんづく名あるは文正の草子、鉢かづきの草子の二篇にして、前者は常陸の國鹽燒の里に住みける文正といへる賤の男の鹿島大明神に祈りてまうけたる二人の娘を骨子とし、この娘がやんごとなき人の妻となり、父文正も宰相の位に上りて、その家富み榮えけりといふに一篇を結び、後者は、鉢を頭にかづける片輪の女の、繼母に悪まれて、世をあぢきなく過し、遂にその鉢の碎け

舞の本

ちちて、金銀財寶あまたその中よりあふれ出て、宰相なる人に嫁ぎてめでたく暮しけりといふを梗概とす。總じて御伽草子の思想は、平安朝の形式を踏襲して、毫も清新の趣を認めがたきもののみなるが、その甚しく通俗化せると佛教の息味を帯びたるとは、殊に注意を要することなるべし。鉢かづきの結末に、「これたゞ長谷観世音の御利生と聞えける、今に至るまで観音を信じ申せば、あらはに御利生ありと申し傳へはんべりける。この物語をさく人は常に観音の名號を十遍づゝ御唱へあるべきものなり、南無大慈大悲觀世音菩薩といへるを讀みては、またいかに佛教の影響の著しきかを知るに足らむ。」

舞の本は今日殆どその跡を絶ちたる幸若舞の舞曲なり、いま四十餘種を存す。幸若舞の權輿は詳かならざれども、その義政の時すてに行はれたるは事實なるべく、されど謠曲創作の年代よりは後れて、概するに體裁文章ともに謠曲よりもやゝ近代の風を帯ぶ、主要の題目はこゝにもまた義經と曾我兄弟とにして、これならぬも神躍り魂飛ぶ勇壯の事蹟を第一とし、獅猛殺伐、針小棒大筆を極めて誇張の言を構へたれば、今日の讀者を以て見れば、かたはらいたきこと

俳諧

多し。思ふに謠曲はその品位甚だ高く、中流以上に行はれたるものにして、舞の本はその趣味やゝ低く、多くは中流以下に喜ばれたるものというて可なり。

俳諧は山崎宗鑑、荒木田守武等が始めたるものと傳ふ。宗鑑はやゝ宗祇に後れて出てし人、また連歌に志しゝかども、この道はすでに宗祇に至りて絶巔に達し、後進の士の施すに餘地なきを思ひて、轉じて別に滑稽洒落なる新生面を開かむとし、守武もこれに合してその發達を助けたり。所謂俳諧の連歌略して俳諧とのみいふはこの時に起り、また別に連歌の附合を離れて、一句をよみすつる發句も行はれぬ。蓋し連歌の起るや、その初は滑稽を主とし、一種の文學的遊戯としてこれを見て、卑しき言語をも、俗なる趣味をも、何等の束縛もなく、自由自在に用ひたるところに特色は存せしなるが、年を経るに従ひて、漸くまた眞面目のものとなり、法格も備はり、用辭思想の選擇も嚴かになりしかば、これより更に俳諧は廢れ、嘗て連歌が和歌に對して試みたるが如くに、また連歌と拮抗對立するに至りしなり。俳諧の起るや、それかくの如し。而してよく習慣の爲に左右せられず、規則の爲に箝制せられずして、一時の座興を遣るに成功した

りしかど、この時代において、なほ言語の上に滑稽を弄するに止まりて、いまだ十分なる發達を見ず、その戰國の頃起り來れる淨瑠璃と共に、わが文學史を飾るは、更に江戸時代を待たざるべからず、従つてこゝにはたゞ發生の徑路を説くに止めて、その餘はこれを後の全盛期に譲らむとす。

以上述ぶるところを綜合すれば、この時代に入りて文學の傾向は正しく一轉機を示せりといふを得べし、すなはち保守的、貴族的なる境を出でて、通俗的となり平民的となる。既に前代にありても多少この傾向は見るべく、戰記類もまた然りきといへども、この時代に至りてこの趨勢は殊に著しくなり、進んで江戸時代に入り、以てその文華を煥發せしむ、こゝに注意すべきはこの平民文學發達の因縁にして、こゝは固より曩に略説せる個人的觀念の傾向と相關聯す。この時代の個人的觀念は、實は社會の進化に伴へるものにあらず、平民の自覺に伴へる積極的所依を存せず、唯世の中の亂るゝに従ひて、一方に社會的、國家的觀念の銷磨すると共に、一方に學問の道廢れて貴族的文學を味ふだけの能力なきに至れる結果として、訓蒙的、平民的なる文學は起れるなり、即ち平民的文

平民文學の
曙光

戰國末世

學の發生はいまだ以て平民思想の進歩に依れるものと稱すべからず、さればこれを以て直に文藝の進歩といはむは早計の甚しきものにして、實はその退歩を示すものに外ならず、思想の自由なければ、徒らに古代文學を憧憬し、さりとて趣味の素養なければ、古代文學の妙趣も見出すに由なく、ひたすら形式の摸擬にのみ趁る。室町時代の特産と稱せらるる謡曲の結構の、前後因襲、一を讀めば他は推すに難からざるも、これが爲にして、能樂としては一種幽遠の趣を具へて、ひとかどの見所はありながら、文學としてはたゞ手際よく古來の美辭麗句を補綴したりといへる外に、何等大なる自發的特色なきは、いかに悲しき現象ぞや、御伽草子の詞藻の如きも、また飽くまで鑄型の中に誇大の辭句を弄して、固陋の弊濟ふべからず、舞の本の單調なるも、またこれに同じ要するに江戸時代の曙光はこの時までに見はれたれども、その本體たる平民文學が眞の平民的思想を發揮したりしは、なほ遙かに後の事なり。

室町時代の末期は所謂戰國の時代なり、干戈動くこと頻にして、文學は絶滅の境に瀕す。幽齋歿せば古今傳授の絶えむことを恐れて、丹後田邊の城に勅使を

立てて、その闇を解かしめたまひし一事によりて考ふるも、和歌の道推しては文學にその人の乏しかりしを知るに足る。この時に當りて學問文藝に指を染め、以て僅かにその命脈を次の時代に傳へたるは、京師の五山もしくはその他の大寺の僧侶にして、苟くも文字を修せむとする者は、就いてこれに學ばざるべからず、後世の寺子屋の稱もこれらの因縁より起れるなり。あゝ國亂れて麻の如く、都も野邊の夕雲雀落つるを見ては涙ぞ流る、しかすがに大名の威權あるきはの城下は賑へり、細川氏、三好氏の堺、大内氏の山口、北條氏の小田原の如きはすなはちその尤なるものにして、京都の文藝の士にして、一時これらの地に難を避けたるものも少からざりき。文運微々たることかくの如くして、わが戰國時代は過ぎて行く。

江戸時代

第一章 この時代の概観

文學普及

江戸時代は明治の世を外にしては文物の最も發達せる時なり、その文學は以て王朝の盛時に比すべきのみならず、もしその行はれたる範圍の廣狹を以て論ずれば、王朝果して何物ぞ。江戸時代の大序は元和偃武なり、元和偃武は戰國の黒幕の落ちたる舞臺にして、正面の主人公は家康なり。蓋し信長、秀吉は大車輪に事を行へり、しかも多く勞して少く收め、めでたき大團圓を見ずして逝けりしが、家康は隱忍して時の至るを待ち、遂に先進の二人が理想を實現したり。亂れたる世は馬上にしてをさむべし、治まりたる世をさむるには文によるべしとは、その大主義にして、時世のかれを去りてこれに向ふや、すなはち大に文事を奨励す、爾後の將軍みなその志を繼げば、幾ばくもなくして教育都鄙となく弘通して、江戸には湯島の聖堂あり、諸藩には藩學あり、庶民の爲には到る

ところ寺子屋の設ありて、書算など日常必須の學術を授けたり、家康また廣く書籍を蒐集して、就中有名なるものを選びて活字に附す、爾來印刷の道俄然として傳播し、民間にも出版の業開け、書籍の普及せること前代にその比を見ず、すでに四民を擧げて、教育足り、知識進めば、從うてまた文藝の盛なるべきは理の當に然るべきことなり、平安朝の文學は美はすなはち美なりといへども、少數なる宮廷貴族の間に限られて、その外に出でず、鎌倉時代には僧侶の一手に專有せられて、いづれの世とて偏重の傾は免れざりしわが國の文學は、この時代に至りて、とにかくに全國民の玩ぶものとなりぬ、從來純文學の書籍は僅かに傳寫によりて行はれ、いまだ版本によりて公にせらるることはなかりしに、機運一轉、今日草稿を終れば、明日は胡鬪に姿を飾りて、天下に流布す、偏に太平の餘澤ならずとせむや。

儒教の勃興

かく學問文藝の都鄙上下に弘布せるは、徳川時代に注意すべき事項の隨一なるが、これに次いで忘るべからざるは、文藝の上に感化を及ぼせる勢力の推移なり、換言すれば、文藝が佛教の配下を去りて、儒教の勢力範圍に入れる一事なり、そも、佛教はその渡來このかた漸く感化を逞しうして、殊に鎌倉時代にありては、國民が思想の根柢をさへ動かさし、張りたるものは弛む、この全盛の勢に僧侶はおのづから枕を高うやしけむ、長夜の眠より覺めいづれば、思ひきや、眼を射るものもはや五彩の璽路、七堂の伽藍にあらずして、嘗てはその袖の下にかばひたりし貧兒の、今はこれらを破壊しつゝ、二王の如く突つ立つを見んとは、貧兒は儒教なりき、儒教はいつしかに佛教の領土を蹂躪したるなり、この教はわが國に入ること佛教よりも早く、しかも佛教の爲に壓せられて勢を布くに餘地なく、朱子學も、既に鎌倉時代に傳はりて、桑門の間に隠れたりしが、今や時勢の一轉機に乗じて、竦めたる頭を思ふさまに伸しけるなり、この時代の儒者が佛教に對する關係を考察するは、また興味あることにして、藤原惺窩は一たび祝髮して、妙壽院と稱したりしが、のち豁然その非を悟りて、儒道に歸し、林羅山は幼時建仁寺の寺中に寓して、切に僧侶たらむことを勧められしも、固く執りて聽かずして、惺窩の門に入る、山崎闇齋も還俗したる人、不振の教界爲すなきを知りて、絶藏主の法名と共にこれを抛ちて、朱子學に就き、木下順

儒教の勢力

庵また佛道より儒道に轉じたるものなりと稱せらる。これら當時の儒者は自己の勢力を張らむが爲に、口を極めて當の敵たる緇衣の徒を罵り、以て從來佛教が扶植し來れる勢力を覆さむと試みたり。

神道の如きも、由來本地垂迹の説によりて佛道に混化せられ、甚しきは神にして佛に隸屬せる觀あるものなきにあらず、唯一神道の如きは神道の獨立を唱へたりといへども、なほその道を説くに當りて佛敎の敎理に借るところ多かりしなり。然るにこの時代に至りて度會延佳の神勢神道、吉川惟足の視吾道、山崎闇齋の垂加神道など起りて、神道を佛道の範疇より脱却せしむると共に、佛敎の庭内にこれを拉し來り、宋儒の見によりて、陰陽理氣の説を融和一す、佛敎の文明指導者としての勢力、國民思想の先達としての勢力の佛敎を越えて遙かに上にありしは概ねこの類にして、文學の如きもかの國の文學たる漢詩漢文が牛耳を執れるは、かゝる時代の現象としてさもあるべきことといふべく、文學批判の見地はた以前は佛敎の厭世因果説の上へのみ置かれしが、これに至りて全く移りて儒敎の修身齊家説を土臺とせるも敢て怪むに足らざる

佛敎の弘通

なり。

幕府はいふも更なり、諸藩の藩學いづれも儒敎を以て學問の根本とし、道徳修養の憲法とするの世なれば、さらば佛敎は全くその勢力を失ひたりしかといふに、決して然らず、民間一般に盛なるは敢て前代に渝らざりしなり。名僧碩徳の輩出したりしは固より佛敎振肅の主因、明僧隱元が新に黄檗の一宗を傳來したる、運徹は眞言、鳳潭は華嚴の振作者、白隱は禪門中興の祖と仰がれたるが如きを思へ、されどその外にまた佛敎をして前日の盛を維持せしめたる一因あり、よりて以て佛敎は泰山の安きに據るを得たり、即ち幕府が耶蘇敎を禁ぜんが爲に取れる政策にして、その制によれば國民は上下を舉りて、異敎徒にあらざるを表明せむ爲に、いづれの宗派にもあれ、佛敎信者たることを要したるなり。すなはちこゝに一家あれば必ず一家の檀那寺を定めざるべからず、檀那寺はまた必ずこの檀家に對して寺受證文を交附せざるべからずして、八代將軍の治世までは、宗門改帳はやがて戸籍簿たるの實を具へぬかゝれば、宗敎として盛なるは今もこの佛敎に及ぶものなく、神道の實力に至りてはこれに較

武士道

ぶべくもあらざるなり。されば當時の中流以下に行はれたる文學のうち、なほ因果應報、宿命の説を骨子としたるもの多かりし所以、これによりてまた釋然として明かなるべし。

すでに國民の心中には二千年來の歴史を經たる儒佛二教併存して抜くべからず、されどこれは到底外來の思想にしていまだ全くわが固有の精神と合一しがたし、かくてかれをこれに融和打成して渾然たる一個の美玉をなす、いはゆる武士道これなり。そも、武士道の根本精神たるや、國初このかた深く國民の胸臆に包藏して失はざるもの、戰亂多端の武家時代に際して漸くその形を現はし、が、その内容と形式とを兼備して、利弊ふたつながら高調に達せるは、この江戸時代を措いて何れにか求めむ。何をか武士道といふ、一言にして盡せば、内に膽を練り氣を養ひて、外、弓馬、刀劍乃至兵法に達するなり。刀劍は武士の魂なりとて行住身邊を離さず、時に殺伐に涉るもまた已むを得ざるに出づ。忠孝はまた武士道の要件なり。國の爲、君の爲には千鈞の命を抛ちて、鴻毛の輕きに比し、死節を全くするは、かれ等が寤寐に忘れざるところ。然諾の一言金鐵よ

心學

りも堅うして、武士に表裏反覆の行なしと誇る。こゝにおいてか武士が個人間の信用は甚だ嚴なるに至りたれども、また一方を見れば、當時國內諸藩に分裂して、天下國家の觀念に乏しければ、これらの觀念もいまだ大なる統一的思想を形成するに至らず。同藩の中にもまた上下階級の差別明にして、平等の思想を缺けば、公德心の甚だ高からぬ程度にありしも惜むべし。その他廉潔克己等も武士が特に重んずべき道の中に數へらる。金錢を見ること塵埃の如く、私慾の爲に自己の意志を枉ぐるは、許しがたき卑劣の行爲として、社會の制裁は忽ちその頭上に墜ち來れり。

およそかくの如きはこの時代における武士道の綱領なり。當時社會に濶歩して國民道德の指導者を以て任じたる武士が必須の徳なり、藝なり、なほこれと同時にその地位低しとして輕んぜられ、従つて徳義の制裁も、武士に比べては、しかく嚴しからざりし町人の間にも、おのづから發達せる道德律の存するを見たり、而してそが一個の教理として現はれしを、この時代の中葉に起りし石田梅巖の心學とす。心學は、武士道がわが國固有の忠孝尚武の精神を基礎とし、

折衷するに儒佛二教の特色を以てして成れるが如く、また神儒佛の三道を混じて生れたり唯その異なるは、これは忠義を第一義として説かずして、孝行を主とし、かれにありて口にするをだに憚られたる金銀財寶の重んずべきを諄々として説きたる點にあり、すでにこの武士道とその基くところを一にし、またその影響をも受けたる心學が、嚴格なる教理において、虚偽騙詐等の不徳を警めたるや明かなりといへども、普通には町人は武士とおのづから事情を異にするところもあり、空辭義、懸責は商買の方便なりと許し、その結果は武士が金錢の輕侮と相合して、取引上の不信用となり、餘弊引いて今日に及んで未だ抜くべからず。

道德主義

かくの如き時代に養はれたる文學の平安朝と痛くその性質を異にすべきは、いはてものことなり、平安朝文學の主動者は感情なりしが、江戸時代の文學に至りては意志の活動を中心となす、故にかれには普通の事象たりし男女の戀愛も、これには主題として寫すこと稀なり、蓋しこの時代において、人性自然の要求に従ひて男女が相愛の情を恣にするが如きは、節操なく、克己心なき儒

弱の所業として斥けられ、殊に武士が女性に愛着するが如きは、刀の手前も耻かしき振舞とし、戯曲小説の主人公としてもかゝる輩は同情を寄する所以を見ずとせられたればなり、されば現はれ來る主人公てふ主人公は、いづれも道念堅固にして、性慾に對して降服せず、斷々乎として行くべき道を行くを常とす、換言すればこの時代の文學は感情を寫すものとはせられずして、寧ろ勸懲主義の道德を教へて俚耳に入り易からしむる善巧方便として用ひられたるなり、また武者修行、敵討などの勇壯なる事柄は題材として最も多く、各篇また毎曲到るところ殺伐の氣に滿つ、讀むもの敢て怪まず、却つて手を舉げてこれを歓迎したりしは、そのあくまで平安朝と趣を異にし、好個の對照をなすところなり。

四段の階級

江戸時代の文學を論ずるに當りて、儒佛二教の影響を受けたる國民の思想を述べたるのみにては、いまだ以て盡せりといふを得ず、すなはち更に進んでその社會制度の如何に及ばむ、そもくわが國氏によりて族を分ち、上下の別盡然として存したりしは、太古以來のことにして、平安朝しかり、鎌倉時代また然

り、然るに一朝戦國の世となるに及びて、この階級制度は碎けて、實力の社會となり、下流の士も器量によりては侯伯の位に上り、臣僕時に主君の地を篡奪して怪まず、こゝにおいてか徳川幕府の政を始むるや、子孫後世の爲に、その家を安きに置くの道は、まづこの戦亂時代の風習を掃蕩して、社會の秩序を挽回し、嚴重に永遠にこれを持續せしむるに如かずとなし、さらに階級の制を正しくして、上下その分に居らしめ、一步を外に出てむとするものあらば、社會をしておのづからこれを制御せしむべき方針を取る、いはゆる士農工商の別はかくして生じぬ。この四級の稱も固よりさることながら、別にこれを公卿武士町人百姓と分たむは、更に妙ならずや。さらば前の區別に見えたる商と工とは、ひとつ町人のうちに攝せらるゝこと、勿論なり。この四級の中に就きて、公卿は京都に局在せる極小の階級なり、平安朝の古にありては、一國文化の源泉として、勢また並ぶものなかりしが、鎌倉幕府の創立以來、位のみは依然として高きに居れども、知識も生活もやうく下向し、この時代に至りては、むしろ迂愚固陋なるものの標本として、一般社會には何等の交渉も勢力もなくてぞ過ぐる。百姓

文藝におけ
る上下の離
隔

は如何にといふに、交通極めて不便の世、都會の文明は地方に傳はらず、従つて平和なる田舎にのみ閉棲して、眼に一丁字なきこの種の民の、いかてか學問とやらん、文藝の歴史とやらんに關知せむ。四級のうち、これに關知するところ多かりしは、武士と町人となり、わけても武士こそは人の中なる人と謠はれ、江戸の文化はこれを中心として湧き出てたり。

階級の制厳しく立ちて、町人の子は生れながらにして算盤はじく運命を持ち、武士は生涯二本指と株がきまれば、これに相應しき差別はまた文藝嗜好の上にも現はれ、中流以上に行はるゝものと、それより下ざまなるとは、おのづから相分れて互に犯すことなかりき。士分の家に彈ぜらるゝは、琴、町人の門に響くは、三味線、かれに烏鷺の懸引あれば、これに飛車角の魂膽あり、一方の樂むは、土佐狩野の畫、一方の翫ぶは、吾妻錦繪能狂言と淨瑠璃芝居ともまた同じ相違を示す、もしそれ文學に至りては、漢詩、和歌は前者の專有にして、狂歌、俳諧、戯曲、小説などは後者の領分ならずや。かく分れたる雙方の長短を比較するに、上流は何事によらず古法を株守して、清新の風に乏しく、下流はこれに反して歴史と

家系の尊重

習慣とを蔑如し恣に新様をも試み得て、發達頗る見るべしといへども、その對象たる讀者にして、すでに向上の一路を缺けば、趣味の陋劣はまた免れがたき缺點なりき。あゝこの上流と下流ともしよく混和抱合せしならば、その結果は更に一段の光彩を添へたるべきに、不幸にして氷炭相容れず、一旦發展の途に入りし文藝をして空しく一所に停滯せしめしは、惜みてもなほ餘あり。階級の制度はまた延いて系統の重んずべきを知らしむ、かばかり犯しがたき貴賤上下の區別も、詮じつむれば家名の尊重なり。生れて武家となるも素町人となるも、たゞこれ系圖一卷がせさする業、一代の學識も移すべきにあらず、一身の徳望も更ふべき道を知らず、因襲久しうして世を擧つてこれに甘んず、甘んずるを得るものは幸にして、自己の伎倆を頼んで、家格の外の出世を望むものは禍なるかな、身を倒さまに血に啼くとも、破格の立身のゆるさるべき社會にはあらずりけり。されば人々いづれも家族の分子として、個人の權利は認められず、吾は自己の吾にあらずして、一家の吾、氏神家の檀那寺とはいへど、吾の宗教とはいはず、わが身とわが家との間に利害の衝突を生じたる時は、吾を没

消極的態度

して、家を立てざるべからず、養子といひ、勘當といふ二つの反對せる習慣も、一家系の斷絶に備ふる豫防策、階級分れて家系は重く、家系重くして、職業世襲の風は成る、これ自然の勢なり。武士の家に生れては、父と同じく弓矢の道を練り、町人は多少の自由を有したれど、なほ醫者の子は藥味箆筒の前に坐る習にして、祖先嫡々の職業をしも變へて、別に野心を貯ふるものあらば、遠からずして破滅の日は到るべしと思へり。従うて上下の風俗、何れもその身分を示して混ぜず、亂れず、竹庵老の慈姑頭、新五左の淺黄裏、片はづしは御殿女中の外はな、俱利加羅紋の文身は江戸、子の鳶の者なり。この職業世襲の風と諸般の道に師資相承を貴ぶとは、またおのづから相伴ふ、生みの父母は身體の親、藝術の師匠は才能の親、かれの血統を重んずるが如く、これが系統をも重んじ、弟子七尺去つて師の影を踏まず、師の教ふるところは斯道の骨髓、秘事口傳の沙汰喧ましく、手本の神聖を讀すものは、豫め破門の辱を期したりしなり。およそかくの如きは、江戸時代に入りて始めて養はれたる習慣にはあらず、由來するところ頗る遠しといへども、徳川幕府が消極政略を

傳承の弊

行ふに至りて、殊に甚しきを加へたるはいふまでもなからむ。いつの世とて須臾も國民の念頭を去らざるは向上の精神なり、この趨勢をして擅に増長せしめんか、秩序の破壊は早晚免るべからざる運命なるべし。幕府は早くもそのおのれに不利なるを見たり、鎖港の制もこれが爲すべし、耳なれぬ説を唱へ、見なれぬ物を作ることを禁じたるも、これが爲なり。これのみにあらず、季節以外の野菜菓物類を市場に出すべからず、身分に従ひて着る物は一尺何分以下に限るべしなどの瑣事をさへ、法令の正文に載せて、實行を強ひ、以て天下萬衆をして小仙窟裡の少康に安んぜしめ、併せて幕府千年の基礎を堅うせむとしたり。幕府の消極的方針は、果然、國民をして、よく勤儉質素に、各自天命に安んずるの風を養はしむるに効果ありき。されどまた當時の社會を驅りて、因循固陋に流れしめ、著しく事業の進歩を萎靡せしめたるに至りては、その罪決して輕からず、わけても文藝の道において然るものあり。それ藝術の天才は個人的なり、個人的特性の滅却破壊を以て一代の方針とせる時代において、いかてか天才の出現を待たむ。江戸時代の文學に携はるものは、他の機械的諸藝に従事するも

普遍美の描寫

のと共に、師資相承す、父子傳統す、後進眼を開いて人生の實相を見むとすれば、粉本堆く遮り、典型算を亂して横はる。人間の墳塋は一年は一年より蒼然たる古色を添ふ、かれらが粉本と典型とは一代は一代より現實を遠ざかりて、幻妖奇怪の境に入れり。かくの如く因襲隨逐、年を追うて自然と離隔せる作物を讀破して眞意を誤らざるものは、幾かに泉下に眠るものの誰なるかを知りて後に碑銘を判ずる徒のみ、知らざるものは則ち盲目大象を探るの歎を禁ぜざると共に、やがては唾棄して顧みざらむとす。時代が創意を没却して、摸倣を強ひたりし弊もまた甚しいかな。

かくの如く社會は家系を重んじて、個人を無視す、世人が自然となく、人生となく、一に普遍美を主として、個性美は冷淡なりしは、また必然の結果にして、この現象を反映したる江戸時代の文學は、世にあり得べしとも思はれざる道徳完全の摸本的男女を空想し來りて主人公となし、肉あり血ある個人を描くを忘れたりき。

御家騒動

進んで文學に用ひられたる題材を見れば、家系尊重の大事事件はいはゆる御家

時勢の概括

騒動に如くはなし、御家の重寶紛失し、その保管者がこれを尋ねて東奔西走得ざれば則ち自殺したりといふは、殊に注目し値す。何故に今日のわれ／＼より見てはむしろ些細なるが如き器什を秘藏して、傳家の重寶となし、一身を賭しても、これが保存に熱中したりしか、他なし、傳家の重寶はやがて祖先が功名手柄の標象なればなり。それが器什としての價値の如きはさもあらばあれ、たゞそれ祖先の記念すべき遺物なるが爲に、これを永遠に傳ふるは、子々孫々の忽諸に附すべからざる義務にして、父祖の名と一家の名とを不朽に遺すと遺さざるとは、一にかゝりて後繼者がこの重寶を保存するとせざるとにあり、換言すれば、名器の亡失は、とりもなほさず家名の斷絶なりと思惟せられたればなり。』要するにこの時代の文學は、種々の原因の促すありて、發達の上よりいふも、普及の度よりいふも、洵に前代未聞の盛を致せり。されど一たび戰國の世に遇ひて壊れむとせし階級の制も、幕府の確立と共に更に成り、文學も貴賤全く趣を異にして、上流なるは保守的にして固陋に陥り、下流なるは進歩的なれど趣味の野鄙を免れず、一般に時勢と相應じて消極的に流れ、系統の傳承に執着して、

時代の區劃

個人の描寫に想到せず、勸善懲惡主義の目的に愜はしめむと力めて、終に文學の高尙なる眞意義に觸るゝことなかりしは、わが國文學の爲に忘るべからざる恨事といふべし。

この時代を分ちて、また四期とせむ。

- 一、啓蒙時代 (二二六〇—二三四〇) 八十年間
- 二、京坂の盛運 (二三四〇—二四〇〇) 六十年間
- 三、文運東遷 (二四〇〇—二四五〇) 五十年間
- 四、江戸の盛運 (二四五〇—二五二八) 七十八年間

この四期のうち、最も特色あるは、京坂の盛運期すなはち所謂元祿時代と江戸の盛運期すなはち所謂文化文政時代(または大御所様時代)とにして、啓蒙時代は、むしろ京坂盛運前期とも稱すべくして、させる光彩もなく、文運東遷時代は、一部は前の元祿時代に接し、一部は後の文化文政時代に屬して、江戸盛運前期ともいふべく、ともに以て一期を劃するに足るの要素と價値とに乏しといへども、暫く如上の區劃を設けて、了解記憶に便するのみ。

第二章 啓蒙時代

古書の蒐集

戦國以來、學問文藝の道衰へて、典籍の散逸せること驚くに堪へたり。應仁の亂に、博學を以て名ありし一條兼良は家を後にして、難を都の外に避く、その桃華坊の文庫は、邸内にありて、辛うじて兵燹の禍を免れしかど、七百餘合の筥に滿ちたりし藏書は、武士の狼藉にあひて、とり散らされ、誰ひとり拾はむとするものもなく、空しく路上に横はりしとぞ。そののち兵亂、織豊時代を通じて荒び、流民轉蓬國狀の悲惨この時に過ぎたるはあらず。家康覇權を握りて、干戈こゝに動かず、すなはち大に文教を興すに意あり。可いかな、渠は焦眉の急務として、銳意遺書の蒐集に着手したり。上は内裏仙洞より、下は武士町民の間に至るまで、搜索探求及ばざるなく、當時褊狹なる公卿が家寶として、篋底深く秘めたりし書類まで、嚴令の下に呈出せしむ。これらは悉く五山の僧侶に附して筆寫せしめ、必要あるものは更にこれを版本となす。

印刷の進歩

そも、わが國における印刷の最古の遺物と見るべきものは、奈良朝の古、天平寶字八年、一百万塔を作りてその中に藏めたる陀羅尼なり。その後平安朝にも經文摺寫のことなきにあらざりしが、固より屢、行はれたりとは見え、鎌倉時代以來や、進歩の度を示し、法然上人の撰擇集、正平版の論語などを古きものとし、室町時代に及びては、所謂五山版の經文、詩文集、語錄など多く現はれ、地方にしては、周防の大内氏、上杉氏の臣直江氏等また古書を翻刻せることありき。されどこれらもなほ兵馬倥傯の際における偷閑の餘事にして、勘合校定するところ、いまだ五車を充すに及ばざりしに、家康がこたびの舉こそは、徹々たりし出版事業に一大刷新を行へるものにして、印刷の歴史の上に忘るべからざる一轉機を呼びたるなり。かくして行はれたる印刷には、まづ活字を試用す。蓋し文祿征韓の役に傳へたるかの國の法に倣ひて作れるもの、それも時期いまだ早かりけむ、銅製なるは幾ばくもなくして廢れ、木製なるはその後や、久しく行はれたれど、遂にまた整版に壓倒せられたるんぬ。活字整版の消長はともあれ、爾來、印刷は年毎に盛に、寛永の頃には早く民間にさへ弘布して、庭訓、節用

の類より、啓蒙訓誨の書など刊行せらるゝもの續々として相踵ぐ。出版術の進歩は知識の普及を促し、知識の普及はまた出版術の發達を早からしむ、かくて暗黒裡に餘命を保ちし戰國の文化は江戸時代の朝暾を迎ふ、この時期を名づけて啓蒙時代とはいふなり。

この時代の儒學は藤原惺窩が朱熹の學を奉じて名を擧げたるに起れり。惺窩の弟子にして鐵中の錚々たるものを林羅山とす。羅山、惺窩の推薦によりて家康に事へ、政治に參與して畫策するところ少からず、子孫相尋いて幕府の儒官たり。當時、佛教なほ盛にして、儒學は文化の中心たること難かりければ、惺窩、羅山は力を極めて彼が勢力を打破せんとす。元來、宋儒の學は理論に偏して實行に疎き傾ありしものなるが、をりふし幕府草創の際を去ること遠からず、新法の制定は急中の急務なりければ、林家の如きは必要に迫られて、古來の制度を考覈し、諸家の傳記を研究す。加ふるに世は戰亂の後を承けて、學問普及せず、人民高遠の學說に耳を傾くるに堪へざりしかば、在官の儒家も民間の學者も故らに平明なる實際的倫理を説き、易きによりて直ちに世を導き社會を教へむ

儒學の訓蒙
的、實際的
傾向

歌壇の趨勢

とせり。この方便の爲に梓に上されたる多くの書籍の、いかに通俗を旨としたりしかは、その十中の八九が、諺解、和解等の表題を有するに徴しても知るを得べし。朱子學に對抗して當時に重んぜられしを、中江藤樹が唱出せし王陽明の學派とす。朱子學が談論講學を主としたるに反して、これはひたすら實踐躬行の先にすべきを主張し、徳孤ならず、藤樹はよく四隣を感化して、天下をして近江聖人の名を以て呼ばしむるに至りき。藤樹の高足に熊澤蕃山あり、備前に居り、野中兼山朱子學派の大家として土佐に居る、いづれも藩侯の帷幄に參して、政弊を矯め、また國俗を化するに力ありしを見れば、幕初時代の儒者が、學者としてその道の蘊奥を極むるよりも、廣く世を裨益せむと庶幾したりしこと察するに餘あり。

和歌は戰國の時に當りてその道まさに絶えなむとしたりしを、細川幽齋、木下長嘯等のあるありて、僅かに江戸時代に傳ふるを得たり。長嘯は秀吉が室の甥にして、和歌を幽齋に學びて得るところあり、關原の亂起るや、宗家の存亡を餘處にして、風月に隠れ、柔儒の行一世の誹を免れざりき。堂上の人にして幽齋に

道を問へるもの、中院通勝、鳥丸光廣等あり。これらの人々は、單に室町以來の風尚をその儘に傳へたりといふのみにして、和歌を以て上流の翫賞に限り、その埒外に出づるを欲せざりしに、ひとり幽齋の門下より起りて、地下にして斯道の復興に力めたるもの、松永貞徳あり。貞徳の弟子に名士おほく、殊に注意すべきを北村季吟とす。季吟が畢生の心血を灑ぎしは、古典の註釋にして、就中源氏物語、湖月抄、枕草紙、春曙抄、徒然草、文段抄など世に歓迎せられ、今も盛に行はる。宜なるかな、人の近世における文學の普及を論じては、その始を貞徳師弟の鼓吹に歸し、同時に古文學を味ふものの多きに至れる主功を以て季吟が平易親切なる編述に推さむとすることや、たゞその所説はなほ二條當流の舊套に拘泥して、何等の自家の發明もなかりしは、惜むべき限なり。蓋し季吟や、その生存の時代や、次の元祿期にも涉り、所謂舊風の殿將として、棹尾の勢を示すものといふべし。

貞徳の俳諧

さりながら江戸時代の文學を通じて、最も光輝ある特色は平民文學の發達に如くはなし。この一期間についていふも、殊に著しきは、和歌にあらず、國文にも

あらずして、實に俳諧の進歩なり。貞徳は幽齋に和歌を學びぬ、されど和歌は到底貞徳の長技にあざれば、従つてその功勞もこゝには存せず。貞徳の貞徳たる所以は、一に古風の俳諧を大成せるにあり。さらばこの古風の俳諧とはいかなるものなりしぞ、その眞の價値よりいへば何等の賞讃すべきものにもあらず。一二の例を見よ、

しをるゝはなにかあんずの花の色。

花よりも團子ありてや、歸る雁。

前者は掛詞を用ひたる例にして、後者は俗諺を用ひたる例なり、これ等は共に貞徳が常用の手段にして、一見、人の意表に出づるが如きも、畢竟幼稚なる言語の遊戲に過ぎず、趣味豊富ならず、時には猥雑口に上すべからざるものあり。渠が創作の才は必ずしも門下の秀才に及ばず、かくてもなほ俳諧史中の重鎮たるは、足利氏の世に起りて、いまだ正當なる文學上の價値を認めらるゝに至らざりしこの文學にしも、始めて法式規格を定めて、その旗幟を明かにし、また大に門人を養ひて、これが弘通に力め、よりて以てみづから期するところを成就

したりし一點に存せずんばならず。而してその著御傘ぞ俳諧の爲にはその好運を世にうち出しし寶槌にして、翻つて從來ひとり平民文學として勢ありし連歌の爲には、その頭を碎いて長しへにその生氣を復すること能はざらしめし鐵槌なりける。

貞徳の門葉

貞徳が俳諧の門葉榮えたるが中に、野々口立圃、松江重頼および安原貞室の三人拔群の稱あり。殊に貞室は

これはく／＼とばかり、花の吉野山。

の如き、感情の自然をありのまゝに詠じたるを以て遙かに同輩と選を異にす。その他も一人には一人の異色なきにあらずといへども、要するに貞門の俳諧は師風を受けて幼稚未熟に、取るにも足らぬ言葉の掛合などにうき身を窶して、しかもまたみづから規定せる法格によりて拘束せられたる観なくんばあらず。

宗因の俳諧

この時に當りて大坂にありて俳諧に新奇の一體を起せるを西山宗因とす。いはゆる檀林風にして、この派の特長とするところは、磊落不羈の詩情を洩らす

に、殊更に放膽なる修辭法を用ひ、或は信屈の漢語を喜び、或は屢、古歌謠曲の文句を引き、また好んで法外なる字餘を試みたるにあり。

やがて見よ、棒くらはせむ、蕎麥の花。

の如きは、故らに霸氣ある語を弄して、傍ら滑稽の意を寓し、

頭巾寒うして、北に峨々たる青山なし。

といへる類は、漢語と字餘とによりて、適勁の調を得んとせるもの。

古歌に曰く、千歳ぞ見ゆる鏡餅。

初花や、いそぎ候ふほどに、これははや。

などの例は、古句をその儘に利用して、運用の自在に人を驚かさむと欲したるものにあらずや。これらの數句によりても、宗因が才氣縱横、辭藻口を衝いて迸れるものなること略、察すべく、その用辭における用意と苦心とはまた頗る諒とするに足るものありといへども、内容の清新奇拔がこれに伴へりしや否や、遺憾ながら首肯するを得ず。要するに俳諧をしてとにかくにかばかりの勢力を得るに至らしめしは、古風と檀林風との功によるべしといへども、その進歩

小説らしからぬ小説

は決してこれに止まるべからず、前途はなほ悠久として遼遠なりしなり。さて小説に移らむ、この時代の小説界は稍多忙なり、これ一は印刷術の進歩に伴へるものなるが、さりとてこの時代に出版せられたるものを以て、悉くこの時代の作物となさむは早計に失す、さるは室町時代の著作にして、この時代に及びて始めて刊行せられたるもの、決して少からざればなり。一般の風潮を觀するに、この時代の小説は純文學としていまだ獨立するに至らず、多くはむしろ倫理書、地理書などの小説化せるもの、換言すれば學問、教訓、傳道などの爲に使はれたる一種の傾向小説に過ぎず、いな、小説といはむには餘に小説らしからざるもののみといふを得べし。如、備子の可笑記、山岡元隣の誰が身の上、三教一致の旨を説きたるが如き、清水物語が佛法を揚げて儒教を貶し、祇園物語がこれに對して反駁を試みたるが如き、また鈴木正三の二人比企尼がひたすらに佛教の厭世觀を述べたるが如きは、傳道の目的より成りたるもの、竹齋物語、色音論の如き、淺井了意の作と稱せらるゝ東海道名所記および江戸名所記の如き、中川喜雲の京童の如きは、京、江戸その他の地理を趣味あるやうに教へ

恨之助と薄雪

たるもの、この時代の小説といふべきものは大抵この種類のものなり。されどこの時代にも純粹なる小説なきにあらず、そのうちにも最も有名なるものを探りて二篇を得、恨之助草子と薄雪物語とこれなり。恨之助は慶長頃の作と思はれて、この時代の作物にては最も古きものの一なるべく、男にては葛の恨之助、女にては雪の前を主人公としたる例の事ふりにたる戀愛小説なり。行文ことさらに絢爛なれど、印象極めて明確ならず、室町時代における釘鉾補綴の跡を追うて、何等の特色もなく、たゞ追腹切つたる記事などに時代の風尚をあらはすのみ。薄雪物語は寛永の頃世に出て、園部左衛門と薄雪姫との情事を寫し、姫死してのち左衛門は出家してその菩提を弔ふといふに終る、一篇の徑路、甚だ恨之助に似たり、記述の體裁は男女往復の書簡に擬したるものにして、蓋し堀河院の艶詞に源を發せるものなるべく、その時好に投ずることいかばかり大なりけむ、新薄雪物語、錦木、小夜衣など、その後相續いて出てこれに倣ふ。されど薄雪も結構の平板なると共に、文章また情熱の迸れるなく、殊にさらでもあるべき和漢故事の引用の雜多なるは、いよ／＼讀むものをしてこ

浄瑠璃

ちたく厭はしき悪感を加へしむるのみ。この外に、安樂庵策傳が著にして、嘶の本の鼻祖と稱せらるゝ醒睡笑あり、滑稽の古雅にして簡淨なるは遙かに後世の輕口に優り、これに次いで昨日は今日の物語、仕方嘶、會呂利狂歌嘶、一休嘶など風を望んで世に現はる。支那の剪燈新話の類に倣へりと覺しくて、珍事異譚を寫せる淺井了意の御伽婢子、狗張子等またこの頃に出づ。島原の役以前は、禁制に遇ひながらも、耶蘇教の密かに行はるゝありて、外國語を學ぶ者もありけらし、伊曾保物語の翻譯さへ成りて、僅かに萌芽に過ぎずとはいへ、やうく西洋文學の輸入せられしことをも忘るべからず。

なほ逸すべからざるは浄瑠璃のことなり。浄瑠璃は室町時代に起りて、今、こと新しく始まれるにあらずといへども、この時代に至りて三味線に合せて語らるゝやうになり、同時に傀儡を伴ひ舞はしむるやうになれるを注意すべし、三味線はもと支那もしくは琉球より傳はれるもの、永祿の頃早くわが國に行はれたりといへば、その頃よりこの時代の初に至りて、すでに四五十年を経たり。かくて浄瑠璃のこの樂器と併せ用ひらるゝに及びて、共に一時にもてはやさ

歌舞伎

れ、いつしか流派をさへ分つやうになりぬ。されどこの文學は思想も詞句もなほさせる新意もなく、むしろその源流たる謠曲、幸若の舞曲または當時盛に行はれたる説教祭文等に倣ひて、或は男女の戀愛或は勇士の功業などを仕組み、敢て自らその陳腐をも覺らず。中にも金平節の如きは、折ふし戰亂の世を距ること遠からず、人心おのづから殺伐の氣象あるに乗じて、力めて勇壯活潑なるものを脚色し、大夫は鐵棒を以て拍子を取り、意氣軒昂するところに至れば、われを忘れて岩をも木偶の首をもち破りぬといふ。その趣向をいへば、主人公は坂田金時の子金平、渡邊綱の子武綱など、いづれも義經、辨慶にもまされる剛の者にして、猛獸山賊をとりひしぎ、また地獄廻をなして閻魔惡鬼をも苦むすべて肩胛つゝばり口尖らかし、誇張に誇張するを以てその特色とせり。

浄瑠璃は地の文と對話とがうち混じたるより見ても、謠曲の系統を引けるものなること明かにして、對話のみを以て成れる歌舞伎と異なること勿論なり。歌舞伎芝居はその發達、浄瑠璃とは交渉なく、慶長の頃、出雲のお國といふ女子によりて翫められ、佛教鼓吹の爲に行はれし舞謠と狂言とを折衷して成れる

ものなるべし。とにかく淨瑠璃も歌舞妓もこの時代にありてはなほ極めて幼稚の域にあり、いまだ眼識ある人々の觀賞に値するまでには進歩せざりしなり。

第三章 京坂の盛運

前代の経過

文學は社會の變遷と共に推移して的確にその状態を反映す、室町時代の末に當りて文學に現はれたる最大現象は平民の物興といへる新事實なりしが、それも積極的に自覺の力によりて成りたるにはあらずして、むしろ社會組織の瓦解と共に、おのづから窮屈なる階級の束縛より解放せられて然りしものなることは、すでに論じたる如くなり。理由はともかくも干戈相争うて息つく暇もなかりし世の漸くあらぬ昔と過ぐれば、平民の將來は益々希望あり、文學もまたその手によりて新方面の開拓に従事せられむとす。されど幕府創立の當初にありては、自然の順序として、生活状態の改善すなはち物質的文化の發達も

支那との關係

しくは一般知識の弘通に力を盡して、いまだ文藝の上に深く意を注ぐの餘裕を得ず、いはゆる啓蒙時代はかくて文學史上特筆すべきものもなく疾くうち過ぎにけり。

幕府初政の頃最も尊重せられたるは儒學なるが、さりとて平安朝の弘仁前後におけるが如く、これが爲に自家を忘却して、斯學の本國なる支那に心酔することはあらざりき。それもまた理由なきにあらず、當時かの國は明末に際して、制度文物あましくも廢れたる時なり、僧隱元が家綱の招聘に應じて來朝せるも、或は本國の擾亂を避けて、天下太平なるわが東海の君子國に就かむと志したるにあらずや、朱舜水が水戸公に仕へたるに至りては、明朝の遺臣として、その没落を見るに忍びずして來朝したるものなること、明白なり。かくてはこれ等歸化人の本國の文化につきて説くところ、いかに美しからむとも、聞くもの全然これを師表と仰ぐに吝かなりしは、また然らざるを得ざるところにして、彼此對照、漸く自己に對する信念を堅うせるは、なほ道眞の奏請によりて遣唐使を止めたる後の平安人士が情勢に似て、しかも一層強烈なるものあり

明治との比較

しならむ。

當時の形勢は蓋しまた大に明治の初年と同じきものあり、たゞ明治初年の社會は、すでに江戸三百年の雨露にはぐくまれて、一躍急速の發達に堪ふべき素地を養ひたれども、幕初時代は然らず、久しく戰亂蒙昧の惡時代に惱まされて、至るところ礪礪荒蕪、知識の犁鋤は草莽を闢くにだになほ多年の努力を要したり、またこの時代とても西洋との交通なきにあらざりしが、その文明の滔々奔注し來りて、國民を壓迫し刺戟したること、到底維新以後に及ばず、從つて社會進歩の歩度も、かれにありてはこれの如くいまだ俄かに着々として進捗する能はざりしのみ。

五代將軍

さもあらばあれ、今や泰平うち續くこと八十年、嘗ては一椀の稗、一掬の水に飢渴を凌ぎたる民も、いつまでかこの悲惨の生活をつゞけて止まむ。衣食足りて禮節を知るならひ、かれ等が慾望の早く精神的娛樂を求むるに至りしは、自然の勢といふべし。江戸時代の門戸が家康の手によりて開かれたる如く、江戸文學もまたこの人によりてその緒に就けるなるが、五代將軍綱吉に至りて殊に

元祿の盛運

意をこゝに用ひ、嘗に有司をして獎勵の道を誤らざらしめむと期したるのみならず、またみづから諸侯を招いて經書を講ずること屢なりき。上に威ある時、その好むところは、下において益甚し、將軍學を嗜むこと三度の食事の如くにして、諸侯みなこれに倣へば、四民また翕然としてこれに向ふこと草の風に靡くが如く、文化日に起り、學藝月に盛なり、これを學問の上より見たるわが元祿時代の大觀となす。

江戸幕府が施政の方針はあくまで消極的なり、消極的政策の特色は壓制なり、束縛なり、壓制と束縛とはこれに慣るゝ國民をして萎靡沈滞せしめずんば止まず。江戸時代を通じて、社會は未曾有の泰平を享樂しつつも、なほこれらの障礙の爲に個人的發展を阻害せられたる傾向あり、個人的發展に對する桎梏の直ちに文藝の進歩に影響すること大なるは、更めていふまでもなきことなり。幸にも元祿時代にありては、この傾向いまだしかく甚しきに及ばず、たとへ三代將軍家光の如きは、はやく諸侯に宣言して、みづからは生れながらにして幕府の主なれば、卿等に對して等輩の禮を執る能はず、今より君臣の儀によるべ

しとして、急に従來の寛大主義を廢して、よろづ窘束の方針を執り、同時に人民に對する幕府の制裁もやう／＼嚴重を加へたりとはいへ、戰國この方恣に増長せる奔放の習慣は一時に抑ふるを得ず、従つてなほ中葉以後の如く國民精神の鬱屈を見ることなかりしなり。試に思へ、東縛の棄却は文藝發展の最大要件なり、されどこれのみを以てして如何ともするなきは戰國の歴史に微證あり、また思へ、國家の治安は苟くも文藝發展の素因として除外すべからず、されどこれのみを以てすべてを攝せむことの難きは、平安朝の歴史に考へて明かなり。さらば文藝の眞の發展はいかにして來るべきか、いはく、これらの二條件が兩々輔翼の關係にある時なり、委しくいへば、活潑潑地なる自由の精神を以てして、國民が文藝の製作翫賞に當るべき平靜樂易の天地を有する時なるべし。さらばわが元祿時代は實にこの好時期にあらずや、譬喻少しく奇に涉るの嫌なきにあらざれど、貝類の饒かに産するは河海雨水の交はるところにあり、元祿時代はこれ桑名の磯、その新鮮豊富なる文藝こそは名物時雨蛤、木曾の急流を躍り下れる快活自由の精神が、ひねもすのたり／＼と天下太平なる伊勢の

習慣の打破

海に注いで、投合調和するほとり、蠣蛤ぞ湧き出づる。

元祿文學の特長として、まづ擧ぐべきはいづれの點にありやといふに、新進氣鋭何物にも拘泥するなき自由の精神を鎗として、斷々乎として従來のあらゆる慣習を衝破し、以て不羈獨立の大文學を樹立し得たるにありて存す、そのあくまで創建的にして新意に富めるは、いふまでもなきことなり。翻つて中世の文藝史を按ずるに、人智よく開けず、先人の所説は絶對無上の證權として動かすべくもあらざれば、文藝の士が自然と人生とに對するや、また自家の心眼を運用せむとはせず、唯々諾々として古型舊習を株守す、人情いづこぞ、理性いづこぞ、あはれかくの如くにして、一代の精神を發現すべき文學に、いつとも知らず誰ともつかぬ人情あり、理性あり、怪奇幻妖習をなして世はむなしく過ぎぬ、作るものに罪あれば讀むものにもまた咎ありて、當代の讀書界はかゝる作物をしもわが意を得たるものとして迎ふるに躊躇せざりき、禍亂蒼生を苦むること幾十百星霜、今や平和の福音を傳へてすてに一世紀に垂んとす、儒學の勃興に伴ひて上下の知識は著しく啓發せられたり、文學上の典型とやらんはい

まだ知るところにあらず、この新知識を提げ、この燃ゆるが如き感情を以て、おのづからなる人生と中世の作品とを比較し來れば、二者の没交渉にして相隔絶せる雲泥萬里の相違のみならむや、かれ等が愕然として驚き、毅然として反抗の聲を擧げたるもの、實に所以あるかな。かくてわが元祿時代の社會は全く中世の厭ふべき慣習を脱して、花紅に柳綠なり、あるは梅、超然たるは野鶴の如く、あるは牡丹、赫耀たるは美人の如し、實もあり、花もあり、文壇の榮げにこの時に極まるとぞ見えし。

順庵と益軒

漢學には木下順庵、貝原益軒ら博洽を以て聞ゆ。順庵はその學博通普遍を主とす、自己の學識のすぐれたるが爲よりも、門下に知名の士を出せること多きを以て有名なるは、俳諧における松永貞徳に似たり。益軒の學風は求めて達見を銜ふことをせず、淺近を旨として諄々説いて倦まざるをその特色とす。その著書いづれも平易の國文にて綴り、大和俗訓、家道訓、初學訓、文武訓などいはゆる十訓の如き、處世の道を説けるもの多く、また通俗に諸國の地理を示して行旅の人に便せるものも少からず。この童蒙の教訓を目的とせるは益軒が國文學

仁齋の古學

界の北村季吟と進退を同じうすと稱すべき點にして、しかも季吟が古典の註釋をこれ事としたるの觀あるに反し、益軒が一に實際の道義を説いて社會を益せんとしたりしは、兩者の趨向を異にしたるところなり。さばれ順庵も益軒もその半世は前代の人にして、爲すところまた前代の風潮の外に出てず、元祿時代の漢學者として大光彩を放てるは別にその人あり、伊藤仁齋及び荻生徂來すなはちこれ。

伊藤仁齋は京都の人、資性穩雅、いふところ奇を求めざれどおのづから卓拔、眼光よく紙背に徹するの概あり。初め朱子學を學びしが、その老佛の説を交ふること多くして、孔孟の眞面目にあらざるを疑ひ、古意を知るはこれら宋儒の附會を斥けて、直ちに原文に對するに如くはなしとし、遂に自らその神髓を得たりと稱す。仁齋論じていはく、大學は孔子の遺書にあらず、中庸も後人の攙入多し、宇宙第一の書はそれ論語か、孟子これに次ぐと、またいはく、論孟を讀破すれば、即ち孔子その人に接するなり、孟子は論語を敷衍せるもの、論語は教を説きて道その中に籠り、孟子は道を立てて教その中に存す、さらに論語の理を説け

るに對して、五經は實際を論ず、故に學者まづ論語の一書に天地に磅礴せる自然の理を悟り、然る後五經に鑑みて、これを萬物の實際に應用するを要すと、朱子學は理氣二元の説を立てたれども、仁齋はこれを駁して、二者を分たず、天地間たゞ一元氣の存するのみといひて、生々活動機に應じて動くべしとし、世の道理に著して變ずることを知らざるものを排したり、仁齋がかく一元説を主張して、自ら潑刺たる活氣に鞭ちて勇往直進せるは、もとよりその本來の性の然らしめしなるべしといへども、また時勢の促せるものあるを忘るべからず、蓋しかくの如きは元祿の思想自由の時に遇うて始めて見るべく、秩序紊亂して、士民歸向するところを知らざる世に起るべき現象にあらざればなり、或はいふ、仁齋の説は明の吳廷翰の吉齋漫錄と符節を合するものあり、仁齋は竊かに漫錄の説を取りたるものなるべしと、またいふ、清朝に古學を唱へたるもの顧炎武あり、仁齋はこれによれるにあらざるかと、第一の疑は學説に偶然の契合をも認めざらむとする嫉妬褊狹の言たるを免れず、第二の疑は二人の時代は同じといへども、仁齋が遙かに年長なりしことを知らば、おのづから氷解せ

祖來の古文

む、仁齋はこれわが國における唯一の大哲學者、單に薄弱なる理由を以てその偉大を疑はむとすとも、余輩はその平生に顧みて、決して渠が剽竊を敢てして得意なるものにあらざるを信ず、仁齋と殆ど同時代にしてまた朱子學を破したるもの山鹿素行あり、これもまた時運の生むところ、おのづから然りしなるべく、仁齋の學と何等の交渉なくして出でたるもの如し、たゞ素行の本領はむしろ兵法にありて、儒學にあらず、従つて整然たる組織なく、系統なければ、その識見に至りては相等しきも、一全體たる學説として見る時、ひとり仁齋を擧げざるべからざるは、また已むを得ざる次第なり、仁齋の長子を東涯といふ、學問の該博、修辭の洗鍊、遙かに父の上に出づ、されど一意乃父の説を祖述するに止まりて、敢て異を樹てず、復古學はこの後繼者ありて、漸く盛を致す、仁齋處士として生涯仕へず、堀川の塾に帷を下して門生に臨むに、刺を通ずるもの無慮三千、國別にしてたゞ飛驒、佐渡及び壹岐の人を見ざるのみなりきといふ、東涯について同塾に教へ、爾後連綿として明治の世に至る。

堀川塾は京都にあり、その頃別に江戸にありて名聲籍甚なりしを、荻生祖來と

し、伊藤父子と對峙して當代東西の偉觀なり。徂來は川越侯柳澤吉保の臣、委しくいへば東涯と同時代の人にして、仁齋にはやゝ後れたり。初め朱子學を學びしが、仁齋の古學を唱ふるを見て、感奮發明するところあり、みづから一派を起して朱子學を誹り、併せて仁齋の説をも駁す。徂來が仁齋に向つて矢を放ちたるは、學說の相違によるよりも、むしろ個人的憎惡に出づ。嘗て渠、仁齋の説に服して一たび書を致ししに、仁齋すてに老いて執筆に懶かりしか、他に事情ありしか、これに酬ゆることなかりしかば、徂來は痛くその自尊心を傷けられ、憤懣骨に徹して、事ある毎にその鋒鏗を露はす。仁齋童子問を爲れば、徂來辨道を作りてこれを駁し、かれに語孟字義、論語古義あれば、これに對してわれに辨名、論語微あり、大學定本現はれて、大學解は成り、中庸發義に對する中庸解の關係もまたかくの如し。およそかくの如きは徂來が古學に對する態度なりきといへども、滿幅の霸氣に乗じて攻伐を事とするは、その他に對してもまた同じ。渠の學は内に蘊蓄せむことを冀ふよりも、むしろ異を立てて世に傲らむことに力め、いふところ沈厚の風に乏し。謂へらく、仁義忠孝は徳にして道にあらず、道は

すなはち詩書禮樂なり、故に道は先王の作爲せるものにして、おのづから存したるものにあらず、これを知るの道、古辭を學び、古文を讀むに越えたるはなし。文は秦漢の前に溯り、漢魏六朝を參照すべく、詩は須らく範を盛唐以上に採るべし、文は韓退之に至りて衰へ、學は程朱を得て墮落すと。かくの如く、ひたすら古文を尊崇して、宋元以後の風を賤しめたるが、その詩文を評論軒輊したる一段は、實に明の李(于鱗)王(世貞)の説に負ふところ多かりしなり。これを要するに徂來は哲學者たるよりも經世家に近く、經世家たるよりも操觚者といふを當れりとす。されば渠が研究の第一義は辭句の工夫、形式の穿鑿にあり、また好んで天下の經綸を談ずれども、個人の道德に至りては深く問ふところにあらず。孔孟の書は讀めども、孔孟が倫理の觀念は寧ろ閑却して顧みざりしなり。門人の俊秀には太宰春臺、服部南郭あり。經學を修めて身を持つる極めて嚴格に、師とも同門とも趣を異にしたるは春臺、詩文に堪能に、併せて文人風の畫技に長じたるは南郭なりき。これを始として、綾園の門下才人多く、古文辭學の一派大に世に行はれたるが、一身を修むるを以て偏固なる舊式の村學究のこととせ

新井白石

る。往來の子弟に放蕩無頼の徒の多かりしも、また已むを得ざる數なるべし。哲學者たる仁齋は一個のコスモポリタンなりとはいへ、堅忍不拔、自己獨得の學說を立てたるこの人にして、その用ふる文はなほ漢文なるざるを得ず、往來が眼中また支那漢文あるのみとせば、文學に對する當時の趨勢卜するに難からざるべしといへども、しかも外國文學の操縦の容易ならざるは、屢説けるが如くにして、いかにこれが平民化したりとはいへ、上下を通じて書かれ讀まれむことは望むべくもあらず、且や元祿時代は國民自覺の時代にして、摸擬蹈襲に甘んぜざる意氣の壯あり、かくの如くにして、余輩は漢學者より出て、國史を究むれば、識見無雙、國文を作れば古今絶倫と稱せらるゝ白石、新井君美を迎へ得たり。白石は略、往來と時代を同じうす、江戸の人、六代七代の將軍に歷仕して、その帷幄に參し、當時の施設渠の建白に基くもの多かりきといふ。その頃、羅山の孫鳳岡あり、五代綱吉以來の儒臣として、また一方の勢力たり。白石これと合はず、屢、臺閣の上に議論を戦はして、その敵を屈せしむること數回、されど八代吉宗立つに及びて、すなはち斥けられ、鳳岡更に信任せらる。白石政治を料理

するの傍、心を學問の研鑽に潜め、著はすところの書、繁忙の間に成るといへども、積めば等身、多作すれども駄作なく、彼に當り此に當れる眼光の警拔にして、多角的なる、一鶴鷄群に擡んずるの概あり。その重なるものを數ふれば、南島志、蝦夷志の地理におけるが如き、采覽異言、西洋紀聞の西歐事情を明らかに、やがてわが國洋學の先鞭を着けたるが如き、本朝軍器考、車輿考、冠服考の有職故實におけるが如き、東雅、同文通考の國語の性質を説き、漢字假字を論じたるが如き、古史通、讀史餘論の古今の歴史を考究せるが如きあり。中にも古史通は神代の史論にして、この時代の真相を知らむとせば、まづ古語に通曉するの要あるを説き、更に去つて神名、地名等はしばらく習慣に従ひて書紀に則れども、事實の材料は古事記に仰ぎ、以て古意は古言に求むべしといへる自家の主張を明にす、古事記傳に先だつて既にこの卓論あり、白石が識見の高邁なること、この一斑によりて全豹を推に足らむ。加賀侯がこの書を見て、手を拍つて、本邦第一の書、萬古の疑を決すといへるもの、敢て過褒の讚辭にあらざるなり。讀史餘論は將軍の前に古今の成敗を論じたる稿本、頼山陽の日本外史は、單に史論とし

白石の傑作

ては、その糟粕を嘗めたるものなりと稱せらる。文學の上より白石の傑作とすべきは藩翰譜と折り焚く柴の記となり。藩翰譜は諸侯伯の系譜を記し、乾燥なる諸家の履歴を列叙したるものなるが、間々勇士奇傑の逸話を挿みたり。その文意を歴ずして成り、毫も斧鑿の痕を止めず、筆端聲あり、文字の移るに従うて人物もまた活動し、彼此應酬の態眼前にあり、折り焚く柴の記は白石の自傳なり、記すところ、藩翰譜の一般に單調無味なるに比して、頗る變化あり、波瀾ありといへども、文章のあまりに優雅ならむことを欲したる爲に、却つて冗漫の弊に陥れる觀なくんば、あらず、余輩をして遂にこの名文をしも棄てて、藩翰譜の簡潔遒勁を採らしめむとするは、惜むべき限ならずや。とにかくに白石は一代の文章家なり、その本領は政治家たるにあるべし、學者たるにあるべし、殊に爛々たる史眼は、以て古今に獨歩するに足るべしといへども、文章にかけてまたよく、渠と對峙して相下らざるもの幾人ありや。固より渠の作れるところは、史實の記載を旨として、純文學の域に入るべきものは、あらずらむ、されど春水の過ぐるところ、柳櫻枝を交はさずとも、流れゆく

大日本史の編修

姿に落花浮絮の趣あり、枯木死灰を捕へ、これに氣脈を通じて、萬葉駿騷の雲を搖曳せしむるもの、實に渠白石が靈筆にあらずや。日本一の敘事文家は誰ぞと問へ、近松門左衛門ならずばすなはちわが白石なり。こゝに史學の消息を説くに當りて、特筆大書すべき人あり、即ち水戸の徳川光圀にして、白石に先だちて世に出て、白石よりもさらに大なる事實を成したり。その史學に對するや、嘗にこれを以て一身の事業としたるのみならず、後世子孫に涉れる社會的一事業となしたるなり。同時にまた光圀は文學の保護者なりき、古典の學の復興は實にその賜にして、新文學の發現もまた渠に負ふところ鮮少なりといふを得ず。光圀は家康の孫にして、頼房の第三子、兄を超えて家督を承く、承くといへども、自ら安んぜず、史記の伯夷傳を讀むに至りて、殊にこの感深く、史記尊重の念はやがて歴史編纂の計畫を促したりと稱す。一説には、林春齋の本朝通鑑に、皇家の始祖は吳の太伯の後なりとあるを見て、世なほかくの如き僻説あるかとして、これを改訂せしめ、みづからまた修史に志したりとも傳ふれど、強ちに信ずべからず。さて光圀が叱咤督勵の効空しからず、彰考館

水戸學の大
義名分説

の儒臣はよく名君の素志を成就せしめたり、近時に至りて大成せる大日本史即ちこれなり。

光圀は曩に一言せるが如く明の遺臣朱舜水を聘して賓師とし、程朱の學に歸して、最も道義を重んじたり、常に家祖家康を尊崇して、その神靈を拜すること忘れざりしが、これと共にまた深く皇室を畏敬し、毎歲元旦必ずまづ西に向つて宮闕を遙拜したりといふ。されば大日本史の編輯に當りても、大義名分を正しうするを以て最大最要の使命とし、この立脚地によりて在來の國史に三個の訂正を試みたり、何ぞや、神功皇后を帝王の外にして、皇妃傳に收めたるはその一、大友皇子を本紀に加へたるはその二、神器の所在を標證として、南朝を正統に立てたるはその三なり。今日より見れば、これらもまた多少の論なきにあらざるべしといへども、渠が旨意の存するところは、則ち諒とすべし。わが身は幕府の近親、奉ずるところは支那の儒學なり、この境遇の桎梏を蔑視し、この學問の束縛を脱し、國體の存するところを明めて、自覺せる國民が指南車たらしむとせる光圀はまた偉なるかな、これを以て畢竟その宗家に禍せること多か

萬葉集の註
釋

るべきを悲しむが如きは、時運の變遷を思はずして、區々たる一家族の存亡に執着する至愚の偏見のみ、光圀また古文を輯めて扶桑拾葉集を成し、法度儀式を類別して禮儀類典を撰す、しかもその計畫は別に更に大なるものありて存しき、萬葉集の註釋すなはちこれ。

萬葉集は奈良文學の精髓なるに、平安朝に至りてすでにこれを讀むもの多からず、鎌倉以後はまして一二の註釋ありといへども、暗中の摸索のみ、その書は傳ふれどもその意は解すべからず、古史の闡明を以て己の任とせる光圀は深くこれを遺憾として、これが良註釋を得んことを思ふ。事の成否は當事者の人選如何による、江戸に求むれども、この地文運なほ盛ならずしてその人を得ず、乃ち遙かに大坂なる下河邊長流に託す。長流は大和の人、古典を學んで自得するところあり、説くところ舊套を脱却して、頗る獨創の見に富み、後年浪華に寓居するに及びて、就いてその門に入るもの甚だ多し。されど性狷介にして、また疎懶、平生人の刺を通ずるものあれば、好惡意の嚮ふところに任せて、或は座を空うして引き、或は門を閉してこれを謝す。されば水戸家の依囑に應じて、心

契沖が古典の學

に快しとする時にあらざれば毫を下さず、事業の進捗はかくしからずして、荏苒歲月は経過し、遂に註釋を果さずして歿す。光圀なほ屈せず、更にその人を求めて長流が莫逆の友契沖を得、禮を厚うしてこれを聘す、されど契沖は俗事を煩はしとして草廬を出でず、光圀が紙筆を送りて懇に事を囑するに及び、やう／＼に庵中に筆を執ることを諾す。

阿闍梨契沖は攝津の人、幼にして薙髮して眞言宗の僧となり、高野、長谷、室生等に修道苦業し、特に悉曇の學に深き淨嚴律師に學びて得るところあり、元來契沖の嗜好は佛教の經典よりもむしろ古典の學に傾けり、一たび悉曇を律師に授けられてより、これをわが國の假名と對照比較して研鑽怠らず、平安朝中葉以降假名の用法の甚しく墮落せるを發見し、これを古代の精確なる格式に歸さんとして立言していはく、正しき假名を知らむとせば、まづ直ちに古事記、萬葉集、和名抄等の漢字の音を假りたるものによらざるべからず、平假名、片假名を用ひたる書は、轉寫の際、誤に誤を傳へて到底信を置くに足らず、所謂定家假名遣の如きは殊に杜撰を極めたるものなりと、かくて契沖はその生涯を通じ

戸田茂睡

て二個の大事業を成就したり、一は歴史的假名遣の復興にして、和字正濫抄はその具體的發表なり、一は即ち萬葉集の研究にして、光圀が依託によりて拮据經營、一生の心血を瀝いで成れるもの、實にこれを萬葉代匠記四十卷となす。かくて契沖が偉大の勢力と卓抜の見識とを傾倒して、この書を考註するに及びて、古代文學の寶庫は突如として暗中に開け、無價の寶珠は燦として光彩を放つ、わが國の復古の學はこゝに至りてその緒に就けりといふべく、このち幾ばくもなく國文學の隆々たる奎運を迎へたるも、契沖の功多きに居るは勿論の事なり。

契沖は古典を註釋して一世を裨益したり、この時江戸に戸田茂睡あり、梨本集を著はし、中世以來の歌壇の積弊を痛擊して、みづから和歌革新の先覺者を以て任じたり、されど茂睡は創作の技において拔群の譽なし、その論も破壞的にして建設的ならず、詞を盡して、制の詞、主ある詞などは師範家が相排擠せんが爲、その道を尊くし、神秘にせむが爲に造り設けたるものなるを論破したりしに過ぎざりしなり。とにかくにその識見は敬重するに足るべく、これもまた元

國學興起の
順序

祿特異の現象にして、古代慣習の束縛を断たむとしたるものなるが、當代の歌壇はいまだ直ちにこれに應ずるの準備を缺きたりけむ、さしたる反響を見ずして止めり。

仁齋の古學は抽象を主として哲學的思索に傾き、徂來は政治經濟の如き實際の方面に重きを置きしが、その說漢學に出でて一般國民に緊密の感と與へず、共に未だ以て當代における社會の反省的思想を満足せしむること能はず。さらに水戸の歴史學は道義を唱へ、名分を正しうせむことを力めたりといへども、なほその初は過古を過古として、現代と沒交渉なりしを如何にせむ。契沖が古典の學また然り、渠やもと圓頂緇衣の徒、固より漢學者の時流に伍して佛敎に對して敵意を挿むものにあらず、さりとて儒敎に對しても後の國學者の如き偏見は持たず、その古文を註するや、論旨極めて公平に、理智の指導に従ひて、中世の間、傳説と俗信とによりて謬まられたることを正して、また遺憾なきが、その從事せるところは専ら古文辭の學にあり、古の假名遣を今に復活せしめむとしたる一點のみは、その學を以て現在に關係あるものとしたりといふ

を得べけれども、遂にその上に及ばず、倫理風俗に關して過古と現在とが異なる交渉を有するか、この邊の消息に至りては、一言もその口を洩るゝを聞く能はざりき。然るに思へ、元祿は現世主義の時代ぞ、自覺自信の時代ぞ、當時の國民には外國よりもわが國が尊く、過古よりも現代が主なり、この國民にして、すでに古代の歴史を明らかに、その美醜を發く、いつまでか手を空しうして徒らに古代の花を眺め暮すものぞ、更に進んでその蓋を抜き、瓣をちぎりて、自家の藥籠に收め、以てその理想を現實にし、社會を改善するの資に充てむと志すに至るべきは、當に然るべき發展の順序なり、かくして契沖の後に荷田東麿は出づ。

荷田東麿

荷田東麿は京都の人、幼にして古典の學を好み、制度格式、有職故實、國史、國文に精通し、當時、堂上家の人々が固陋頑迷風をなせる間に立ちて、ひとり異色あり、嘗て江戸に出づるや、名聲一時に傳はり、諸侯のその門に遊ぶもの踵を接す、八代將軍また祿を與へて召し抱へむとしたりしが、辭して京に歸る。東麿は一個の學者なり、而してその資質においては世の謂はゆる慷慨家なるものに似た

り。以爲らく、平安朝以來、歌文の道漸く淫蕩に流れ、今や絶えて上古純樸の風を存するなし、これを矯むるは我儕の任なりと、乃ち歌を詠ずるも、取材はおのづから他と異ならざるを得ず、戀愛の歌は一生遂に詠まざりきといふ、東應また儒佛の異教に學びて、道を説くものはあれども、國民が本來の性情に基きてわが國に固有の大道を闡明する者なきを慨し、歌うていはく、ふみ分けよ、倭にはあらぬ漢鳥の跡を見るのみ人の道かはと、渠が國史を極め、律令を明らかに、古學の盛衰、道義の興廢を研究したるもの、一にこの抱負を實現して、再び淳朴溫良の時代に歸さんとし、僞らず飾らざる上古の風を儀表として、今日の道德を律せむとしたるものに外ならず、或はいふ、さはいへど、東應の學は當時大に世に行はれし儒教の古學に負ふところなからずやと、それ或は然らむ、されど余輩の見を以てするに、元祿社會の風潮は必ずしも摸擬因果の關係を以て説くべきものにあらず、右に流れては仁齋等が古學の唱道となり、左に流れては東應が國學の建設となる、東西南北、趣くに從ひて、隨所に大渦は卷きたるにあらざるか、契沖との關係は固より否定せず、東應が仁齋等の學に暗示を得たと

平民文學の大觀

ころ強ちにこれなしとも斷ずべからず、されどこれらの交渉に重きを置くは、いまだ深くこの時代の世相に通曉せざるものなりといふべし。以上は學問に關する方面の觀察なり、これより去つて純文學の方面に眼を轉ぜしめよ、總じて江戸時代の文學に賞讃すべきは、そが上下を通じて廣く行はれたる點にあり、されど廣く行はれたりとはいへ、同一の文學が貴賤に通じて行はれたるにあらずして、讀者の階級によりて文學の種類を異にし、換言すれば各種の文學はその種類に從ひて勢力範圍を別にしたりしなり、いふまでもなく舊習を墨守したりしは上流者輩にして、これを打破したるは中流以下にあり、中流以下の文學、これを稱して平民文學といはむ、平民文學の發展は實にわが江戸時代の壯觀にして、またわが國文學史上の精華なり、この文學をしてかゝる盛運に際會せしめしは、一にこれに携はるもの、從來の拘束を離れて、自在にその創見を發揮したるによらずんばあらず、而して現代を謳歌せる元祿時代が殊にこの種の作家に富めりしはまた自然の勢のみ、かくて和歌を超えて俳諧行はれ、古風なる物語廢れて、浮世草紙興り、謠曲漸く下火になりて淨

芭蕉の正風

瑠璃盛に人氣を引く。
革新の旗を翻して天下の俳風を一變したりしは松尾桃青なり。桃青また芭蕉と號す、伊賀上野の人、初めその地の城代藤堂氏に仕へしが、のち名家と世事とを抛ちて専ら風流三昧に入る。その俳諧の經歷を尋ねれば、まづ京に出て北村季吟の門に古風を學び、また流行を追うて檀林風を弄ぶ。芭蕉もとより學才あり、詩にありては白樂天の平易、寒山子の禪機を喜び、わけて李杜の風格を慕ひて、桃青の稱も李白と相對せしめむが爲なりと傳ふ。わが國にては最も西行に私淑して、その山家集によりてこそ正風の眼は開けたれ。旅行の癖もまたこの自然詩人に負ふところあり、後年江戸に定住して後も屢、道祖神にそゝのかされて天外放浪の客となる。げにも抖擻行脚は芭蕉が一生の行樂、諸國の名所舊跡にして渠の詩囊に入らざるもの幾何かあるか、る經驗をもつて従來踏襲の俳句に臨めば、造化の隱微を究め、自然の秘鑰を開くべき詩の本義いづこにありとも知らず、この玩具の如き文學の形式によりて胸裡に鬱勃たる感情と目睫に映じ來る森羅萬象とを寫さむとれば、茫然自失せざらむと欲するも

得んや。李杜、西行の詩歌はさすがに宇宙の玄理を解して人生の奥底に觸れ、千載の後、讀者をして光風霽月の襟度を偲ばしむ。されど國異なれば言語同じからず、星移れば人情もまた變ず、渠等が詩形美は美なりといへども、直ちにわが筆に入らず、即ちこれを今に用ひんや、筌蹄は問はず、たゞ魚鳥を狙へ、月をだに忘れずば指おのづから指さむ。これを芭蕉が根本の主張にして、用語は現代を標準とすれども、取材は必ずしも月雪花紅葉とも限らず、見るものにつけ感興の浮ぶがまゝにうち出し、先哲の跡を見ずしてその意を見る。さても

古池や、蛙飛び込む水の音。

の一首に至りて、忽然として轉迷解悟の境に入れりと叫ぶ。この一句詩としての價値はさばかりに高しとも思はれず、たゞ芭蕉が經歷の上より見て、すなはち無量の妙味あり、今日まで渠が費せる千思萬考みなたゞこの境に臨んで即ち應ずる一味の妙諦を得むが爲に外ならざりけり。中心の感情は本、技巧の波紋は末たるべしといへる年來の所説は、こゝに至りて動かすべからざる自信となりけり。芭蕉の句は壯より老に及びて三たび變化す、漢語を用ふること多

芭蕉と鬼貫

く、絢爛の趣ありしはその初なり、花實併せ得んことを欲して苦心慘澹たりしはその中なり、切磋琢磨の功を終へて、成るところ却つて平易に、いふべからざる軽味を有するに至れるはその終なり。されど一たび古池の響に得たる信仰は生涯を通じて變ぜず、よく俳諧をして、盛唐の詩、西行の和歌と比較して軒輊するところなきに至らしむ、翁もまた偉なるかな。

芭蕉はもとより敢て推敲を怠るものにあらずといへども、興に乗じ機に應じて詠出するをその本懐とす、玉石混淆はこの種の詩人に免るべからざる通弊にして、吾人その好例を西行に見たり、芭蕉今はたかくの如く、或は松島の勝景に對して一句を吐かざるが如き、或は、道端の權は馬に喰はれけりなどの、時流には推稱せられながら、宛としてこれ道學的口吻、純文學としてはむしろ價高からざるものがあるが如き、是と非と、巧と拙と、集を通じて相半ばす、またその巧妙なるものを選ぶも、細緻なるものあり、放漫なるものあり、塵を拾ひて玉に化し、天地を方寸のうち、に收め、或は暉麗に、或は豪壯に、和易また悽慘、鶯や、餅に糞する椽のさき。

花の雲、鐘は上野か、淺草か。

山吹や、宇治の焙爐のにほふ時。

荒海や、佐渡に横たふ天の川。

名月や、池をめぐりて夜もすがら。

無殘やな、兜の下のさりとす。

數句いまだ以て作者の一面をも覗ふに足らずといへども、渠には千人の心あり、山川の景が行くに從ひて移るが如く、芭蕉の思想も時に從ひて變化窮りなし。大小併せ存し、清濁併せ呑むところ、これやがて大詩人の面目にあらずや、天下の俳士星の如く砂の如き時、ひとり渠が牛耳を執り、濟々たる一方の雄をして甘んじてその膝下に屈服せしめしも、一にこれが爲のみ。芭蕉一たび去つて其角、嵐雪以下の輩各、派を立て黨を争ひて、俳諧を口にする者は日に月に増ししかど、その道はすなはち衰へぬ。芭蕉と同時代に攝津伊丹に上島鬼貫あり、またよく舊套を蟬脱して、自然に歸り、趣味を重んずること、蕉風と頗る相似たり、たゞこの人や、進んでその流を布くを思はず、獨みづから清うして樂めば、名聲

不易流行

彼に如かずといへども、また一代の傑物たるを失はず、東に芭蕉あり、西に鬼貫を生める。元祿の風潮はまた推するに難からざるなり。

芭蕉既に道を立てて、門下を率ゐるに當りて、その箴言とするところを聞け、いはく、不易流行と、またいはく、さびしをりと、不易流行とは何ぞや、不易とは萬代不易の美の謂なり、詩を作らむほどの者は、この永劫不壞の美を捕ふるを要すとなり、流行とは時を逐うて推移する風潮の變遷なり、句を捨るほどの輩は、不變美を望むと共に、またこの隨流時變の現象を逸すべからず、人も解せぬ姿言葉に古代の形骸を死守するが如きは、わが黨のことにあらずといふなり、例へば悲喜の情を述べ、賢人義士を讃するが如きは、不易の領分、人事を寫し、風俗を歌ふが如きは、流行の範圍にあらずや、前者は他くまで純正にして、溫雅なるを特色とし、後者は流行の珍らしく、用語の新しきにをかしみは存す、畢竟芭蕉は彼によりてその一面純美に憧憬れし、古典派の詩人たるを明かにすると同時に、此によりてその一面また匆忙なる世態の波に掉し流るゝ、元祿一般の思潮に同化したりしを、自白せるものなるが如し。

さびしをり

さらばさびしをりとは如何、寂は句の色においていひ、寂は句の姿においていふ、また細みといふことあり、これは句の心においていふ、何れも相扶けて幽寂冲澹の趣を得しむ、苟くも俳諧の道に遊ぶもの、この三者の旨を解せずんば、作るところ或は妖冶に過ぎ、或は浮薄に流れて、眞實の妙處には詣り難かるべしとなり、かく芭蕉が閑適の境地を説けるは、その人社會の匆忙に應接しながら、また一步をこれより退いて超然たるところありしを説明して餘ありといふべし、抑、俳句はわが文學のうち形式において最も小なるもの、複雑の思想、繁劇の動作、時間の經過を寫すが如きは、三句十七字の堪ふべきにあらず、従うて個性美よりも普遍美、人事美よりも自然美、活動よりも寂靜を主とするは、争ふべからざる約束なり、芭蕉以前既にこの傾向は明かなりしかど、芭蕉に至りて特に然るを見る、渠や流行の強ちに無視すべからざるを説けど、重んずるところは到底不易にあり、寂、寂ほそみといふも、畢竟同一論點に歸着せむのみ、一はこれ芭蕉が性情の然らしめしところ、また自然との默契もあるべく、佛頂禪師に參して獲得せる宗教的信仰にもよることなるべし、さてこそ俳諧の性質と芭

町人の勢力

蕉の性格と相待ちてこゝに渾然たる正風の一體は成りたるなれ。正風の體たる、幽玄にして枯淡、流俗を超越して、遠く西行の和歌、雪舟の墨畫に接すといへども、この點やがて元祿一般の平民的風潮と際離する所以、芭蕉が現代の詩人といふよりもむしろ古風に愉悅する人たる所以なり。芭蕉の沈靜と枯淡とは社會と風馬牛、その意を得たりと稱するものも實はその眞を得ず、大多數はこれに對して興會を感ぜず、元祿の平民は更に自己の社會を描ける積極的なる娑婆氣に満ちたる作品を要求す、この要求に應じて西鶴と近松とは出てたり。元祿時代は芭蕉の如き消極的世界觀を喜ぶべき時代にはあらざりき。世は太平なり、生活の程度は進みぬ、進みて驕奢の極に至りぬ、わけても平民の勢力こそ見ざましけれ。かれらの中には、折ふし運輸交通の道開け、土木建築の業興れるに乗じて、これに身を委ねて一攫鉅萬の俄分限も少からざりき。慶長の角倉了意が保津川、富士川の改修は今昔の物語なれど、明暦の江戸の大火に木曾の木材を買占め、その後また安治川を修して功利ふたつながら收め得たりし河村瑞軒は元祿の初にいまだ死せず、江戸には紀文と奈良茂と全盛なり。紀文

は郷土の名産紀州蜜柑を江戸に上せて巨利を博し、東叡山根本中堂の造營を請負うて得るところはたいかばかりなりけむ、本所に廣大の邸宅を構へて、客を迎ふる毎に席を新にし、數人の疊屋日々手を休むるに暇なかりきといふ、京の中村内藏助銀座として豪富に誇り、大坂には娼家茨木屋幸齋ありて家作の結構宮殿も及ばず、淀屋辰五郎は一萬坪の地所と一萬人に近き奴婢とをわが者として王侯の贅澤に比す、江戸の石川六兵衛の妻が清水の舞臺に京の難波屋十右衛門の妻と衣裳競をなして、模様の南天の實に累々たる珊瑚珠を列ねたりといふも、當年の榮華を偲ばしむる好話柄なり、財實限あり、虛榮の心いまだ消えざるに、藏庫まづ空しく、餘の遊興に夢の間に百萬の資産を蕩盡するもあり、分外の榮耀沙汰の限なりとて、幕府に籍沒せらるゝもあり、覺めての後の悲境はまた天下の耳目を敬てしむるものなきにあらざりしかど、とにかく當時の町入はまたもとの町人にあらず、武士こそ名のみはいめしかりけれ、實力に於いて天下は平民の天下なるを奈何にせむ、浦安の國安うして、米價頻に下落すれば、まづ苦むしものは米を祿なる武士ぞかし、あはれ金錢を土芥と見たり

し戦國武士の風はいつしか失せ、苦しき時は二本投げ出しても、町人様に才覺を頼まざるを得ず、さりとて町人もえらくなれるものかな。されば江戸には旗本奴に反抗して、幡隨院長兵衛、唐犬權兵衛等の所謂町奴なるもの跋扈し、然諾の一言に男一疋かけて、弱きを扶けて強きを挫く面魂さても頼もしく、上方の文學にも、その忠臣藏に殊に一町人を拈出して、天川屋儀平は男でござると氣焔を吐かしむ。わけて大阪は、秀吉が築城のかた漸く堺の富を吸収して、東西往返の要津となり、出て入る船の影港の口を埋めたり。江戸を政治の中心とすれば、大坂は商業の中心、彼處は武士の都にして、此處は町人の都なり、げにや全國の相場を支配するは堂島の米市場、こゝが日本の臺所とはよくぞいひし。みなこれ町人の自覺に因する現象にあらずや。

試に當時における國民の心裡を解剖せよ、いかに余輩明治の人と事態を同じうするぞ。今日古老の幕府時代の狀勢を語るを聞く時、余輩は悚然として膚粟を生ずると共に、いかなればこの曠古未前の盛代に生れ、隆々たる帝業を賛し、思想は自由に、才に任せて、驥足をも延ばすを得るかを思はうて、衷心いふべから

現代の賞讃

浮世繪と浮

ざる愉快あり、五千萬の蒼生今に至りて誰かまた戀々として維新以前の國情に歸らむことを冀ふものぞ。元祿平民の心情も必ずやまたかくの如くなりしならむ、おのれ等が擊壤鼓腹の情を以て幕府初政の時もしくは戰國の末季に比するに、夢か、幻か、はた天地の顛倒したるかを疑はしめむとす。もしそれ百般の文明に至りては、貞享、元祿の元和、寛永におけるは、なほ明治四十年の文久、慶應におけるに同じ、かれ等は余輩と共に眼を睜りてその長足の進歩に驚くと同時に、またかゝる歎美すべき社會の一分子として生存し、活動するを無上の誇とし、光榮としたりしや、明かなう。當時の町人が、わけても欽慕の聲を放ちて惜まざりしは、三津の繁華なり、よくもあらぬ例ながら、役者評判記難波入江船にいはいはく、天地人の三才に人ほどたつときはなし、中にもお江戸は武士所、都は女の艶所、大坂は町人所、人情風のよき所、頼むというてひかぬ所、きかぬと云うて死ぬる所、萬大腹中な寛濶所、麻につるゝ蓬つむ女までも心のだてな色所、そなはつて下卑ぬ所なりと。

かく現代を謳歌して、また他あるを思はざれば、古代の憧憬などいへることは

元祿平民の大禁物なり、口にするところは一より十まで現實世界なり、當時の小説に化物も幽霊も出てざるにはあらねど、また謠曲の幽霊の如きものにあらずして、臆病なる人間らしき化物となりぬ、その頃浮世といふ詞あり、なほ平安朝に今様といふが如し、すなはち當世風といふほどの意なり、元祿時代はこの浮世ならては夜も明けず、日も暮れず、浮世狂、浮世笠、浮世囊、浮世楊枝、さて同じ格にて浮世繪と浮世草紙とは出づ、浮世繪は當世の風俗をあざやかなる色彩に寫し出して、専ら中流以下の玩弄に供したるもの、菱川師宣、鳥居清信、宮川長春等最も名あり、浮世草紙はすなはち元祿の寫實小説にして、從來の假名草紙に對して起れるもの、これを論ずるは即ち井原西鶴を論ずるなり。

井原西鶴

井原西鶴は現代謳歌者の張本なり、大坂の人、俳諧を西山宗因に學びて、檀林の高足と許されしが、固より繁忙なる都會に育ちし身の、心を動かすものは天地山川の自然にあらずして、變轉極なき人事の現象にあり、渠もまた芭蕉の如く幾春秋を羈旅に費し、異境に過し、は、一目玉鋒及びその小説によりて推されるれど、浮世に氣遠き月花はその性の嚮ふところにあらず、所詮の對象は人心の

秘密にあり、風俗の真相にあり、殊に諸國遊里の状態を探るを以て旅行の目的とす、かくの如き人の喜ぶところの思想はよく從來の小詩形に盛るを得べきか、果然、俳士西鶴は四十一歳を一期として小説家と豹變したり、その處女作はすなはち天和二年の好色一代男にして、これを江戸時代の小説に一時代を劃せし傑作なりける、この作一たび梓に上るや、讀書界は色めきたりぬ、かねて一代の民衆が心に描きたりしところは、この作によりて現實にせられたり、これより西鶴の名一時に高く、俳壇の鬼才其角の如きも、吉原五十四君を著はしてまた渠が作に擬すれば、大勢は推して知るべきのみ、一代男に始まりたる快樂本位の小説即ち好色本は爾後數年うち續きて、よく三都その他の遊廓の委曲を盡し、洛陽の紙價爲に高かりしが、機を見るに早き渠は、喝采の聲未だ收まらざるに先だちて、局面を一轉し、忽ち武士を題目とせる武道傳來記等を出す、されどこれらは固より町人の謳歌者たる西鶴が得意の壇上にはあらず、更に三たび移りて終に町人社會を捕へ、筆もまた漸く圓熟の境に入れりしが如し、日本永代藏、胸算用などはこの期における雄篇とす、この外に珍事異譚を集めた

西鶴の思想

るもの因果物語の類もありしかど、一括していふに西鶴において最も見るべきは初の戀情小説と後の町人小説とにあることいふまでもなし。一代男といひ、一代女といひ、いづれも前後一貫せる一篇の主人公を許けて、その生涯の情事を寫したるが如し。もしその描寫をして思ふさまの現世的快樂——社會の制裁を無視し習慣の束縛を侮蔑せる人間生慾のたけ——を盡さしめ、以て當時の町人に媚びたるものなりとせば、その理想の賤劣尾籠は憫笑するに堪へざるなり。されど余を以て見るに、西鶴の小説は概するにその事件の進行においても、人物の性格においても、豫め這般の考案あるにあらず。否、主人公さへいづれともなき、今の新聞紙の三面記事に髣髴たる短篇を彼は輯集補綴せるが如きものなり。更にその記するところを見れば、伊勢源氏の一節を今様に譯出せるもあり、一代男の如きは大體の着想においてまた源氏に負ふところありといふを得べけれども、西鶴は竟に西鶴にして、その本領とするところは極端なる寫實にあり、渠や觀察奇警にして、精透、三都風俗の華奢に驚きつゝ、その紅紫眼を射る表面を描きつくせるは勿論、文明の裏必ずまた罪惡潛

西鶴と世相

み弱點伏する所以を抉出して餘すところなきは、筆鋒の簡潔犀利なると相俟ちて、洵に古今獨歩と謂ひつべし。しかれども外に觀ること多きもの、内に察すること少し、西鶴の觀察力はかくの如く精微なりといへども、その想像力に至りてはすなはち缺く、故にかばかり通曉したる遊里の様も、見聞を離れては一語も下し得ず、一旦經驗を寫し盡しては、これを再びするに重複の嫌あり、みづから生まむとすれば、想涸れ筆また慄まる、一代男に比べて二代男が劣り、二代男に比べて三代男が更に下れるは、これが爲のみ、西鶴はまた自らよく知れるものなり、その好色物より轉じて武家物、町人物に移れるは、時勢を見るに敏なるの致すところなるべしといへども、そもくまたこの弱點を自覺せるによらずんばならず。

さもあらばあれ、西鶴の壯年時代を表はすものは前の好色物にして、晩年を描けるものは後の町人物なり、この思想の過程はひとり西鶴に特有なるにあらずして、實に當時一般の民心を反映せるものといふを得む。青春血熱しては、短き世に樂むべきは色と酒、さつさ押せくと、駕籠を飛ばすは鳥原、新町、さては

吉原に流連すれど、中年以後に及びては、懐寒きおのが影を顧みて流石に秋風に身をすぼめざるを得ず。昨の遊蕩兒は今の世間男、勤儉貯蓄を口にし、人間萬事金の世の中と悟れるも殊勝ならずや。かくても西鶴はなほ快樂的詩人たるを失はず、時に榮華の槿花一朝の夢と消え易きを啣ちしこともありつれど、これら悲愁の曇は由來佛教的厭世思想の屢、わが國民の性情に浸みむとして、しかも能はざると一般、いつしか寛濶の風に吹きはらはれて、西鶴本來の面目は曝露せらる。後期の小説に現はれたる、働き得る日に働きて、老年の隱居を樂めよといへる思想は、また樂天的にして寫實的なり、西鶴自身の人生觀にして、一般世間の世界觀なり。

近松門左衛門

兩雄並び立たずといへども、名家時に相率ゐて起る、西鶴を結べる筆を以て直ちに近松に續がざるべからざる元祿文學は眞に余輩の誇とするところなり。近松門左衛門、巢林子と號す、傳ふるところによれば、はじめ西鶴に學ぶ、されど元祿は個性發展の時なり、徒らに人の糟粕を嘗めて止むべきにあらず、渠の趣くところは西鶴と異にして、別に淨瑠璃の新方面を開拓したり、近松の生國は

時代物と世話物

いづこなりけむ、異説並び存して定かならず、京に出てて摺紳一條家に仕へ、位階をさへ授けられしが、自家を知るものは自家に如かずとかや、更に浪人して都萬大夫座の爲に歌舞妓の脚本を作り、これも面白からざりしか、更に轉じて宇治加賀椽、井上播磨椽等の爲に淨瑠璃を作る。時に貞享二年、大坂の淨瑠璃大夫に竹本義大夫(筑後椽)といふものあり、道頓堀に竹本座を立つ、近松京を後に下りてこれと結び、爾後専らその座附作者として、相續いて新作を出す、義大夫もとより美音梁塵を動かすもの、近松が靈筆はこの妙腕を俟ちていよ／＼發揮せられ、唇齒輔車、當時難波第一の名物としいへば、竹本座の淨瑠璃よと世に許され、開場を待ちて市民はおしかけつめかけ、酔へるが如く狂へるが如くにもてはやしぬ。

そも／＼淨瑠璃には時代物、世話物の二類あり、時代物はその舞臺を過古に取り、世話物はこれに反して目前現在の出來事を仕組む、小野お通が十二段草子以來、淨瑠璃は概ね時代物なりしが、元祿前後の風潮に促されて、さて世話物は出て來たるなり。されど當時にありてはそれもなほ二番目物として餘興に演

時代物の性質

ぜらるゝばかりの様にて、近松が全力を盡してもまた時代物にありて世話物にあらず。その作について數へても實に彼の八に對する此の二の比のみ。今日こそ近松が世話物はわが文壇隨一の名品と仰がれ、渠がシェイクスピアと上下せらるゝ所以また一にこれあるが爲ともせらるれ。元祿時代の人々は國姓爺合戦、曾我會稽山に寢食を忘るゝことを知りて、いまだ曾根崎心中、天の綱島に不朽の價值あることを思はざりしなり。かくの如きは現在を生命とせる時代にありても、なほ全然歴史の束縛を脱すること能はず、むしろ題材は從來のまゝに歴史的事實を採用せしもの、されどその内容を探れば、則ち元祿の元祿たる所以を知る、所以とは如何。

時代物は世界を古代に取るといふ、されどこゝに古代といふにも制限を置かざるべからず、名のみを聞けばいかめしき武士もひと皮むけば當世の素町人、義經といふは大盡、辨慶といふは幫間、曾我兄弟は廓あらしのどら息子なり。されば史實の正否などいふむづかしきことはさておき、言語も全く現在慣用のもの、儀式正しかるべき上流武邊の語調も無下に卑しく、大坂商人が奉公人に

所謂心中物

對する口吻と毫も選ぶところなし。かくの如きは現在を最高級に置ける元祿時代にさもあるべき自然の勢にして、近松が故意にかゝる時代の混淆を敢てしたりといはむことの非なるのみならず、寧ろ近松もまた時勢の小兒たることを證して餘あり。

世話物はまのあたりなる事件を捕へてこれを種とすといふ、中にはやゝ時代の汚れるもあれど、多くは大坂またはその附近の地に起れる近事を、眼もくめるめくばかり早く淨瑠璃に作り、操にかけたるものにして、偏にその迅速を以て世人の喝采を博せむとしたるなり。その重なる題目は、いふまでもなく男女の心中にして、數多き世話物の中よりこれを除き去らば、剩すところ幾何かあらむ。當時蕩逸浮靡風をなして、この病的現象は到るところに蔓り、巷談茶話その沙汰ならぬはなし。近松この風習に乗じて、靈妙の筆を最近の世話に着くるに、言々涙あり、句々珠を聯ねしかば、果して一世を風靡し、これが爲にうらわかき男女のこの慘劇を實地に演ずるもの一時更にその數を加へたりきといふ、かのゲイテがファウストと思ひ比べて、天才の威力眞に人を驚倒せしむ。

世話物の性質

近松が世話物の先驅は元祿十三年に出でし長町女腹切にして、心中物の露拂は同十六年の曾根崎心中なり、これよりさき延寶六年、萬屋助六心中といふ淨瑠璃都一中によりて語られしかど、何人の作なるかを明かにせず、これについては近松を以て心中物の先達とすべし。さて近松は世話淨瑠璃を作るに當りて、その事件に如何ほど忠實なりしかと見るに、さまては實際に拘泥せず、經緯大體の骨格をこそ摸すれ、筋肉を附し、色澤を賦するは、一に渠が好尚の嚮ふところ、に俟つ。こは寸毫も違はず事實を寫さば、その關係者より苦情を申し込まると、恐ありといふ懸念にもよることなるべけれど、そも、また近松が特殊不動の趣味と理想とを有したるに、あらずんば、いかてかこれを想化し、醇化してかゝる妙篇傑作を做し得む。

近松と西鶴

近松が西鶴と全くその徑路を異にする所以は主としてこの一點に存す、西鶴は社會の事相を活寫して餘すところなかりしといへど、畢竟その表面的現象を對象としたるに、近松はこれら皮相の觀察を排して、天地と共に渝らざる人心秘奥の一物を把持せむとす。故に西鶴が小説には今はた忘れられたる服飾

近松の文章

飲食物などの語彙、應接に暇なく余輩を苦むれど、近松が戯曲にはさるたぐひ多からず、所詮は義理なり、人情なり、その衝突なり、義理と人情との衝突！あゝこれ人間性情の極致、人生の波瀾長しへにこれを繞りて重疊として止む時なし、この渦に投ずる時、佳人涙あり、これに觸るゝ時、才子腸を斷つ、近松はこの大題目をしも捕へて、剔抉分解、庖丁の牛を割くが如く、然るものあり、その道徳的觀念も西鶴に比して頗る發達したりしかども、さりとして後の褊狭なる讀本作者の如く、必ずしも善人榮えて悪人亡ぶべしとはせず、あくまで情理の絆に纏はれて抗すべからざる運命の手に翻弄せらるゝ世上幾多の人の子の爲に同情の涙を灑ぎ、これと共に訴へ、これと共に恨みて、結末多くは心中の悲劇となる、その少數は普通平凡の終極を告ぐるもあり、稀には因果應報の理を説明するに至るものさへなきにあらず、鎌倉以後一般の風尚漸く移りて、文學の従ひて左右せられたるを看取せよ。

西鶴はわが世の歡樂に沈溺して、放縱自ら恣にせるもの、その作物の内容の當時の時勢粧を描けることは既に述べたり、その文章は同一文學中に胚胎せる

ものなれば、さすがに古文の影響も少からずといへども、法格規約に至りては全然これを無視し、別に自由奔放なる一體を創めたるところに特色を有す。近松は然らず、渠は等しく社會を寫すといふも、主眼とするところは異にして、念利那に消滅すべき皮相の現象には意を留めず、ひたふるにその理想とするところを押し樹て、不滅不易の人情を探らむとせしかば、渠にありては今と共に更に訴りて古をも究めざるべからず、加ふるにその立脚地、西鶴の如く全く任意的なるを得ずして、舞臺に上せて語らざるべからず、操にかけざるべからずといふことの、その詞藻を拘束するありて、おのづからまた古文學の範圍に近づかざるを得ず、渠が初期の作物の如きは殊に著しくその影響をうけたり、甚しきに至りては謠曲と全く同一なる題目を選び、その文辭もそのまゝに襲用したるもの少しとせず、されどかくの如きは天才近松がいつまでか甘んじ得べき境界ならむ、幾ばくもなくこれらの困難をも打破し、古文を消化しながらも、自ら獨立自由の天地を濶歩し、一たび紙面に對すれば千萬言たちどころに湧く、こゝに至りて國文學の素養は却つて渠を助けたること少からざる

歌舞妓

べく、天馬行空の快筆得て端睨すべからず、もしそれ渠が簡潔なるべくして累説し、眞面目なるべきところに諧謔を弄したるが如きは、偶、千慮の一失にして、これをや弘法の筆のあやまりといふべく、いまだ以てその千載不世出の文豪たるを否定するには當らざるなり。

すでに啓蒙時代の終に説きたるが如く、歌舞妓と淨瑠璃とは發達の徑路を異にしたりき、而して歌舞妓には初より一人の名だたる作家をも出さず、近松の如きも、一時この方面に筆を染めたれども、後には一意淨瑠璃の著作に従事するに至れり、按ふに歌舞妓には直接に觀客に接する役者に無上の權力あり、作者はその下に立ちて註文にも難題にも應ずるの覺悟なかるべからず、この屈辱は學あり才あるものの受くるに屑しとせざるところなるべければ、おのづからさせる作家をこゝに誘致すること能はざりしならむ、されば脚本には見るべきものはなかりしが、それにも係はらず、元祿の歌舞妓はその技藝において目覺しく發達したり、役者の有名なるもの、京には坂田藤十郎等あり、江戸には市川團十郎初代二代相續いて荒事の名人、中村七三郎は無類の和事師とし

てもてはやさる。梨園の巨匠今を盛と輩出し、今日の演劇は實にこの時において成形せられしなり。

平民と演劇

そもく、淨瑠璃にもせよ歌舞伎にもせよ、その江戸時代に入りて生育せられ、元祿に至りてかく美花を結べるは、全く平民の發達に基けるなり。忝りて思ふに、平安朝には枕草紙、源氏物語等の出づるありて、散文、わけて小説はそののち今に至りても匹儔なきまでに振ひしかど、演劇の方面には何等の發展をも見ざりしにあらざや、これ他なし、劇の性質として長時間の演藝の鍊磨と大仕掛なる舞臺上の設備とを必須の要件とすれば、平安宮廷の貴族の生活いかに嫺雅に、庫裡いかに堆積し、長袖いかによく舞ふとも、その少数者の範圍のうちに、よくこの大道具を整へ、旬月の演技を繰返さむことの不可能なるはいふを待たず、僅かに單調にして幼稚に、華麗なる服裝と由緒ある樂器のほかは何等の準備もなき、雅樂を以て満足せざるを得ざりしもの、怪むべきが如くにして、また故あるかな、下りて室町時代に至れば、猿樂の興行には平民的傾向もやゝ見るべくなりしが、その後亂離の世の中とて、これに親み得べきものは、いつも悠

悠無事なる貴紳か、さらば干戈の暇に閑日月を弄せむとせる中流以上の武士輩のみ、舞臺といふも名のみにて、興行の時日も漸く一日二日、今日やめていつ始むべしとも限らざれば、その脚本は對話よりも諷誦して記憶に便なるものならざるべからず、その演技もまた一を學びて容易に他を推し得べき同型のものを選ぶべしとの註文も出づべし、かくてぞ千篇一律の語るよりも謠ふべき謠曲の特體は成りたる。しかるに江戸時代に入りて情勢一變、元祿には平民は一躍して文化の中樞となり、歌舞伎もまたこの新進の大衆に擁せられて、急劇の發展を遂げ得たり。こゝに至りて曩日の蓆張の小屋掛の面影はまた見るべからず、定紋の櫓をあげたる堂々たる定小屋は成りぬ、舞臺は廣く、道具は美に、衣裳は眼を奪うてきらびやかかなり、外題も半月、一月、評判よきは百日も打ちつゞくるに、日毎に新顔の客筋を絶たず、時人誇りていはく、新吉原と葺屋町とを知らずんば、江戸の繁華を語るに足らずと。

戯曲小説界の趨勢を見るに、西鶴の後、これを學びて當時の社會を寫せる小説日を追うて盛行したりしかど、その祖を凌駕するものなし、たゞ所謂八文字屋

八文字屋本

本なる一束の作物に異色を見るのみ。八文字屋本はこれを刊行したりし自笑の屋號をとりてこの名あるもの、自笑みづからその作者と稱せしが、眞の作者は別に存し、わけても江島屋其磧の名儕輩を壓す。この草紙は西鶴が好色本に倣ひて、男女の情事を主とし、殊に狹斜の風俗を好題目とし、更に等類にして異情なる小話を集めたる所謂氣質物を多く出せり。寫すところ西鶴の如く表面の寫實に止まらず、やゝ近松が淨瑠璃になせるところをも試みて、滑稽皮肉なるが中に、一味悲愁の人情を籠め、行文はたその保守的なる京都の地に生じたる爲か、西鶴より一步を退きて一段の古文臭味を帶ぶ。さりながら八文字屋はもと劇評すなはち役者評判記に家名を擧げて、爾來年々ひき續きてこれを本業としたるもの、従うて小説も歌舞妓の感化を受くること多く、一方には近松によりて頓に興れる淨瑠璃の影響さへ甚しかりければ、その草紙はかれを摸しこれに擬して、おのづから清新の氣を失ひ、全盛幾ばくもなくして振はずなりぬ。

淨瑠璃の變

淨瑠璃の發達はこれに比するにめざましきものありき。竹本座創立ののち數

遷

義理と人情

年を出でずして更に道頓堀に豊竹座の起れるあり、紀海音を立作者として、盛に竹本座に對抗を試み、南北競うて勢を張らんとしたりしかば、これに伴うて作者も多く出て互に想を練り腕を磨く。近松の歿後最も噴々の名ありしを竹田出雲とす、その脚色の變化に富めるは近松に比してむしろ優るところあり。されど近松を外にして、またさばかりの學識と才能とを提げてこの道に入るものは得がたかりしかば、この頃より合作の風頻に行はれ、全體の統一を擱きて部分の美に力をこめ、たゞ一幕の山を看板にして觀客の好評を博せむとす。趣味低き平民の前にはかくても所期の成功を收め得たりしかど、その實は一部の劇曲にも各齣の優劣あまりに顯著に、人物の性格も矛盾撞着、前後に關聯もなき人物事件を加へて、たゞ支離滅裂と評するの外はなく、所謂夢幻劇の病弊は膏肓に入りてまた救ふべからざるに至りぬ。近松逝いて數十年、その間なほ名ある作者も少からず、世は淨瑠璃の世とこそ見えしに、一人のこの弊風を矯めて巢林子に踵を接せむとするものも出てざりしこそ是非なけれ。

中古以來、制慾克己の精神次第に養はれ、女性を卑むの風盛なるに従ひて、もは

や戀愛は文學の上乗なる題目とはせられずなりぬ。江戸時代に至りて儒教の影響殊に著しきものあり、上下を通じて一切情緒の發動を抑制するの主義を取れば、まして男女の相愛の如きは、最も情弱なる人間の閑事、否、罪過として、架空の説話としてもまた耳を假す者なきが、この時代における社會の傾向なりき。何事ぞひとりわが元祿時代の感情を重んじて、中にも戀愛に我を忘るゝもの多きや、この點において元祿は江戸時代らしからぬ。江戸時代にして、むしろ一步を平安朝に容るゝものといふべし。平安朝と元祿時代とはわが國における感情主義の二大盛期なり、されど類似のうちおのづからまた差別は存す。これを文學の上に見るに、かれにありて波瀾を起ししものは常に感情と感情との衝突なりしかど、これにありては到るところ感情と義理との葛藤なり。こは、定まれる道徳律のいまだあるなく、ひたすら感情の中庸を標的として行動せる平安朝と、忠孝仁義の道に國民思想の根柢を固めたる江戸時代との、社會精神の相違に基ける必然的結果なるべし。

凡下なる平

民の趣味

そは主として町人の間のことにして、學識備はり、徳操高き中流以上の社會にはあらず。従つて戯曲小説の喜ばれたるも大抵前者の範圍を出でざりしは、今更説くまでもなきことなり。事情かくの如くなれば、戯曲小説において道徳とよび義理となふるものは、また極めて皮相淺薄なるものにして、後人をしてそのあまりに形式的なるに失笑せしむ。殊に一轉して金錢すなはち義理の存するところなるに至りては、迂愚また及ぶべからず。義理の爲ならで金錢の爲に死すとは、すでに近松のその作中に喝破せるところ、いかに理財と離れがたきが町人のくされ縁とはいへ、親の藥代拂はむが爲にその身を奴隸にし、主家の寶をとり戻すとてその妻を賣るの類は、まだしものこと、放蕩に身を持ちくづして融通がつかずとて我とわが刃に伏し、遊女うけ出す身の代がなしとて心中を急ぐ、自殺は實にかれ等が壓迫苦痛を脱すべき唯一無二の手段にてありけるなり。

戀愛は當時の倫理觀よりしては勿論排斥せられたり。男女が自己の自由意志によりてその愛情を交換するが如きは、以ての外の所業にして、女子はもとよ

遊廓

り、男子も結婚問題は徹頭徹尾これが解決を父母に仰がざるべからずとせられ、夫婦同棲の後も、よしいかほどの愛情をうちに貯ふとも、表面は儼として主従の如き關係あり。お夏の如き、おさんの如き、お七の如き、西鶴、近松の名筆に上りたればこそ、世の同情をも贏ち得たれ、實際に見て當時の社會は淫奔破倫の徒と做し、半ば憐笑を禁ぜざると共に、半ばその無節操を彈指するに憚らざりしなり。たゞ一別天地あり、こゝにはさしも峻烈なる社會の制裁もなく、窮屈なる道徳の桎梏もなし、はにかまず、氣どらず、とりつくるはず、天真の性情を露出せる婦人は、こゝに來りて始めて見るべし、これを當時の遊廓とす。蓋し元祿の人士が遊廓に對する、その觀念において大に余輩と趣を異にするものありて存す。當時の遊廓は幕府の消極政略の壓迫に堪へざる鬱氣の噴火口に外ならず、これや上下おしなべて邊幅を去りて自由平等に遊興すべき唯一の交際場裡にして、遊ぶものも遊ばすものも、一面には金錢の勢力の下に動けど、また世間一般の徳義を離れて、憎むも愛するも感情趣味の和合衝突により、意氣あり、はりあり、情もあり、かくて京の島原、大坂の新町、江戸の吉原はいつも不夜

この時代の概観

城の繁昌を極め、西鶴を初として作家のこれに向つて筆を着くるもの甚だ多かりしかば、元祿文學の花は大半この裡より咲き出てぬといふも不可なることなし。

要するに元祿時代は江戸四期のうち最も積極的なる時代にして、思想極めて自由に、かつ創意的なり。この特色は學問文藝の各方面に現はれ、仁齋、徂來の漢學におけるあり、契沖、東應の古典の學と國學とにおけるあり、或は俳諧の芭蕉を呼び、或は戯曲小説の西鶴を起し、近松を作る、今と昔と、自然と人生と、向ふところは各、異なりしかども、發するところは一個の源泉なり。渠等は故らに歩調を整へ、氣脈を通じたるが如くに、勇往邁進、以て中世以降、時勢を蔑にし、人心を麻痺せしめ來れる歴史的制裁の圍を破らむと試みたりしなり。而して或はその理想を古代に求め、或はその趣味を現代に見出でて、十人十色、時に相扞格するものさへなきにあらざりしかど、畢竟これ個人性の相違に加ふるに、經驗の不同より來れる結果にして、この紅紫參差として、枝を交はせるところ、やがてまたわが元祿文學に一入の光彩を添ふる所以ならずや。

余輩は今や江戸文學最盛の時期を敘述し了りぬ。一顧名残を惜みて、更に歩を轉ずれば、自由を叫び個人を重んじたるも煙火流星一時の現象、世は人は再び太平の波に浮沈して、壓制、没自我、習俗の中に漂はむとはするなり。

第四章 文運東遷

八代將軍

徳川氏中興の名主を八代將軍吉宗とす。家康の曾孫にして、折しも幕府の政弊漸く現はれ、三代の功業日に落ちむとする時、紀伊より入りて將軍職を繼ぐ。大に紀綱を振肅し、武事を獎勵すると共に、風俗の頹廢を矯正し、人才の登用はいふも更なり、刑律を明にし、貧窮を賑はす。しかのみならず、外國科學の勝れたるを見て、これを範として天文、窮理、本草等の學に一大刷新を行ひ、最も意を殖産工業の發達に留めしかば、諸國の物産一時に起り、餘澤の引いて今日に及べるもの、決して少しとせざるなり。されど翻つて思へ、吉宗が勤儉質素を唱道し、全力を竭して制慾主義を鼓吹し

文藝の窘束

たる結果は、いよ／＼國民の自由を奪ひて、個性の没却をきたすことなかりしか。消極政略は徳川幕府と終始起倒す。家康まづこの方針を樹ててより、前後十五代、政治に與るものは、この遺範に悖るを得ず。吉宗いまはたこの主義を固守して天下に臨む、その人物の大なるに伴ひて、四民の壓迫を感ずることもまた甚しかりしや明かなり。一例を文學に因縁深き出版法に取れ。そも／＼出版に對する政府の干涉は、幕府創立以來のことにして、敢てこの時に始まれるにあらず。すでに元祿中にも、風俗を攪亂し、虚説妖言を構ふる書冊の版行を禁ずるの法度を見しが、これにも拘はらず、放縱淫逸なる當時の社會精神は益々發達したれども、こは風紀取締の上に已むを得ざる事情も存して、強ちに咎めがたき節もあり、されど享保に至りて幕府の箝制は、俄然重きを加へたり。即ち従來行はれたる小説院本類はこの時更めてその版木の檢閲を受くべきこととなりしのみならず、新に上梓すべきものは、その種類の何たるを問はず、すべて著作者及び發行者の署名を要することとなりぬ。こは作家及び書肆をして自己の責任を知らしむるもの、固よりこれを咎むべきにあらず、むしろ讚賞に値すと

この時代の
二大現象

いへども、その上に將軍家については、現在の直統はいふに及ばず、その過去の歴史またはその家系の枝葉に關する瑣細の記事をさへ一切載することを禁ずるに至れり。かくの如くんば種々の窘束すべて操觚者をして反省せしむるが爲よりも、社會の向上を欲するが爲よりも、むしろ徳川氏の安寧を計るが爲なり。かくして花紅葉咲き連ねたる元祿の世を過ぎて、早くも人心萎靡、文藝の發展はこゝに一頓挫をなしたるなり。

文運東遷の過渡期は前後五十年なり、その間上方は形勢日に蹙まり、江戸は漸く好望なりといへども、いまだ偉觀を成すに至らず、一般の勢運は要するに不振なりといふに憚らず、さらばこの五十年は全く文學史上に特筆すべきものなかりしかといふに、さすがに然らず、少くとも閑却すべからざる二個の重要現象ありて存す。元祿の盛運に乗じて諸般の學藝勃興したりしが中に、時において最も後れ、或はこの時代に屬すともいふべきものに、荷田東廬の國學ありき。その特色はすでに前代に敍べたればまた贅するの要なし。今は賀茂真淵がその後繼者として出て、學派の基礎を堅うすると共に、これを傳播して一世を

前後連鎖の
時代

風靡せし徑路を説かざるべからず、これ一なり。元祿まで漢學は専ら修身齊家治國平天下の學問として、實踐躬行の倫理學、もしくは高遠深遠なる哲學の如く思惟せられたりしに、風潮一變、單にこれを純文學の方面より見て、詩文として翫賞するもの多きに至れること、これ二なり。この二大動力が後の文藝に及ぼせる影響は極めて甚大なるものあり、幕末以後は漢學は洋學によりてその地盤を覆されたれども、彼も此も同じく外國の學にして、國學と相對して、内と外と時に提携し時に反抗して、今日に至りて勢力なほ互解せず、國粹保存といひ、外國崇拜といひ、また維新前後における尊王といひ、攘夷といふが如きも、畢竟これらに對する好惡賛否の聲に外ならずといふべし。而して縦にこの風潮の變化あり、横にこれを貫いて、文藝の中心は京を出でて江戸に遷る、一時の趨向はすなはちこれなり。

國學の發展は、いふまでもなく、前時代における活潑なる社會精神が存續繼承して、こゝに一段の進化を示せるものなり。すなはち元祿の遺業はこの時代に至りて始めて光彩ある完結を告げたるものなるが、また一方よりいへば、次の

江戸盛運期における宣長、篤胤等が事業の先鋒となれるものにして、勤王討幕の思想はすでにこの時に萌えたるなり、否、すでに元祿に兆したるなり。漢文學の流行もまた次期に至りて更に大に興るべき新文學の素地を作れるものにして、いづれも前後の關係を味ひて興は一層深かるべく、この時代のみにしては、さしたる發達も認めがたきなり。長あるもの短また伴ふ、國學はよく中世以降の束縛を脱して、上古の簡素自由の時代に復歸せんとしたるが、あまりにこれを憧憬せる結果はまた却つて古文學に對する拘泥となりぬ。漢文學もまた彼の簡潔の辭句、遒勁の格調を輸入せる功勞は否みがたけれど、その内容をも模倣して及ばざらむことを恐れたるが如きは、餘弊の甚しきものなり。以下漸を追ひてこれらの消息を明かにすべきが、獨立せる一時代としては、所詮この時代はさして壯大の觀あることなし。文學者その人も他の時代に比して寥々たるを免れず、たゞ國學の眞淵、俳諧の蕪村の如きは、匹儔稀なる大家として特筆大書するに憚らず。

賀茂眞淵

縣居の翁賀茂眞淵の生地は、平安朝以來文學の中心地たりし京都にもあらず、

眞淵の學說

新文學の勃興地たる江戸にもあらずして、その中間なる遠江なり。はじめ渡邊蒙闇につきて徂來學をも修めたるが、のち東應の名を聞き、京に出て、その門に入りて、専心攻學、終に國學の奥旨に達す。師歿してのち、郷里に歸りしが、決然として以爲らく、今の時學を弘め名を傳へむとせば、江戸に出づるに如くはなしとす。なほち行李を調へて東下し、帷を下して諸生に教授す。當時、江戸の地に學者も少からざりしが、眞淵の唱ふるところ奇抜にして生意あり、講筵常に學生を以て充ちたりとぞ聞えし。馬の嘶くにさへ驚ける幕府の當事者はかくと聞き、如何ぞ不問に附するを得む、與力加藤枝直をして往いて學問の正邪を探らしむ。枝直もさるもの、是非の鑑別は明かなり、一たび眞淵の聲咳に接しては、推服措かず、宅を己の近隣に構へてこれを迎へ、自ら師友を以て待ち、またその子千蔭をして子弟の禮を取らしめしかば、眞淵の名はいよゝゝ高く、ついで東應の子在滿の推薦によりて田安宗武に仕へ、生涯江戸に寓して、著述に講說に専らその道を傳ふるに盡瘁したり。

そも、眞淵が研學に當りて憤慨禁ずる能はざりしは、和歌が古今集以來漸

く優弱に流れて、消閑の末技、戀愛の媒介となれると、漢學が國民精神に浸潤して太古淳樸の風を失はしめたとにあり。渠はこの和歌の墮落と漢學の跋扈とは個々關係なきものにはあらず、漢學傳播以來漸く和歌は剛健の氣を脱して女性的となりしなりと推定し、従うて支那の學問に對して絶對的反抗を試み、かくの如きは天地自然の大道にあらず、かの國の如き虚偽詐瞞に充てる國俗を矯めむが爲に設けたる人爲不自然の道のみ、これをしも忘れて直ちに取りてわが國に應用したりしは、思はざるの甚しきものにして、無用の拘束はこれより人心に加はり、天真の流露を妨げて、さらずばいかに美はしかるべき歴史の上に虚飾惰弱の痕を遺さしめしなれ、今よりわが國の前途に慮り、社會人心の改善を圖るものは、厭ふべき平安朝以來の文化を捨てて、須らく本然の要求のまゝに行動せる無垢なる祖先の古に歸らざるべからずと絶叫せり。この點において眞淵の説はやゝ大道廢れて仁義ありといふ老莊の説に似たり。さらばいかにして漢學の影響なきわが國本來の真相を知るを得べきかといふに、眞淵答へて曰く、上古の和歌を究むるに如くはなし、その他典籍いづれもか

歌人として
の眞淵

らごゝろを免れず、和歌のみ人性の眞を詠じて偽らず、飾らず、和歌といへど固より比較的後世の作は與らず、萬葉の四千四百餘首、記紀のうちなる二百餘首を人の國より傳はらて神世を受けし人心の精髓とも稱すべきものにはある、これを學ばば古意おのづから明かに、古意を範として進まばすなはち無爲の自然に復するを得むと、かくて自然の順序として眞淵は古言の研究に心を潜め、萬葉考、祝詞考、冠辭考などいへる有益の著書あり、されど方便はやゝもすれば目的となる、眞淵が究竟の標的は古道の復興にありしかど、畢竟古文學の研究となり了せるの觀あり、恰も徂來が復古説を唱へて古文辭の考察に流れたると同一徹にして、眞淵がそのはじめ修得せる漢學の影響はこゝに至りて更に現はれたりともいふべきか。

眞淵が萬葉集の研究は契沖に比して更に一步を進めたるものにして、その説の世道人心に影響ありしは遙かに徂來の上にあリ。されど眞淵の特長は道學者たり宗教家たるよりも、文學者たるにありて、天稟詩人の素質を備へたり。渠は古道を闡明せんと力めしかども、深く哲學的思索を廻らせるにあらず、わが

國固有の道を復活せしめむとしたりしかども、これが宗教的宣傳を計畫せるにあらず、寧ろ自己の好尚によりて一種尙古の文藝教を樹立せむとしたるものにして、その創作の才に至りては蓋し驚嘆すべきものあり。萬葉の研究に従事せる渠は、かくしていつしかその言語と格調とに感染し、これを以て直ちにその作歌の上に應用し、また長歌の復興をも志して、苦心經營、作るところ朗々として誦するに堪へたるもの多し。たゞあまりに古語古調を弄したるが爲に、當時の讀者には、甚だ耳遠き感ありしのみならず、廢語を用ひ、またその意義を誤解したるつかひざまさへ少からざりしかど、とにかくに虚飾の粉黛を退けて自然の古意を見んとし、萬葉の形式を借りて、ある程度までこの理想を實現し得たるは、さすがに文壇一代の雄たるに耻ぢず。これより萬葉崇拜の風一時歌壇に吹きすさみしかど、精神を汲むを忘れて、外形を摸するを事とするもの徒らに多かりしは、惜みても餘あり。當時これと全く反對の方向に出てたるものに京の小澤蘆庵あり、旨と平易の雅言を用ひて率直なる感興を遣り、やゝ歌壇に重きをなせりといへども、その勢力に至りては眞淵に及ぶべくもあら

漢學の變遷

ざりき。

江戸時代にありて外國文化の傳はれるは和蘭と支那とよりし、共に長崎を経て國中に弘布す。されど前者の影響はいまださばかり大ならず、いよ／＼勢力ありしは後者なり。顧れば漢學は學藝の先達として太古以來の關係あり、たゞ時代の變遷に伴ひて、これに對する態度の異なりしのみ。この時代においては、元祿の初期までは嚴格なる哲學もしくは道德律として尊奉せられたりしに、その末葉に及びては、専ら文學の方面よりこれを學ぶものあり。徂來が古文辭學の如きはすなはちこれに傾き、その門下の服南郭、順庵門下の祇南海の如きは殊に然り。この二人は、柳里恭と共に、また畫才ありて、始めて文人畫を輸入したるもの、文徵明、董其昌などの明代文人の名これより漸くわが國に高し。詩文既に儒學を離れて特立したる上は、これを専門の學として門戸を構ふるものもあるも、怪むべきことにあらず。支那小説の研究に従ふものも漸く多くなりて、その翻譯書も現はれ、この流行はまた更に讀本の發生を促したり。もしそれ文人畫の勃興が天明調の俳諧に及ぼせる直接はた關接の影響に至りても、蓋し

與謝蕪村

また常人が意想の外にあらむ。天明俳壇の驍將を與謝蕪村とす。つらく思ふに、芭蕉歿してのち俳諧の風潮年を逐うて非に、群小宗匠おのゝ異を立てて、互に辯難攻撃すれども、その目的多くは糊口の道を得んとするにありて、月並の俗調鼻を衝くの臭あり、世はやうやくこの頹勢を挽回すべき天才者の出現を待ちたるが、天明の頃に至りて反動の氣運は正に熟しぬ。無爲庵楞良、雪中庵蓼太、春秋庵白雄、暮雨庵曉臺、南無庵闌更、これらもいづれ一騎當千の勇士ならぬはなかりし中に、旗幟最も明かなりしものこそわが與謝蕪村にはありけれ。蕪村は攝津の人、嘗て江戸に江戸座の俳諧を學び、のち京に住む。天性畫技に長じ、文人畫家池大雅と名を等しうして、兄たりがたく、弟たりがたし。されど二者おのづからその趣に於いて異なるものあり、蕪村の畫はあくまで飄逸洒脫、大雅は正にして蕪村は奇、彼は聖にして此は僊なり。自ら謂へらく、われに師なし、自然を以て師とす。最も意を筆墨の外に置けども、形態おのづから備はる、他なし。寫生より入りて寫生を離れたればなり。さばれ畫人としての蕪村はいま多く語るの要なし、たゞ看過す

蕪村の俳風

べからざるは、この繪事と俳句との關係にして、渠が俳句に對する主張はまた必ずや繪畫に於けると相同じかりしなるべく、かくて畫の筆法は俳に入り、俳の趣味は畫を助け、兩々相俟ちてその才能を發揮せしめたりと覺ゆ。芭蕉は靜寂の趣を得るを以て旨とせしが、蕪村の期するところは進んで活動の態を捉へむとするにあり、かれの消極的なるに反して、これは積極的なり。自然の景物を寫すこと多きは、彼此伯仲の間にありしが、これに主觀の語を交ふること多きは前者にして、あくまで客觀的態度を以て貫かむとせるは後者なり。芭蕉を古今集に比すれば、蕪村は新古今集なり。その

牡丹散りてうち重りぬ、二三片。

柳散清水澗、石處々。

の如きは、最もよくこの風尚を現はせるもの。また芭蕉は、専ら自然の懷に投じて、人事はこれを忘れむとする傾向ありしに、蕪村は好んでこれを詠ず。

御手打の夫婦なりしを、衣更。

鯨賣、市に刀を鼓しけり。

従うてその思想は、芭蕉に比して、やゝ複雑なりといふを得べく、殊に渠に多とすべきは、従來の俳句は、繪畫と等しく、一時的現象を描くを以て普通とせしに、更に進んで音樂的に時間の経過をも寫さむとしたるにあり、而してこの固定せる小詩形中に多量の意味を含蓄せしめむが爲に、簡潔なる漢語を借り來り、もしくは歴史的事實に助力を仰げるは、渠が屢用ひたる獵手段なり。

霜百里、舟中にわれ月を領す。

春雨や、綱が袂に小提燈。

見よ、かくの如くにしていかにもその句の活躍し、また複雑なるを得たりしかを、また見よ、かくの如くにしていかにもその調の緊縮し、かつ勇健なるを得たりしかを、燕村はかくの如くにして先哲がいまだ成し得ざりしところを、或る程度まで遂げ得たりしなり。この時に當りて、別に江戸より京に出てて名をなしたるもの炭太祇あり、また複雑の人事美を詠ずるに巧にして、この點のみにおいて、は敢て他人の企及を許さざりき。

俳句の性質

元來俳句はその文字僅かに十七、短詩中の短詩なれば、その對象はよくその特

點を捕へて、これを表すべき字句は酥の如く熟煮し、刃の如く鍛錬せるものなるを要す、もしこれを忘れて或は習慣に従ひ、或は枝葉に馳せむか、直ちに印象薄弱となりて、所期の思想を傳ふること能はざるべし、翫味者の方よりいふも、もしその人にして、十七字に約して突如として投げ出されたる事物に對して、嘗て經驗なく、はた趣味をも有せざらむか、一句の意味は頑として通ずるに由なかるべし、されば、俳句や、一見詠じ易く味ひ易きが如くにして、しかも詠じ難く味ひ難きことこれより甚しきはなし、貞徳以來、その流行天下に普く、芭蕉以後は吳服屋の手代、髮結床の下剃までが、やかなの運用に頸うち傾くる世となりたれど、弊害百出、半ばは博奕の如きものとなり果てたるも、畢竟その眞意の得がたきが爲なるのみ、芭蕉さへ複雑の思想はこれを避け、人事、時間の描寫はこれを難しとし、活動的狀態もその能くするところにあらざりき、みなこれこの詩形の不便の超越しがたきものあるを示すものなるべし、固より俳諧には種々の法則あり、その季を定めたるが如きはわけても著しき例にして、藤は春、牡丹は夏、鯉、奈良漬の類さへ、二月、六月のものやうに一定して動かさず、

詩文の隆盛

その煩瑣なる一見堪へがたきが如き感あるも、實は、この約束なくしては、片言隻句の中に時處の的確なる心もちが現はしがたきなり。その他雑多の法則も初はみな小詩形に免るべからざるべき缺陷を補はむが爲の方便として出来たるものなるべし。かゝる窮屈なる詩形をしも操縦して、許多の困難を排し、斯道の上に一新生面を拓ける蕉村が功はまた偉大ならずや。而して渠が句の芭蕉に比して時に浮華誇大の弊に陥るものなきにあらざるは、取材の相違に基くとはいはむよりも、むしろ人格の問題として見るべきものなるべし。蕉村歿して芭蕉以後の無明の長夜は再び来りぬ。長夜は明治の世まで續きぬ。

小説は、八文字屋本依然として情勢を持続すれども、毫も活氣を存せず、その間に教訓の意を寓せたるもの、または怪談、奇聞、實録類も多く出でたりしが、みな見るに足るものなし。この時に當りて著しく特色を有して、後の讀本の魁とされるものを英草紙とす。英草紙を説かんとせば、まづ漢文學の流行を思はざるべからず。漢文學の影響を受けてこの草紙も出でたるなり。さても文壇の情勢を察するに、今や詩文は都鄙に盛行し、詩社を設けて騷客を集むるもの多し。京

英草紙

には龍草廬の幽蘭社、江村北海の賜杖堂、服蘇門の長嘯社あり、江戸には服南郭が芙蓉社、安清河が市隱社ありて遙にこれに相對峙し、大坂には片山北海の混沌社あり、高陽谷は瓊浦芙蓉詩社を結びて、長崎、京の間を來往す。かくては稗史小説もひとり侮蔑せられていつまでか續かむ。長崎の譯官たりし岡島冠山は京攝に遊び、また東都に住して、通俗水滸傳、小説讀法等の著あり、更に岡白駒は支那の小説俗語に通じ、これに關する著述少からず。從來とてもこれを繙くものもとよりなきにはあらざりしが、これらの書出でてより、世人の稗史小説に對する態度は漸く一變し、讀者は日に増し、俗譯の出づるもの頻々として相次ぐ。

英草紙は實にかゝる時に生れしなり。その著者を都賀庭鐘といふ、大坂の儒醫博物骨董に精しき兼葭堂と友とし善く、船載の小説類のその一讀を経ざるは稀なり。この述作ありしは寛延二年にして、その續篇に繁夜話、莠句冊あり、いづれも短篇小説を輯めたるもの、元祿清新の氣なしといへども、漢文脈を交へて遒勁なる辭藻は殊に世人の注意を引けり。唯その文餘に漢臭を帯び、わが國の

習俗を寫すにさへ、或は、手を舉げて會釋すといひ、或は人を響應するに、粥を煮せしめなどいへる無意義の蹈襲隨所に散見するは、當時の人には珍らしと喜ばれたらむが、實厭ふべき限なること勿論なり。その内容は剪燈新話、聊齋志異等に倣へるものにして、珍異幻怪の談柄全篇に滿つ。蓋し八文字屋本全盛の世に小説改新の機を促せるものにして、この事業を以て上田秋成の雨月物語は出てたり。

上田秋成

上田秋成は大坂の人、後年京に寓して、その地に果つ。年三十五にして始めて八文字屋本風の小説に筆を染め、天成の才筆、すてにその處女作に現はれたりしが、みづからこれに嫌焉らず、更に方面を轉じて雨月物語を作れるなり。雨月は英草紙を見てこれより着想せるもの、體裁また短篇數種を集めたるものにして、各篇いづれも異事怪談ならぬはなく、内容形式ともに兩書を比較して明かに相承の跡を見る。されど、前者は小説的事實を假りて作者が道德觀を示せるものなるが如く、その道德的批判は當時世上の偏僻論者が云爲せるところに比して頗る寛大に、或は從來の歴史より見て當然惡人とせらるゝ人の上にも

同情を注ぐを惜まず、或は惡人と思ふも自己の偏見より生ぜる錯誤の判斷にして、實際においては然らざるものありなど、怪異を語りつゝも實は議論の筆を進めたるものならむか、而してその世間に對するも樂觀的見地を以てしたるが、後者はこれと表裏全く相反す、秋成生れて剛愎狷介、世に容れられざるよりも、おのれまづ世を容れず、常に白眼にして人を見たる性情は、いきほひ作物の上に現はれざるを得ず、熱嘲痛罵眞に骨を刺すものあり、また英草紙をはじめめとして怪を語るといふも、何れも現世的色彩を帯びたるが江戸時代の小説に通有なる特質なるに、秋成がこの作のみひとり神秘的にして、幽韻縹渺、遙かに世を隔てたる感あり、行文また縦横馳突、意に従つて動かさずといふことなく、絢爛にして華麗、古今よく匹を争ふに足るもの少し。秋成中頃より醫を專業として、一たび小説に念を断ちしが、晩年に及びて、更にまた癩癩談、春雨物語等の著あり、こたびは脂粉の氣失せて蒼枯の色これに代り、今はた故らに想を練り、思を凝すことをなさず、一氣呵して筆を下すといへども、辛辣なる諷刺はいよいよ出てていよ／＼度を加へたるが如し、虚偽罪惡の結塊の中にわれひとり

建部綾足

清むが如く、みづから高く標置して、怒號これ快しとせるは、畢竟秋成が存在の生命なりしなり。

秋成と同時に江戸にありて、また讀本の發生に與りて力ありしを建部綾足とす。綾足は南部の人、亡命して洛東東福寺の僧となりしが、のち蓄髮して東都に住む。長崎に熊斐に學びて畫名あり、俳諧をもよくし、また片歌カミウタの一派を立てむとせしが、廣く行はれざりき。明和五年、秋成が雨月物語を出すと殆ど同時に西山物語を作る、文辭つとめて古雅を欲し、一篇の材料は京都滞在中の見聞にかかると稱せらる。次いで本朝水滸傳は成れり、こは惠美押勝を宋江に、道鏡を高俅に、琵琶湖畔の伊吹山を梁山泊の水寨に擬したるものにて、文章平凡に、結構また強ひて巧を弄すれども、人の感興を動かすに足るものなし。しかもその世人の注意を引くこと大なりしは、一に水滸傳翻案の先鞭を着けたるが爲にして、秋成と共に等しく讀本の魁をなすといふも、固よりその間に幾何の逕庭あるは忘るべからざることなり。秋成が鬼才に匹敵して下らず、江戸の讀本興隆にも多大の關係を有するものとしては、むしろ平賀鳩溪を推さむか。

平賀鳩溪

小説と古典

鳩溪は讃岐の人のち出て江戸に寓す。天與の才幹極めて多角的にして、苟くも手を着くればすなはち長ず。その専門とするところは本草、窮理の學にありて、これに關する發明創意決して少からざりしが、輾轉不遇にして一生世に用ひられず、滿々たる不平絶ゆる時なくして、淨瑠璃小説の戯作に僅かに鬱悶を遣りしもの如し。その小説は、根無草の如き、風流志道軒傳の如き、いづれも當時の市井に見聞せし瑣末の俗事を題材とし、滑稽を旨としたるものなるが、その滑稽も尋常一様の滑稽にあらずして、動もすれば憤懣煩悶の情の虚隙を衝いて火燄の如く揚るを見る。この點について見るも、正に關西の秋成と好一對にして、渠の如き精悍有爲の質を以てして、開帳のにぎはひ、見世物のをかしさ、さては女大力の様子などの、陋劣なる小範圍に踞踏せざるを得ざりし衷情、洵に憐むべしとなす。蓋し、鳩溪の如きは、徳川氏の消極的また階級的制度が、餘にその壓迫の手を固くしたるが爲に、可惜多能の士をして彷徨就くところを知らず、花咲くこともなくて朽木と化し果てしめたる、好個の實例なるべし。

以上四人は直接に文化、文政の讀本の爲に地盤を作れるものなり、中に就きて、

の學

鳩溪はやゝ他と異にして、むしろ、青本、洒落本の發生に影響すること大なりしといへども、これを讀本の魁として擧ぐるも、また不當の見解にはあらざるべし。かゝる類の作者が續々輩出して、新文學の發生を誘致したりしは、主として支那小説の感化に基けること、すでに述べたるところによりてほゞ明かなるべきが、これと共にわが國學もまた渠等を助けたり、然り、外國文學の影響のいかに大なりしにせよ、國文學の素養なかりせば、その作物はいかに貧弱にして不具ならむ、幸にして渠等はまた古典の學に注意したり。これと表裏して古學者にもまた時に小説の作あり、荷田在滿、賀茂真淵等が擬固の體を以て短篇の作を試みたるも、娛樂の傍、古代の語法語格を普及せしめんと、の主旨に出でたるなるべし。上田秋成は加藤宇萬伎の門人にして、晩年は主として古典の研究に力め、殊に宇萬伎の師たる真淵に私淑して、その著者の出版に關しては甚大の功あり、小説の如きは實は渠にありて閑餘の副事業に過ぎざりしもの如し。しかもその小説に對するに、漢文學の影響を認むると同時に、國文學の造詣の深かりしこと、また一見して知るべし。また縣門の名簿を繕かば、宣長が入門

文學の東遷

を記したる寶曆十四年の前年の條には建部涼俗、平賀源内の署名をも併せて發見せむ、而して更に凌俗の翻案せる水滸傳が純粹古雅の和文に成り、また西山物語がみづから古語に註釋を施して古文の習得に資せむとしたるが如き、彼此勘合して思半に過ぐるものあらむ、余が漢文學と相俟ちて、古文學の小説に及ぼせる影響甚だ少からずといへるは、これ等のことをいへるなり。翻つて思ふに、文學の中心はこの頃やうく、動きをめぐめ、諸般の文化と共に、擧つて京坂を去つて東の方江戸に遷らむとす。真淵が京に學び、江戸に下りて帷を垂れしが如きは最もその著しき例にして、俳諧に蕪村はあり、小説に秋成はあれど、大勢はすでに定まれり。淨瑠璃とてもはた同じ、享保に門左衛門歿し、寶曆に出雲歿してより、近松半二が雙肩は俄に重く、一時好評をも博せしかど、大家の倒れむとする時、一木いつまでか支ふべき、劫風一陣、さしもに盛なりし大坂の淨瑠璃もこゝに崩れおちて、江戸は却つて凱歌を擧げぬ、凱歌の發聲は實に福内鬼外が神靈矢口渡なりき。福内鬼外は鳩溪が別號、渠になほ數篇の作あり、その他にもこれにつぐべき作家一二にして足らざりしが、淨瑠璃の運命は處

草雙紙

をかへても、すでにこの時に傾きて、今に至りてまた振はず、小説に至りては、これと趣を異にして、江戸に移りて新しき發展は着々として成り、元祿前後における上方の盛況をも凌がむとす。特に印刷の進歩の著しきものあり、その粹は所謂江戸錦繪の精巧美麗、今も眼を射るばかりなるに見るべく、これが小説の進歩に便宜を與へたるはまたいふを俟たざるなり。

さらばまづ江戸に行はれ來りし小説の種類はいかなるものなりしぞ、余輩はこれを草雙紙の名に一括す。草雙紙の起原は遙かに溯りて元祿以前にありと覺し、その初は丹色の表紙を用ひたれば赤本といひ、その題は御伽草子中の鉢かづき、文正、桃太郎、花咲爺、かちく、山猿蟹合戦、鼠の嫁入、また金平淨瑠璃に取れる金平が恠勇譚、さらば辨慶、朝比奈、四天王、新田、楠等が武功の物語、やゝ移りては、色道の勝負、敵討の成敗などにして、五枚を綴りて一冊となし、一枚毎に繪を挿めり。しかるに安永四年、懸川春町が金々先生榮華夢の出でたるより風體一變、専ら當時の人情世態を描き、童幼よりも大人の見るものとなりぬ、かくしてさきの赤本、黒本は進みて青本、黄表紙となりぬ。この青本、黄表紙といはむ

洒落本

もまた妨げずの寫すところ多くは遊廓の事情、開帳、見世物の流行などにして、滑稽洒落を旨とし、さりとして諷刺、教訓などいはむが如き目的もなく、ひたすらおのれの通と才とを衒はむの浮華輕薄の念よりす、もし讀者にして手を拍ちて珍作よ通人よと笑はば、すなはちかれ等の希望は満たされたるなり。

青本と併びて、別に洒落本なる一東の小説あり、露骨に吉原、深川あたりの遊里の様を寫したるものにて、野卑猥雜厭ふべく、余輩はこれを以て堂々たる文學の中に伍せしむるを耻づるものなるが、しかもなほ輕々に排斥しがたきは、極端なる寫實的描寫のこゝに用ひられし一事あるを以てなり。元祿の西鶴が寫實を主たりしことは、すでにこれを説きぬ、げに西鶴は舊來の習慣に従うて自己の見聞にも觸れぬ事物を描かむとはせず、一意社會の實相を捕へむと試みたりしなり。されど今にして思へば、そのいはゆる寫實は比較的印象の著しきものをのみ引き出でて、微細に當面の事相を寫さず、對話はもとより一種の文章體にして、口語をその儘に筆にしたるものにはあらざりき。洒落本の寫實はすなはち然らず、遊里を描いては遊女嫖客が容姿衣裳の説明はいふも更なり、

或は客の種類により、もしくは見世々の慣習によりて異なる言語のつかひざまなど、細かに観察の眼を著け、一舉手一言句も洩らさざらむとする風あるを見る。一言にしていへば、洒落本の寫實はこれまでになく忠實なり、眞に寫實らしき寫實はこれに始まるといふも不可なることなく、按ふに明治における寫實派の筆もまた或はこの邊に學び得たるならむ。

吉宗が政治に勵精せる結果は、その死後に至りて益あらはれ、幕府の基礎更に固きを加ふると共に、江戸の繁華はいよ／＼目ざましくなりぬ。九代、十代の將軍は坐ながら太平謳歌の歡聲を聞けるものなりき。吉原、深川の不夜城はいはゆる十八大通が驕奢の競争場、千蔭、春海の輩さへもこゝに出入して、遊興に身を窶す時世なれば、一般の文藝が靜平和樂の氣に満ちたるも當然のことのみ。あはれ、市民は胸中一片の不平なく、鼓腹擊壤、花の大江戸に生れ合せて、朝な夕なに眺むるは前と後の富士、筑波、水道の水をわかせる錢湯に鼻唄うたうて、うか／＼と過し暮ししなり。この歡樂場裡の消息はさながら青本に現はれ、また洒落本に寫されしが、ほかにまた適切にこれを髣髴したりしは、天明調の狂

狂歌と川柳

歌なり。狂歌には、これよりさき、享保の頃大阪に油煙齋、貞柳あり、名聲をさ／＼高かりしかど、その作多くは平凡にして、しかも理窟に陷るの弊を免れざりしに、今しも江戸に四方赤良、大田蜀山等の出づるありて、洒落とうがちとを主としてこれを詠じ、高尚なる滑稽はなほ求むるに難かりけれど、口を衝いて出づる諧謔は人をして頤を解かしめずんば止まず。柄井川柳またこの時に出て、巧に人生の弱點を捕へ、これを露骨卑近の警句に仕立てて、皮肉なる諷刺を試みる、また江戸太平の氣運に乗じたるものに外ならざるなり。

第五章 江戸の盛運

徳川氏九代、十代の政治はやゝ紊れたり、十一代家齊の世はまた更に振ふ。老中たりしものは松平越中守定信にして、八代の施設に倣ひ、遠く氏祖の遺訓に則れる渠が爲政の方針は、依然として消極的なりしかど、在職六年の短日月の間に、よく綱紀を張り、經濟を整へ、武事を勵まし、奢侈を戒め、風俗を匡せること、十

この時代の
大勢

五代を通じて多くその比を見ず。げにや家齊天下に臨むこと五十年、これを大御所様時代といふその一語の響のすてに何ぞ悠揚たるや。されどその晩年よりして内外の風雲漸く穩かならず、水野越前守擧げられて樞機を握り、英斷以て天保の改革を行ひしかど、察々の明を勵まして瑣末の事にも干渉し、敢て假借することなかりしかば、忽ち四民の反抗を招き、功半ばならずして退きぬ。この頃より外國との交渉また漸く頻繁になりて、嘉永に至りては米艦江戸の近海に來り浮び、人心恟々、やがて尊王攘夷論の沸騰となり、上下ともにこの内憂外患の大渦に捲かれて、混沌の裡に王政維新を迎ふ。さればこの時代の下半期は學問文藝などの榮ゆべき時にあらざりしかど、その上半期すなはち文化文政時代の盛況は元祿にも劣らず、人或はこれを以て徳川氏三百年中の黄金時代となすも、また理なきにあらず。

定信は好學の士なりき、渠が信州岩村の城主松平氏より引いて林氏を繼がしめし、衡こそは、同家の中興大學頭述齋その人なり、林家の昌平坂學問所を幕府の有とし、柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里等をして、述齋を扶けて幕士及び諸藩の

寛政政治の
長短

子弟を教授せしめ、多紀氏の躋壽館を擴張して醫學館となししも、渠なり、塙保巳一の爲に和學講談所を設けて、群書類從の編纂に従事せしめしも、渠なり、諸國の寶物を調査し、谷文晁をして畫筆を採つて集古十種をなさしめしも、また渠なり、定信はかくて學藝の保護者たりしのみならず、優にみづから文學者たるに耻ぢざる材幹あり、致仕の後、樂翁と號し、殊に和文隨筆に長じて、花月草紙等の著ありき。以上は定信が美點なり、好所なり、されど身すてに消極的壓抑主義を以て治世の綱領とする徳川氏の執政者たる上は、ひたすら穩健なる古説を庇護獎勵して、新奇の異説を撲滅迫害せむとしたりしは、已むを得ざることなるべし。漢學には、朱子學の外に陽明學もあり、堀川の古學もあり、菴園の古文辭學については、更に折衷學派も出て來て、互にその勢力を争ふ。定信はかれらが黨同伐異、正邪の辯論に囂々たるを嫌ひ、これを一に歸せしめむとして、終に朱子學を奉ずるものにあらざるよりは、幕府に仕ふるを得ざらしむ、所謂異學の禁なり。この禁制は諸藩の學者をして、水の低きに就くが如く、朱子學に向はしめ、一見すれば學界の弊風を一掃したりしかの觀あれども、むしろ辯難攻

撃以て向上進歩すべき學問はこゝに一頓挫を來せり、すなはち當代の學徒はその第一義とすべき事理を忘れて、字義の末に拘泥する訓詁の學に陥るにあらずんば、酒食遊興の媒として詩文に淫するもの、滔々として風をなす。蓋し訓詁考證の學は清朝の學風の影響し來れるものにして、こゝに定信によりて間接の補助を得、その勢うたゞ盛なるに至りしなり。要するに異學の禁に逢ひて學問は萎縮し、才あるものは韜晦していよゝゝ野に隠れ、名利を逐うて幕府に阿附するものはひとりますゝ世に時めく。

されど人心箝束の著しき事例は著述出版に對する制裁に如くはなし。天明寛政の交なりき、田沼意知が殿中に刃傷せられしこと、松平定信の政治に關することなどを小説に託して書けるものありしかば、幕府はその罪を問ふ、取締の法これより嚴になりて、寛政三年には山東京傳洒落本を作りて罰せられ、翌四年には林子平内外の形勢を論述して、その藩仙臺に塾居を命ぜられ、後また數年喜多川歌麿はその描くところの錦繪が風俗を紊亂するの恐ありとて刑に遇ひ、累は飛んで岡田玉山の繪本太閤記も絶版を命ぜらる。天保の改革には、幕

出版の制裁

知識の向上

士大野權之丞は青標紙、殿居囊を編して政務に關することを公にしたりといふを以て、爲永春水は人情本を著はして風俗を壞亂せりといふを以て、まづ槍玉に揚げられ、寺門靜軒は江戸繁昌記によりて奇禍を買ひ、柳亭種彦また田舎源氏によりて咎を被らむとして僅かに免かる。幕府がかく出版著作の自由を束縛したるは、蓋し、その意、人心の惑亂を防ぎ、風教の頹廢を制せむとするにあれば、その動機においては同情するに足るといへども、行爲は苛酷なり、嚴しき壓迫は作者及び發行者の上に下れり。されば寛政に名流京傳が罰せられし後、出づると出づる小説は、いづれも幕府の消極方針に和同するを以て唯一の標準とすれば、その最急の要件は教訓の二字に歸せざるを得ず、こゝに勸善懲惡主義は確立し、一般の傾向において小説はやゝその地位を高うし、従うて文學の上の階級も減殺したると共に、變化縦横の妙は全く滅却せられたり。小説が地位を高くし、文學における階級も減殺したりしを以て、ひたすらに文藝を一途に出でしめむとせる幕府の法令に基けりとするは、皮相の見たるを免れず、その最大の原因は思ふに知識の普及に存せむ。この時代の上半期は江

江戸時代のうち最も平和なる時代にして、假武の後、學問の開けてより早く二百年を経たり、圖書の弘布したることまた元祿時代の比にあらざれば、國民が智育に於て長足の進歩をなせるは、更めて説明するにも及ばぬ事なり。されば小説もこの趨勢に伴ひてやう／＼野卑の境を脱して高尚の域に進まむとし、小説家みづからも所謂戯作のみを以ては甘んずること能はずなりて、さばれいまだ文學の眞價値を識得せざる際なれば、別に隨筆の著述に歴史的雜考を公にして、文壇に學者の名を馳せむことを求む、京傳の骨董集、馬琴の玄同放言等はかくして出でたるなり。橘守部、黒川春村の如きは、狂歌師たりしもの、後には専ら國學者として立てり。北川眞顔は赤良の門人なりしが、後にはその狂歌を俳諧歌と稱して教訓的意義を含ましめ、力めて風尚を向上せしめむとせり。その意中は憐むべしといへども、その作はかへつて平板に流れ、遂に渠はその道における貞徳ともならず、まして芭蕉も出でずして、こゝに早くも狂歌は挫折す。俳句はた天明以後、俗了し、頽廢するのみ。而して高尚なる和歌が更に流行して社會の大勢力となりしは、また以て國民が知識の増進を推するに足るべし。

和歌の勃興

江戸にありて和歌に名ありしは加藤千蔭と村田春海とにして、ともに眞淵に従ひて學べり。いづれも文學の方面に得るところありて、古典の研究は深からず、またこれに通達せむともせずして、むしろ風月を諷詠するを以てその務とす。和歌は眞淵に學ぶといへども、師が晩年の萬葉調は佶屈贅牙の弊に陥れりとして、これを避け、むしろ中年の流麗暢達の風に倣ひたりき。この二人を師として學ぶもの甚だ多く、國學もまた和歌も著しく勢を加へしは、或は偏に偉大なる眞淵が斯道鼓吹の感化ともいふを得む。されどこの時に當りて京に香川景樹の起りて翕然として天下を風靡せるを見ては、いまだこの解釋を以て盡せるものと思惟するを得ず、即ち文學に對する世人の着眼點が漸く高きにむかへるの致せる一現象に外ならざること、今説きたるが如し。

香川景樹

香川景樹は鳥取の人、はやく京に出て、徳大寺家に仕へ、和歌に潛心して遂に一家をなす、その立つるところは専ら眞淵に反抗したるもの、眞淵が新學を破りて新學異見を著はし、かれが萬葉集を以てその道の模範と仰げるに對して、

景樹の歌論

これは古今集に私淑し、従つて、平安朝の古漢文學盛に行はれて歌道日に頽廢せむとする難關に際して、敢てその前に低頭せざりしのみならず、作例を珠玉と連ねて天下後世に示せる貫之を以て特に偉大なりとし、古今集正義を作ると共に、また土佐日記創見の著あり、思ふに、紀氏が才藻の俊逸を世に知らしめむとの意に出でたるや明けし。景樹はさらば全然古今集と貫之とを以て歌道の神髓を發揮したるものとし、ひたすらこれに歸向し、これを踏襲せむことを求めたるか否、渠は古今の意を汲んで強ちにその跡を追はず、己の至心至誠に訴へて、虚飾なく細工なく、あるがまゝなる感情を直下に傾倒せむことを期したりしなり、されば景樹が歌論の大概を窺ふに、蓋し次の如し。

以爲らく、眞淵の古學といふも、畢竟和歌の極意を以て修辭の技巧に盡きたりとせる謬妄の説のみ、平明直截なる今日の慣用語を以て卑俗と賤しみ捨てて、ひとすぢにむづかしげなる古辭廢語に典を遣らむとせる偏僻の主張のみ、和歌豈かくの如きものならむや、和歌に重んずべきは實にその調にあり、調とは何ぞや、たゞ巧に古語雅言を連ぬるが如き淺はかなるものにあらずして、人心

の秘宮より溢れ出づる悲喜の情の、口に上り辭となりておのづから音節を具するものすなはち是なり、これは天地に根ざして、古今を貫き、四海にわたりにて、大よそ違はざること少きは宜ならずや。以上歌學提要の説なり、この書は景樹の門人内山眞弓の手に成りて、師説を輯録せるも、自然の感興はむしろ考へず、僞らざる日常の文語を借りて具象せしむべく、強ひて胸底にも響かぬ古今萬葉の言辭を摸擬するは、却つて天真の流露を妨ぐべし。歌は感應の聲なり、うたひ上ぐると同時に感ずるものならざるべからず、探り尋ねて漸く主意を知るが如きものは歌にあらず、歌は他の技藝と異なり、おのが心の趣くに任せれば、法もなく、式もなく、况んや古歌によらむとすれば古き倅立ち、師の風を學ばむとすれば忽ち似せものとなり、詞をとれば小盜と誹られ、意を奪へばなほ罪重く、調を掠むれば強盜とさげしめらる、また文辭を專にすれば巧におちて造花の如きを免れず、徒言タダコトにては人感ぜず、感ぜざれば歌といふの甲斐なく、更にせむすべなきやうのものな

り、されば才藝の達人も博學の識者も難しとする業なりかし、されども名利の念を去り、たゞ性情の誠を柔として分け入らむには、おのづから進み易きこと、却りて磯城島の道に如くものなかるべし（歌學と提要）。かくして桂園一派は樹立し、當時、關西、西國の歌壇を風靡したるはいふまでもなく、明治に及びてなほ廣く世に行はる。

今や景樹の歌學は成りぬ、眼を轉ずれば本居宣長が古代小説に對する評論も出てぬ、その評にいへらく、源氏物語を以て、儒佛の道を示さむが爲に作られたりとするは、牽強附會もまた甚し、作家はたゞ物のあはれを寫さむとて筆を執れるなり、されば讀者もまた物のあはれを感ぜむが爲に讀めばすなはち足る、これを外にして何の目的かあらむ心得かあらむと、この二人が説くところ頗る相似たるものあり、江戸時代にありては、まことに空谷の跫音にして、これを明治評論家の先導と稱するもまた不可なし。然らば江戸の文學は各種の方面においてこれらの評論を辱しめざる發達をなし得たりしかといふに、遺憾ながらこれを否定せざるを得ず。宣長は文學の決して宗教道德によりて拘束せ

宣長の小説論

讀本の流行

らるべきものにあらざるを説けり、景樹はまた作家その人の性情を發露すべしと論じたり、文學はこれら二三の先覺者によりてやう／＼純美主義の立脚地に立たむとする傾ありしかど、多くの作家はなほ階級主義、保守主義、道德主義の鳩毒に惱みて、二百年來の迷夢いつ覺めむとも知らず、小説の上生まれ、和歌の上生まれ、實際においてこれ等の批評に伴へる反響は極めて微弱なりしなり。さて余輩は甚しく景樹の見識を讀したり、さなり、渠が平明の通語を用ひて直ちに人情の奥底に觸れむとせる一段は、批評と創作と相俟つて當時の文壇に第一流を稱すべき價値あり、その門下にもまた長技を有するもの乏しからざりしかども、この尊敬すべき子弟の作歌も、實は習慣の繫縛に左右せらるること、眞淵の一流と五十歩百歩に過ぎざるものあり、また浜つて思ふに、桂園が主張は小野蘆庵がすでに抱いてまた試みたる所なりき、この事は一言注意し置くべき必要あり。

さてこの時代における小説を代表するものは、讀本なり、元來、讀本の名は、繪本及び草雙紙が挿繪を主とせるに反して、旨と文章を讀ませむとするよりこの

名あり、廣義に解すれば假名草紙、浮世草紙をもこの分類中に攝すべく、實際讀本の稱は、すでに八文字屋本のみづから唱ふるところなりしが、今日いふところの讀本は、通常更に狭き意義に用ひられ、かの英草紙に端を發して、漢文學の影響極めて深く、専ら勸懲主義を標榜して、寛政頃より盛に行はれ來れる半紙形の小説をば稱するなり。これが作家の棟梁は曲亭馬琴なることいふまでもなし、しかもこれに先だちて山東京傳ありしことを忘れざれ。

山東京傳

山東京傳は江戸の町人なり、若き頃より狹斜の巷に出入して、頗るその事情に通ず、もとより學問は博しともあらざりしかど、超凡の趣味を有して文藻また群衆に絶す、書技にかけても天稟の才あり、初は錦繪を作り、また青本の挿畫を描くこと多かりしが、青本の譽世に喧傳するに至つて、専ら著作に身を委ぬ、これよりさき、その年漸く三十前後にして、はやく戀川春町、明誠堂喜三、芝全交等の諸先輩と其の肩を並べ、ついでまた洒落本に指を染めては絶技の名高かりき。寛政二年、幕府が猥雜なる書籍の發行を禁じたるにも拘はらず、書肆葛屋重三郎の勸黙しがたくして洒落本を作り、その翌年、手鎖五十日の罰に行は

京傳の讀本

る。京傳もと小心翼翼たるもの、深くこれに懲りて、二三年が間は筆を執らず、僅かに馬琴をして數種の青本を代作せしめしのみ。その後また青本の著作に従事せしが、當年の騷壇を驚倒せし自在の筆致、滑稽の情趣、今いづくにかある、ただ教訓を主とすといひて、詩味索然たるもののみ多し。按ふにこの間は筆路滞りて感興湧かず、寧ろ兀々として商業に勵み、蓄財に忙はしくして、著作は第二義のこととしたりしが如し。更に數年を経て讀本を出す、蓋し時勢の推移に見るところありて、この轉化を試みたるなり。この頃より馬琴の名やうやく文壇に高くして、肩をその師分たる京傳に並ぶ、京傳に年來の聲望あれば、馬琴に新進の意氣存す、かれ一書、これ一書、二者の競争ははしなくもこゝに始まりて、互に角逐して相下らず、屢、相似たる材料をさへ捕へて、伎倆の優劣を世に問はむとす、また一代の偉觀なり。

京傳の作を見るに、文字は平易流暢にして、その人物は馬琴の作に多きが如き、道義的觀念の權化を見ること稀なり。これらや、今日、渠が動もすれば馬琴以上に評價せられむとする理由なるべきが、概していふに、讀本における京傳は到

底馬琴の敵にあらず、滑稽を主とし、寫實を旨とせる短篇の青本、洒落本こそ得意の壇場なるべけれ、長篇の讀本に至りては結構の才に乏しき渠の能くするところにあらず、そのいつしか馬琴に凌駕せらるゝに至れるもの、固よりその所のみ、元來京傳は遲筆なるに、その意志また強からず、精力に任せて數千言立ちどころに下り、年々數種の讀本を出して平然たりし馬琴に比ぶるに、すでに作物の量において非常の逕庭あり、殊に讀本の作者として、山東庵はその質において、曲亭に三舍を避けたり、蓋し渠は風俗人情の觀察寫實にこそ非凡の才を有して、よく精微の趣致を捕へ得たれ、その想像、獨創の力に至りては小説家としてあまりに缺如するところあり、組織的才能にさへ乏しければ、結構脚色に重きをおける讀本の述作に適すべくもあらず、一に從來行はれ來れる戯曲脚本を粉本として、その斷片を補綴し、變化なく、はた統一なく、陳腐なり、散漫なり、讀者は屢、棊を挿みて倦怠の聲を發せずんばあらず、この傾向は渠が作中にありて最も有名なる昔語稻妻表紙に於てすでに十分に認むべく、その續篇本朝醉菩提に於て殊に著しく、その絶筆雙蝶記に至つては、馬琴が術學的なる

を厭ひて、力めて平俗を期したれど、支離滅裂の弊はこゝにその極度に達したるが如し。

曲亭馬琴

今や余輩は江戸時代における小説家の泰斗曲亭馬琴を説くべき時となりぬ、馬琴は江戸の人、その家は士分とこそいへ、渡用人の地位甚だ低ければ、資産とても豊かならず、職業の選定に迷ひて、幾度か方向を轉じたる後、寛政二年に至りて始めて京傳によりてその作を公にす、時に年二十四、こゝに渠が立脚地は明かにせられたれども、いまだ聲望は添ひ來らず、その隆々として喧傳せらるるに至りしは、三十六歳にして京坂を漫遊せる後にして、これより盛に讀本を著はし、京傳の名もこれが爲に味く、ますく、創作を續けて、殊に長篇に筆を揮ふ、青本の變形なる合巻に浩瀚なるものを出すに至りしも、實に渠を以て嚆矢とす、馬琴は性來の達筆なるに加へて、身體頑健、意志あくまで強固なれば、成さむとして成さざることなく、晩年に及びて不幸にも過勞の爲に明を失ひしが、なほその口授を先だちし子息の遺妻に筆記せしめて、いまだ曾て安逸を思はず、遂に八十二の壽盡くる時、二百種に餘れる著作を殘せり。

馬琴の讀本

馬琴が京傳にまされる特異の點は結構の才にあり、自己の藥籠中に收めし材料も、その量においてこそ違へ、質においては和漢の古書載籍敢て京傳が取りたるものと異なるところなかりしが、その結果において著しき差等を生じたるは、一にこれを咀嚼し、消化し、換骨し、脱胎する能力の不同に由らざんばあらず。京傳は短篇の中にも甚しくその脚色の絲を錯雜混亂せしむ、馬琴は好みて長篇を作れども、條路常に整然、照應歴々として掌を指すが如し、而して渠の如く多作し、渠の如く速成して、なほかつ京傳の如く類似重複の點少く、變化を生み波瀾を重ねし手腕に至りては、さすがに欽仰せざるを得ず、これおほかたは馬琴が本來の才氣に俟つものなるべしといへども、しかもまたその根氣に任せて博覽多讀、眼を古今内外の書籍に曝しし賜にして、支那小説の感化はわけ偉大なるものあり、中に就きて忠義水滸傳の如き、演義三國志の如き、西遊記の如き、金瓶梅の如き、水滸後傳の如き、三途平妖傳の如き、快心篇の如き、また隨筆五雜俎の如きは、絶えず渠が材料の供給を仰ぎたりしものなりき、げにや萬卷の書を讀破して、識見遙かに時流を抜きしは、深くみづから誇るところにし

勸懲小説

て、渠が生涯を通じて、いはゆる戯作者の地位に立ちながら、ひとり傲慢不遜他の群小作家を眼下に視たり、幕府が令を下して小説の述作に窘束を加へたりし際も、かゝる時泰然たるもの乃公一人のみと自負し、勸懲主義の麾下にたて籠りて筆硯益壯なりし著述堂が得意、豈想見すべからずや、
さればいはゆる小説における勸懲主義は馬琴に至りてその最高調に達したるなり、概していふにこの主義を標榜する小説には血あり肉ある人物を見ず、主人公はいづれも忠孝仁義などの美德の觀念を寓せる傀儡子にして、その一舉手一投足もみな窮屈なる道義觀によりて操られ、誤つて人間の最も自然なるまた最も陥り易き情念によりて虜にせられざらむことを寤寐に希うて止まず、作者はこれらの人物に向つて滿腔の同情を瀝いて及ばざらむを恐るゝと共に、これに反照せしめむが爲に、また罪惡の觀念を具體化したるが如き人物を點出し來るは、その常用の手段なり、たゞそれ意志の偏重ありて感情の發動なし、男女の相寄りても木石相對するが如き觀ありしは必然の結果のみ、かくて當代の作家が求めむとしたる變化は、一に事實の表面にありて、内的心理

文體の尙古

の描寫にあらざれば、出て來り出て去る人物いづれも同一模型中のものとなり、個人的ならずして普遍的に、褊狹にして沒趣味なるが多かりき。當時、讀本のほかに廣く民間に喜ばれたるものは合巻なり、合巻は滑稽を主とせる青本が進んで眞面目なる續物語となれるものにして、この變化はまた讀本の感化に出てたりとすべし。一枚毎に挿繪あれば、専ら婦幼に歡迎せられしが、平易を旨とせるその内容は、これを讀本に比するに、相似て大に劣れるものあり。いま茲に余輩は、馬琴を中心として、合巻、讀本を一括せる當時一般の傾向を窺はむとす。前にもいへるが如く、作家は力めてその作物を高尙にせむとし、その著述を以て士君子の覽に供せむとしたれば、その結果は、おのづから形式における尙古主義となりて現はれ、故らに七五の古調を散文の上に弄して、みづからその自由を妨げたるは、西鶴が放縱なる破格の文章に比べて絶好の對照をなす。用語も穿鑿に苦心し、和漢の古典を涉獵して、その中より摘萃すれば、絢爛綺麗の色はありしかど、印象の明瞭は缺きたり。

歴史小説

尙古主義はなほ材料に及んで歴史小説を出す。當時、文學の中心はいふまでも

なく江戸なり、江戸の地は武士の花と仰がるゝところなり、江戸の文學は従うて武士を寫さずんば人氣を博せず、加ふるにまた作物を高尙にせむとする作者は、自然に筆を社會の上流に立てる武士に向く、しかも武士を寫さむとして渠等は眼を中世の歴史に向けたり。これ一つには徳川幕府が江戸時代の事實を寫すことを嚴に取締りたるにもよれど、また一つには現在と相隔つる時劫の霧の縹渺たる色彩を添へて、高遠の趣あるが如くならしむることを知りたるが爲にして、殊に馬琴の如きは源平盛衰記、吾妻鏡、太平記、鎌倉大雙紙等を材料として、好みて源平時代以降戰國に至るまでの史實を脚色したりき。人或は問はむ、その題目によりて見るに、馬琴の小説も明かに世の流行に伴ひて、元祿以來の戯曲脚本に基きしもの多きにあらずやと。然り、渠もまたお夏清十郎を寫したり、お染久松を寫したり、三勝半七を寫したり、お俊傳兵衛を寫したり、されど一たび渠の筆に上りては、これ等の人物も、もはや優柔浮靡の情郎情婦にあらずして、節操松柏の如き忠臣なり、貞女なり、その愛情の如きも放恣なる情慾に出てたるにあらずして、義理によりて相寄れるものなるか、さらでは別に

避けむとして避くべからざる理由あるによるとなす、松染情史に、お染久松は南朝の遺孤なりとして、全く本來の二人が痴話を外にしたるが如きは、その一例なり。

當代の人世観

さらば避けむとして避くべからざる理由とは如何そも、家系尊重、個人没却といへる離るべからざる二個の思想が、江戸時代を通じて人心を左右したるは、すでに概観の章下に説き盡したれば、今更に繰返さずともあるべし、この思想と當時また歓迎せられたる因果應報の説とは小説の上に殊に膠漆の如く結ばるべき因縁ありき。作中の人物はいづれも特立獨行すべき自己の一身にあらず、自己と稱するも祖先より子孫に傳へて悠久なる時代の一期を劃するものに過ぎずして、その行爲は祖先に對して深重の關係を有すると共に、子孫に對してもまた重大なる責任あり、異性戀着の情の如きも決して偶發せるものにあらずして、數代もしくは數十千年の昔なる相思の男女が、輪廻し來りて、その嘗て果さざりしところをこゝに遂ぐるものとし、善人の禍に遇ふも過去の咎、すべて人間一身の現在の禍福はまのあたりなる自己が行爲の結果

偏固なる倫理観

にあらずして、世を變へ代を隔てて附き纏へる先祖以來の應報にして、才も移すべきにあらず、徳も避くべきにあらず、たゞ手を拱いて未前切より未來切に涉れる一大運命の翻弄に任せつゝ、一上一下、その生涯を浮沈せしむる外なしとす。かくの如きは當時の作家が一般の人生觀にして、支那小説の影響もこれありといへども、主として家族主義の系統偏重より來れる傾向が佛家の因果説に抱合して成れるものなるは疑ふべからず。

系統を尊ぶ世には、女子よりも男子が勢力あること、いふまでもなきことにして、女子はむしろ家督相續者を挙げむが爲の機械の如く思惟せらるれば、その妻に子なければ、男子が妾を蓄ふるも、道義の上より當然の處置として許さる。未婚の男女が相愛するは、放埒多情、意志の節制なき破廉耻の行爲とし、たゞ渠等はすでに夫婦たるが爲に、または許嫁の約束あるが爲に、始めて愛情を交はすことを得るなり、されば小説中の佳人才子が思慕の情は親と親とが結べる縁あるが爲にして、夫婦の關係をもやがて親子の關係に歸し、愛も移して孝に化せずんば止まず、忠と孝とは當時の小説にしばらくも缺くべからざる金言

なり、總じて當時の小説殊に馬琴の如きはあまりに道義の觀念に強く、何事もこれによりて律せむとすれば、作者は作中の人物に對して恰も裁判官なるが如き觀あり、固より勸懲といひ、はた教訓といふも、一概に文藝の上より排斥すべき所以なし、然のみならず、活眼を開いて廣く人生を望めば、紛々擾々として法則なく束縛なき間に、おのづから動かすべからざる造化の妙配劑のあるあり、従うて作者が隱密の間に道徳的批判を挿むもまた妨げず、時にはこれによりて愈、その作をして味あらしむる効あるべしといへども、故らに自己の倫理觀によりて練り上げたる典型的人物を標準として、一般社會に向つてこれに合一せむことを求め、觀念を具體に示さず、屢、抽象的批評を挟みて篇中の人物を論議するは、思はざるもまた甚し、わけて馬琴等が懷抱せる倫理觀なるものは極めて獨斷にかつ褊狹なるものなりしかば、その理想的性格を具足せる忠孝兩全の士として示せるものも、従つて頑冥に固陋に沒常識に、いはゆる融通のつかぬ人物のみ多く、おしなべて彼も此も同一の性質を帶ぶるの嫌ありき。

一九と三馬

十返舎一九、式亭三馬は京傳、馬琴と同時代の人なり、同じく小説家といへども主とするところは滑稽本といへる一類にありき、滑稽本は洒落本に出て、洒落本が風俗紊亂の誹ありしを以て、これは専ら社會の瑣末なる事相を捕へて、無邪氣なる笑を取らしめむとしたるもの、また當時の太平を粉飾するにふさはしき一種の文學なりしなり、一九が作にては東海道中膝栗毛最も著はる、こは彌次郎兵衛、喜多八といへる二人の剽輕なる江戸つ子が、あらゆる社會の拘束を脱し、禮儀もなく、格式もなく、善惡是非の關係をも離れて、面白をかしく吞氣なる幾十日の旅行に浮世の外なる生活を現出せることを寫せるものにして、その誇張せる滑稽の讀者をして手を拍ち腹を抱へて大笑せしむるもの少からず、三馬の傑作は浮世風呂と浮世床となり、共に滑稽本の粹にして、膝栗毛と併稱せらるゝものなるが、膝栗毛とこの二書とはその觀察取材の點において著しき相違あり、前者は現社會を寫すといふも、描かれたるものはこれを離れたる別天地の觀あるに、後者はあくまで世相に執着して、人間通有の弱點に對する諷刺を試みたり、されば同じく滑稽といふも、かれにありては、あり得べし

種彦と春水

とも思はれざるほど常識を外れたるもの多く、これにありては、苦笑一番、人をして首肯せしむるものあり。さはいへ、三馬が社會實相の描寫も一部少數の人間に局在し、それも單に身振物いひなどの表面に現はれたる缺點を捕捉してこれを誇張するのみ、終に人生の奥底に入りて、これが解剖を企てむとはせざりしなり。さて一九といひ、三馬といひ、渠等の小説は、現代を謳歌して、太平の逸民が作よとうち頷かるゝもの多し。こは強ち幕府の消極的方針に契合せしめむとの用意とのみにもあらざるべく、むしろ當時一般の風習よりこの現象を醸ししものなるが、とにかくに施政者の鐵槌は直ちに不平遠俗の徒に下りしを以て、いよゝこの撃壤鼓腹主義の歩武を一致せしめ、従つて一代の著作を舉りて一種の典型中に陥らしむるに至りしは、推知するに難からず。

一九、三馬と雁行して柳亭種彦合巻に名あり、その修紫田舎源氏は、源氏物語を繙案じて室町時代にうつし來り、平安朝の純情小説を化して、武士道主義の勸懲小説としたるもの、紙價爲に高かりしが、時の政府は小量なり、これだに忌諱に觸れて、三十八巻を以て中止せざるを得ざりき。とにかくに文學者として種

馬琴の積極的
態度

彦は京傳、馬琴とは固より同日に談ずべからず、一九、三馬にも劣るところあり、そのしかく喧傳せられたる所以は、合巻の内容に存せずして、挿畫の意匠に長けたるが爲のみ、さてこれらの小説家を敍したれば、また序に爲永春水の名を逸するを得ず。春水がよりにて文壇に重きをなし、は、その人情本にあり、人情本もまた洒落本より出てたるものにして、主として男女の愛情を描く。春水自ら狂訓亭と稱して、訓蒙に資すといひながら、ひそかに下劣なる辭句を弄して、卑俗なる讀者の歡心を買はむとす、その當局者の眼に觸れて罪を得たりしこと、言はずして知るべし。

余輩は曩にこの時代の小説は道徳主義の見地より多く忠勇貞節なる人物を主人公となし、これ等の主人公は因果の理法に従ひて種々の艱難辛苦に際會し、渠等もまたこれを以て抗すべからざる運命なりと觀ずるを常とすといへり。然り、かくの如きは當時滔々たる作家が用ひたる脚色の大概にして、基とこゝろ社會制度の影響にあることまた嘗て述べたるが如し。さらばこの服從的態度は遂に變ずる期もなく、また一人のこれに對して反撥するものなかりし

か否、然らずかの馬琴は勸懲主義の泰斗なり、しかもその偉大なりしだけに、これが壓迫を感ずることも、また人に超えたりけむ、圓轉滑脱の間にも年を経るに従うてその消極的態度を脱して、別に積極的描寫を試みたり、渠、古史を繙きて、有名なる英雄豪傑の末路の悽慘なるもの少からざるを見て、衷心不平の情に堪へず、その荒誕なる想像力に任せて、更に自己の小天地を造りて禍福相轉ぜしめ、以て渠等の幽魂を弔ふと共に、遣りがたき自己が胸中の鬱塊を洩らさむとす。見よ、渠は椿説弓張月に、爲朝はわが國土に力を延ばすの餘地なきを以て琉球に渡り、その子舜天丸以後、子孫相ついでその地の王となると記し、俊寛僧都島物語に、鬼界の孤島に流竄せられたるかの僧都をしも、空しく雄圖を懐いて死せしめず、更に歸り來りて兵學の秘奥を義經に授け、以て源氏復興の基を開かしめたりとなせり、もしそれ馬琴が作中の最大長篇たる南總里見八犬傳に至りては、安房里見氏の興隆を骨子として、鎌倉管領の勢を以てするも、關八州の兵を以てするも、仁義を守りし彈丸黒子の小藩に勝つ能はざりしとす。その他、弓張月の跡を追うて、三郎義秀をして遠島に勇を奮はしめむとしたる

朝比奈巡島記の如き、南朝忠臣の遺孤をして、足利義滿を金閣に射殺して父祖の讐を報ぜしめたる開卷驚奇俠客傳の如き、いづれかこの例にあらざるべき。かく運命に屈從する消極的態度を一變して、進んでこれに抗し、これを開いて自己の才幹を發揮せしめし積極的態度こそは、馬琴が當時の作家中に一頭地を抜ける最大特色にして、その小説の規模の雄大なる所以もまた實にこれに職由す。さらば馬琴をしてかゝる傾向に移らしめたるは如何なる勢力の爲ぞ。或は曰く、そは歴史を讀むものの感ぜざる能はざる不平に基けるのみ、人生の偏頗多きに對する自然の人情に出でたるのみと、されど思ふに、こは當時一般の小説家が社會の消極的束縛に對して等しく胸裡に貯へたる反抗心を、偶、馬琴が事蹟を古代に借りて放射したるものにあらざるなきか、而して馬琴をしてかくの如き思想を懐くに至らしめしものは、また恐くは國學の發展に存せむ。かの八犬傳における里見氏が皇室を重んじ、これに仕ふる八犬士が氏姓を改めむとするに當りても、朝廷に奏請して後始めてこれを行へりといふが如き、尊王の微志の存するところ、明かにこの邊の消息によつて推知すべきにあ

東西學風の
差別

らずや、畫界を見れば菊池容齋の如き、また同一の思想より出でて歴史畫を作り、殊に好んで蒙古襲來もしくは南北朝時代における忠臣義士の事蹟を描く。かくては余は翻つて當時の國學を、説かざるべからず。

前期以來、文化の盛衰處を更へて、京坂は漸く振はず、殊に京都公卿の窮厄は言葉も及ばぬばかり、その全體の供料を擧げて、なほ中大名一人の石高に過ぎず、雲の上人の名はゆかしながら、扇の骨つくり、楊枝けづりのみじめさよ、されば寶曆年中すでに不平の聲はかうじて竹内式部の事件も破裂したるに、何ぞ關東の地の悠々たるや、鴛鴦池塘に眠り、鯉魚急湍に躍る、周圍の人を化す眞に争ふべからざるものあり、江戸にありては、龜田鵬齋、大窪詩佛、菊池五山、谷文晁、酒井抱一の輩、書畫の會にこと寄せて、日夕宴飲に耽り、狩谷梅齋、黒川春村等、やゝ選を異にして學術に忠なるも、訓詁考證の末に拘々たるに、京にありては、歌人に小澤蘆庵、詩人に頼山陽など、慷慨悲歌の士多し、勢かくの如くなれば、縣門の弟子も東西居るところによりて、おのづからその流派を分てり、眞淵は古道を明らむる國學者たると共に古風を詠ずる歌人なりしに、門人はしかく多面な

本居宣長

るを得ずして多くその一面を得、江戸にしては千蔭、春海後者を傳承して歌人として以て立てるに、伊勢にしては本居宣長前者を祖述して、いはゆる皇國の大道を大成す、もとより尊王愛國の士なり。

本居宣長は鈴の屋と稱す、伊勢松阪の人、醫を學ばむとして京に出て、契沖の書を読み、感ずるところありて古學に志し、郷里に歸りて後も深く自ら修む、遙かに縣居の盛名を聞いて、憧憬措かず、會、眞淵が伊勢より畿内にけかて巡遊することありしかば、すなはち旅宿を訪ひてその門に入る。時に宣長古事記註釋の志ある由を語りしに、眞淵大にこれを賛し、おのれもまたはやくよりその必要を認めしが、まづ着手せる萬葉の研究に日暮れ途遠からむとす、子なほ春秋に富みたれば、われに代りて、これを大成せよと、慫慂激勵せしかば、こゝにその業に着手し、研鑽考覈、三十五歳といふに筆を起して、三十五年にして稿を脱せるもの、すなはち古事記傳四十八卷なり、實に契沖が萬葉集代匠記と並べて、古典研究の最大著述と稱せらる。

宣長の學說

宣長は神代ながらの大道を發揮せむとしたる人にして、古事記傳の大著もこ

それが闡明の津梁たらむが爲なりき。その説を概括すれば、曰く、蓋し神道といひて別に存するものにあらず、たゞ神代の神々の行藏を尋ねて、その跡を祖述するところにこれを見る。神代の歴史は今日の思想を以てしては理解し難きこと多し、淺薄なる人智を以て天地と共に大なる神意を量るべくもあらざればなり、われらは唯仰いてこれを信ずれば足る、強ひてこれを解釋せむとするが如きは、儒學者の陥りやすき習癖なり。わが國はすでに儒學の爲に誤られて、國家惑亂し、人心墮落せり、上古は然らず、貴賤おしなべて天つ日嗣の大御心を心として、大詔畏みつかへ奉り、至らぬ隈もなき大御惠の光にかくれて、各、その祖神を齋き敬ひ、その身の分をつくして誠を行へば、浦安の國かぎりも知らず安かなりしなり、さらばまた今もこの古に歸りて、おのづからなる神の道を行はずやと。かくの如くにして宣長は眞淵に比するに、更に一步を進めて、理性の知るべからざるところは、すなはち信仰によるの外なしとし、この點において學術的研究を離れて宗教的範圍に入れるが如き觀あり。されどなほ二者の性質を考ふるに、いづれも眞摯なる學者の所説にして、熱烈なる宗教家の所爲にあ

國學の活動

らず、眞淵には獨斷なる僻説往々にして存せしが、敬虔なる態度に至りては眞に敬服するに堪へざるものあり、その古書に對するや、博引旁證盡さざるなく、具さに諸説の異同を辯じ、これを基礎とし、これを歸納して、始めて自家の結論に達す。故にその爲すところ極めて迂遠なるが如きも、論據一たび立たば堅實なること盤石の如く、加ふるに識見超凡、洵に一代の大家たるに耻ぢざりき。宣長の名すてに奥羽九州の果にまで轟き、來りて就學するもの甚だ多く、徒らに高く標置せる公卿のまた渠が在京を期としてその講座に列するもの少からず。門下の秀才許多ありしが、わけて古道の眞意を紹述するに力ありしは、平田篤胤を主位に推す。篤胤は出羽の人、學問該博ならざるも、事に當りて剛毅果斷なり、いまだ刺を通ぜざるに先だちて宣長は歿せしかど、深くその學説を喜びて欽仰措かず。先師歿後の門下生として、一身を提げて古道の宣傳に盡す。余はこゝに始めて古道の宣傳といふ、然り、宣長はむしろ學問としてこれを究むるに過ぎざりしに、篤胤は更に進んで敬神祭祀の式をも定め、以て從來儒佛二教の影響多かりし舊神道を排斥して、別に平田派の神道を起し、従つてまた國

民が覺醒一番、二千年來、萬般の事物の上に被り來れる外來の文教の壓迫を一掃せざるべからざることを大聲疾呼して止まざりき。かくの如くにして果して國民の自覺心は喚起せられ煽動せられ、上古王政の盛況は渠等が目睫の間に現じ來りて、こゝに盛に勤王愛國の論は沸き、恰も外國交渉の漸く繁きに伴ひて、更に攘夷の説は燃え出てぬげにも明治の革新は百年の昔すでに學者の夢裡に往來したるものにして、これを先にしては水戸學の唱道あり、これを後にしては國學の主張あり、維新前後の志士が行動はこれに養はれて出て來れりといふも不可なることなし、もとより志士のうちには國學者も多かりしなり。



明治の世

大化の改新
と明治の維新

明治の維新は古來未曾有の大變革なり、これよりさきわが國の歴史の上、政治の上、はた社會の上の變革と稱すべきもの、太古にして大化の改新あり、中世にして文治の幕府創立あり、近世にしては則ちまた慶長の江戸開府あり、いづれもわが明治の變動に比するに足るが如くなれど、具さに比較し來れば、その間また大に事態の異なるものなくんばあらず、江戸幕府の樹立を見よ、この時にも紛糾極なき百年の大亂は收まりたり、塗炭の苦を嘗めし天下の民衆は、これより生業に安んじ、枕を高うして眠るを得たりといへども、これを外にして政治もしくは社會の組織に如何なる根本的改造か施されけむ、これ等の點において家康がむしろ頼朝の先例に倣へるものなりしは、すでに前章に述べたるが如し、さらばこの標範と仰がれし鎌倉の開府はいかに、この時にしも政治の中心は始めて京を出でて關東に遷り、公卿の手を離れて武士の料理すると

ころとなりぬ、これ疑もなく政治上の一大革命なるべしといへども、なほいまだこれに對すべき變遷の風俗習慣に及べるを見ず、たゞこれより更に沂りて大化の改新に至りては、折ふし傳來せる佛教と支那文物との影響を受けて、國民の惰眠一時に覺め、これ等の外來文明を參酌して、有史以來の大刷新を實行したり。明治の維新はひとりこの大化の改新に比して語るべし、嘗に政治の上とのみならず、制度も、風俗も、また固より本論の對境たる文藝も、事々物々この時を機として面目一新、舊慣と典型とはあらゆる方面に擺脫せられて、痕跡をも遺さざることとなりぬ、これを驚天動地の出來事と呼ばずして何をかしか稱へむ。この振古未前の大變革はさらばいかにして成りたるぞ、いふまでもなし、わが國人が直接に切實に西洋諸邦の民と接觸し交通するに至れる結果にして、余輩が明治の維新を以て、文治、慶長兩度の變革と趣を異にして、孝徳朝の新政と相似たりとなすは一はこの點に存す。しかも彼此その度の強弱を比較し來れば、また終に同日の論にあらざるなり。さもあらばあれ、この大化の改新も、わが明治維新の變革も、急轉直下、よくかばかりの大英斷を實行しながら、な

勤王論と開港説

ほ甚しき人心の動搖を惹起して、血を流し肉を屠るが如き殺伐悽慘の修羅場を現すること、意外に少うして止みしは、外國にも例なき歴史上の一大奇蹟なるべし。

海外諸國との接觸は疑もなく明治の維新を催促せる最大原動力なり、然り、一言に悉せばこれに過ぎじといへども、更に委しくその原因を索むれば、勤王論と開港説と是なり。その來由を尋ねるに、二説はその初において固より扞格相容れず、上代の文物制度を考覈して、王政思慕の念一日も止みがたく、從つて江戸幕府の壓制を憤慨せる、いはゆる國學者流の見解所説に本づいて起れる一派の輩が主張は前者にして、渠等は幕末當時、徳川氏の爲政者が外交仕末に窮せるに乗じて頻にその鋒鋦をあらはす。これに反して幕府に左袒せるものは、よく海外諸邦の事情を研究し、世界の大局を觀じて、通商貿易の止むべからざるを説く、後者はすなはちこの徒の唱ふるところなり。かくて勤王論者が極力幕府の壊倒、新政府の建設と共に攘夷鎖港を囑々するに至りしは、勢正に然るべきことにして、二派が葛藤折衝の決するところ、やがてわが前代未聞の大政

變なりしなりされどこの勤王論者も、幕府を以て直接當面の敵とせる間こそ、その開港説に對して鎖港主義を持するの要を見たれ、さて王政一新、海内一統の曉となりては、その必要もなく、且や當時の世界の情勢に照して、通商互市の避くべからざるは、蘭學者輩ならぬまでも、弘く世人の間に知られて、漸く天下の輿論となれり。さればよし開港貿易や、その初、幕府が窮策に出でたる措置なりとすとも、新政府代りてまた敢て改むるに及ばず、むしろある期間を過ぎては、舉國一致、この方針によりて全力を傾け、西歐文物の輸入これより一時に盛にして、新しき國家の新しき文明はこれを模範とし、これを融合し、これを渾化して成れるを見たり。あはれ、當時の人頑迷にして悟らず、蝸牛井蛙とみづからその門戸を閉ぢて、猫額大の桃源境裡に一時の偷安を續けたらましかば、——想ひ見るにだに戰慄を禁ぜず。

日本固有の精神を發揮せむとする國學者流の國粹保存説と、開港貿易によりて大に西洋文化を輸入せむとする洋化説とは、とにかくに維新を契點として一時相一致し、相提携せるに似たり。されど二者はもと尊王論と佐幕説とが兩

國粹説と洋化説

端にありて相對峙せるが如く、全然その主義において相反す。換言すれば、その極端に奔れるものは、一は頑固なる保守説、一は猛烈なる進取説にして、維新後に至りてもなほその軋轢消長の跡はあらゆる方面においてこれあり。明治聖代の歴史といふも、畢竟その一方がいかにしてよく國粹を發揮するを得たるか、他の一方がいかにして泰西文物を傳來し得たるか、はたこれが結果として、全くその性質を異にせる東西兩洋の文明が、いかにこの絶東の島帝國において混化せられ、融合せられたるかの答案に外ならず。かくてこの二主義の合離盛衰の見地よりして、大體に區劃するに、明治維新後の舞臺は凡そ十年毎に一線を引くべきに似たり。即ち維新成就の日より西南の役までが一期、次に十八年乃至二十年のころほひに歐化主義がその絶巔に達するまでが一期、日清戦争まではまた一期、されば今の時はその後を承けたる最後の一期の道程もしくは終末に際するか。とはいへ前後通算するも僅々四十年のこと、一々章を設けて論ぜむもことごとくしと思へば、以下一括して大概を敍てむ。

維新の改革

維新後の革新は社會のあらゆる方面と事物とに及ぶ、政治の上に幕府を廢して王政を復古し、やゝ後れて立憲の制を取りしは更にもいはず、官制の上にも幾度か變更あり、そのはじめ藩に代へて縣を置き、地價を定めて租税の法を立て、さて士族の家祿を奉還せしめて、國民皆兵の令を布けるなど、擧げ來らば頁を重ねてなほ足らざるべし。わけても階級打破の一事は新舊變動における著しきが中の著しき特色にして、貴族驕從の制はこれより軽く、公卿は齒を涅め、眉を剃ることをせず、庶民僧侶もひとしく氏を稱し、佩刀禁ぜられ、散髮獎められ、華士族も互に婚嫁するを得れば、穢多非人も平民の格、人身賣買はもとより昔日の語草となりて、騎馬に鞭てる平民の得々たるを見よ、かくの如くにして華族と士族と平民と名は三様に存すれど、國民としての權利は同一に傾きて、決して從來の如き差等なく、個人々々はおのがむき／＼、目的を定め、職業に就き、才によりては青雲に駕するも難き業にあらずなりぬ。こゝに至りて平等自由の福音は日本の社會を風靡したりといふべし。

保守的暴動

物質的事業の進歩

も世間往々にして急激の革新を喜ばず、頑冥固陋の舊説を盾として、光榮ある新政府の施設を破壊せむとするものあり、維新頭初十年の間はむしろこの種の暴動多きに驚かむとす。見よ、要路の謀臣は路上に殞されたり、幕府再興の擧は所々に企てられたり、舊藩主が東京に居を構ふるは累代相結べる領民を棄つるものとして一揆を起せるものあり、四民平等の制は正に平民を以て穢多と同一視せむとするものとして憤慨せるものあり、兵制の改革に反抗し、特に徴兵の告諭における血税の文字に拘泥して、政府のまのあたりに人民の血液を搾取するにあらざるかを恐れたるが如きは、今日より見れば何たる滑稽ぞや。その他、學校の廢止、太陰曆の復興を主張して起れるなど、暴動の種類極めて多けれども、要するに前代の因循姑息なる近眼を以て現代に對する恐怖と、過去追慕の念とが、相倚り相扶けて構成せる悲喜劇にして、及びがたき脚色と演技とは後人の意想の外にあるもの少からず。

かゝる時代なれば、維新の實現も十年の昔と過ぐれど、なほ精神的文明の活躍するものあるを見ず、たゞ物質的文明に至りては、野にあると朝にあるとに論

なく、國民擧つて一意その發達に腐心すれば、早くも注目すべき成果を得たり。蓋し物質的事物はこれを精神的事物に比するに、遙かに皮相的にして、直ちに人目につき易ければ、彼我雲泥も啻ならざるこの方面の差異のまづかれ等を驚倒せしめたるも、故ありといふべし。かくて電信通じ、郵便開け、瓦斯燈も點けば、電燈も照る、五十三次に沿うて布かれたる鐵路は二旬の行程を一日に縮め、遠州洋に白扇倒懸の景を賞するはその昔膽を冷しし黒船の上と知らずや、牛肉に舌鼓うち鳴らすもの、大髻惜しげもなく刈り落して、羅紗のズボンに濶歩するもの、千態萬狀なる衣食住の新様は、みなこれ物質的事物の輸入に伴へる現象にして、洋風流行の盛なる、時人もまたみづから意外の感に打たれしなるべく、五七年が程に日本の社會は天地轉覆しぬとは屢、余輩の耳にせる老人の繰言なりき。

前代文藝の破壊

わが文藝の一たび維新の大浪に攫はれて、爾後久しく暗黒の中に沈淪せりしは、偏に國民がこの心靈的ならぬ事物の改善に忙殺せられて、また他を顧みるの餘裕なかりしが爲にして、一世の趣味性の墮落、墮落といはむよりはむしろ

第一期の文學

地を掃へること、戰國の世もまたかくの如くなりしかと覺ゆるばかりなり。神佛の分離に伴ひて佛寺の存廢露よりもはかなく、寺々の由緒ある寶物は頻々として賣られ、賣られむとしてしかも買ふものなく、焼かれむとして僅かに傳はるを得たるが如きは、都鄙にその例多かりき。もしそれ貴重なる典籍書冊の散佚したるもの夥しかりしは、また推察するに餘あり、ざりとてはまた慘ならずや。泰西文明に眩惑せる國民の傾向はよくかくまでの破壊を敢てしたり、敢てしたりしといへども、これに伴ふべき建設は成らず。余輩は今暫く文藝の上にて例を取りたり、されど文藝のことのみならず、倫理然り、宗教然り、形而上の事物悉くみな然り。

明治第一期の文學界には殆ど見るに足るものなし、強ひてその人を求むれば、江戸時代の戯作者の流を汲める假名垣魯文を推すべし、魯文滑稽の筆を弄して西洋膝栗毛等を作る。この書はいふまでもなく一九の東海道中膝栗毛に倣へるもの、舞臺を西洋に取りて、西洋文明國の世相を描出せむと試みたるは、稍、注意すべきが如くなれど、一篇の主眼たる滑稽戲謔多くは沒趣味にして、駄洒

落の域を距ること甚だ遠からず、その價值極めて乏しきものとす。脚本界には河竹默阿彌あり、ひとり斯道に聲譽を恣にすといへども、その思想を窺へば依然として舊時代のものたるのみ。このほか張三李四の文人者輩、名を傳ふるもの必ずしも少からずといへども、江戸文學をばいや下様に引き下せる成島柳北が戯文戯詩壇の泰斗として、一代に重きをなしたるが如きを思へば、他は多くいはずして可なり。概括して論ずるに、この時代の作品は陳腐の思想を糜爛せる前代の形式に盛れるものにして、いかにひいきめに見ても、いまだ以て明治新文學の先蹤を示すものとはいひ難からむ。

精神的事業の不振やそれかくの如し、さるが中に閉却すべからざるは一般知識の普及なるべし。すでに江戸時代はその以前に見るを得ざりし學問興隆の時代にして、上下貴賤ともにその修得に心を傾けたりしが、なほ百姓町人の間にはこれが無用を唱ふるものなきにあらざりき。然るに明治の世、學制の布かるゝに及びては、男女六歳を學齡として必ず學校に上るの義務あり、津々浦々いづこの山の奥とても咄唔の聲を聞かざるはなし。當時、この學校教育と相俟

一般知識の
進歩

ちて愈、國民の知識を啓發する力ありしは、活版の傳播とこれに伴へる新聞紙の發達となり。新聞紙の萌芽は既に文久年間にこれありしが、明治初年に至りては、政府がその日程を公布せむが爲に世に出せる太政官日誌は即ち今の官報の基礎を作り、中外新聞、江湖新聞は民間新聞紙の曉鐘となり、これより續々新聞紙の發刊あり。四年、西洋紙及び西洋活版術の用ひらるゝに至りしは、正にこの事業の進歩に一期を劃するものにして、その影響は決して單に新聞紙發展の上のみに止まらざりき。およそ印刷術の一國の文運に至大の關係あるは今更いふにしも及ばぬことにして、江戸時代の文學が前古未聞の盛を致せりといふも、その主因の一はまた確かにこの術の進歩にあるべし。活字版は、前にもいへるが如く、はやく江戸時代において試みられたることありき、されど幾ばくもなく、整版に勢を奪はれて、廣く行はるゝに至らざりしが、こゝに及びて洋式に則りて、大にその術を研究し、時事を最も迅速に報導すべき新聞紙と相應して、一大飛躍を遂げ、書籍の刊行せらるゝもの、また従つて日に相續ぎ、これらの新現象はやがて偉大なる明治文學を建設すべき基礎となれり。

新文明の鼓吹者

三田に慶應義塾を起せる福澤諭吉は學問の普及、社會の啓發に功績ある第一人なり、その教育に對する熱心と識見と摯實の態度とは蓋し何人も及ぶ能はず。著述多きが中に世界國づくしは記憶に便ならむが爲に七五調もて歌ひ、記事の乾燥なる、詩として多くいふに足らずといへども、讀誦一遍、泰西國情の髣髴の間に映じ來るものあるは、いかに當代民衆の知識を増進するに力ありしぞ。その他西洋事情、學問のすゝめ等を著はして、専念、新文明の鼓吹に努めたるなど、時代の先覺者として國民を指導せる功勞長しへに没すべからず。わけて渠に記念すべきはその平明暢達の文體にして、こは決して不用意の間に生れず、自由を期する故に文語と口語との調和を計り、平易を尊ぶからに漢字をも節約し、以て從來行はれたる粗大誇張の漢文調を打破すると共に、精細緻密の思想を十分に貫徹するに足るべき一新文體を創めむとする奮勉努力に成り、わが明治の文章は渠によりて略、その形式を整へたりといふべし。さらば三田の福翁は文章史の上にも逸すべからざる近世の大手か。私塾を開いて洋學を教へたるもののうち、慶應義塾の福澤を除いては、同人社を建てたる中村正直

第一期の概括

を推すべし。正直はじめ昌平校に入りて漢學を學び、のち更に洋學を兼修して、スマイルスの西國立志編、西洋品行論等の譯あり、その意社會の改善、品性の修養にありしや疑を容れず。外に明治七年米國より歸朝して、同志社を京都に興し、耶蘇教主義を奉じて、育英の事業に獻身せる新島襄あり。また得易からざるの高材にして、新文明の扶殖はまた多大の援助をこの人に得たり。かくの如くにしてこの期間は純文學については特にいふべきこともなし。但、一方にかく十年依然たる舊時代の遺物を見るのみなりしと共に、他方にいまだ結果の穂に出でたるものこそなけれ、その素質の漸く養はれ培はれつゝありしを知るべし。

歐化主義の一轉機

西南の役は、維新以來各地に續發せる暴動に比すべからざる、大變なりき。時は明治十年にあり、動亂の影響殆ど引いて全國に及び、人心の蕩搖甚しかりしが、この役は後の叛亂を醸さむとするものの懲戒となりて、城山の陥落と共にこの種の擧に出づるもの漸く跡を潜むるに至れり。そはいふまでもなく暴動の

大なりしに従ひて、國民の感動も大に、一世の豪傑西郷隆盛が聲望と戰術とを以てしても、官軍の威光は遂に秋毫も犯すべからざるものなるを了解したればなり。國家は靜謐に歸したり、封建の夢は覺めたり、こゝに至りて愈、その勢力を逞しうし來れるは、維新のかた一派の主張となれる歐化主義にして、西南戰爭の終る頃より、雷にかの國の物質的事業を輸入し來れるのみならず、更に進んでその政體制度をも移して以てわが國に行はむとする、急進的改革論者も著しくその數を増すを見たり。そも、隆盛が前に官を辭して郷國に歸りしは、おのれが發議せる征韓論の廟堂に容れられざりしが爲にして、憤懣は發して更に兵力に訴へられしなるが、共に袖を列ねて野に下れる土佐の板垣退助等は途を異にして、専ら言論によりて政府と勝敗を決せむとし、率先して民權自由を唱ふ。げにや民權自由は當年の套語、これを標榜して起てる有志の徒は土佐を中心として、九州の端より東北の極に蔓り、自由温泉、自由煎餅、自由丸、自由亭など、さらでものものにまで一にこの珍らしき新語を冠らせて喜ぶに至りぬ。以て過激なる自由思想の時勢に投じたる一斑を推すべし。

急激なる政治論

かくて佛國の革命時代は時人が憧憬の的となりぬ、渠等が理想的人物としいへばヴォルテール、ルッソー、さらばモンテスキューと名ざししも當然の數中江篤介、ルッソーの民約論を譯して過激なる自由主義を唱道すれば、鳥尾得庵王法論を出してこれを破す、人權新説に保守の見を洩す加藤弘之あれば、天賦人權論にこれを反駁する馬場辰猪あり、喧々囂々として底止するところを知らざる一世の議論は、民權自由の問題ならざるはなし。明治初年以降、一に米國の功利主義によりて行動せる天下は、こゝに至りて全く佛國思想の空論によりて支配せらる。壯士となん呼べる遊食無類の徒は至る所に横行濶歩し、官吏の跋扈を見る時は、悲憤慷慨扼腕する、竹槍席旗て堂々と、一時に亡ぼす夢を見た、愉快々々などいへる、殺風景なる所謂壯士歌の普く民間に謠はれしに徴するも、一世の風潮は昭として眼のあたりにあり。

政治小説の流行

思ふに當時の日本は、革命前後の佛國の如く、狂飆時代の獨逸にも似たるかな。國民は誰彼となく政治運動に奔走して、文藝も單にその論諍を盛るの器として用ひらる。十年の役後、新聞紙の必要が切實に世間に知らるゝと共に、その勢

力傾に上りて、發行部數の増加驚くべく、これが編輯に携はれる記者等は、國民の輿望を負うて、擧つて刻下の政治に容喙し、これに載する小説も維新前後における尊王攘夷二派の軋轢、佛國の革命運動、もしくは露國の虛無黨の陰謀などを材料として、殺氣勃々、腥風陰森、一括してこれを民權自山の論評に熱中するものと見るを妨げず、その文體は佶屈聱牙、むしろ生硬未熟なる漢文直譯體なり。當時最も嘖々の名ありしは經國美談にして、著者を矢野龍溪とし、往昔希臘の聯邦が互に覇を争へる時、シーベスの名士エバミノンダスがペコビダスと協力して、國威を輝かしたる歴史的事實を敷衍す。その外、東海散史の佳人の奇遇、末廣鐵鴈の雪中梅、須藤南翠の綠簑談の如き、いづれもこの政治的狂熱時代の影像にあらずして、何ぞやさばれこれ等の著者はみな文學専門の士にあらず、寧ろ政論家として世に立てるものなれば、眞正の藝術的批判の尺度を以てその述作の價値を云爲せむは或は酷なるべく、余輩もこゝに單に歴史的にその發生の由來を説きて止まむのみ。

西洋文學の

西洋小説の翻譯もこの十年代になりて漸く色めき立ちぬ。維新以降、泰西文物

翻譯

の輸入紹介せらるゝもの算なく、その色味は隨處に認められしかど、文學的作品の翻譯に至りてはひとり未だ現はれざりしに、國民の知識の進歩につれて、これもまた起れり。明治十二年に出版せられし花柳新話はこの新現象の急先鋒にして、原著はリットンのアノレスト、マルツラッアース、譯者を織田純一郎といふ。これよりリットン及びヂスレーリを筆頭として、ユーゴーなども傳へらるゝに至りしかど、概していふに、これらの翻譯小説も多くは純文學の進歩に伴へる積極的產物にあらずして、炎々たる政論熱の副産物なり。すなはち當時、泰西政治社會の状態に通じたる政客新聞記者等がかの國々における前人等輩の生活を欣慕し、渠等が政治的或は歴史的の述作を耽讀好愛せる結果、これをわが國に移植せるもの、蓋し十中の八九を占むべく、従うてまたかく翻譯せられし小説の原著者が、政治の方面に名を顯はししもの多く、その著述の動機が等しく政治的傾向に出でたるもの少からざるはいはずともあるべきこととなるべし。この頃、別途を進める翻譯壇の一異彩は外山、山等が編輯せる新體詩抄なり、抄中間々編者の自作もうち交れど、西詩を譯出せるもの大部分を

粗笨なる文辭

占め、とかくの議論はあれど、いはゆる新體詩の一體はこゝに始めてその存在を認めらるゝに至れりといふべし。

さりながら詩にもあれ、小説にもあれ、すべて翻譯に用ひられたる文辭は、なほ多くは他の創作品と同じく、粗笨蕪雜にして、歴史的價値を外にしては、させる長所ありとしも覺えず。新體詩は、俳句、短歌の小詩形を覆へして、大膽に奔放に七五の句を制限もなく疊み綴りて長篇を作り出せるもの、その形式上の苦心はさることながら、用語生硬、格調いまだ雅麗ならず、散文に較べてよく幾何の詩趣ありといふを得るか。小説の文章に至りては更に一層の甚しきを見る。滔々として粗雜なる漢文直譯體なり、もしくは馬琴一流の讀本口調なり、これらを以てして甚深微細なる人情の極致を寫さむことの難きは、更めて言ふを須ひず。當時蠢々たる翻譯家が、おぼつかなくも文字をたどりて、原作に存する滋味の大半を失ひ、著者を辱しめて恬然たりしと併せて、好箇の笑柄たらずんば幸なり。

淺薄なる内

以上は形式の論なるが、内容においてもまた賞讃的批評を加ふるを得ず。既に

容

いへるが如く、この時代の作物は、政府の壓制、志士の反撥など、政治社會の事情を以てその中心となすこと、その通有の特色なるが、なほ一考するに、かくの如きは單に皮相を包む粉飾に過ぎずして、實は別にその内面に隠れて存するものあり。裏は表に反す、こゝに濃艶の美人あり、これに對する紅顏の才子ありて、綢繆纏綿たる情事の經緯、さながら春水以來の洒落本種ならずや。たゞ異なるところは、昨の藝者通人が今の壯士才女となれるのみ、恐ろしくも嚴めしき法廷の光景は一見觀客の膽を奪ひしかど、思へば袂をほぢし龔の濡れ場も同じ舞臺の芝居なりけり。

坪内逍遙

この時に當りて、隱然みづから文藝批評界の木鐸を以て任じつゝ、大旆一竿、小説神髓を真向に押し鑿して、この腑甲斐なき文壇の傾向を一掃してむと進み出てしものを坪内逍遙とす。逍遙これよりさきリットン、ライエンヂー、シエイクスピアヤのシーザーを譯出して、當時の政治的風潮に投ぜしが、今や翻譯昨非を悟りて、聲を勵まして、藝術が實用の奴隸たるべきものにあらざして、自體を目的として特立獨歩すべきを唱へ、政治の關係はいふまでもなし、またい

たく馬琴一流の勸懲主義を排して、作家はありの儘なる客観的寫實によりて神妙の域に入るべしと主張す。所論今日より見れば固より備はれるものといふを得ざれども、時人の耳には警鐘の響を傳へたり。疾呼の反應はありき。筆硯に親しめる士は風を望んでその麾下に集まり、期年ならずして文壇は一時全くその寫實主義によりて占有せらるゝに至れり。而してこの主義をまづ創作の上に試みて、實例を天下に垂れしも、逍遙その人に外ならざりしは、いと興あることにして、作は即ち當世書生氣質なり。されど書生氣質は小説神髓の意見を體達せず、主人公たる青年男子は號して當代の標本的書生なりといへど、舊樣依然、また洒落本系統中の人物にして、僅かにその纏へる明治教育の新衣の人を顔かしむるあるのみ。新小説の範たるに及ばざりしことまた遠いかな。とはいへ、一たびこの論とこの作と出て、維新以來の新空氣中に成長して江戸時代の作風に趣味を感ぜず、ざりとて政治小説の乾枯淺薄なるに眼を覆へる人々が、雙手を舉げて歓迎の意を表せるは、さもあるべきことにして、從來、小説としいへば一に閑人者流の戯作として、讀書界のこの方面のみには門外漢た

歐化主義の高潮

るを以て寧ろ得々たりしものも、こゝに始めてその價值を認め、そが高尚なる教養ある士人の讀物として決して耻かしからぬものなるを會得せしめたる功は大なりといふべし。とにかくにこの二書は文學史に一期を劃すべきわが小説界の指南車なり、大恩人なり、一步を進めて明治文學の啓發者といふも強ち過褒の辭にあらざるべし。

明治十年代は國民を擧げて西洋文化に心酔せる時なりけり。この風潮は十七八年頃よりわけて甚しく、逍遙の小説論の如きも、實はかの地の藝術論を假り來りて我に應用せるものにして、所謂言文一致體が漸く小説界に勢力を占め來れるは特に注意すべき現象なり。羅馬字採用は盛に唱道せられ、英語は國民教育の基礎とせられんとす。中には人種改良と稱して東西人の雜婚を慫慂するものさへあり。何事も西洋ならては埒あかず、二十年、假裝舞踏會を總理大臣伊藤博文が主催の下に鹿鳴館に開ける時は、實にこの歐化熱の最高潮に達せる時なりき。維新以來の時潮に伴ひて新教育の修得に志せる人々の素養はたこの時に成り、今よりはその修得せるところを提げて、直ちに實地に行はむと

するものも多々これあり西洋文明の紹介者たる國民の友が雑誌界の明星として呱呱の聲を擧げしも正にこの二十年の春主筆たりし徳富蘇峰は別に新日本の青年と題する一書を公にして現代の青年の須らく歴史の束縛を脱して、獨立自重の氣象を養ひ、瀛西の道義思想を輸入すると同時に、國家を衰朽せる老人輩より解放して根本的に具體的に新日本の經營に當らざるべからざるを呼號す。これらはいづれか新來文明の感化なり影響ならずとせむ。されど時勢は轉じて止まず、その後及びてもこの趨勢はいまだ力なきに至らずといへども、西洋謳歌の聲は正に二十年に極まり、これより新しき反動——復古主義——の氣運はまた展開し來れり。

新文學の勃興

明治二十年代は純文學勃興の新時代なり、十八年に出でし逍遙の書生氣質は固より作風廻轉の樞軸なりしかど、作そのものに大なる價值あるにあらず、ついで同じ人の妹背鏡あり、こたびは人情世態の表裏を發いてや、細に入り、靴一重は脱がれたれども、なほ直ちに痒きを搔くこゝちは、せざりしに、氣凝ると

紅葉と露伴

ころ、霧と布き霞とたなびかざんば止まず、こゝに至りて一篇の傑作浮雲は衆人翹望の對象として現はれたり、浮雲の作者を長谷川二葉亭とす、その文章は、對話のみならず、地の文をもすべて口語體を以て行り、むしろ平凡なるが如き家庭の波瀾を捉へて、心ゆくほどの摸寫を試む、洵にこれ當代小説の逸品にして、小説神髓の主張はこの作によりてほゞ遺憾なく實現せられたる觀あり、余輩はさきに書生氣質を論じて、エホジノイキダ劃期の作に擬せむとせしが、こゝに至りて更にこれを浮雲に代へ、以て批評の小説神髓と並べて明治文學變遷史上の二大述作と斷ずべし。この頃、純文學に熱心なる一團の青年輩の自作集を公刊し來りて、嶄然頭角を現はせるものあり、これを硯友社同人とし、集を我樂多文庫と名づく。この前後、書籍雜誌の發兌一時の風をなし、雜誌のみにつきていふも、廣津柳浪の大和錦あり、新たに硯友社を脱せる山田美妙が都の花あり、森鷗外を主筆として西歐文學の移植に力めたる柵草紙も出て、第一編に色懺悔を載せたる新著百種も生れ、今に連續せる新小説もその初刊はこの頃にありき。當時の新進小説家中の二雄を指して尾崎紅葉、幸田露伴といふに何人も異論

なかるべし。紅葉は色懺悔のかたその作出づるとして當らざるなく、露伴風流佛に名さだまりて、五重塔に愈、高し。二者の特色を比較すれば、彼は筆致優艶にして、濃かなる婦女子の情を寫すに巧に、此は好んで偏僻の人物を捕へ、文辭また宕逸遒勁の趣あり、而して前者はその筆の圓熟するに従ひて、愈、活社會、實世間の寫實に赴き、後者はあくまで理想に執着して、自己が本領の發揮に力む、一は客觀的にして、一は主觀的なり。紅露の二人を措きては、山田美妙、饗庭篁村、齋藤綠雨等の名を記すべし。逍遙の細君、鷗外の舞姫及びうたかたの記の如きも頻に世評に上りしが、この二人はむしろ批評家として盛名あり、没理想論における二家の論戰は當代文壇の偉觀なりき。なほ一人の女流天才者あるを忘るべからず、即ち樋口一葉にして、女らしく、やさしく、人情の底を穿ちたるその作風は、他の作家輩に見がたきこの人の長所にして、彗星の如く去來せし浮世二十五春秋、文壇五星霜の短生涯、はかなくもまた花々しかりけり。

復古主義の活動

そもこの時代にかくの如き文學の牽運を迎へたるは、一面社會の事情に伴へるなり。二十二年に憲法の發布せられ、二十三年に年來の宿論として久し

古典の研究

く期待せられし帝國議會の開かるゝなど、國家の前途は希望洋々として春の海の如く、一時政治熱に狂奔せる國民の感情いつしか柔らぎて、その注意は新たに學問文藝に向へり、而してこれらは國民の友、柵草紙などのあるありて、直接間接に外風の感化を被りたること勿論なるが、その勢力は十年代に比すべくもあらず。雜誌日本人が旨と泰西文明の缺陷を指摘して復古主義を唱道せるが如き、また以て時運の變を卜するに足るべし。かくて井上毅が文部大臣の地位にありて國語教育を奨勵せし前後より、古典の研究俄然として起り、西洋崇拜の思想は幾ばくもなくして國粹保存主義に壓倒せられ了んぬ。

時運は争ふべからざりき。頻々として出づる書籍は日本文學全書を初として、古典文學の複刊極めて多く、古代の研究着々歩を進めて、奈良、平安兩朝の文物も釋然として闡明せらる。否、上代文明の寶藏が開かれしのみならず、近世文藝の考覈も緒に就けり。明治初年にありてはその文學江戸時代を繼承すといふも、僅かにその下半期における馬琴、種彦、春水等を云爲するに過ぎざりしに、こゝに至りて更に訴りて西鶴の小説、近松の戯曲に及び、二百年足る足らずの

正岡子規

古にかくまでの雄篇傑作が存せるを世人の知らず顔にうち過ぎしことの、今更に驚かれぬ。殊に紅露の二家はいたく西鶴の筆致を喜び、後にこそおの／＼自家獨得の長所によりて異色を發揮するに至りしかど、一時は進んでこれが模倣を試みたるなり。もしそれ一葉の甚しき西鶴崇拜家にして、その感化を受くること夥しかりしは、その作物に接するものの熟知するところなるべし。これのみならず、正岡子規が俳句の創作批評の新見も同一風潮の上に坐せる注意すべき一事象にして、これまで永く芭蕉を以て斯道の神と仰ぎつゝ、一言一句その旨に違はむことを恐れし月並調の俳壇は、渠が俳風——稱して日本派といふ——の樹立と共に千仞の崖下に墜されぬ。子規の眼識は時流を超越す、刻苦勉勵、渠がその誤らざる批判力によりて芭蕉の句集を翫味して、是を是とし、非を非とし、後には更に蕪村の作物の研究に及びて、あらゆる長所を收めて己が藥籠に投ぜしは、なほ人の記憶に新なるところなるべし。子規は實に才幹あり、されど渠にしてもし歴史的研究を積むことかくの如きに及ばざりせば、なほよく明治俳壇の大人物として、元祿の芭蕉、天明の蕪村と對伍せらる

劇壇の形勢

るを得たるべきか、未だ俄に斷言するを得ず。

かくの如く、古今東西を比較して國民固有の長所を發揚せむとしたるは、この時代の特色にして、いづれの方面にも歴史の研究甚だ盛に、雜誌史海の出でて夥多の讀者を有したるも偶然にあらず。繪畫、小説、脚本等にも、歴史畫、歴史小説、さては史劇など唱ふるもの漸く現はれ、劇壇には河竹物既に時勢後れの觀ありて、いはゆる市川團十郎が活歴物新たに人氣に投じたり。この活歴物を書きおろせるは依田學海、福地櫻痴等にして、専ら史的考證に重きを置き、言語服飾の末までも古代の儘を寫さむとすれば、事實に偏して空想の容るべき餘地を存せず、無味乾燥いふべからずといへども、時勢の要求するところは正に然りしなり。時も時、他方に一派の演劇は起りたり、これを壯士芝居また新演劇——近頃正劇の名も見えたり——といふ。その起源を尋ねれば、をりふし政治運動の衰へたるまゝに、活計を失はむとせる遊食の徒の癩めたるものにして、固より藝術的價值などを問ふべきにあらず、社會に對する勢力の如きも、既に傾ける舊劇にだに及ばざりしは、當初の勢また已むを得ざりしなり。逍遙が史劇を

第三期の概括

論じ、その所論を具體的に示せる桐一葉、牧の方などを出せるは、やゝ平地に波瀾を起せる觀あれど、單に脚本として讀まれしのみにして、習慣の壓制はいまだこれを舞臺の上に演ぜしめず。

一括していふに、この時代は復古的精神の漲れる時にして、國粹保存は上下前後に唱へられ、上來説き來りしものの如きは眞にその一斑のみ。たゞ一言注意すべきは、國粹保存主義の説といへど、これを曩日固陋の攘夷説と同一視すべからざることなり。一面において泰西文物の輸入は障礙なく續けられ、それさへ盲従の境を去りて、漸く取捨の域に入りぬ。さらば余輩もまた筆を更めて次期に對せむ。

二十七八年
戰役

明治二十七八年は更に文學史上に一時期を劃するもの如し。時は日清戰役の前後にして、わが帝國の大捷は國民の自信を強うすると同時に、西洋諸國との關係も一層複雑に赴き、交通貿易も益々發達して、東西兩洋を隔つる千萬里の波濤も今はわづかに一葦帶水のみなるの觀あり。文物の研究またこの機運に

心理小説

後れず、あらゆる方面に彼の長所を取りて我に融化せむと試むれば、文學的作品の翻譯も前日の杜撰なるもの比にあらず、精密なるもの、眞摯なるもの相續いて生じ、進んではその精神思想の色味をもわが創作に應用せんとするに至れり。

二十七八年の戰役は國家の財帑を費すこと夥しく、その初頭に當りては勝負の決いまだ何れにありとも信じ難ければ、諸般の事業すべて頓挫の姿ありき。されど勝算すてに立ちては反動の活氣を生じ、二十八年の内國博覽會に美術が一代の盛運を示せるが如く、文學もまた非常の進境ありしなり。かくと見て二十六年の交、一たび發刊するの止むを得ざるに至りし雑誌の復興するあり、新たに起れるものその數さらに多く、従つて新進作家の名を傳へられたるもの少しとせず。小説の内容も變れり、人情の曲折を映射せしむる心理的描寫の傾向は、これまでとても認められざるにあらざりしが、その淺々しく甘たるき情事のみを以てしては、新社會の思潮と相容るべきにあらず。こゝにおいてか轉じて社會の暗黒面に筆を着け、觀察は走つて日進月歩の競争場裡に敗北

せる人々の悲惨の境遇に及び、或は肉體的或は精神的なる不具者の上に及びて、いはゆる心理小説もしくは悲惨小説と稱せらるゝ新主張は成れり。まづこの新傾向を代表せるものは廣津柳浪、泉鏡花等にして、既に老成の域に達せる紅葉もこれらに刺戟せられて多情多恨を出せり。この作や場中の人物多からず、事件の變化も極めて少けれども、龐然たる長篇、微妙なる人情の推移を寫して掌を指すが如し。その口語體もまことに圓熟して、以て廣く世の文範となれり。蓋しこの一篇は紅葉一代の傑作として推重するに足るものなり。ついで金色夜叉を著はし、失戀の極、貪婪無殘の高利貸となれる青年を主人公として、最も深刻の趣致を極めむとせしが、易和洒脱の性は冷酷悽慘の場を描くに適せず、矛盾撞着、その筆の竟に人生の暗黒方面を描くに堪へざるを曝露したり。文章はた口語體より文語體に歸り、技巧を弄して綺羅に過ぎ、駢儷對照の典型中に固定せる嫌なきにあらず。これを多情多恨に比べて著しき遜色あり、作者が苦心と經營とは水泡に歸し、自らまた自己の短所に想到したりけむ、氣沮みて筆漸く動かず、斷續常なく、完結を告ぐるに至らずして紅葉は逝けり。

思想界と批評界

當時、思想界の雄を以て目せられしは大西祝と清澤滿之となり、明治の哲學、明治の宗教をいふものは必ずこの二人の名を逸すべからず。思想の沈厚にして深邃なるは、固よりこれに及ばざれども、文藻富瞻にして威力あり、評壇の一方に睥睨して、常に問題の提供者となり、青年が崇拜の的となりしもの、高山樗牛に如くはなし。樗牛謂へらく、凡そ文藝に携はるものは時代精神のあるところを察せざるべからず、苟くも現代の思潮に觸れざるものは文學として取るに足らずと。これより延いて日本固有の國民性を發揮するの必要を唱へ、いはゆる日本主義を唱道せる一團の人々の中に加はり、聲を大にして呼號す。されどその後ニイチエを祖述してその超人説を鼓吹するものあるに至りて、渠の思想も漸く推移して、或は美的生活を説き、或は平清盛、日蓮上人を憧憬せる論文を出して、個人の勢力の最も重んずべきを説きたり。樗牛の後、網島梁川あり、眞摯なる見神の信仰を披瀝するに流麗なる文章を以てし、聲名一時に喧傳せり。惜しいかな、これら四人共に早く歿して、思想界及び批評界のうたゝ落莫たること。

寫實小説

創作の風尚も批評の傾向と相並びて進歩し、寫實主義、自然主義を抱持するもの漸く勢を得たり。その主張するところ、小説は實世間の人物をありのままに丁寧筆寫すれば則ち足るといふにあり、小杉天外、小栗風葉等まづこの一派の主領として仰がれぬ。顧みれば二十年代の小説はその以前に比ぶれば頗る進境ありといへど、なほ習慣に拘はり歴史に執して、直下に現在の人生に觸れず、固より人物も舞臺も材を現代の社會に取りたりとはいへど、なほ日に公衆の注意より遠ざかりゆく賤妓蕩子を寫すもの多かりしなり。然るに今や躍進一番、世人が一般に痛切に感じ來れる社會の動搖、新舊思想の衝突に基ける家庭の波瀾等に向つて、觀察の眼を鋭くするに至れり。女子教育は急速にその量において進歩し、女學生は新たに社會の一勢力となれば、この新現象もまたおのづから作物の上に現はれざるを得ず。殊に當今の社會事情に關聯して、社會主義を敷衍せる一種の傾向小説の出でたるが如きは、また見逃すべからざる文壇の現象ならざらばならず。

歌壇の形勢

文學はなほ種々の方面において進歩せり。短歌も同じ風潮に隨逐し、從來の典

劇界の形勢

型を擺脫して清新の作を産出し、新體詩も二十七八年の交は優美典雅なる古調を用ひて、誦すべきものなきにはあらざりしかど、その内容はいはゆる朦朧體の名に背かずして、未だ社會の期待を充す能はざりき。三十年を越えては、泰西思想の融化によりて、形式の完備よりも内容の充實に努め、或は象徴主義を取るといひ、或は自然主義に依るといひ、一部の青年者間に耽讀せらるれど、文藝の歴史よりいへば、前代の趣味を失ひて、今人の作風いまだ成らず、その前途はなほ遼遠なるべし。俳句は、子規が一たびその旗幟を明かにしてより、文壇に重視せられ、隠然として一方の勢力たりしが、あはれこの文壇の勇將は早く大患を得て奮闘數年、なほ春秋に富める身を以て、既成の功と無限の恨とを殘して逝きぬ。將星墜ちて形勢また振はず、隨從の士漸く倦怠の色あり、子規が晩年の事業たる萬葉調の短歌も寫生文も、將來いかばかりの發展を見るべきか、疑なきを得ず。

劇壇の消息はといふに、三十六七年の交、老練なる名優多く世を謝して、その後を承くべきものいまだ出てざれば、技藝の妙味を以て脚本の缺乏を糊塗する

ことも難くなりて、舊派の沈滞殊に甚し。これに反して新派の演劇は年を経るに従ひて練磨の功を積み、漸く世に重んぜらるゝに至れり。彼は従來の聲價を墜さざらむとし、此は新來の機運に乗じて、互に自派の向上を希望すれば、競争はやがて避くべからざる結果なり。かく新舊兩劇相對して勢を張らんとするにつけて、第一の要求はいふまでもなく新脚本の製作なり。果して多少の作家の或は創作を試み、或は泰西脚本の移植によりて、これが供給に勵めるあれど、梨園の情實と俳優の專恣とはいまだ名家をして自由にこの道に手腕を揮はしむるに至らず。されど機運の進歩は固より争ふべからず、逍遙の舊作もこゝに始めて舞臺に上れり。逍遙はなほ樂劇新曲浦島を作り、これと共に新樂劇論を著はして、今後わが國に行はるべき劇は振事を主とする樂劇ならざるべからざるを主張せり。恰もこれ書生氣質と小説神髓とを併せて世に問へると同一手段なるが、かれらが文學界に一時期を劃せるが如く、これらもまた劇界の警鐘たるべきか、その勢力の及ぶところの如何は暫く將來を待つべし。とにかくにその言説は常に一世に先だち、社會公衆を誘導啓發すること前後二十年、

最近の小説界

今なほ演劇の改善に腐心して老の至るを知らざるの概あるは、明治文壇にありて異數とすべく、功勞また第一と稱すべし。かくの如く文學のいづれの方面も進歩を見ざるなきが中に、際だちて目ざましきは小説の發展なり。小説が現代世界の文壇の流行物たるはいふまでもなく、明治文學の粹もまた實に此にありて、一時、新體詩、俳句等に名を得たるものも、轉じてこの方面に筆を染むるもの尠からず。げにや昨今小説の作家と稱すべきもの數ふるに堪へず、さるが中に嶄然として群衆に傑出せるものは夏目漱石と國木田獨歩とにして、二人はその作風においてまた好個の對照を示す。漱石は英文學の造詣極めて深く、また俳句に堪能に、中年以後に至りて小説を作る、初は滑稽諷刺を事とし、漸く嚴肅の境に出入して、一作は一作より面目を新たにせむと苦心せるさま、作物の上に歴然たり。蕭散なり、沖澹なり、洒脫なる俳と禪との趣味と精緻なる英文學の風尚と兩々相扶けて、その筆致をして清新にしかも細緻ならしむ。人情の描寫は寧ろ迂にして、ある觀念を捕へ來つてこれを具體的に現はさむとし、數、説明的敘述に趨る傾あり。獨歩の作は多く短

篇なり、迂餘曲折の詞華言葉は却つて感想の流露を妨ぐとなし、故らにこれを避けて、驀進して自然の人生を衝かむとす、従うてその文簡短直截にして、些の修飾なく、漱石が詞藻を烹鍊すると正反對の位置を占む、蓋し渠の小説は直接に現代の思想に觸れ、露骨に人間の性情を描きて、以て讀者の眼前に最も簡明なる社會の縮寫圖を展開すると共に、かれらをして人生の秘密の一部を掴み得たるの感あらしめんと欲するものなり、この人文壇に名を得てよりこれに倣ふもの俄に多く、批評と作品と相待ちて大膽自由の描寫を叫び、現代文壇の流行はいはゆる自然主義に止めたり。

この文壇の事情は、説き來つて日露戦争の後にまで及べるものなり、三十七八年の戦役はわが國曠古未前の大戦、敵國とせし露西亞が歐洲の大國なりしだけに、わが收めたる戦勝は殊にめざましく、國民の自覺がこれより一層の強さを加ふると共に、列國環視の眼は益々睜らる、從來かれらはわが島帝國を極東の一小國として、動もすれば侮慢の氣色ありしが、戦後の今日に至りては形勢全く一變す、ある最近の辭書に列強なる條下に日本を擧げて千九百六年を以て

國民の使命

これに伍すといへり、かゝれば日本國民の飛躍は刻下の世界の大問題となり、諸國の學者、政治家等種々の方面より觀察を下して、この歴史上の奇蹟を闡明むとす、われもまた固より自己の研究を怠るものにあらず、或は武士道を以て國民の精華とするものあり、或は西洋の個人主義に對して家族主義を唱ふるものあり、とにかく東西兩洋の關係がこの役ののち益々緊密の度を加へ來れるは争ふべからざる事實にして、將來、この兩洋の文明は互にその長所を失ふことなくして、圓滿渾一に融合せらるべきか、はたかくの如きは一場の空想に止まりて永遠に不可能のことに屬すべきか、これ等の問題を解決すべき使命を荷へるものは即ち世界における最舊文明國の一國民にして、また世界における最新文明國の一國民たるわれら日本人を措きて他にあることなし、われら日本人はみづから奮つてこの使命を果さむが爲に、古今東西の文化の粹を蒐めて打つて以て一丸とし、これを悠久にまた無限大に向上進歩せしめむとするものなり、文藝發展の徑路もこの國運と伴ひて年と共に新に年と共に熾なるものあるべし、また多望なるかな。

國文學史講話終

索引

あ	青表紙 一八八	青標紙 三七七	青本 三七八、三七九	赤染衛門 二二七	縣居 眞淵、實茂を見よ 五八、六三、六七、七二、七	赤人、山部 五七〇	赤木 五七三	赤良、四方 一六六	顯季、藤原 一五九、一六〇	顯輔、藤原 一七八	顯時、越後守 一七八	秋成、上田 五八四、五八八	朝比奈巡島記 五九八	吾妻鏡 一七〇、一七一	東慶、荷田 三二四、三二五、三二六、三二八	篤胤平田 四〇三	天名地鎮(アナイチ) 一〇五
イ	阿佛尼 二〇四	綾足、建部 三六六	有衛、藤原 九六	在滿、荷田 三三三、三三八	鴉鷺合戦物語 二四三	關齋、山崎 二六七、二三八	家隆、藤原 一八九、一九一、一九二、一九九	家康、徳川 二四〇、二四二、二八二	異學の禁 三七五	十六夜日記 五〇二	和泉式部 三三三	和泉式部日記 三三三	出雲、竹山 三三三、三三六	伊勢物語 三三三	伊曾保物語 三三三	一條天皇 三三三	一代男 三三三、三三六、三三九
う	一代女 三〇〇	一の谷織軍記 三〇〇	一葉、樋口 四八	一休 二四八	一休喃 二九二	一九、十返舎 三九五	田舎源氏 修業田舎源氏を見よ 三九二	狗張子 三九二	今鏡 一五三	妹背鏡 四三六	彌世織 三三九	色懺悔 四七、四三八	石清水物語 三三三、三三九、三九二	因果物語 三三三	隠元 三九二	浮雲 四二七	浮世草紙 三三七、三三八、三三九

淨世床 三九五
 淨世風呂 三九五
 雨月物語 三五四
 宇治拾遺物語 三二〇
 薄雪物語 三二一
 歌合 三二一
 うたかたの記 三二一
 雨申吟 三二一
 宇津保物語 三二一
 宇萬伎、加藤 三二一
 恨之助草子 三二一

詠歌大概 三二一
 榮華物語 三二一
 機齋、狩谷 三二一
 惠心僧都 三二一
 蝦夷志 三二一
 益軒、貝原 三二一
 江戸繁昌記 三二一
 江戸名所記 三二一
 枝直、加藤 三二一

繪本太閤記 三六六
 延喜式 三九
 艶詞 三二一
 大堰川行幸和歌序 二九
 鷗外森 三二一
 大鏡 三二一
 お國出雲 三二一
 憶耳、山上 三二一
 櫻痴、福地 三二一
 落窪物語 三二一
 お通、小野 三二一
 御伽草子 三二一
 御伽婢子(オトギバウコ) 三二一
 鬼貫、上島 三二一
 應仁記 三二一
 王法論 三二一
 近江聖人 藤樹、中江を見よ 三二一
 折り焚く柴の記 三二一
 女文字 假名を見よ 三二一

海音紀 三二一
 開卷驚奇俠客傳 三二一
 歌學 三二一
 學問のすゝめ 三二一
 景樹、香川 三二一
 花月草紙 三二一
 可笑記 三二一
 住人の奇遇 三二一
 風につれなき物語 三二一
 片歌 三二一
 氣質物(カタギモノ) 三二一
 學海、依田 三二一
 家道訓 三二一
 假名 三二一
 假名草紙 三二一
 假名聖教 三二一
 假名文 三二一
 兼良、一條 三二一
 歌舞妓 三二一

鎌倉右大臣 實朝、源を見よ 二六三
 鎌倉大雙紙 二六三
 我樂多文庫 二六三
 家隆 イエタカを見よ 二六三
 歌論 二六三
 河内本 二六三

喜雲、中川 二六三
 鬼外、福内 鳩溪、平賀を見よ 二六三
 其角、校木 二六三
 季吟、北村 二六三
 義經記 二六三
 喜三二、明誠堂 二六三
 其碩 二六三
 喜撰 二六三
 喜撰式 二六三
 紀傳道 二六三
 昨日は今日の物語 二六三
 黄表紙 青木を見よ 二六三
 九經 二六三
 鳩溪、平賀 二六三

救済 三二七
 狂歌 三二七
 玉山、岡田 三二七
 鏡花、泉 三二七
 曲亭 馬琴、曲亭を見よ 三二七
 玉葉和歌集 三二七
 狂訓亭 春水、爲永を見よ 三二七
 狂言 三二七
 曉孝 三二七
 京極家 三二七
 清輔、藤原 三二七
 曉臺、暮雨庵 三二七
 魚島平家 三二七
 清次 觀阿彌を見よ 三二七
 京傳、山東 三二七
 清水物語 三二七
 京童 三二七
 桐一葉 三二七
 金々先生榮花夢 三二七
 公經、西園寺 三二七
 公任、藤原 三二七
 金平淨嘯嘯 三二七

金平節 二九三
 金葉集 二九三
 空海 二九三
 草雙紙 二九三
 蒲辯談(クセモノガマリ) 二九三
 宮内卿 二九三
 黒主、大伴 二九三
 黒木 二九三
 懷風藻 二九三
 活歴物 二九三
 花柳新話 二九三
 觀阿彌 二九三
 冠山、岡島 二九三
 冠辭考 二九三
 勸懲主義 二九三
 冠服考 二九三
 慶應義塾 二九三
 經國集 二九三

經國美談	三〇〇	好色本	三九
契沖	三三三、三四七	五十音圖	一〇七
玄慧	一七六	五重塔	四三八
勢園 徂來、荻生を見よ	一六三、二八三	後崇光院	三三三
源空	二三〇	後堀和歌集	一三二
兼好	二八五	墓村、饗庭	四三六
兼山、野中	二八五	滑稽本	三九五
玄旨法印	幽齋、細川を見よ	骨董集	三七八
源氏典入	一九八、二〇九	後鳥羽上皇	一八八、一九三
源氏供養	二二二	光背銘	三〇五
源氏物語	一三三、一三三、一四三、一四七、一八二、一九八、二二三、二五〇、三〇三、三〇九	後花園天皇	二八八、二八九
源氏物語湖月抄	二八六	古風の俳諧	三〇五
顯昭	一九九、一九七	古文辭學	一〇四、一〇〇
源氏論義	二一〇	小町、小野	三〇四
顯註密勘	一九八	語孟字義	三〇四
玄同放言	三七八	紅葉、尾崎	四二七、四三〇、四三三
源内、平賀	鳩溪、平賀を見よ	惟足吉川	三六八
言文一致	四三五	伊行、世尊寺	一九八、三〇九
源平盛衰記	二二四、二五三、三九一	幸若舞	三六〇、三九三
硯友社	四二七	穀(コヲシ)、井上	四三九
元隣山岡	二九〇	金色夜叉	四三九
		今昔物語	一五五、二一〇

N

古學 復古學を見よ	二一六、二九	順源	一一一
古今集序	二八〇	慈鎮 慈圓を見よ	三〇〇
古今集正軌	二一〇	十訓、益軒の	二一〇
古今著聞集	二四三、二五三、二六三	十訓抄	九五
古今傳授	二〇一、二八八、二八八、二八〇	詩佛、大窪	四〇〇
古今和歌集	二四三、二五三、二六三、二八〇	紫明抄	一九八、二〇〇
國學	二二二	寂菴	一九九
國史の撰修	二二二	寫實小説	四三六
國姓爺合戦	二二二	車輿考	四三六
國民之友	二二二	洒落本	三三三
合卷	二二二	周阿	三三三
苔の衣	二〇九、二一一	拾遺集	二二六
江湖新聞	四二五	朱子學	二六
五山、菊池	四〇〇	十七箇條憲法	二九
五山	二六四、二八二	述齋、林	三三三
古事記	三九、四四、五〇、五八、一〇三	十二段草子	三三三
古事記傳	一〇	順庵、木下	二六七、三〇〇
古事記傳	一〇	純一郎、織田	四二二
小式部	一三〇	俊慧	一九一
古史通	一〇七	俊寛僧都鳥物語	一九八
越部禪尼	一七二		

K

西鶴、井原	一四一、三四三、三八三、四七三、七七一	時代物	一一一
西行	四三九、四三〇	順源	一一一
細君	一六、一六三、一八九、二二二、二四六、三三八	慈鎮 慈圓を見よ	三〇〇
西園立志編	四二七	十訓、益軒の	二一〇
最澄	九五	十訓抄	九五
采覽異言	三〇七	詩佛、大窪	四〇〇
嵯峨天皇	九九	紫明抄	一九八、二〇〇
兼傳、安樂庵	二九二	寂菴	一九九
狭衣	一四一	寫實小説	四三六
定家、藤原	一八七、一九九、一九〇、一九三、一九五	車輿考	四三六
定信、松平	一九六、一九七、一九八、二〇三、二〇四、二〇五	洒落本	三三三
貞世、今川	三三三、三七四	周阿	三三三
實氏、常盤井	二四四	拾遺集	二二六
實方、藤原	一九六	朱子學	二六
實隆、三條西	二二七	十七箇條憲法	二九
實朝、源	二四五	述齋、林	三三三
小夜衣	一九五	十二段草子	三三三
三教指歸	二九一	順庵、木下	二六七、三〇〇
	九九	純一郎、織田	四二二
		俊慧	一九一
		俊寛僧都鳥物語	一九八

春齋、林 三〇九
 俊菴、朱 一七六
 舜水、爲永 一〇〇、一〇九
 春水、爲永 三七、三九、四二
 俊成、トシナリを見よ 三〇五
 春臺、太宰 一九一
 順德、天皇 一七七
 眞、新島 四一七
 眞永、式目 一七二
 常縁、東 ツネヨリを見よ 一〇〇
 初學、訓 三〇〇
 蜀山、大田 赤良、四方を見よ 三〇九
 彰考館 三〇〇
 正三、鈴木 二九〇
 正三位 二二二
 尙齒會 九八
 書生氣質 四二四、四三六、四三七
 小説神髓 四三三、四三三、四三七
 小説讀法 三六三
 松染、情史 三九二
 正徹 二四四、二四八
 聖徳太子 三六、三六、三六、三九

宵柏、牡丹花 二四六
 昌平坂學問所 三二四
 正風 三八
 勝鬘經疏 九九
 逍遙、坪内 四二四、四三三、四三六
 性靈集 九
 淨瑠璃 三二八
 白雄、春秋庵 三九八
 新薄露物語 三九八
 新演劇 二九二
 心學 四三一
 新學異見 二七
 新樂劇論 三九
 新曲浦島 四二八
 人權新説 四二九
 新古今集 一八八、一八八
 神皇正統記 二二八
 新後撰集 一〇二
 仁賢、伊藤 四九
 新撰苑吹波集 四二六
 新體詩 四三七
 新勅撰集 四三九

新著百種 四二七
 神道五部書 二〇
 親鸞 二二二
 心理小説 四三三
 神靈、矢口波 三六
 神話 三六
 季經、藤原 一九七
 水源抄 一九八、二〇〇
 世阿彌 二四八
 清河、安 三六三
 世界國づくし 四二六
 惺窩、藤原 三六七、三七八
 正劇 四三
 靜軒、寺門 三七七
 醒睡笑 三九
 説經祭文 三九
 政治小説 二九
 清少納言 一九
 雪中梅 二〇

寫生文 四三七
 西洋紀聞 四三七
 西洋事情 四一六
 西洋諒栗毛 四一三
 西洋品行論 四一七
 精里、古賀 三七一
 世話物 二四二
 全文、芝 三六八
 千載集 二八八、三〇〇
 撰集抄 二八二
 撰集抄 二八三
 宣命 二八、一〇六
 川柳柄井 三七三

覆拾遺集 二二五
 素行、山鹿 三〇
 壯士歌 四九
 壯士芝居 四二
 素寂 二四〇
 漱石、夏目 四九
 曾丹、好忠、曾圃を見よ 二四六
 宗長、柴屋庵 二四六
 雙蝶記 二四四
 曾根崎心中 三三六
 蘇峰、徳富 三二六
 蘇門、服 二六八
 祖來、狹生 三二六
 巢林子 門左衛門、近松を見よ 二〇一、二〇三、二〇四、二〇七、二〇九
 草廬、龍 二九三
 曾呂利狂歌嘶 二九二

大日本史 二〇
 太平記 二〇
 太平記讀 一九
 隆國、源 二〇
 誰が身の上 一九
 篁、小野 二四、一〇一
 竹取物語 三三、一三三、一四一
 太政官日誌 二
 多情多恨 四四
 忠度、薩摩守 四四
 忠孝、壬生 一一
 辰猪、馬場 四九
 種彦、柳亭 四九
 旅人、大伴 二
 爲家、二條 二
 爲氏、二條 二
 爲兼、京極 二
 爲相、冷泉 二
 爲教、京極 二
 爲世、二條 二
 陀羅尼、百萬塔の 二
 檀林風 二八

草庵集 三六
 宗因、西山 二八八、三〇八
 曾我、會稽山 二四二
 曾我、物語 二四二
 宗鑑、山崎 二六
 宗祇 二六
 續後撰集 二〇二

大學解 三〇
 大學定本 三〇
 太祇、炭 三六
 太閤記 二六

大日本史 二〇
 太平記 二〇
 太平記讀 一九
 隆國、源 二〇
 誰が身の上 一九
 篁、小野 二四、一〇一
 竹取物語 三三、一三三、一四一
 太政官日誌 二
 多情多恨 四四
 忠度、薩摩守 四四
 忠孝、壬生 一一
 辰猪、馬場 四九
 種彦、柳亭 四九
 旅人、大伴 二
 爲家、二條 二
 爲氏、二條 二
 爲兼、京極 二
 爲相、冷泉 二
 爲教、京極 二
 爲世、二條 二
 陀羅尼、百萬塔の 二
 檀林風 二八

ち

千隆、加藤 三三六
 親房、北島 三三六
 近松 門左衛門、近松を見よ 三三六
 竹齋物語 三三六
 中外新聞 三三六
 中府解 三三六
 中府解 山、外山 三三六
 樗葉記 三三六
 樗葉記 三三六
 樗牛、高山 三三六
 長嘯、木下 三三六
 長明、鴨 三三六
 長流、下河邊 三三六
 樗真、無爲庵 三三六
 菟玖波集 三三六
 通俗水滸傳 三三六
 土御門天皇 三三六

つ

綱吉、徳川 三九六
 經信、源 一五五
 常縁、東 二二二
 貫之、紀 二二二
 徒然草 二二二
 徒然草、文段抄 二二二
 定家、サダイエを見よ 二二二
 眞室、安原 二二二
 庭鏡、都賀 二二二
 徹書記、正徹を見よ 二二二
 鐵腸、末廣 二二二
 眞徳、松永 二二二
 眞柳、油煙齋 二二二
 天外、小杉 二二二
 天壽、國曼茶羅銘 二二二
 天智、天皇 二二二
 天の網島 二二二
 天賦、人權論 二二二
 天武、天皇 二二二
 天明調の俳諧 二二二

て

東雅 三九七
 東涯 三九七
 東海散史 三九七
 東海道中膝栗毛 三九七
 東海道名所記 三九七
 得庵、島尾 三九七
 讀史餘論 三九七
 篤介、中江 三九七
 同志社 三九七
 藤樹、中江 三九七
 同人社 三九七
 土佐日記 三九七
 土佐日記創見 三九七
 俊成、藤原 三九七
 童子問 三九七
 俊頼、源 三九七
 桃青、芭蕉、松尾を見よ 三九七
 當世書生氣質、書生氣質を見よ 三九七
 獨歩、國木田 三九七
 殿居、藤 三九七

な

同文通考 三〇七
 如家、二條 三〇七
 友則、紀 三〇七
 とりかへばや物語 三〇七
 頼阿 三〇七
 長歌 三〇七
 長町女腹切 三〇七
 仲鷹、安倍 三〇七
 梨壺五人 三〇七
 梨木集 三〇七
 業平、在原 三〇七
 南海祇 三〇七
 南廓、服 三〇七
 南翠、須藤 三〇七
 南總里見八犬傳 三〇七
 南島志 三〇七
 錦木 三〇七
 西山物語 三〇七

の

二洲、尾藤 三〇七
 二條家 三〇七
 修紫田舎源氏 三〇七
 二代男 三〇七
 日蓮上人 三〇七
 日本永代藏 三〇七
 日本外史 三〇七
 日本書紀 三〇七
 日本人 三〇七
 日本派 三〇七
 日本文學全書 三〇七
 新學 三〇七
 如備子 三〇七
 人情本 三〇七
 根無草 三〇七
 能因 三〇七
 能樂 三〇七
 信長記 三〇七

は

延佳、度會 三〇七
 祝詞 三〇七
 祝詞考 三〇七
 宜長 三〇七
 俳諧 三〇七
 俳諧歌 三〇七
 梅麿、石田 三〇七
 馬琴、曲亭 三〇七
 白石、新井 三〇七
 祝(ハジメ)、大西 三〇七
 芭蕉、松尾 三〇七
 八文字屋本 三〇七
 白駒、岡 三〇七
 嘶の本 三〇七
 英草紙 三〇七
 濱松中納言 三〇七
 春雨物語 三〇七
 春町、戀川 三〇七
 春海、村田 三〇七

春村、黒川	三七八、四〇〇	二人比丘尼	二九〇	鳳岡、林	三〇六
藩翰譜	三〇八	復古學	三〇三	鶴齋、龜田	四〇〇
蕃山、熊澤	三六五	風土記	三六	寶治百首	三〇三
牛二、近松	三六九	武道傳來記	三六	方丈記	三二二、三三三
ひ		風葉、小栗	四六	北海、江村	三六三
悲劇小説	四三四	風流志道軒傳	三六	北海、片山	三六三
秀句冊(ヒツジクサ)	三六三	風流佛	四三八	發句	二六一
秀能	一九	文鏡秘府論	九九	發心集	二六一
人麿、柿木	五八、六三、六六、七二、七五、二四一、二六二、二七	文華秀靈集	九九	秀眞(ホツマ)	一〇五
一目玉録	三三八	文武訓	三〇〇	法然上人	源空を見よ
日文(ヒブミ)	一〇五	平家物語	一六三、二二四、二二五、二二七、二二九、二七五、二七九	寶物集	二二二、二二三
美妙、山田	四七、四八	平治物語	二二四	本朝軍器考	三〇七
平假名盛衰記	三三〇	遍昭	一〇一	本朝水滸傳	三〇七
弘之、加藤	四九	辨道	三〇五	本朝醉菩提	三〇八
ふ		辨名	三〇五	本朝通鑑	三〇九
風雅和歌集	一〇五	ほ		舞の本	二九六、三〇〇
福内鬼外	鳩溪、平賀を見よ	保己一、塙	三七五	舞姫	四三八
扶桑拾葉集	三二	保元物語	三三	眞顔、北川	三七八
蕪村、典謝	三六、四〇			牧の方	四三二
二葉亭、長谷川	四七			眞備、吉備	三六、一〇六

枕草紙	一三三	水戸學	三〇〇、四〇〇	門左衛門、近松	一四一、三〇九、三四三、三五一、三五五、三五六、三四七、三六九、四三九
枕草紙春曙抄	二八六	都の花	四七	文章博士	九六
正明、石原	一九〇	未來記	二〇七	家持、大伴	五八、七一
正直、中村	四二六	民約論	四二九	役者評判記	三四三
増鏡	二二二	む		康秀、文屋	一〇一
松浦宮物語	二二二	昔語、稻妻表紙	四四	大和俗訓	一〇〇
眞淵賀茂	三四八、三五三、三六八、三七九、四〇一、四〇二	夢幻劇	四四	大和武尊	三〇三、三〇四
滿之清澤	四三五	胸算用	三九	大和錦	三〇三、三〇四
萬葉集	五〇、五八、五九、七六、八六、一〇六、一一二、一一三、二六三、二六四、三三六	紫式部	三九	大和物語	一三三、一四七、一五三
萬葉集代匠記	三三二	紫式部日記	一三三	ゆ	
み		め		諭吉、福澤	四一六
御余	二八八	明月記	一九	行平、在原	一〇一、一〇三
水鏡	一五三	も		幽齋、細川	二四三、二六三、二八五
通勝、中院	二八六	黙阿彌、河竹	四四	雄略天皇	三六五
道眞、菅原	九六、九九、一〇一、一〇二	茂睡、戸田	三三	よ	
道長、藤原	一三五、二二八	元清、世阿彌を見よ	一九	謡曲	一六九、二四三、二七五、二六三、二九三、三二七
光圀、徳川	三九	基俊、藤原	二六	鳴谷、高	三六五
躬恒、凡河内	一一一、二二六	守武、荒木田	二六		
光廣、烏丸	三六六	守部、橋	三七八		
光行、源	一九八、二二〇				

好忠、曾禰	一七〇、一七二	了意、淺井	二九〇、二九二	魯文、假名垣	四〇〇
其經、後京極攝政	一九一、一九三	凌雲集	九九	論語、正平版の	二八五
吉野拾遺	二二〇	綠雨齋藤	四〇八	論語、古義	三〇〇
其基、二條	三三六、三三七、三四六	綠篋談	四〇〇	論語、微	三〇〇
吉原五十四君	三三九	了俊貞世、今川を見よ		和歌、四式	二一六
讀本	三三七、三三九、三六三	梁川、綱島	四三三	和歌、傳授	二二〇
陽明學	二八五	蓼太、雪中庵	三五六	和歌、二聖	二二六
賴政、源三位	二二〇	涼岱、建部	三六九	和漢、期詠集	二二六
萬屋助六心中	三三六	歷史小説	三九〇、三九二	和字、正濫抄	二二六
夜半の寢覺	二二〇	禮儀類典	三二二	和文、假名文に同じ	二二六
り		冷泉家	一〇〇、一〇二		
羅山、林	三六七、三六八	連歌	一七三、一七四、一七六		
關更、南無庵	三六八	蘆庵、小澤	三五六、三六八、三〇〇		
里茶、柳	三五八	六條家	一五九、一九六		
栗山、柴野	三七四	六道	九五		
龍溪、矢野	四三〇	六歌仙	一〇〇、一〇七		
立圃、野々口	三八八	六百番歌合	一九六		
柳北、成島	四一四	露伴、幸田	四二七、四三〇		
柳浪、廣津	四二七、四三〇				

正誤

頁	行	誤	正	三〇七	一二	推	推すに
二〇	六	卯の花くだし	卯の花くたし	三一四	八	過古	過去
三〇	一三	日本固有	日本固有	三一五	一	とれば	とすれば
四五	一	稻葉	稻羽	三一八	一四	苦むものは	苦むものは
一〇五	八	神代文學	神代文字	三二五	一四	壇上	壇場
一三二	一〇	嬌慢	驕慢	三二九	三	許けて	設けて
一五三	九	しせるに	したるに	三三〇	五	天の綱	天の綱
一九五	上欄	政權	收權	三三四	五	氣質物	氣質物
二〇〇	一〇	彈指す兩れば	彈指すれば、兩	三四二	九	同一徹	同一徹
二二二	九	沙羅桑樹	沙羅雙樹	三五五	三	實に	實に
二二六	一一	出てて	過ぎて	三六四	一一	小野	小澤
二三三	五	分立の後も	分立の頃までは	三八三	四	著迷堂	著作堂
二八三	二	百萬塔	百萬塔	三八九	八	人を化する	人を化する、
二九〇	一一	比企尼	比丘尼	四〇〇	八	無類	無類
三〇六	四	支那漢文	支那詩文	四一九	八	無類	無類

18787

好忠、曾禰
其經、後京極攝政
吉野拾遺
其基、二條
吉原五
讀本
陽明學
賴政、源
萬屋助
夜半の
ら
羅山、林
關更、南
り
里恭、柳
栗山、柴
龍溪、矢
立圃、野
柳北、成
柳浪、廣

索引

三九〇三
三九〇二
三九〇一
三九〇〇

了意、淺井
凌雲集
綠雨齋藤
綠叢談

三九〇三
三九〇二
三九〇一
三九〇〇

魯文、假名垣
論語、正平版の
論語古義
論語數

三九〇三
三九〇二
三九〇一
三九〇〇

明治四十一年三月十一日印刷
明治四十一年三月十五日發行

著者 藤岡作太郎
著作權 所有
許不 譯漢
印者 藤本兼吉
發行所 東京小石川區小日向水道町七十三番地
發行所 東京開成館
發行所 大阪開成館

國文學史講話
正價金貳圓

(刷印場工會英秀社會式株)

文學博士 藤岡作太郎 著

國文學全史 平安朝篇

【既刊】
定價金貳圓五拾錢
内地小包料拾貳錢

紙數七百五拾頁(總五號)索引附全一冊
製本クローズス三色刷本裝美本

著者文科大學に在て日本文學史を講ず講授の餘暇別に國文學全史編纂の
企あり平安朝篇先成る是積年研鑽の結果にして古書に拘らず舊説を破り
根柢より考覈し來て然る後縱横に品隲を試む其公平なる客觀的評論は徹
を聞き秘を探り實に國文學の研究に一期を劃する者學界未曾有の大著と
す之を公刊して江湖に薦るは私に以て弊館の誇とする所也

發行所 東京市小石川區 小日向水道町七三 東京開成館

終